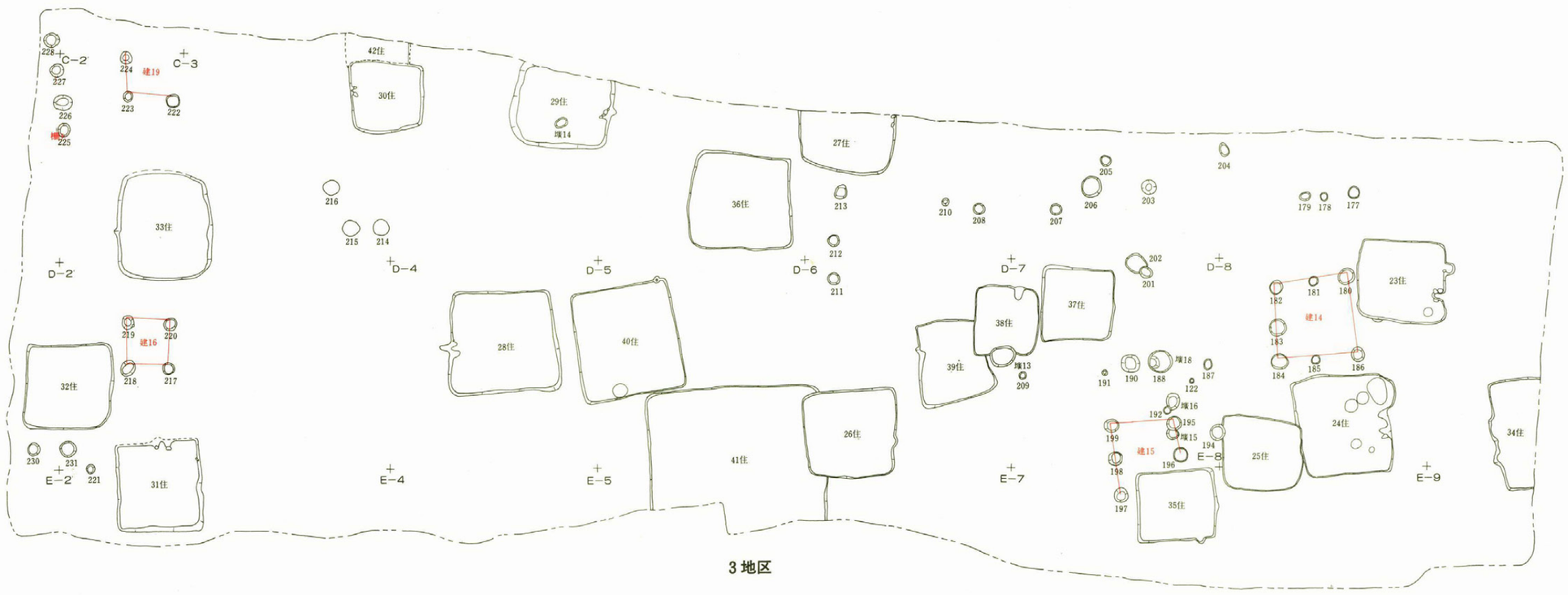
松本市文化財調査報告No.48

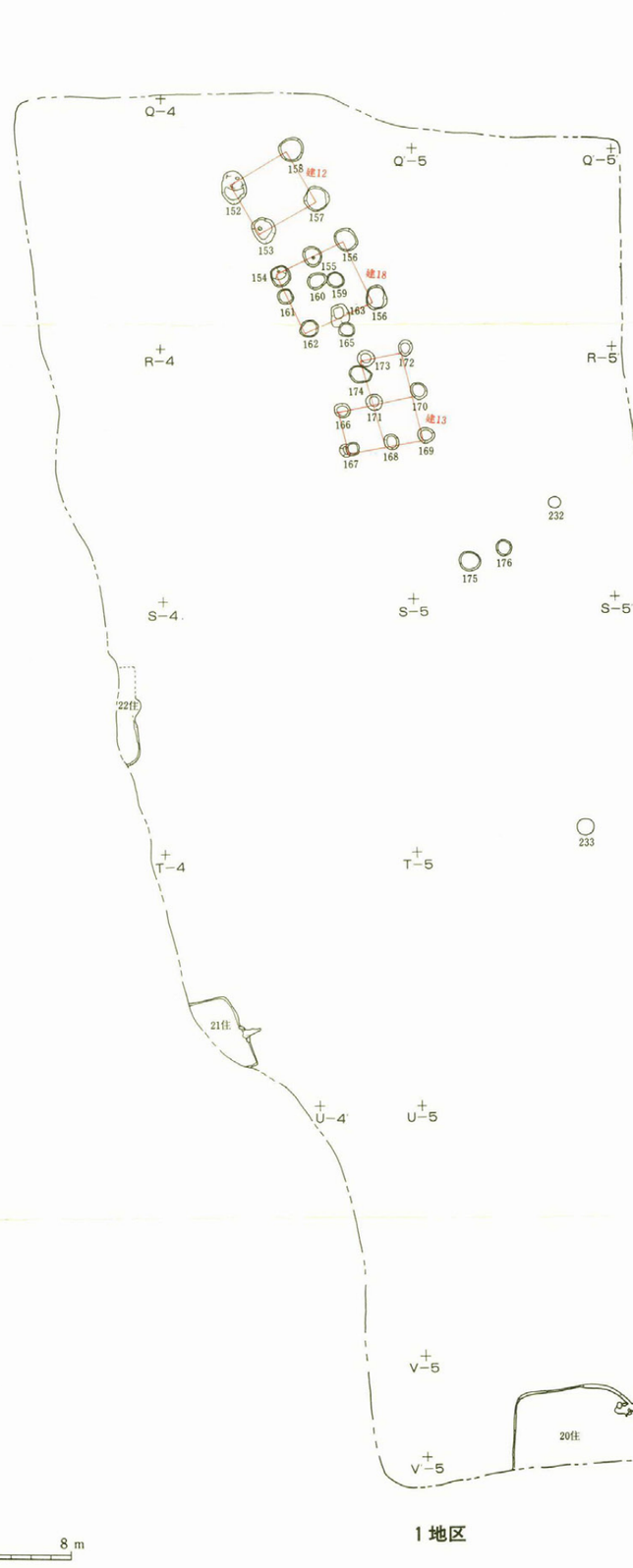
松本市島立北栗遺跡
条里的遺構

——緊急発掘調査報告書——

1987. 3

長野県松本地方事務所
松本市教育委員会





0 4 8 m

遺構配置図(地区別)

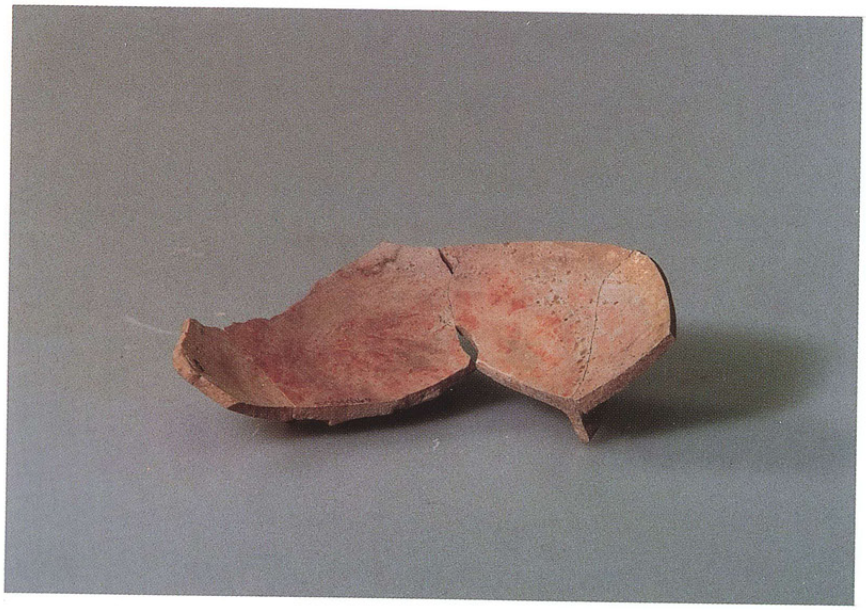
松本市島立北栗遺跡
条里的遺構

——緊急発掘調査報告書——

1987. 3

長野県松本地方事務所
松本市教育委員会

北栗遺跡全景



溝１出土朱書灰釉碗(上)　34住出土内面朱灰釉碗(下)

序

この遺跡調査は、中央自動車道長野線の建設と時を同じくして高速道関連ほ場整備事業島立地区内にあり区画整理工事に併せ工事施工に先立ち緊急発掘調査し記録保存することとなったものです。

調査の実施は松本市教育委員会に全面的に委託し発掘調査が行なわれました。

その結果、奈良時代から平安時代にかかる住居址、土師器、須恵器等の土器類、鋤頭、矢じり等の鉄器類が多数出土し既調査済資料等と綜合することにより地域の歴史を知るうえで貴重な資料となることと思います。

この発掘調査が計画どおり完了しましたことは、県・市教育委員会の適切なご指導とお忙しい中調査団に参画され、発掘調査にあたられた皆様のご尽力のたまものと、感謝しております。

なお遺跡発掘調査が支障なく行なわれましたことは、島立土地改良区の役員、地元関係者のご協力とご理解によるものであり心より感謝の意を表します。

昭和62年３月

長野県松本地方事務所長　佐　藤　善　處

序

島立北栗地区は隣接する南栗地区とともに島立のなかでも南栗・北栗遺跡、水田としての条里的遺構など遺跡の集中する一帯として知られておりました。昭和58年以来行なわれてきたほ場整備事業も徐々に整い当地における調査も4回目を迎え、前回同様緊急発掘調査を実施し記録保存を図る事となりました。

調査は中信土地改良事務所から松本市教育委員会に委託され、市教委職員を中心に地元考古学者、地区の皆様の協力により10月24日から12月28日に亘り行なわれ、多大な成果をおさめ無事終了することができました。その結果、古墳時代から奈良、平安時代にかけての住居址が多数発見され、一昨年の調査結果もあわせてみると、北栗地区一帯に広範囲に拡がる古代の村のようすの一端をうかがう事ができました。折りしも周辺では中央自動車道工事も大規模に行なわれており、近い将来には地区の様相も一変してしまう時その歴史的記録をとどめておくことは私達に課せられた責務と考えております。又今回の成果と今後の周辺調査とにより一層の島立地区の歴史的解明がなされる事と信じております。

最後にこの調査にあたり多大な御理解と御協力をいただきました島立土地改良区をはじめ、島立公民館、地元のみなさまに心から感謝いたしまして序といたします。

昭和62年3月

松本市教育委員会

教育長　　中　島　俊　彦

例　　言

1．本書は昭和60年10月24日より12月28日にわたり実施された松本市島立北栗遺跡、及び島立条里的遺構の緊急発掘に関する報告書である。

2．本調査は松本市が長野県松本地方事務所より委託をうけ、松本市教育委員会が行なったものである。

3．本書の執筆は第1章事務局、第2章第2節太田守夫、第3章第2節木下守、同第3節直井雅尚第5章神沢昌二郎、その他の項目は山下泰永、山田真一の協力を得て高桑俊雄が行なった。

4．本書作成に関する作業分担は次のとおりである。

遺構図トレース：石合英子、高桑俊雄

遺物・図整理：乾靖子

遺物実測･トレース：伊丹早苗、土橋久子、藤田英博、直井雅尚（土器）、木下守（鉄器等）
塩原久和（石器等）、岩渕世紀、大村敏博、岩野公子（写真撮影）

一覧表作成：丸山恵子（遺構・鉄器・石器等）、藤田英博、三村竜一（土器）

5．本書の編集は事務局が行った。

6．調査地周辺では（財）長野県埋蔵文化財センターが発掘調査をしており御指導を得た。尚巻頭カラー航空写真は同センターより提供をうけた。

7．出土遺物及び図類は松本市立考古博物館が保管している。

目　　次

第１章　調査経過

第１節　事業の経緯と文書記録……3

第２節　調査体制……3

第３節　作業日誌……5

第２章　遺跡の環境

第１節　調査地の位置……7

第２節　地形と地質……7

第３節　周辺遺跡……12

第３章　北栗遺跡

第１節　調査の概要……15

第２節　遺構

1　住居址

第１号住居址……16　第２・43号住居址…18　第３号住居址……19
第４号住居址……20　第５号住居址……21　第６号住居址……22
第７・８号住居址…23　第９・10号住居址…25　第11・12号住居址……27
第13号住居址……28　第14号住居址……29　第15号住居址……30
第16･17･18号住居址…32　第19号住居址……33　第20号住居址……34
第21・22号住居址…35　第23号住居址……36　第24･25･26･27号住居址……38
第28号住居址……40　第29号住居址……41　第30・42号住居址……42
第31号住居址……43　第32号住居址……44　第33号住居址……45
第34号住居址……46　第35・36号住居址…47　第37・38・39号住居址…49
第40号住居址……50　第41号住居址……52

2　建物址・柵列……53

3　土壙・溝……70

第３節　遺物

1　土器……72

2　銅製品・鉄器……138

3　土製品・石器……141

第４節　小結……142

第４章　島立条里的遺構

第１節　各地内の概要と遺物

1　北栗地内……145

2　永田地内……145

3　町区地内……146

第２節　小結……150

第５章　調査のまとめ……152

挿図目次

第１図　調査地の位置１……4
第２図　調査地の位置２……8
第３図　周辺遺跡……11
第４図　遺構配置図……13
第５図　第１号住居址……16
第６図　第２・43号住居址……17
第７図　第３号住居址……19
第８図　第４号住居址……20
第９図　第５号住居址……21
第10図　第６・７号住居址……22
第11図　第８号住居址……23
第12図　第９・10号住居址……24
第13図　第11・12号住居址……26
第14図　第13号住居址……28
第15図　第14号住居址……29
第16図　第15号住居址……30
第17図　第16・17号住居址……31
第18図　第18・19号住居址……33
第19図　第20号住居址……34
第20図　第21・22号住居址……35
第21図　第23号住居址……36
第22図　第24・25号住居址……37
第23図　第26・27号住居址……39
第24図　第28号住居址……40
第25図　第29号住居址……41
第26図　第30・42号住居址……42
第27図　第31号住居址……43
第28図　第32号住居址……44
第29図　第33号住居址……45
第30図　第34・35号住居址……46
第31図　第36号住居址……47
第32図　第37・38・39号住居址……48
第33図　第40号住居址……50
第34図　第41号住居址……51
第35図　建物址・住居址相関図……53
第36図　建物址１……59
第37図　建物址２・３……60
第38図　建物址４……61
第39図　建物址５……62
第40図　建物址６・７・11……63
第41図　建物址８・10……64
第42図　建物址９・17……65
第43図　建物址12・18……66
第44図　建物址13・14……67
第45図　建物址15・16……68
第46図　建物址19・柵列１・２……69
第47図　土壙・溝……71
第48図　土師器食膳具の器種細分……73
第49図　甕の器種細分……75
第50図　小形甕の器種細分……76
第51図　須恵器食膳具の器種細分……77
第52図　土器実測図(1)……100
〃　〃　〃
第89図　土器実測図（38）……137
第90図　銅製品・鉄器……140
第91図　土製品・石器……141
第92図　調査地区全体図（北栗）……147
第93図　調査地区全体図（永田）……148
第94図　調査地区全体図（町区）……149
第95図　土器実測図……150

付　図　遺構配置図（地区別）

表　目　次

表　１　建物址・柵列一覧表……55
表　２　出土土器観察表……78
表　３　銅製品・鉄器一覧表……139

第1章　調　査　経　過

第1節　事業の経緯と文書記録

本調査は、島立地区県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査である。事業の主体者は、中信土地改良事務所（現松本地方事務所、土地改良課）であり、両者の間で埋蔵文化財保護のために事前協議を行ない、調査を実施した。調査地区周辺のほ場整備は、当初予定になく急遽、施行することとなったため、保護協議をするとともに本年度の埋蔵文化財発掘調査補助事業として取り組むため、補助金の計画変更承認申請をし、中信土地改良事務所と発掘調査の委託契約の変更をした。以下は、事業の文書記録である。

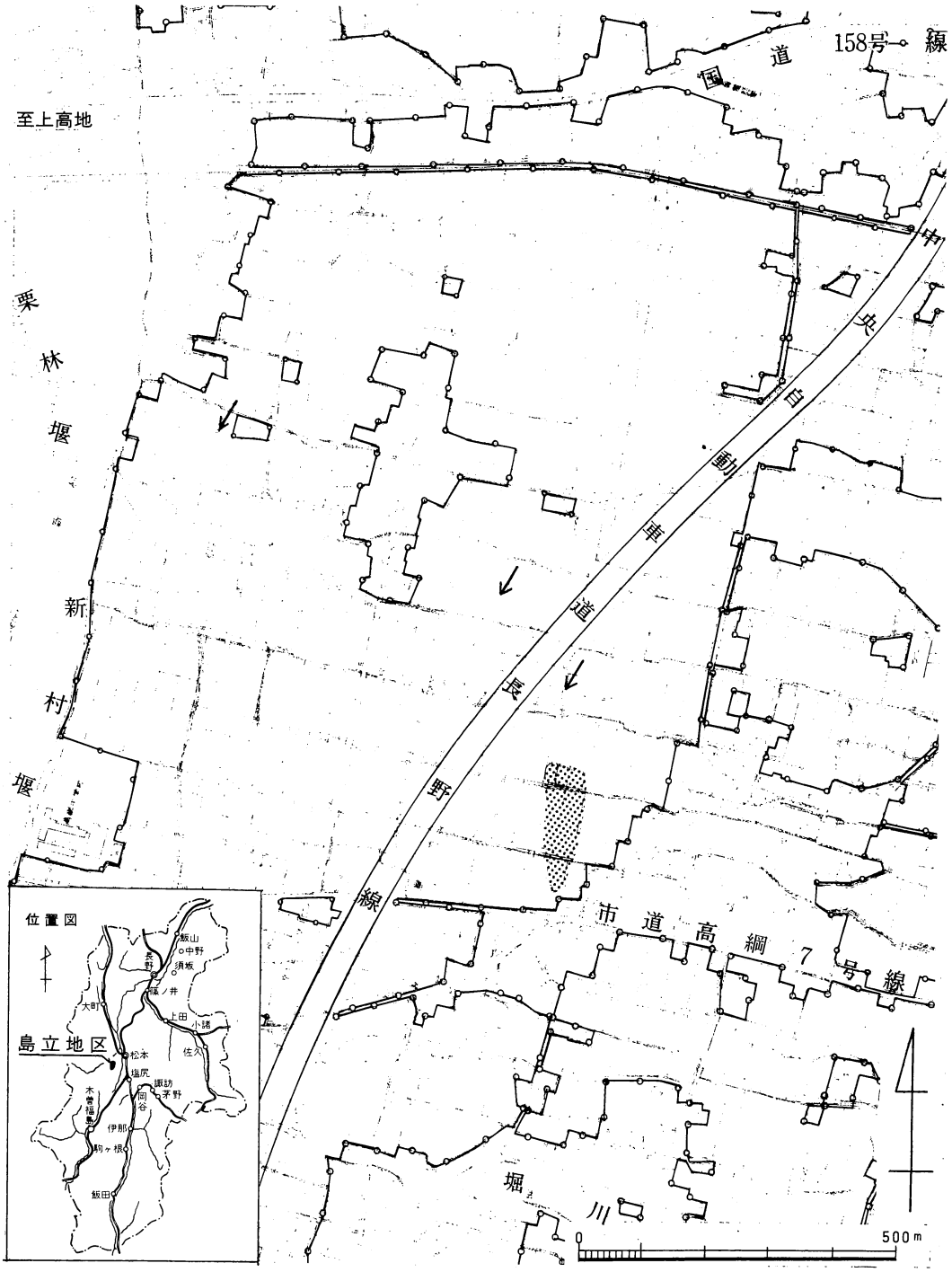
昭和60年11月１日　昭和60年度埋蔵文化財発掘調査事業国庫補助金計画変更承認申請書提出
11月１日　昭和60年度埋蔵文化財発掘調査事業県費補助金計画変更承認申請書提出
昭和61年１月17日　昭和60年度県営ほ場整備に伴う島立地区発掘調査委託契約の変更
２月14日　文化財保護事業執行状況調査

第2節　調　査　体　制

調査団長：中島俊彦（教育長）　**調査担当者**：神沢昌二郎（市立考古博物館長）　**現場担当者**：高桑俊雄（社会教育課）　**調査員**：太田守夫、西沢寿晃、三村肇、森義直、横田作重

協力者：赤羽包子、安藤正人、石合英子、市川今朝男、乾靖子、上原政子、大久保幸子、大久保睦弥、大沢俊孝、大谷成嘉、大谷房夫、奥原美和子、小口妙子、小野いつ美、小野勝近、小野まさ子、開嶋八重子、上条則子、小林周治、小林敏男、佐々木謙司、斉藤美智子、瀬川長広、瀬黒セツ子、高山淑三、田口吉重、鶴川登、内藤達雄、中島新嗣、萩野越次、萩原愛子、堀内澄子、丸山恵子、丸山正喜、三沢元太郎、百瀬一子、百瀬嘉子、山田真一、横山永蔵、横山光代

事務局：浜憲幸（社会教育課長）　神沢昌二郎（課長補佐・昭和60年度）　岩渕世紀（文化係長・昭和61年度）　熊谷康治（主事）　直井雅尚（主事）


至上高地
国道158号線
栗林堰
新村堰
中央自動車道長野線
市道高綱7号線
堀川
0
500m
位置図
島立地区
飯山
中野
須坂
長野
大町
上田
小諸
佐久
松本
塩尻
諏訪
岡谷
木曽福島
伊那
駒ヶ根
飯田
北栗遺跡
島立条里的遺構

第1図　調査地の位置1

第３節　作業日誌

昭和60年10月24日　㈭　　晴　風強し　　本日より開始　予定地内のワラ片付け作業。作業員：佐々木謙司他６名　市教委：高桑

10月25日　㈮　　晴　風強し　　午前中、ワラ、畦畔ブロックの片付け作業。午後、６ヶ所試掘。　作業員：佐々木他６名　　市教委：高桑

10月26日　㈯　　晴　朝、ブルドーザー到着

10月28日　㈪　　晴　朝、バックフォー到着。重機２台による表土剝ぎ。午後、基盤土（床土）を除去する。１地区検出作業開始。作業員：鶴川登他18名　　市教委：高桑

10月29日　㈫　　曇　時々小雨　　１地区検出面まで重機による掘り下げと２地区重機による表土剝ぎ。１地区検出作業継続。午後雨の為現場中止。プレハブ到着し組立てる。作業員：鶴川他20名市教委：高桑

10月30日　㈬　　曇　時々小雨　　１地区検出作業継続。隅に住居址１、焼土２ヶ所検出。２地区重機による表土剝ぎ　土器洗いも若干行なう。　作業員：鶴川他15名　　市教委：高桑

10月31日　㈭　曇一時晴　２地区重機による検出、２地区検出作業開始。３地区表土剝ぎ。　作業員：鶴川他16名　　市教委：高桑

11月１日　㈮　　雨後曇　　２地区重機による土取り。雨の為検出作業は中止。土器洗い。　作業員：鶴川他４名　　市教委：高桑

11月２日　㈯　　晴後曇　　２地区重機による土取り。２地区検出住居址10余軒。建物址10基、溝１等を検出。２地区全体図作成。作業員：中島新嗣他19名　　市教委：高桑

11月５日　㈫　　曇　　１地区中央部検出作業。やや削平しすぎた事が判明、ピットは残っており建物址複数確認。３地区重機による検出。　作業員：鶴川他19名　　市教委：高桑

11月６日　㈬　　雨　　雨の為作業は中止、土器洗い。作業員：赤羽包子他３名　　市教委：高桑

11月７日　㈭　　小雨後曇　　本日より遺構を掘り始める。２地区１、２住掘り下げ開始。溝１にトレンチを入れる。３地区重機による検出継続。しかし雨の為途中より作業を中止。市教委：高桑

11月８日　㈮　　晴　　昨夜の雨の為足場が悪い。３地区重機による検出。重機本日にて終了。１、２住掘り下げ継続。３～８住掘り下げ開始。　作業員：中島他20名　　市教委：高桑

11月９日　㈯　　晴　　３地区検出作業開始、東部に住居址４軒検出。　作業員：中島他16名　　市教委：高桑

11月11日　㈪　　晴　　午前中３地区検出作業継続。中央部より西は、礫が多く検出作業は難行。午後、４～８住掘り下げ継続。９住掘り下げ開始。　作業員：中島他16名　　市教委：高桑

11月12日　㈫　　雨時々曇　　雨の為午前中土器洗い。午後現場作業。５、６、９住掘り下げ継続。12住掘り下げ開始。　作業員：佐々木他12名　　市教委：高桑

11月13日　㈬　　小雨　　朝小雪が舞う。５、９住掘り下げ継続。14、15住掘り下げ開始。建物址１掘り下げ開始。５～７、９、10、12住土層図作成。４、５、７、９住カマド半割。　作業員：鶴川他17名　市教委：高桑

11月14日　㈭　　晴　　11住掘り下げ開始。建物址２～４掘り下げ開始。３～５、８住の土層図作成。３、６、８、９住写真撮影。作業員：鶴川他13名　　市教委：高桑

11月15日　㈮　　曇時々小雨　　２、11、14、15住、建物址２の土層図作成。14、15住写真撮影。柵列１の掘り下げ開始。作業員：鶴川他14名　　市教委：高桑

11月16日　㈯　　曇　　建物址１、２、４、柵列１の土層図作成。16住、７住を切る土壙１、建物址５、６掘り下げ開始。　作業員：鶴川他13名　　市教委：高桑

11月18日　㈪　　曇　　１地区中央部にトレンチを入れる。建物址７～10掘り下げ開始。　建物址１、３、５、８～10土層図作成。作業員：中島他17名　　市教委：高桑

11月19日　㈫　晴　　16住、建物址６、７土層図作成。建物址11、12　柵列２掘り下げ開始　作業員：中島他18名　市教委：高桑

11月20日　㈬　　濃霧後晴　　２、４住　建物址１、３～６、８～10、柵列１の写真撮影。17～19住掘り下げ開始。平面図開始。作業員：中島他19名　　市教委：高桑

11月21日　㈭　　晴　　17～19住写真撮影。２地区西部土壙、ピット掘り下げ開始。　作業員：中島他17名　　市教委：高桑

11月22日　㈮　　曇　　20、24、25住掘り下げ開始。25住より緑釉埦片出土。４、８、15住床面精査。　作業員：鶴川他17名　　市教委：高桑

11月25日　㈪　　曇　　朝雪が舞う。建物址11、20、24住掘り下げ継続。23、26住掘り下げ開始。　作業員：鶴川他８名　　市教委：高桑

11月26日　㈫　　晴　　20、23、26住掘り下げ継続。11時～１時まで空中撮影があり、土器洗いを行なう。17～19住の土層図作成。10、12住写真撮影。　作業員：鶴川他21名　　市教委：高桑

11月27日　㈬　　晴　　27～29住掘り下げ開始。２、４、５、14、15住の床面精査。17住、建物址12の土層図作成。　作業員：鶴川他20名　　市教委：高桑

11月28日　㈭　　雨　　小雨の中作業を行なう。26～29住掘り下げ継続。午後土器洗い。　作業員：鶴川他14名　　市教委：高桑

11月29日　㈮　　曇　　26、28、29住掘り下げ継続。30、31住、建物址13、18、19の掘り下げ開始。23～25住、建物址13、18、19の土層図作成。　作業員：鶴川他19名　　市教委：高桑

11月30日　㈯　　晴　　24、25住写真撮影。建物址12、13、32住掘り下げ開始。９、12、18、19住遺物取り上げ。　作業員：鶴川他13名　　市教委：高桑

12月２日　㈪　　雨後曇　　31、32住掘り下げ継続。33住掘り下

げ開始。20住土層図作成。17、19住遺物取り上げ。23住継続作業。1住、土壙2、建物址12、13、18、19写真撮影。　作業員：鶴川他21名　　市教委：高桑

12月3日（火）　晴　　26～28住土層図作成。11、23、26住写真撮影。34住掘り下げ開始。ピット、土壙半割。1、11、12住遺物取り上げ。　作業員：鶴川他20名　　事務整理作業員：上原政子（以下事務とする）　　市教委：高桑

12月4日（水）　晴　　28住継続作業。丸瓦出土。33、34住掘り下げ継続。35住掘り下げ開始。1住床面精査。23～25、28住写真撮影。　作業員：鶴川他23名　　事務：上原　　市教委：高桑

12月5日（木）　晴　　36住掘り下げ開始。35住掘り下げ継続。29、32、33住土層図作成。　作業員：鶴川他18名　　事務：上原　市教委：高桑

12月6日（金）　晴後曇　　21、22住掘り下げ開始。1、29、35、36住土層図作成。28、32、33、35住継続作業。5住写真撮影。島立条里永田地内重機による表土剝ぎ開始。（以下条里永田とする）　調査員：大久保知巳　　作業員：佐々木他24名　　事務：上原他2名　　市教委：高桑

12月7日（金）　雨後曇　　37住検出作業。溝1トレンチ継続。27、36住写真撮影。条里永田地内検出作業。島立条里町区地内重機による表土剝ぎ。（以下条里町とする。）　島立公民館で40名程遺跡見学。　作業員：鶴川他25名　事務：上原他1名　市教委：高桑

12月9日（月）　小雪　　37住掘り下げ開始。溝1トレンチ掘り下げ継続。建物址12、13全掘作業。雪の為午後発掘中止。午後土器洗い。　作業員：鶴川他23名　　事務：上原他2名　市教委：高桑

12月10日（火）　晴一時雪　　3地区で遺構検出継続。38住検出掘り下げ開始。条里永田地内図面作成。　作業員：鶴川他25名　事務：上原他2名　　市教委：高桑

12月11日（水）　晴一時雪　　39住検出掘り下げ開始。37、38住土層図作成。条里永田地内図面継続。永田地区テント組立。　作業員：鶴川他27名　　事務：上原他2名　　市教委：高桑

12月12日（木）　晴　40、41住検出。37、38住土層図継続。39住土層図作成。第三地区平面図開始。条里町地内検出作業。　作業員：鶴川他24名　　事務：上原他2名　　市教委：高桑

12月13日（金）　晴　　40住掘り下げ開始。20住遺物取り上げ、31住再検出、南へ延びる事が判明。建物址14、掘り下げ、土層図作成。条里永田地内図面継続。条里町地内検出作業継続。　作業員：鶴川他24名　事務：上原他2名　　市教委：高桑

12月14日（土）　曇風強し　　30住再検出（カマドが2ヶ有る事から2軒では？）29住掘り下げ継続。31住新プランで掘り下げ。建物址15掘り下げ開始。柵列2掘り上げ。29住カマド、建物址15、柵列2土層図作成。条里町地内図面開始、写真撮影　　作業員：鶴川他22名　　事務上原他2名　　市教委：高桑

12月16日（月）　晴　　30住検出継続。ピット・土壙の土層図作成。29住写真撮影。条里町地内図面継続。　作業員：丸山恵子他5名　　事務：上原他3名　　市教委：高桑

12月17日（火）　晴後小雪　　41住掘り下げ開始。40住再検出。島立条里北栗地内重機による表土剝ぎ（以下条里北栗とする。）　作業員：丸山他8名　　事務：上原他2名　　市教委：高桑

12月18日（水）　快晴　　41住掘り下げ継続。40住掘り下げ開始。作業員：小野勝近他9名　　事務：上原他2名　　市教委：高桑

12月19日（木）　晴　　41住検出掘り下げ継続。30住切合住居42住検出、31住平面図作成、写真撮影。23住床面精査　ピット土層図作成　　作業員：佐々木他15名　　事務上原他1名　　市教委：高桑

12月20日（金）　晴　　41住掘り下げ継続。建物址16、17掘り下げ開始。建物址16、17、30住42住土層図作成。23、24、26、31、34、35住床面精査　30、42住遺物取り上げ。　作業員：佐々木他21名　事務：上原他1名　　市教委：高桑

12月21日（土）　晴　　13住検出、掘り下げ開始。29住床面掘り下げ。30、42住床面精査。2、24住内、ピット掘り下げ、土層図作成。溝1土層図作成。条里北栗地内検出作業。　　作業員：瀬川長広他21名　　事務：上原他2名　　市教委：高桑

12月23日（月）　曇　　2住床面精査。43住検出、掘り下げ開始。13、40、41住掘り下げ継続。41住土層図作成。30、42住写真撮影、遺物取り上げ。29住再床面精査。条里北栗地内土層図作成、平面図作成。　作業員：大出六郎他23名　　事務：上原他2名

12月24日（火）　晴　　12、14住床面精査。13、24、40住土層図作成。条里調査終了の旨、関係機関へ連絡する。　作業員：鶴川他20名　　事務：上原他2名　　市教委：高桑

12月25日（水）　晴　　13住遺物取り上げ。43住掘り上げ図面作成。6、13、29、40、41住床面精査。17住盛土下より煙道を持つカマド検出。本日で測量要員を除き、一般作業員は作業終了とする。作業員：鶴川他19名　　事務：上原他2名　　市教委：高桑

12月26日（木）　晴　　21、22住遺物取り上げ。29住カマド図面作成。今迄の図面の整理。各住居、カマド図面の見直し。　作業員：鶴川他7名　　事務：上原他2名　　市教委：高桑

12月27日（金）　曇　　2住内ピット掘り下げ。ピット及びカマドの土層図作成。発掘資材の片付け運搬、本日で現場作業終了とする。　作業員：鶴川他7名　　事務：上原他2名　　市教委：高桑

12月28日（土）　曇一時雪　　発掘資材片付け、運搬。業者によるプレハブ、トイレの取り壊し作業。運搬、座標出し作業。　作業員：鶴川他3名　　事務：上原他2名　　市教委：高桑

昭和61年1月6日（月）　曇　　本日より報告書作成に向けて、次の作業を順次行なっている。遺物洗浄、注記、復元、整理、拓影、実測、トレース、図版整理、原稿執筆、校正等。

第２章　遺跡の環境

第１節　調査地の位置

島立地区は松本市のほぼ中央に位置する。ここは南に鎖川、西方に梓川等があり、これらの川の扇状地上に展開しているため、土質は壌土となり、南・西部では野菜、米作などの農産地として利用されている。又東には奈良井川が北流し、この影響により生じた段丘崖周辺には南から南栗、北栗、三の宮などの集落が存在し、北部は上高地に通ずる国道158号線とそのバイパス、或いは建設中の中央自動車道長野線と同松本インターチェンジ等の道路、施設により大庭、荒井などの周辺に急激な宅地化の波が押し寄せている。

北栗遺跡とは北栗集落を中心として東西750、南北350m程の範囲になるものと推定。(1)今回の調査地はその西端部分で、北栗集落にある御乳神社の西～北西一帯の水田地帯である。本調査地より周辺を見ると、西側200m程の所では南北に中央道長野線の工事が進められており、東100m程で通称仁科道（現県道新田松本線）に達し、又南50mで市道高綱線に達する。

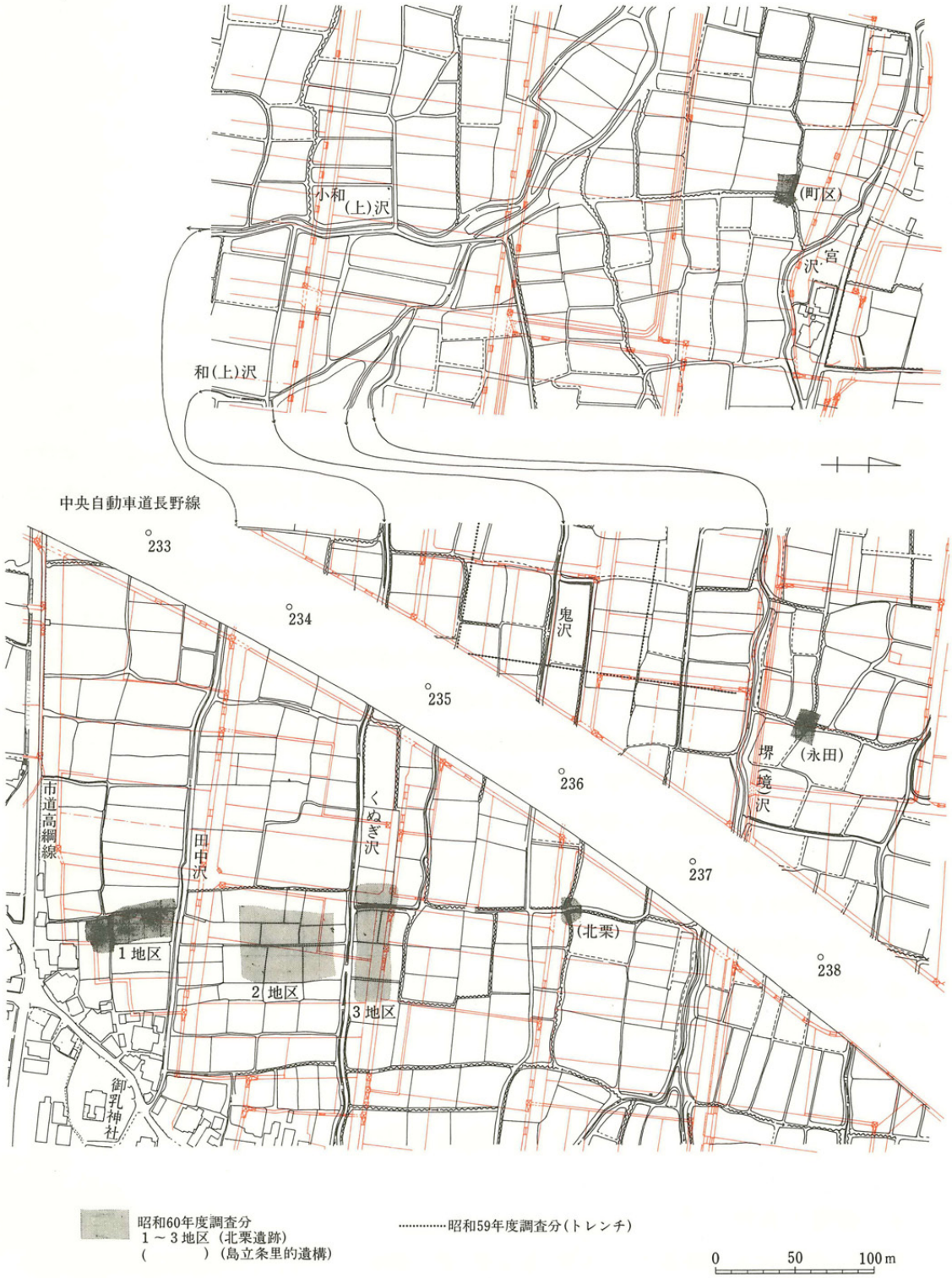
条里的遺構の調査としては一昨年中央道長野線の西側一帯に延べ1570mの長いトレンチを設け、主として断面観察を行なったのであるが、今回は現在使用されている、灌漑用水路の変遷を調べるため、北栗、永田、町区地内一ヶ所ずつ地点を定めた。北栗地内とは中央道長野線東側に当たる鬼沢より分流した小堰と、堺沢より引水した小堰の合流地点。永田地内は堺沢の北側、永田集落の東方で堺沢より引水した２本の小堰が合流する地点。町区地内は平林堰より東流した小堰と、堺沢より北流した小堰が合流する地点である。これらの調査面積は延べ600m²程であり３ヶ所とも位置的には、従来条里的遺構として把えている広い範囲のなかの北部に当たる場所にある。

註１　昭和60、61年度埋蔵文化財センターの発掘成果によると、当初考えていた範囲（南栗、三の宮も含め）よりも、かなり西の方まで間断なく集落が続くように考えられる。

第２節　地形と地質

１　位置と地形

本遺跡は標高600m、地形面の平均傾斜$\frac{7}{1000}$北東へ緩く傾斜している。この地形面は梓川扇状地に属し遺跡周辺は古い扇状地性の広大な沖積地で土壌は深さ60cmを越える壌土である。この地形面の形成についてはすでに新村条里的遺構、島立条里的遺構で述べたので省略するが本遺跡ののる面は


小和(上)沢
(町区)
宮沢
和(上)沢
中央自動車道長野線
233
234
235
236
237
238
鬼沢
堺境沢
(永田)
市道高綱線
田中沢
くぬぎ沢
1地区
2地区
3地区
(北栗)
御乳神社
昭和60年度調査分
1～3地区（北栗遺跡）
（　　）（島立条里的遺構）
昭和59年度調査分(トレンチ)
0
50
100m

第2図　調査地の位置2

押出面の末端であり、河流も次第に北方へ移動したため堆積の状況は複雑となっている。すでに発掘された周辺の遺構で最も近いのは、島立条里的遺構（250m西）、次に高綱中学校遺跡（725m西南西）、島立条里的遺跡（500m北）、島立三の宮遺跡（1,600m北東）等である。いずれも扇状地性の沖積地で堆積環境が類似している。扇状地を形成した梓川の流れの方向を基底礫層でみると次の通りである。島立条里的遺構N－60°－E、島立三の宮遺跡N－40°－E・N－60°－E。これらの方向は東新方向に集まるところから、また58年南栗・北栗遺跡や新村条里的遺構の東西性から考えて次第に曲流し北方へ向きを変えているのかもしれない。また後に述べる第1地区、第2地区の東半、第3地区の東側につながる1mを越える土層の方向N－60°－Eもこの堆積状況を示しているものかもしれない。現在の水田中を流れる用水路は、ほとんど東西性で計画的に奈良井川へ向けて排水をしている。その表層には東西性の堆積が目立っている。地下水位は資料に乏しく推定等深線は590mである。町区の自然水位10.5mを参考にすると10m前後と思われる。

2　遺跡の立地と堆積層

調査区は南から1・2・3地区に分けられいずれも上部に厚い土層が堆積している。地層の状況を概観すると北西方向へ行くに従い土層が薄くなり、それだけ砂礫層が高くなっている。すなわち1地区では検出面まですべて土層。第2地区では南東側80～100cm、北西側60cm。第3地区南東側100cm、北東側70cmと土層が薄くなっている。この状態を1地区からみていくと、厚い土層は上部層と下部層に分けられる。上部層は表土（水田耕土）を含め60～80cmで耕土に続く20cmの青白色土（溶脱層）で以下鉄・マンガンの斑点を混じえた土層からなっている。下層部は黄土色を増したローム質土壌で蛇行状の薄い砂質の帯を混じえる。この土層は検出面の130cmを越え試掘によると砂礫層に達するのは2m以上である。平安初期よりの連続遺跡と考えられる遺構・遺物は地下80cm前後に出土している。この上部層・下部層は59年南栗・北栗遺跡の土層に類似している。南栗・北栗遺跡の場合は上部・下部層の間に流れを示す砂礫層が蛇行するのがみられた。第2地区の土層は第1地区の上部層に相当し地下60～80cmであらわれてくる砂礫層に近づくに従い鉄・マンガンの集積層もみられ暗褐色となっている。西方の島立条里的遺構の土層に類似しているが、条里的遺構の場合は中央部分に同時異相とも考えられる流れを示す砂礫層がみられた。遺構は東側では砂礫層の10cmぐらい上に存在する。西側では遺構の下部に礫を混じえていることがある。また第2地区の中央北寄りに東西性の溝が発見された。溝の幅3～4m（広狭の変化が多い）、深さ30cm～1mと一定せず内部は土を含まない細礫混りの砂層である。鉄分は壁に多く底には部分的である。東への傾斜が極めて緩やかであるうえ底部の堆積に厚薄があるため、用水路として利用したものか判断が難しい。この溝は遺構面とほぼ同じで周辺遺構とほぼ同様の遺物を混えている。3地区北西部は全地区の中で最も土層が薄くそれだけ下底の砂礫層の位置が高い。土層は第1、第2地区の上部層に相当し60～80cmの厚さである。平安中期～後期と考えられる遺構・遺物は第2地区と同様地下60～80cmに存在する。そのため砂礫層へ切り込んでいる場合が多い。砂礫層の礫の形は円礫や亜円礫で硬砂岩

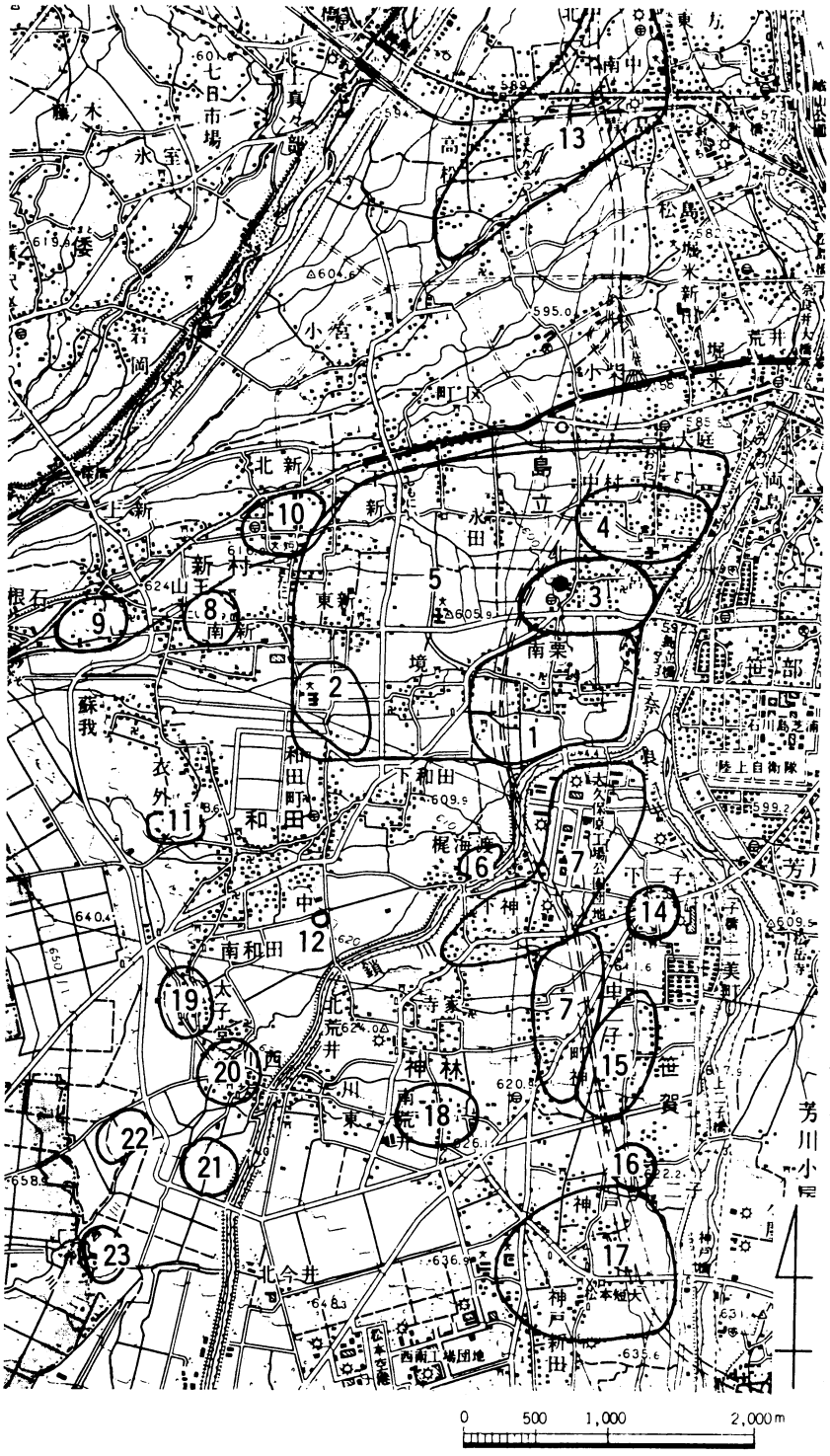
を主とし、チャート・花崗岩・安山岩・砂岩・けつ岩等や砂岩・けつ岩のホルンフェルスがわずかにみられた。粘板岩やけつ岩は細礫が多くいずれも梓川水系の礫で、梓川の氾濫原や旧河床の堆積である。

3　地形の形成

島立地区のように広い範囲で発掘が行なわれると今まで扇状地性沖積地、あるいは氾濫原堆積物と一括されていた地層にもいろいろな堆積状態が発見されるようになり考古学的にも地学的にも興味深い。旧河床が発見されたり、島内高松～上平瀬に至る自然堤防状の地形は埋没地形として発見されるなど、堆積の時期・順序が理解されるだけでなく遺跡の立地環境の解明に役立つ。今回の発掘でも調査地の南東部は土層が厚く北西部は土層が薄い。殊に南東部は２mを越える土層に連続している。一方北西部は次第に砂礫層の位置が高くなっていく。この接点をみると凡そN－60°－Eを示し延長すると三の宮の流れの方向N－60°－Eに連続する。また島立条里的遺構の流れの方向とは平行する。これによって旧河床や氾濫の方向が推定される。次に調査地の資料をもとに、地形の形を順序立ててみると下記のようになる。

1	下部砂礫層　地下２m（＋）	第１地区
2	下部土層　　ローム質土壌黄土色	第１・２地区
3	上部砂礫層　地下60～80cm	第２・３地区
4	上部土層　表土（耕土）青白色土層、褐色土層	第１・２・３地区

ここで注目されることは下部土層の極めて厚いことで上部砂礫層と下部砂礫層の連続は考えられないとするとこの土層と上部土層・砂礫層は一応不整合で堆積時を異にすることになる。この場合下部土層と砂礫層の状態が南栗・北栗遺跡に対応あるいは連続する可能性がでてくる。南栗・北栗遺跡のこの土層は縄文土器の包含層であるのでその関連も予想される。あるいは前述の埋没地形・土壌とも考えられ、北栗集落や南栗集落が自然堤防状の高まりとなって、後の氾濫原に対していた状態が想像される。また条里的遺構調査の時にも永田集落寄りに１mを越える土層を観察している。氾濫の常として複雑な堆積が示されるが古い自然堤防状の高まりと、旧河床や乱流路がみつかることを期待したい。



● **発掘地点**

1．南栗遺跡（1983～85）
2．高綱中学校遺跡（1984・85）
3．北栗遺跡（1985）
4．三の宮遺跡（1986）
5．新村島立条里的遺構（1984～86）
6．梶海渡遺跡（1985）
7．下神・町神遺跡(1983)
8．秋葉原遺跡（1982）
9．安塚古墳群（1978）
10．新村遺跡
11．西和田遺跡
12．和田町遺跡
13．島内遺跡群（1984～1986）
14．下二子遺跡
15．中二子遺跡
16．くまのかわ遺跡(1981)
17．神戸遺跡群（1979）
18．南荒井遺跡
19．太子堂遺跡
20．川西遺跡（1986）
21．川西開田遺跡
22．三間沢川左岸遺跡
23．境窪遺跡

（ ）内市教委調査年度

第3図　周辺遺跡

第3節　周辺遺跡

島立地区より西を望むと新村地区がある。ここにはすでに調査され末期古墳で知られる秋葉原遺跡、安塚古墳群がある。又南方には梶海渡遺跡、鎖川を越えれば下神、町神、下二子、中二子遺跡（いずれも奈良～平安時代）とつづき、更に南にはくまのかわ（縄文、奈良、平安）、神戸遺跡（縄文・平安）などがあり、これらはいずれも松本市教育委員会、長野県埋蔵文化財センター等により調査の手が入っている。そして遠く山形村境まで眺めれば、川西開田（縄文・平安）、三間沢川左岸（平安）遺跡があり、境窪遺跡では弥生・平安時代の遺物が得られている。

さて島立地区では昨年埋蔵文化財センターによる中央道部分の調査が一応終了し、既に一部その成果を知る事ができる。それによると鎖川から堀川迄の南栗遺跡からは、古墳時代末期から中世までの竪穴住居址337軒、掘立柱建物址106棟、土壙・墓壙約1,000基、他に柵列、溝、井戸、集石等が検出され、当該遺物の他、縄文・弥生土器、八稜鏡、金・銀環、佐波理銚等を出土している。この北側、堀川から境沢までの間は北栗遺跡としている。ここでは弥生時代後期住居址１軒の他、奈良・平安時代から中世にかけての遺溝が多く、竪穴住居址253軒、掘立柱建物址93棟、竪穴状遺構を含む土壙1800余基、それに溝、柵列、水田址等を検出、遺物には中世陶磁器の他、和鏡、数珠、瓦塔、簪等がある。さらにこの北側から松本電鉄島々線までの間は三の宮遺跡として扱い、ここでは古墳時代末期から中世にかけての竪穴住居址176軒、掘立柱建物址81棟、柵列10、畠地３、土壙3,000余基の他、水田址の可能性のある３地点を確認している。(1)

未整理ながら今年度行なったほ場事業関係の調査について簡単にふれておく。三の宮遺跡では弥生時代末期住居址12、古墳・平安時代住居址各１軒、中世の建物址と住居址を30余基、他には中世～近世の墓壙等を検出した。条里的遺構の調査としては、平安時代の住居址を２軒、また県道新設に伴う事業で奈良～平安時代住居址13軒、建物址１軒等を調査した。

中央道というこの長大なトレンチは南栗、北栗、三の宮遺跡の西側をかすめ、従来条里地帯として眺められてきた一帯の中央部を通っている。これにより点、範囲でのみとらえられてきた各遺跡を関連づけこの地の歴史的様相が解明されつつある。

注１　長野県埋蔵文化財センター『長野県埋蔵文化財センター年報２』　1985
『長野県埋蔵文化財ニュース　No.19』　1987

第4図　遺構配置図

第3章　北　栗　遺　跡

第1節　調査の概要

今回はまず調査予定地内に6ヶ所試掘を行ない土層把握につとめ、次に南より便宜的に1、2、3と地区名をなし2地区から開始した。地区別に分けたのは各地区間に使用中の農道及び水路が通っておりそれを残す必要があった為である。その結果実質調査面積は1地区1,147m²、2地区2,566m²、3地区1,624m²の計5,337m²である。

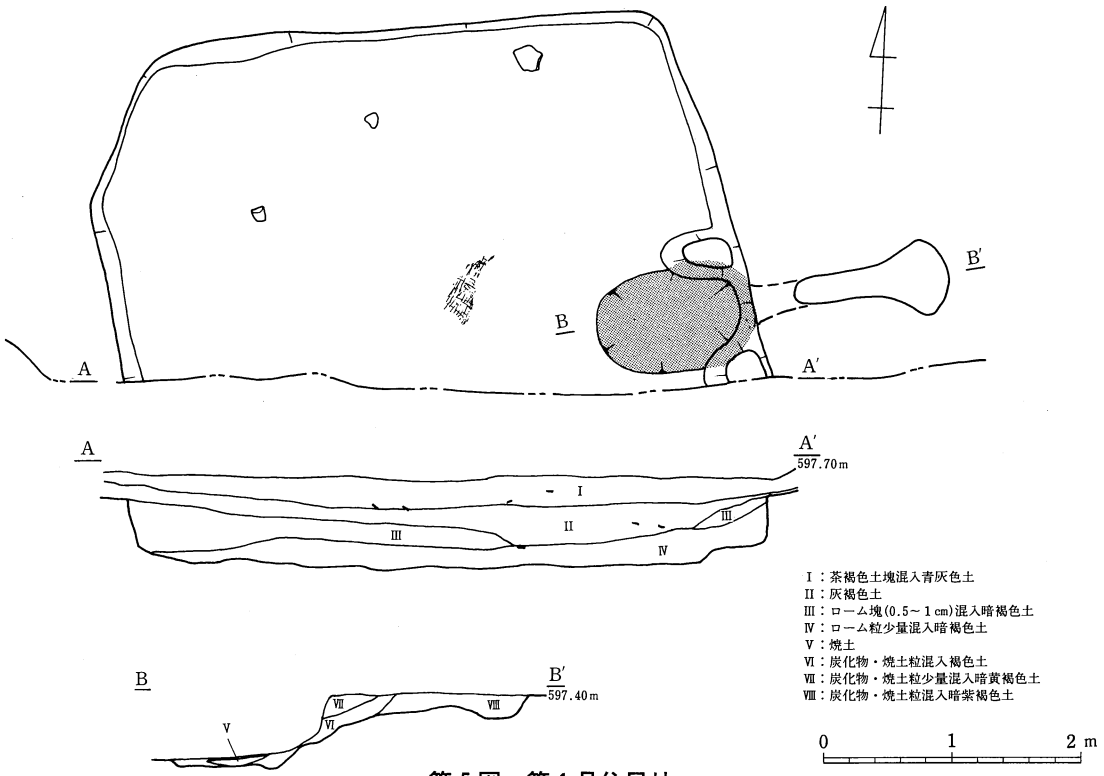
発掘成果としては住居址43、掘立柱建物址19、柵列2、そしてこれらを含めてのピットが総数233、土壙18、溝1などである。

時期別にみると、住居址はほぼすべてが奈良時代末から平安時代末期に含まれるが、遺物が少ないながらも建物址は古墳時代末～平安時代中期迄の様相を見せており、この点両者はやや時期差がある。

溝は西から東へ巾の広い1本を検出した。時間的制約の為トレンチを3本入れたにとどまる。その結果自然流路と考えられるが、須恵器を主体とする多量の遺物が出土した。

遺物としては土器に住居址より該期の土師器、須恵器、陶器など各器種を見ることができる。又縄文晩期土器片が土壙より出土、さらに2地区検出面及び溝覆土中から弥生時代の彩色土器片数点を得ている。又やや変ったものとして唯1点住居址内より得られた布目瓦がある。これは丸瓦で遺存状況は非常に良い。金属器の類としては銅製帯金具、紡錘車、鋤頭などがある。又土製品、石器類は量的に少なく全体に貧弱であった。

尚1地区に関しては試掘でも遺物を得る事ができず、又既に削平した北の2地区より土質が良好すぎて鉄分・マンガン分などの集積層が顕著でなくやや深めに重機を入れてしまった。その結果、中央部にて2ヶ所から焼土を発見したのであるが、この焼土を遺構に結びつけることができなかった。



第5図　第1号住居址

第2節　遺　構

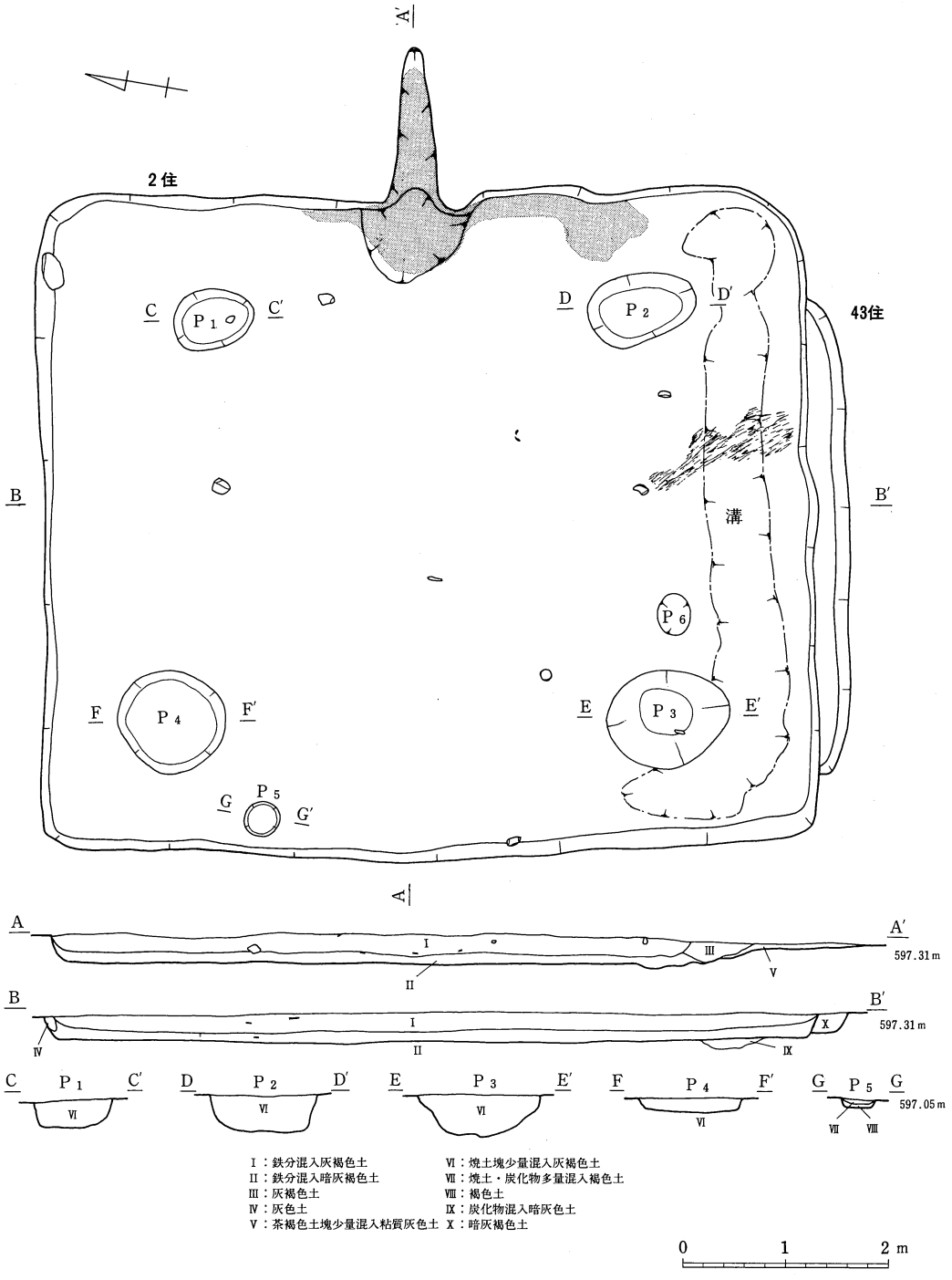
1　住居址

第1号住居址

本址は2地区南西隅にあり北東には2住が接近している。南半部は未調査となってしまったが、規模は東西5.0mでやや不整な方形を呈すものと思われる。主軸方向は、N－80°－Eを示す。遺構は2地区のうちでは非常によく残存しており、壁はほぼ直状をなし検出面から床面迄の深さは中央部分で約60cmを測る。床面はローム塊混入褐色土で平坦となり壁際部分以外はかなり堅く良好であった。又覆土は土質で石はほとんど含まず多量の土器が混入している。その中層には若干の焼土及び炭化物を確認したが埋没時に凹地を利用した痕跡であろうか。

カマドは床面よりやや高く設けられた粘土袖と長い煙道より成り、被熱部分は80×120cm程度の範囲で焼土類が広がっている。なおピット等は検出することはできなかった。

遺物は多く須恵器を主に土師器、灰釉陶器が見られる。須恵器には有台、無台の坏が多く他に短頸壺、長頸壺、甕、土師器には坏、内黒埦、甕、小形甕等がある。混入したと思われる須恵器高坏、灰釉碗を除けばVI期に該当しよう。



第 6 図　第 2 ・43号住居址

第2号住居址

本址は2地区南西部に位置する。東西6.5m南北7.5mの規模をもち今回検出した住居址中最も面積的に大きい。平面形は東側がやや隅丸を呈し主軸方向はN－80°－Eを示す。南側には本址より古い43住があるが浅い為にほとんどが消失してしまっている。又南東壁から内側にかけて炭化材片と小骨片が若干見えていた。これらは覆土中層であり1住同様埋没時の痕跡と考えられる。残存壁は20～25cmとさほど深くはない。床面は自然礫直上にありローム塊を含む土、或いは茶褐色土となっており部分的に堅さが感じられる程度である。

カマドは東壁中央部分にあり非常に長い煙道をもっている。又東壁の南半部はやや内に外に凸凹しておりその壁際と煙道部は煙出し近くまで焼土が広がっているのが確認された。

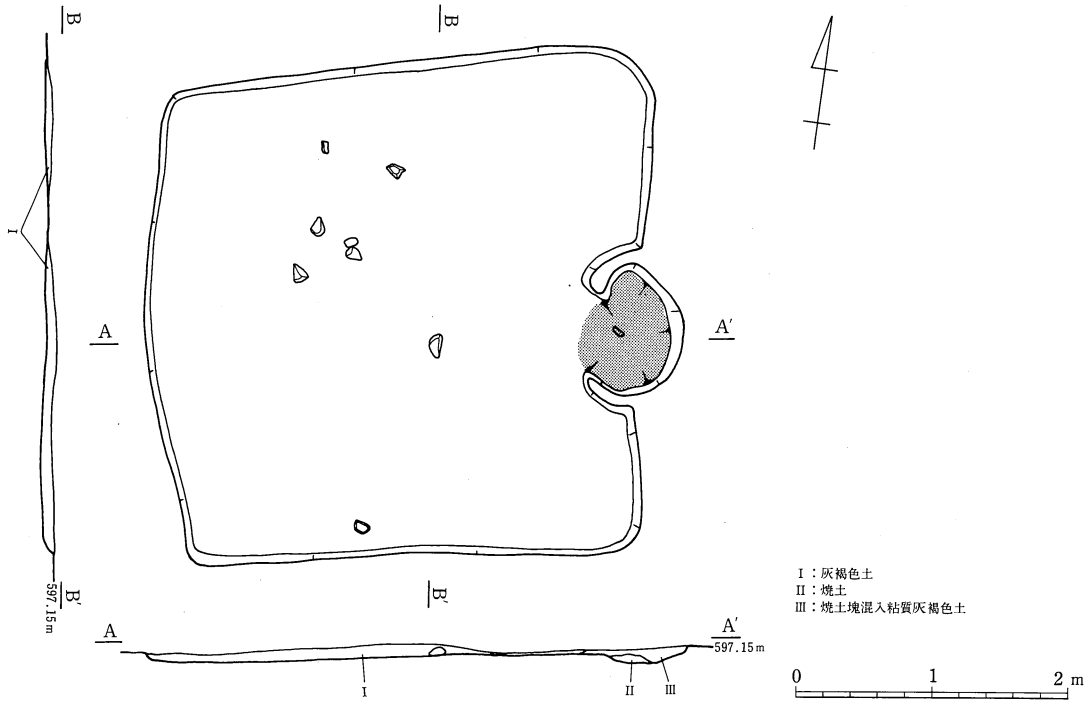
ピットは6ヶ検出された。このうち主柱穴はその規模と位置からしてP_1（78×59×29cm）、P_2（107×70×38cm）、P_3（121×96×45cm）、P_4（115×101×4cm）の4ヶと考えるが、P_4は特に浅い。なお南壁やや内側には床面下からではあるが、巾60cm前後、深さ約10cmの溝が検出された。溝は一部が東・西壁に添い、巡り始めている。この中からは焼土塊・炭化物が多く、土器片も比較的多く出土した。

遺物は土器が割合多く他に鉄器がある。土器は須恵器と土師器が見られる。須恵器には、有台・無台坏、蓋、スリ鉢、甕、長頸壺、甕等、土師器には小形甕、甕等がある。供膳形態はすべて須恵器である。鉄器としては鑓鉋が1点有った。土器からして本址はIV～V期を与える。

第43号住居址

本址は2住の鉄分沈澱の覆土に対し、その余り見られなかった土を以って確認した遺構である。南壁のみしか遺存しておらず概要の把握は不確実なものとなってしまった。規模は恐らく東西4.7m前後で方形を呈するものと思われる。壁高は15～20cmと2住より約5cm程低い。床面は壁際のみのためかかなり軟弱である。

遺物は非常に少なく、土師器・須恵器の甕数点にとどまる。この遺物と切合からして本址はIV～V期以前であろう。



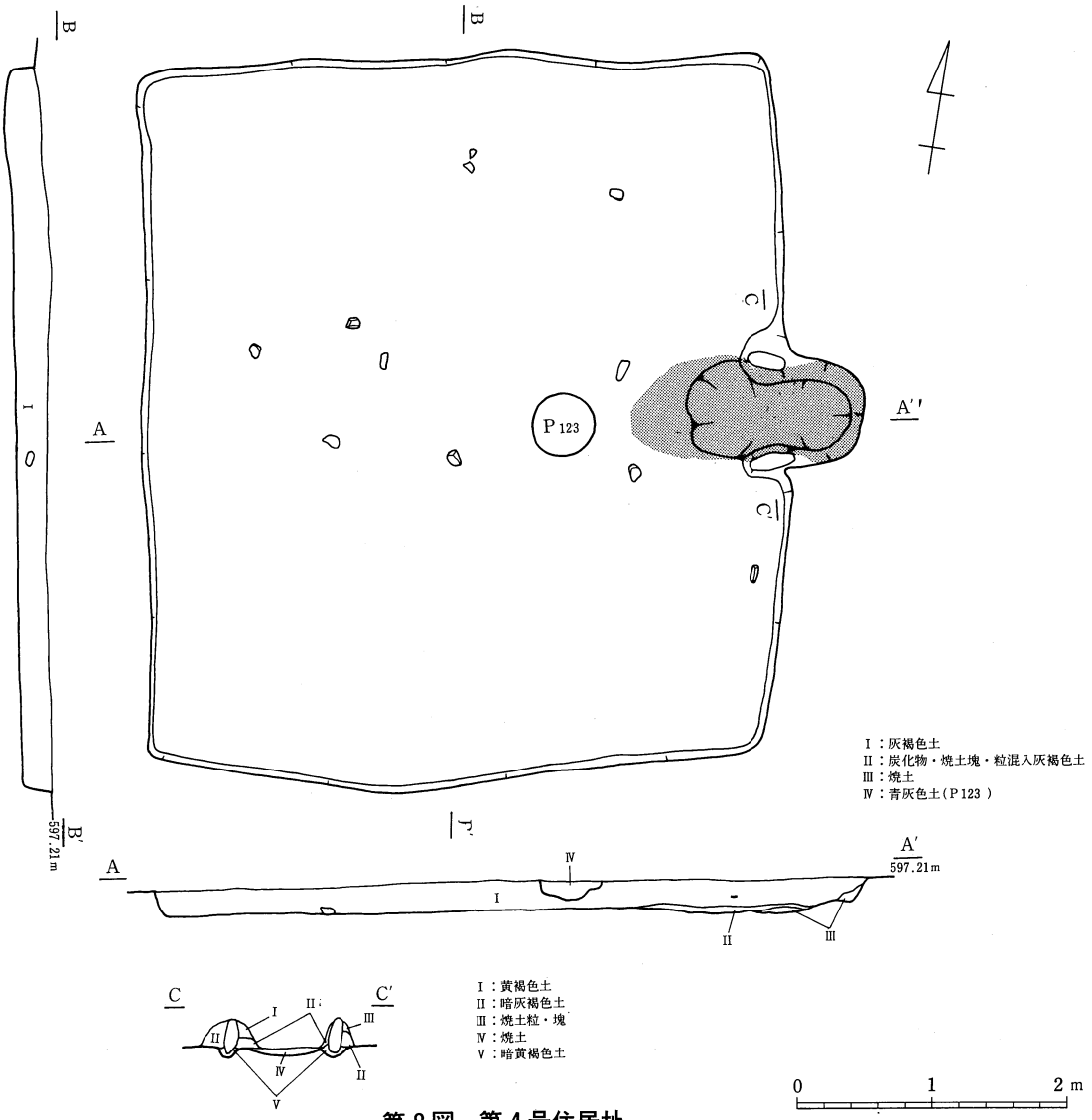
第7図　第3号住居址

第3号住居址

本址は2地区中央部やや南寄りに検出された。3.4×3.6mとかなり小形の住居址である。カマドのある東側の二隅はやや丸く、西壁中央部はゆるやかに外側へ張っている。主軸方向はN－79°－Eをとる。掘込みが浅かった為と重機削平とにより遺存状況は悪い。覆土中には拳大よりやや大ぶりの石が8ヶ程混入しており、当初はもっと多量にあったことをうかがわせる。床面は検出面から最深部で約10cm程である。状態は直径2～5cm大の礫が混入する土が一部堅さをもっており、それを床として捉えた。壁は低いが茶褐色土で明瞭であった。

カマドは東壁中央部に位置し、壁の一部を内側に掘り残したのか、あるいは土を固めカマドの中心部を囲うようにして両袖を設けていた。焼土は焚口から奥壁まで良く遺存し、燃焼空間が奥で広がっていたものと思われる。又土器はこの焼土上より比較的多くが出土している。

遺物は少なく須恵器を主体とする。このうち蓋と坏が図示できた。これらにより本址はV～VI期の時期と考える。



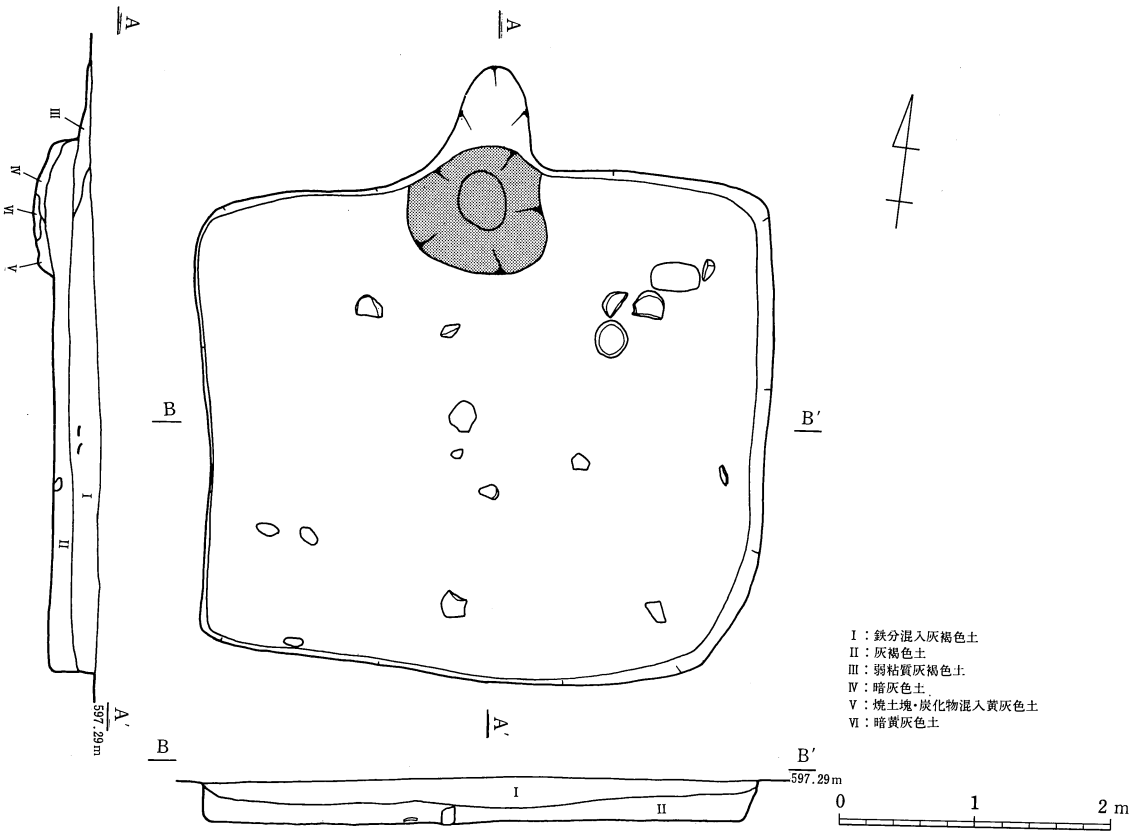
第8図　第4号住居址

第4号住居址

本址は2地区ほぼ中央に位置し、規模は4.7×5.4mを測る。主軸はN－81°－Eを示し、平面形は南北両壁がゆるやかに凹凸となる方形を呈する。覆土中には全く土質の異なるP_{123}を検出している。壁は茶褐色土を呈し四面とも約20cmでほぼ直状に落ち込む。床面は1～5cm大の礫層直上にありやや堅い茶褐色土である。

カマドは東壁中央にあり、安山岩の石2個を立て埋設した石芯カマドである。焼土は焚口部より内側に広がり、奥壁まで遺存している。

遺物は少なく須恵器の有台・無台坏、壺、土師器の小形甕などである。供膳形態は須恵器がほとんどであった。Ⅵ期の遺構である。



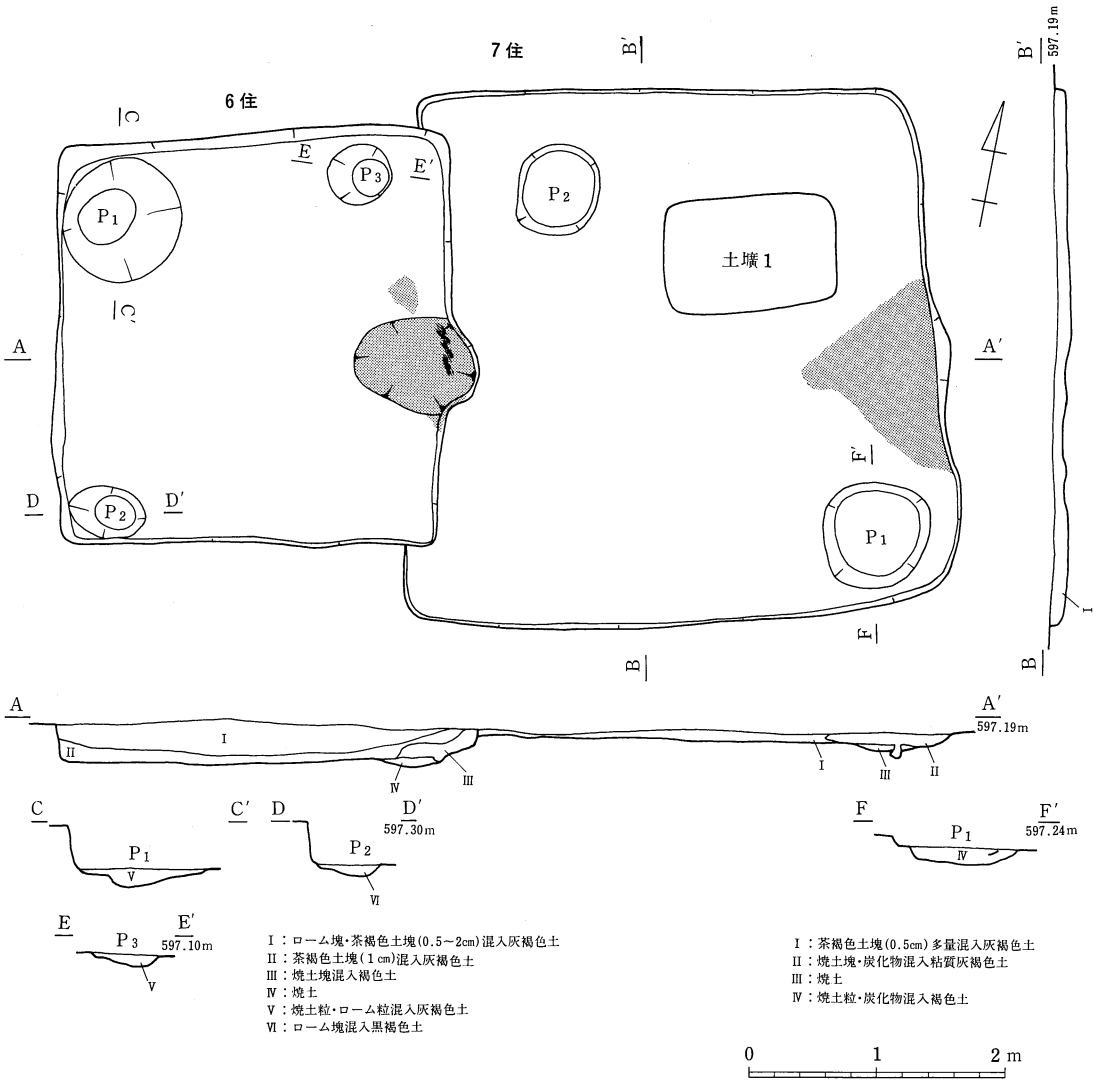
第9図　第5号住居址

第5号住居址

本址は2地区中央やや南寄りに検出された4.1×3.8mの規模をもつ住居址である。平面形は概して隅丸方形を呈するが、東半部は緩やかに張り出し、西半部はゆるやかに内湾する。覆土は鉄分の沈澱したⅠ層と、そのほとんど見られないⅡ層を主体としている。遺構の遺存状況は良く、遺物はほとんど床面から得られ、覆土中から得られた物は少ない。主軸方向はN－7°－Wを示す。壁高は30～35cmを測り、西壁面はやや外へ膨らみ、巾着型のようになっている。床面は茶褐色を呈し、中央部はやや堅い。又北東部には花崗岩を含む平坦な石が床面上に密着していた。

カマドは、北壁ほぼ中央に位置する。壁が少し掘り込まれ、奥壁は急に立ち上がり、煙道が延びている。焼土はカマド内と周囲の床面上90×100cmの範囲に広がって見られる。

遺物には、土器の他に帯金具と、刀子が2点ある。土器は須恵器と土師器が見られ、須恵器には有台・無台の坏が多く、他に高坏、壺等、土師器には内黒坏、小形甕他に武蔵型の甕が多い。供膳形態としては須恵器、土師器があるが須恵器を主としている。これらの遺物より本址はⅦ・Ⅷ期を考える。



第10図　第６・７号住居址

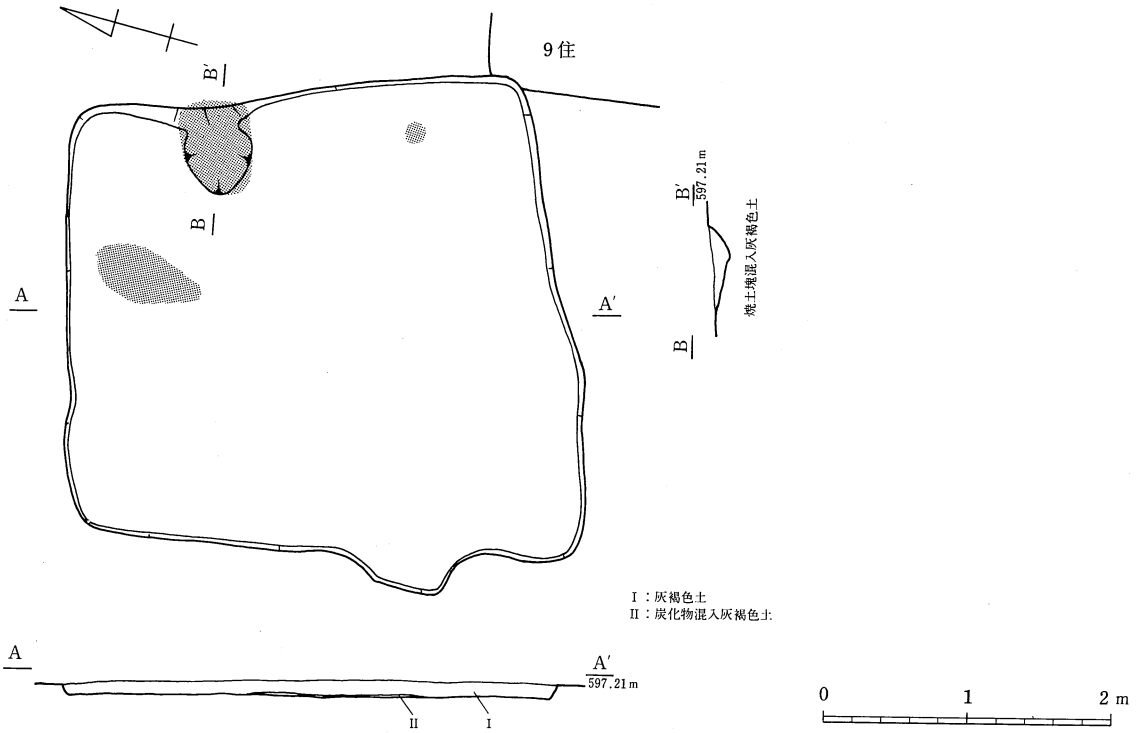
第６号住居址

２地区南東部に位置し、東側に７住を切る。規模は3.1×3.4mと非常に小形で方形を呈し、主軸方向はＮ－80°－Ｅを示す。壁高は約30cmを測り、壁は直状を示す。床面は黄褐色土で堅く良好であった。遺物はほとんど床面近くにあり、覆土中からのものは極めて少ない。

カマドは東壁中央に見えており、壁を掘りこんだだけのもので、75×95cmの範囲に焼土が広がっていた。

ピットはP_1（98×90×12cm）、P_2（62×40×11cm）、P_3（52×50×12cm）があるが、いずれも浅すぎて柱穴としては好ましくない。

遺物は少なく須恵器に坏、甕、土師器に甕を見る程度である。他には刀子の茎かと思われるものが１点である。供膳形態はほとんど須恵器でVI期に該当する。



第11図　第８号住居址

第７号住居址

本址は4.4×4.2mの方形の住居址である。N－77°－Eに主軸を置き、西壁部分を６住に破壊され、又、北東部分には本址埋没後、土壙１が存在した。浅い掘り込みと重機による削平の為遺存状態は悪く、検出面より床面迄は非常に浅い。この為遺物も少量で床面及びその直上のものが主なものとなる。壁は約10cm前後、床面は壁面と同様茶褐色土となりやや堅く砂質である。

カマドは東壁中央部に位置する。特別な施設はなく壁が若干張り出し、焚口部が周囲の床面より少し低いのみである。袖受の施設のない為焼土は両側にやや広く散っている。

ピットはP_1(84×82×14cm)、P_2(72×63×10cm) の２ヶが隅に検出された。共に浅く主柱穴とはなり得ないと思われる。

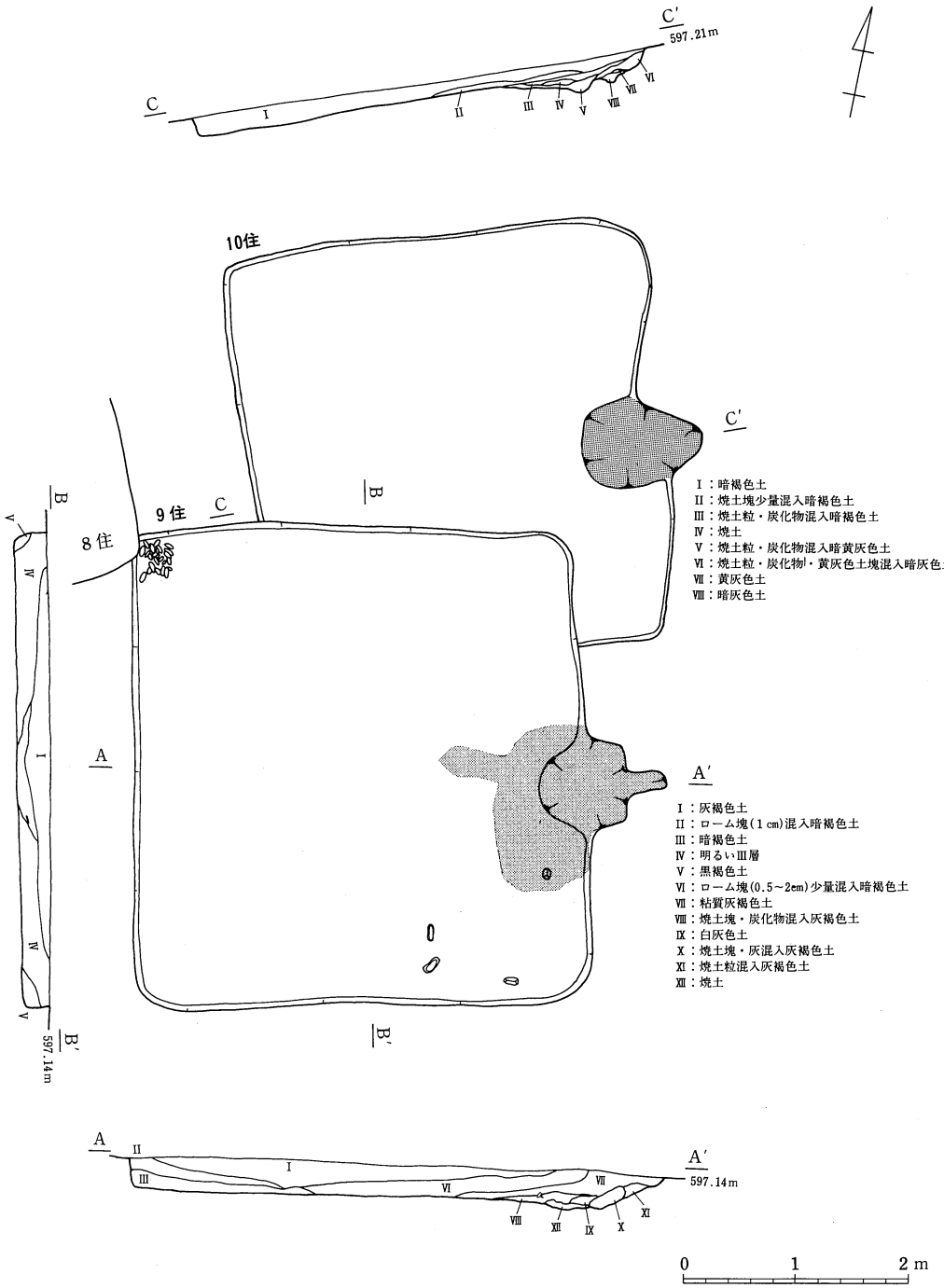
遺物は少量で須恵器の蓋、坏、土師器の小形甕、甕等があり、VI期以前Ｖ期頃と考える。

第８号住居址

２地区南東部に位置する。規模は3.6×3.6mの不整方形を呈する。主軸方向はN－72°－Eを示し、南東隅で９住の一部を切っている。床面は黄褐色土で軟弱な状態であった。又中央北寄りには焼土と炭化物が薄く広がっていた。壁は10cm前後と低く、遺物も床面上より得られた少量のみである。

カマドは東壁中央やや北寄りにあり、燃焼部分が少し低く掘り込まれたのみで、これに関わる焼土も狭い範囲にまとまっている。

遺物はごく僅かで土師器武蔵型の甕がありこの遺物からすると９住より古い様相を示す。



第12図　第9・10号住居址

第9号住居址

本址は2地区南東隅に検出された。前後関係を見ると北西隅上部を8住に切られ、北側では本址が10住を切っている。遺構は茶褐色土から黄褐色土中に掘り込まれ、良好な遺存状態であり、土層断面では典型的な自然堆積の様子を見せている。規模は4.6×4.2mで端正な隅丸方形を呈し、主軸方向はN－81°－Eを示している。四方の壁は20～28cmと割合に高く残り、垂直に近い状態であった。床面は平坦で一面に黄褐色土となり、堅く極めて良好である。遺物は覆土下層から床面にかけて多く見られ、主たる物が出土している。又北西隅床面上には36個の編物用石錘と思われる自然石がまとまって見られる。

カマドは東壁中央部に位置する。幅は80cm、奥行は周囲の壁より約35cm程掘り込まれて、燃焼部を造り出しているが、火床面は周囲の床面より若干下がる程度である。煙道は35cm程が残存している。焼土は多く、非常に鮮やかな赤橙色を呈し、カマド全面及び住居址内部にかけて大きく広がっている。土器類はその周囲にも多く遺存している。なおピット等は全く見られなかった。

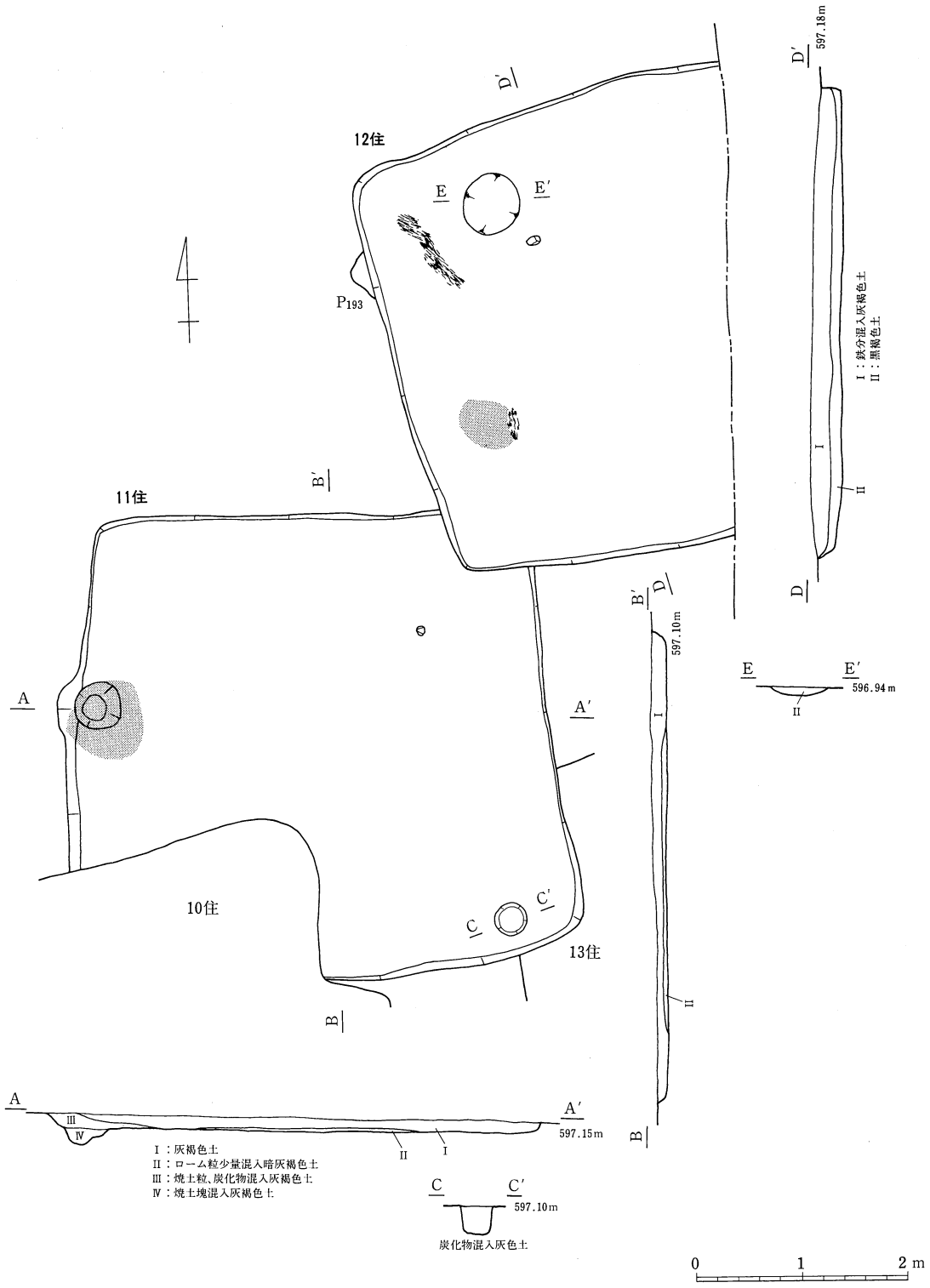
遺物には須恵器と土師器とがある。須恵器としては有台、無台坏、短頸壺、甕など、土師器には内黒坏、小形甕などが見える。供膳形態は須恵器を主とするが内黒土器も混じえる。ここで編物用石錘について少し触れておく、これらは67～192gのもので70～100gのものが多く、その種の石としては小ぶりなものであり、このうちの1点に擦れた痕跡が確認できた。土器から与えられる本址の時期はⅦ期であろう。

第10号住居址

本址は9住に南を切られている為、検出できたのは約7割程度の面積である。覆土は9住の灰褐色土に対し、本址は暗褐色土となり黒っぽい事で両者を区別している。規模は3.6×3.8mを測り北東隅は丸く、他の二隅は角張った方形を呈している。主軸方向はN－74°－Eを示す。壁は15～20cmの高さを持ち直状をなす。床面はやや堅く壁同様に茶褐色を呈する。

カマドは東壁中央に位置し、壁を掘り凹めただけのもので特別な施設は設けていない。ただカマド北側の壁は故意に掘り残してあり、それが燃焼範囲を限定させており、その為袖の一部をなくしていたものとも考えられる。また焼土の見られる中央部には灰色の土を落とす小さい穴が見えている。これは位置からして支柱石を抜いた痕跡と思われる。

遺物は少なく須恵器に蓋、坏、土師器に甲斐型坏、小形甕、甕などである。これらを考えると本址はⅤ・Ⅵ期とする事ができる。



第13図　第11・12号住居址

第11号住居址

本址は2地区南東隅に位置する。この辺は褐色土中に住居址の検出密度が高く、本址も4軒が切り合っていた。灰褐色土の覆土を落とす本址を中心として各住居址の覆土を概観すると、まず本址南東隅には先行する13住がある。土色はやや灰色の度合が少なく、炭化物・灰色のブロックが混入している。そして本址を切る遺構としては南西部に10住、北東隅に12住がある。前者はやや黒っぽい暗褐色土で、後者は鉄分を含む灰褐色土であった。規模は東西4.2m（北側）～4.8m（南側）、南北4.4mを測り、南部が巾広い台形様を呈している。主軸方向はN－90°－Wを示す。壁は褐色土で10～15cmと低く、床面は判然としているがやや堅い程度である。遺物は少なく、床面上及びカマドの周辺より若干得られたのみである。

カマドは西壁ほぼ中央に位置する。壁は若干外へ膨らみ、火燃部はピット状に周囲の床面より約15cm程凹んでいる。焼土量は少なく狭い範囲に見られた。

ピットは南東隅に15×15×26cmのもの1ヶを検出した。

遺物は少ない。須恵器として蓋、土師器に輪積み痕の残る長胴甕などを得ている。これらより本址はIV・V期と考えられる。

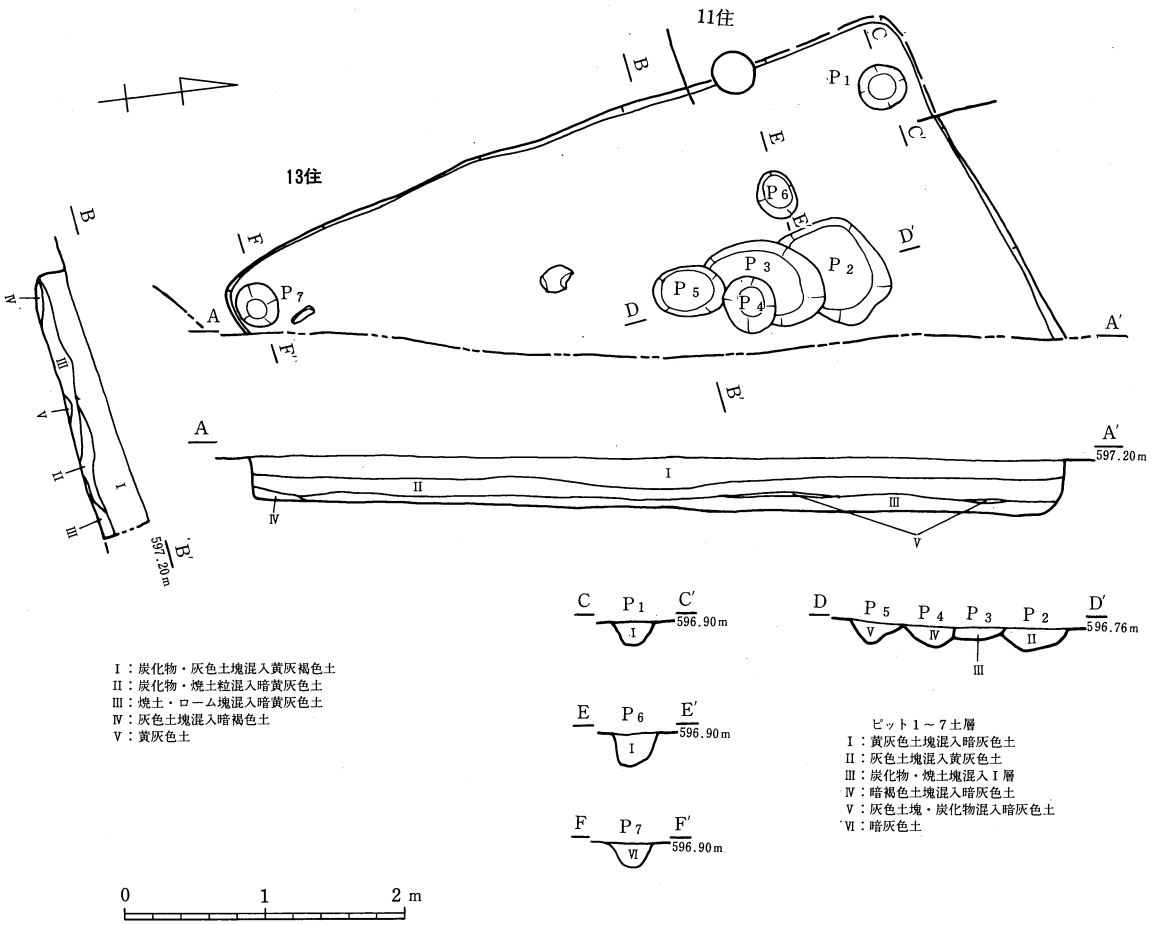
第12号住居址

本址は南西部で11住の一部を切り、又北側には11住同様本址に先行する建物址4が存在する。東側は土盛用地に確保したため調査できなかった。規模は南北で4.5mを測り、方形を呈するものと思われる。壁は20～25cm遺存し、床面は黄褐色土で部分的に堅さが確認できた。西壁ではP_{193}を切り又貼床下にはP_{14}が存在した。これらは位置と規模からみて建物址4のものと考える。西壁寄りに見えている焼土と炭化材片は、覆土中～下層にかけてのもので、本址廃絶後、埋没堆積中の所産である。

カマドは未調査となった東壁側にあるものと推察する。その場合主軸方向はN－80°－E程度を示し、今回調査した住居址の範囲内に納まっている。

ピットは北西隅に1ヶを検出した。なだらかな落ち込みで、柱穴の用をなしてはいない。

遺物は少なく、須恵器に端部内側にかえりが付く蓋、ヘラ切りの無台坏、土師器として甕、小形甕などである。これらより本址は今回調査のうち最も古い様相を見せており、III・IV期をあてはめる事ができよう。



第14図　第13号住居址

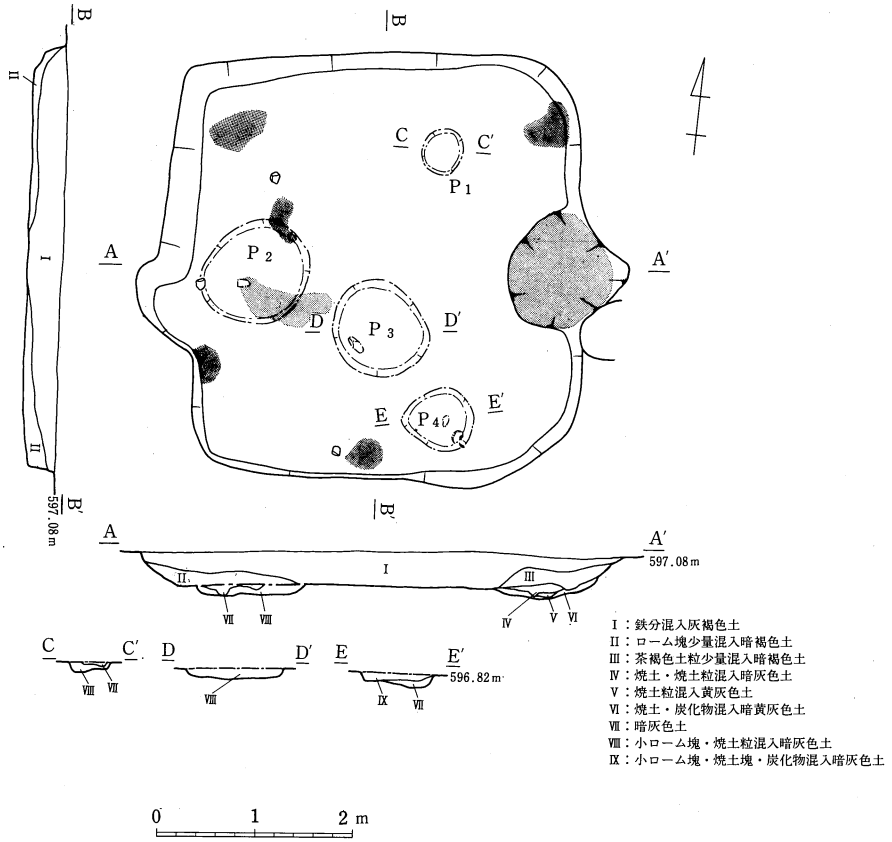
第13号住居址

2地区南東部に位置し、北西隅を11住に切られているが床面が深く掘り込まれているため、上部を破壊されたのみでプランは確認できた。北側に検出した12住と共に東部は盛土下となってしまい、調査できたのは全体の3割程である。規模は西壁側で南北5.1mを測り方形を程するものと思われる。覆土は上面黄灰色土で、炭化物、焼土粒を多く含みこの点が周辺の住居址検出とは異なった様相であった。壁は褐色を呈し直状となっている。壁高は20cm（西壁）～40cm（北壁）を測る。床面は茶褐色土であるが特に堅さはない。

カマドは見当らず、東に設けられているとするならば主軸方向はN－70°－E程度となろう。

ピットは単独で3個　P_1（32×32×17cm）、P_6（36×27×23cm）、P_7（34×30×18cm）、切り合って4個　P_2(82×？×16cm)、P_3（88×？×17cm）、P_4（42×28×19cm）、P_5（52×34×13cm）を検出した。これらは位置、規模から見ていずれも主柱穴になるとは考え難い。

遺物は少なく須恵器、土師器が見られる。須恵器には坏、蓋、広口壺など、土師器には底部に手持ちヘラ削りの見える内黒坏がある。これらの遺物からはIV・V期を与える。又縁辺と中央に敲きの痕跡を見せる自然石がある。



第15図　第14号住居址

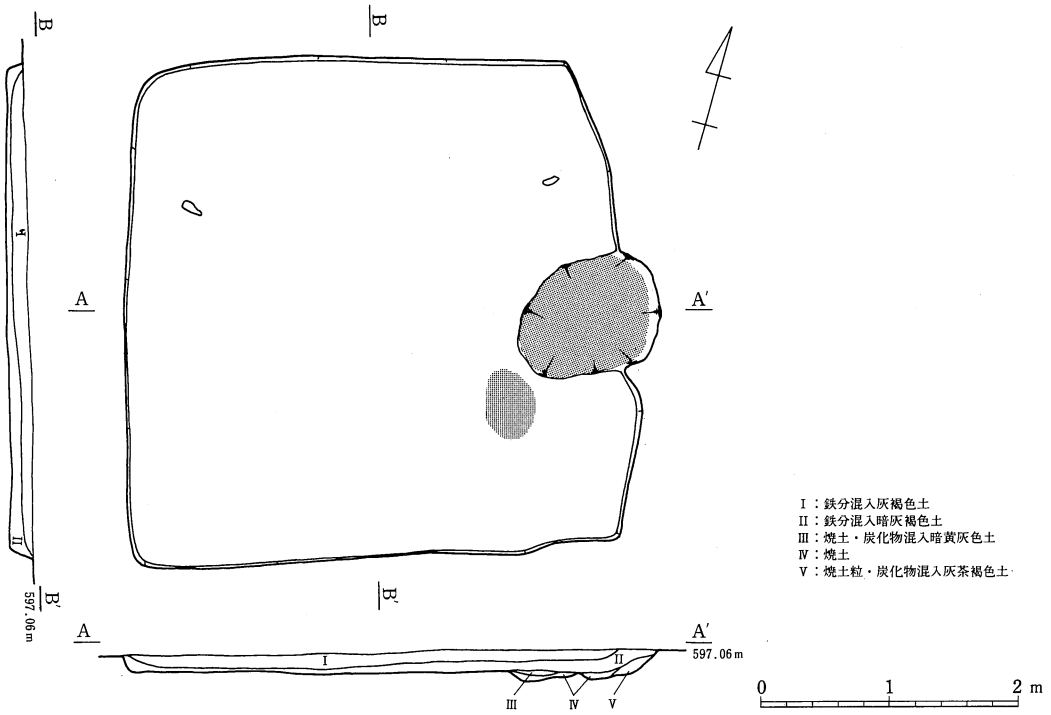
第14号住居址

本址は２地区東側に位置し建物址６に切られ、建物址７、11を切り構築されていると思われる。規模は4.2×4.4mである。平面形は北西隅が角張り、他の三隅は隅丸な不整方形を呈す。西壁中央の突出部は本址の施設と考えられるが、建物址７との切り合いとも考えられはっきりとしなかった。主軸方向はＮ－85°－Ｅを示す。壁は西壁中央～北壁中央にかけてはやや緩やかでその他は直状をなす。検出面から床面迄の深さは中央部分で約35cmを測り、覆土は鉄分混入灰褐色土がほとんどを占める。床面は黄褐色あるいは茶褐色を呈し平坦で堅く良好であった。

カマドは東壁中央を50cm程掘り込み構築されており袖等の施設はもたない。被熱部分は120×105cm程度の範囲でしっかりとした焼土が広がっている。又焼土は覆土下層から床面にかけてP_2内及び周辺・北西隅・北東隅・南壁中央からも検出された。

ピットは４ヶあるがいずれも床面下からのものである。このうちP_3（104×92×14cm）は建物址６の一部と考えられる。その他のピット　P_1（48×43×10cm）、P_2（115×100×11cm）、P_4（74×65×15cm）はどれも浅いものである。

遺物はカマド付近に多く、須恵器、土師器がある。須恵器には蓋、有台・無台の坏、短頸壺、土師器には甲斐型坏、小形甕、甕がある。供膳形態は主に須恵器であり、遺物よりⅥ・Ⅶ期を与える。



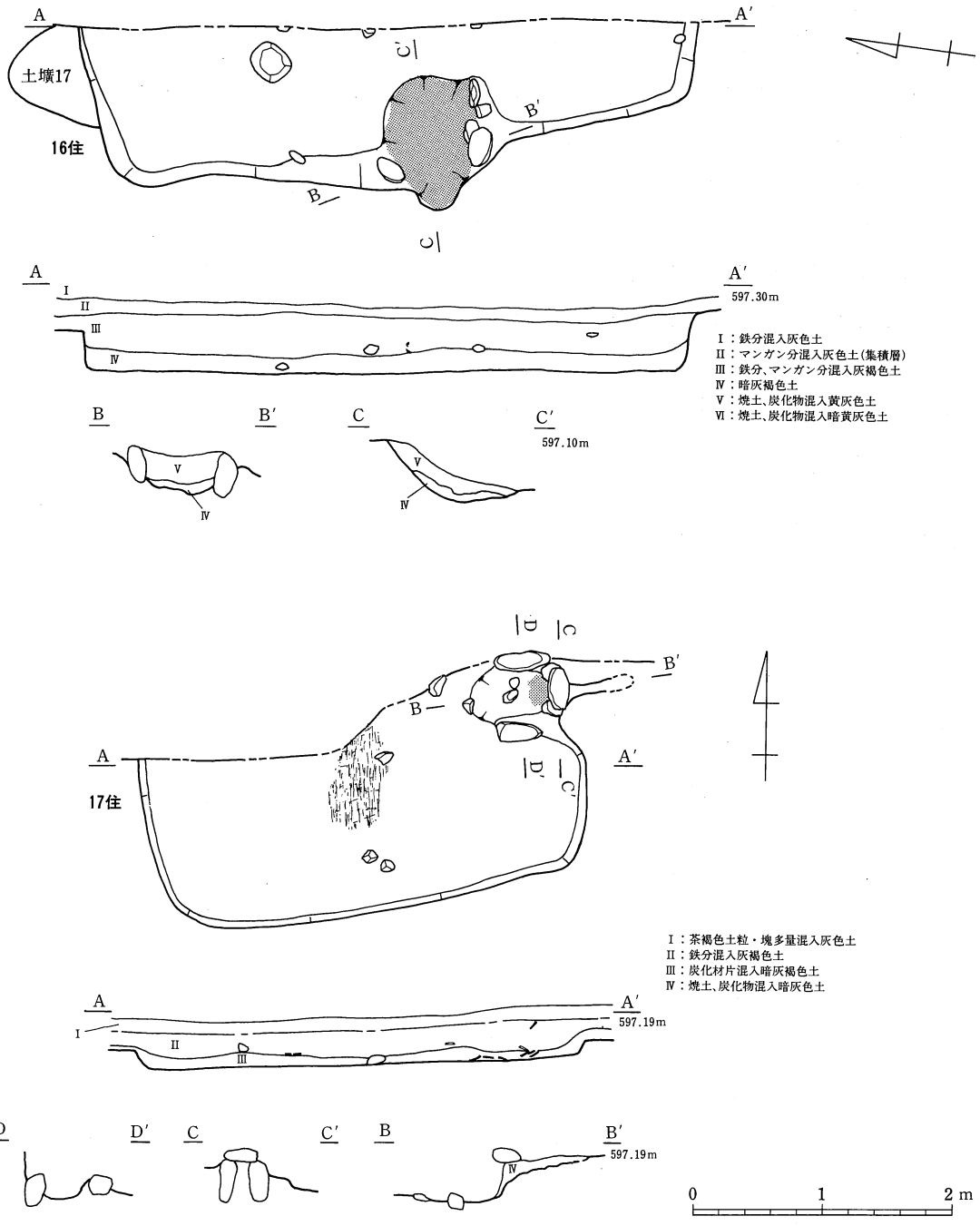
第16図　第15号住居址

第15号住居址

本址は２地区北東に位置し西側には建物址８がある。規模は4.0×3.9mで平面形は北西隅のみ丸く他の三隅は角張る方形を呈する。主軸方向はＮ－73°－Ｅを示す。壁は直状をなし検出面から床面迄は約15cmとかなり浅いがプランは明瞭であった。床面は茶褐色ないしは黄褐色を呈し平坦で部分的に堅くしまり良好であった。又北半部は直径３～10cmの中礫が混入露出していた。

カマドは東壁中央をわずかに掘り込み構築され、焼土は被熱部及びその南側に見られた。ピットは検出されない。尚建物址８の規模より本址との切り合いが当然考えられるがこれらも検出されなかった。

遺物は僅かで須恵器坏、土師器甕、他に刀子がある。Ⅴ・Ⅵ期の様相を示す。



第17図　第16・17号住居址

第16号住居址

本址は2地区東中央やや北に位置する。東側が耕作中の畑のため削平できず検出面積は全体の3割程度である。東側は現地表面からの土層観察が可能でありその点では好運であった。尚本址は縄文晩期の浅い土壙17を切る。規模は南北4.7mを測る。主軸方向はN－103°－Wを示す。壁は直状をなし検出面から床面迄は深く南側で45cmほどである。プランは黄褐色土中に検出され、覆土上層は中礫を多く含む鉄分・マンガン分混入灰褐色土、下層は中礫を多く含む暗灰褐色土である。床面は1～3cm大の小礫が多く暗灰褐色を呈し平坦でそれほど堅さは感じられなかった。

カマドは西壁中央部をやや掘り込み石を数個用いた石芯カマドであり、南北の大きな袖石は高い壁中に埋設されていた。又焼土は検出面より火床まで良好に遺存していた。ピットは検出できなかった。尚本址は全体的に遺存状態は良好であった。

遺物は僅かで須恵器壺、土師器甕、小形甕、内黒坏があり、これらよりⅥ・Ⅶ期が該当しよう。

第17号住居址

本址は2地区北端中央やや東よりに位置し、土盛りのため南側半分程しか検出できなかった。規模は東西3.4mと他に比べ小さい。主軸方向はN－75°－Eを示す。検出面から床面迄は12cmとかなり浅い。床面は礫混入の褐色土で平坦でありそれほど堅さは感じられなかった。

カマドは人力で除土した為もあり今回調査した住居址中最も遺存状態の良いものであり、5ヶの大きな石から成る単純な石組カマドである。両袖石は40cmの間隔を持ち床面に置かれている程度である。その袖石よりやや内側に天井石を支える石が深く埋められている。これら4個の細長い石に対し天井石は扁平で火床部分からは30cmの位置にある。煙道は幅狭く東の方では土色が判然とせずその長さを50cm程と予想した。カマド内の焼土は非常に少なく天井石下に僅かに残るのみである。尚住居址中央に炭化材片があるが敷物が燃えたものであろうか。

遺物は、浅い覆土ながら多い。少量の須恵器坏の他、供膳形態の主流を占める内黒坏、埦、坏、鉢、甕、小形甕など土師器は特に多い、これらより本址はⅧ・Ⅸ期である。

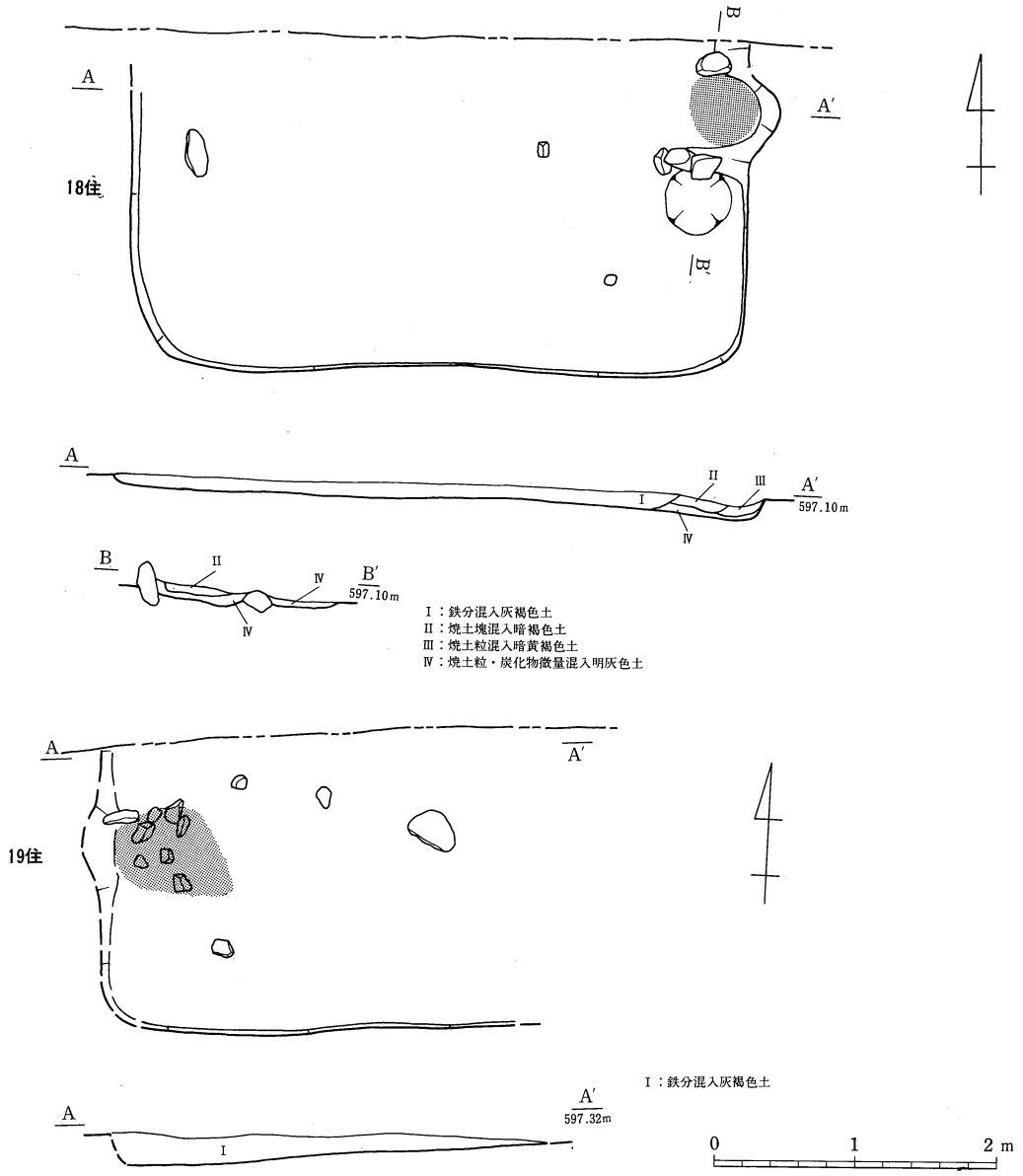
第18号住居址

本址は2地区北端西よりに位置し、17、19住同様南側半分のみしか検出できなかった。規模は東西4.3mを測り、隅丸方形を呈するようである。主軸方向はN－90°－Eを示す。検出面から床面は10cmとかなり浅く、覆土は鉄分混入灰褐色土を主としている。床面は褐色土で軟弱であった。又西側の石は、床に据えられたように密着し検出された。

カマドは東壁をわずかに掘り込み石を数個埋設した石芯カマドである。カマド内の焼土は、わずかである。

ピットは1ヶ（48×46×5cm）で穴というより凹み程のものである。用途は不明であるが、カマドに伴う施設かもしれない。

遺物は僅かで土師器坏、小形甕、甕程度でありX期以降と考えたい。



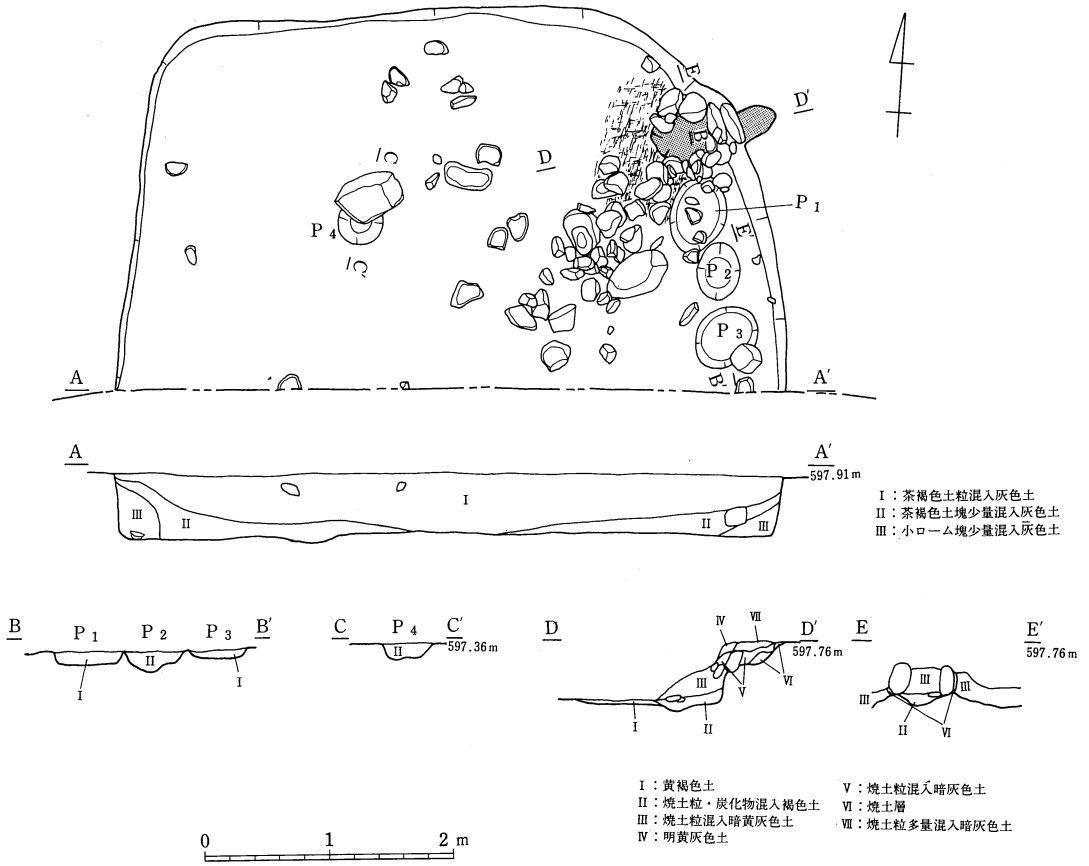
第18図　第18・19号住居址

第19号住居址

本址は2地区北西隅に位置する。東西側は削平しすぎてしまい南壁のみ確認された。西壁は検出面からの土色が判然とせず、カマド施設及び床面より推定した。主軸方向はN－91.5°－Wを示す。土層図より見ると西壁カマド北側で約22cm程一層で鉄分混入灰褐色土の覆土をもっている。床面は小礫を含む茶褐色を呈し平坦で堅く良好である。

カマドは西壁にあり中程度の4個の花崗岩を浅く埋設して構築した石芯カマドである。焼土はこの簡単なカマド前に薄く広がるのみであった。ピットは検出範囲においては認められない。

遺物はカマド付近に多く、土師器坏、灰釉碗等があった。これらより本址はX期以降とする。



第19図　第20号住居址

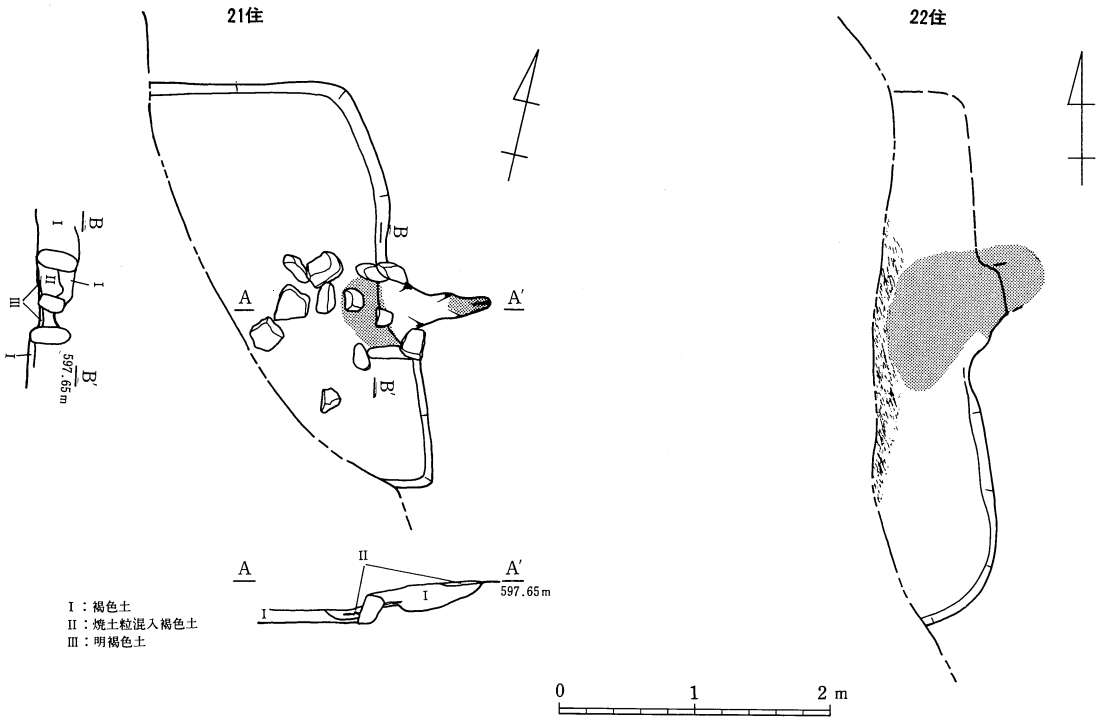
第20号住居址

本址は１地区南端に位置し、土盛りのため北側半分程しか検出できなかった。規模は東西約5.4mを測り、主軸方向はN－57.5°－Eを示す。壁はほぼ垂直にたちあがり床面から検出面迄は50cmと深い。鉄分沈澱茶褐色土中に灰色土を覆土としており明瞭に分かる。又カマド付近覆土上層より住居址中央床面にかけて小児頭大～直径50cm程の多量の礫が流れ込むように見られた。床面は黄褐色を呈し平坦できわめて堅く良好であった。

カマドは今回の調査中ただ唯一北東隅に構築された石組カマドである。

ピットは　P_1（63×45×11cm）、P_2（47×35×17cm）、P_3（56×44×７cm）、P_4（36×？×13cm）と４ヶ検出したがいずれも浅く主柱穴とは考えられない。

遺物はカマド周辺と壁際に多く見られた。土師質の皿、坏、疑似高台、足高高台の埦、灰釉陶器の深碗、瓶など、他には須恵器の生焼けの坏がある。これらより本址は今回で最も新しいXII･XIII期を与える。又鉄器として釘、針らしきものがあった。



第20図　第21・22号住居址

第21号住居址

本址は１地区中央やや南西際に位置する。盛土のため東側３割程度しか検出できなかった。小形で規模は南北3.0m程と思われる。主軸方向はＮ－75.5°－Ｅを示す。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は20（南部）～40cm（北部）を測る。プランは茶褐色土中に検出され、覆土は明褐色土であった。床面は黄褐色を呈し平坦であるが堅くはない。

カマドは東壁中央に構築された石芯カマドで煙道は長さ65cmを測り、焼土はカマド被熱部と煙道先に若干みられた程度であった。尚カマド前に数多く見られる20～30cm大の石をカマド施設に伴うものと想定するならば石組カマドとも考えられよう。

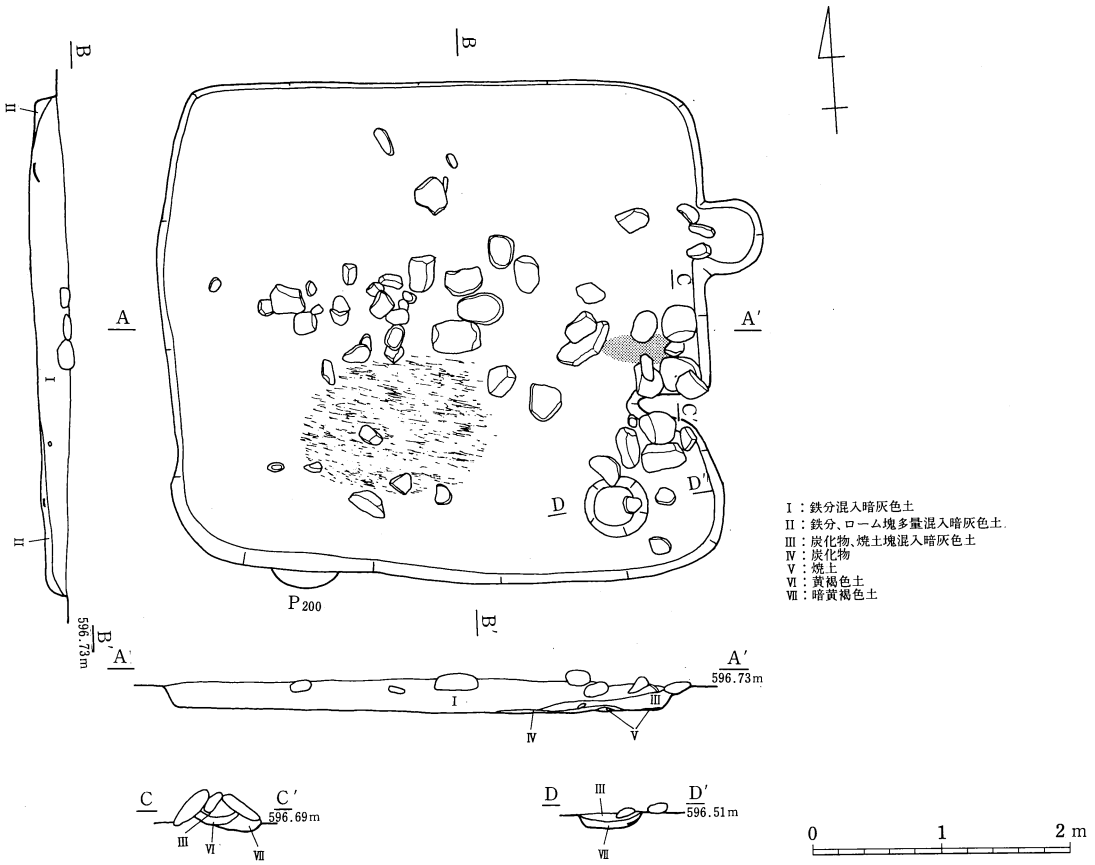
遺物には生焼けの須恵器、坏、内黒埦、小形甕、甕、鉢などの土師器、灰釉陶器の碗などがありこれらより本址はＸ期とする。

第22号住居址

本址は１地区中央西際に位置する。盛土のため東側わずかしか検出できなかった。又カマド～北東側は削平しすぎたため壁は不明瞭となった。規模は南北4.0m程で主軸方向はＮ－85°－Ｅを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり南側で約10cmと低い。床面は黄褐色を呈し平坦であるが堅さはそれ程感じられなかった。尚カマド前床面には厚さ１cm程の炭化物が広がり西へ続いている。

カマドは東壁中央に壁を掘り込んでつくられており、カマド内及び周辺に多量の焼土がみられた。

遺物には須恵器坏、土師器甕、小形甕等があり、時期的にはⅥ・Ⅶ期と考える。



第21図　第23号住居址

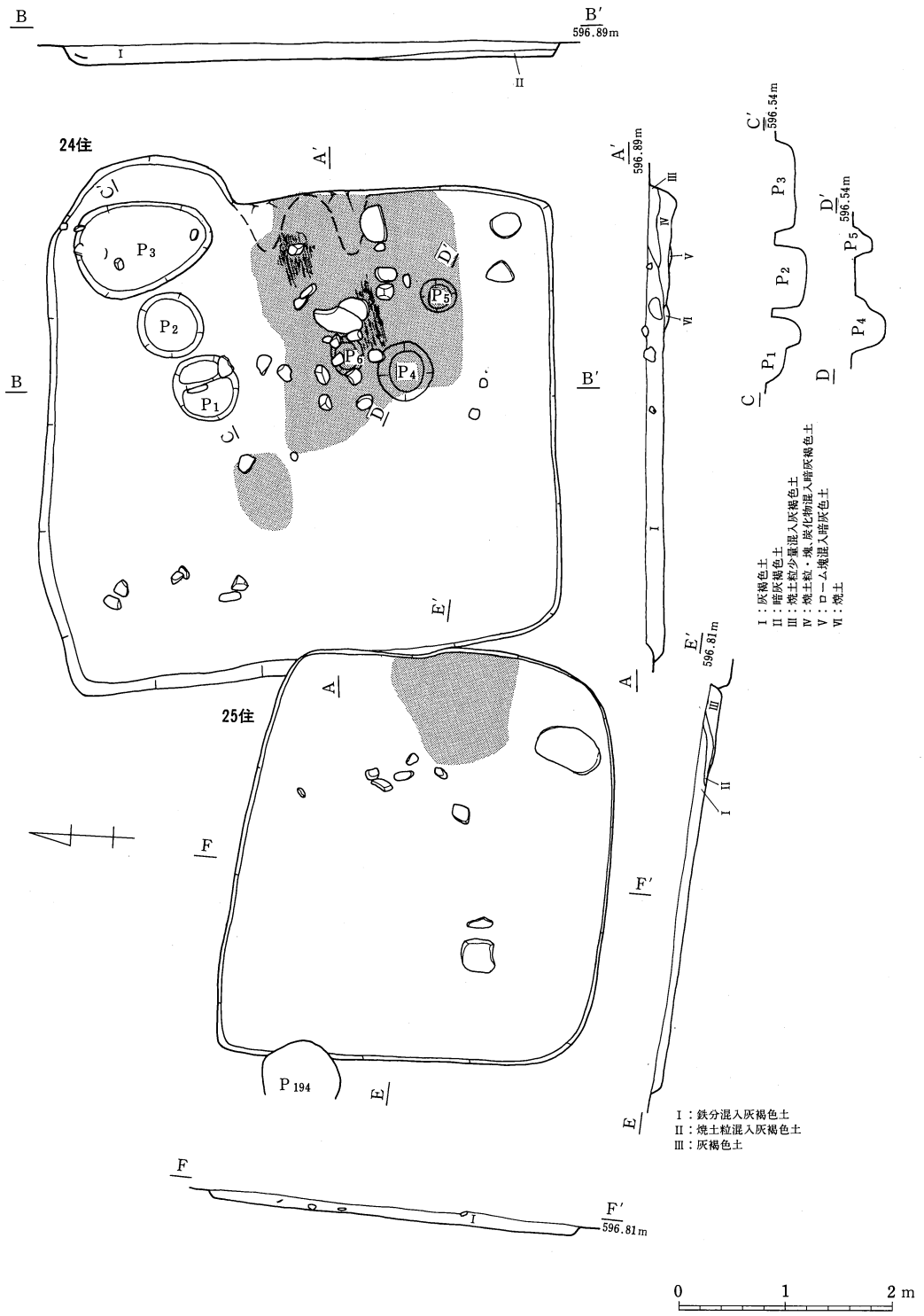
第23号住居址

本址は３地区東側に検出され、南側でP_{200}を切っている。カマド北側に張出し部をもつ4.3×4.0mの方形の住居で、主軸方向はN－94.5°－Eを示す。覆土は暗灰色土で、上層～中層にかけて花崗岩を中心とした人頭大の石が約20ヶと多く混入している。これらは埋没途時に投げこまれたと考えられる。また炭化物も多く、特に中央南西寄り床面上には敷物が焼けたような状況で検出されている。しかし焼土は見当らず本址が火災住居であったとは考え難い。床面は平坦で非常に堅く、鉄分が沈澱し茶褐色を呈している。また壁はやや斜めに立ち上がり検出面までは20cmを測る。

カマドは東壁中央部分にある。石組カマドで両袖石が内側に倒れ天井石と思われる石が中に落ちかけている。焼土の広がりは60×25cmと小さく煙道は検出されていない。

ピットは南東隅に１ヶ（50×46×12cm）検出された。カマド南側に掘り残した地山と床面に置かれた数個の平石、それにこのピットとでカマドの付属施設となっていたものかも知れない。

遺物は多く、生焼けの須恵器坏、土師器は有台、無台坏、内黒坏、埦、小形甕、甕、灰釉陶器の碗、瓶等である。供膳形態は各種別のものが混在している。これらより本址にはX期を与える。



第22図　第24・25号住居址

第24号住居址

本址は3地区東側に位置し25住が西壁をわずかに切る。規模は4.5×4.8mを測る。平面形は方形で北東隅に張り出し部をもつ。主軸方向はN－87°－Eを示す。壁はやや斜めに立ちあがり、床面から検出面迄の高さは15～20cm程である。覆土は灰褐色土で上層～中層にかけて小児頭大の石が多く見られた。床面は黄褐色を呈し平坦で堅く良好であった。

カマドは東壁中央に設けられており遺物出土状況から袖を有していたと思われる。壁の掘り込み煙道等は見あたらなかった。焼土はカマド周辺から床面中央まで広範囲にわたる。

ピットは　P_1(64×60×35cm)、P_2(62×60×30cm)、P_3(128×90×17)cm、P_4(56×52×27cm)、P_5(34×30×15cm)、P_6(37×30×？cm)が検出された。いずれも用途は不明である。

遺物は土師器の内黒坏、埦、鉢、耳皿、坏、甕、灰釉碗等で須恵器はなく、X期である。

第25号住居址

本址は3地区東側に位置し、24住西壁南側をわずかに切る。又西壁北側はP_{194}に切られる。規模は3.9×3.5mを測る。平面形は北西隅が少し角張り西側がわずかに長い台形状を呈す。主軸方向はN－94°－Eを示す。壁は黄褐色土で床面から検出面迄は10cm程と浅い。覆土は鉄分混入灰褐色土で24住同様明瞭に確認できた。床面は鉄分が沈澱し茶褐色を呈し平坦できわめて堅く良好であった。

カマドは焼土が東壁中央を中心に120×105cmの範囲で広がり東壁中央に想定されるが、袖、煙道等の施設は見当らない。

遺物は須恵器の生焼け坏、土師器の内黒埦、坏、灰釉陶器碗などでこれらよりX・XI期を与える

第26号住居址

本址は3地区中央やや東寄りに位置し、西に41住を切る。規模は4.6×3.3mで北側が東西にやや長い台形様を呈し、主軸方向はN－90.5°－Eを示す。壁は垂直に立ちあがり床面から検出面までは住居址中央部で33cmを測る。覆土は上層～中層が茶褐色土塊多量混入灰褐色土で下層は暗褐色土であり、小児頭大の礫が混入している。床面は茶褐色を呈し平坦できわめて堅く良好であった。

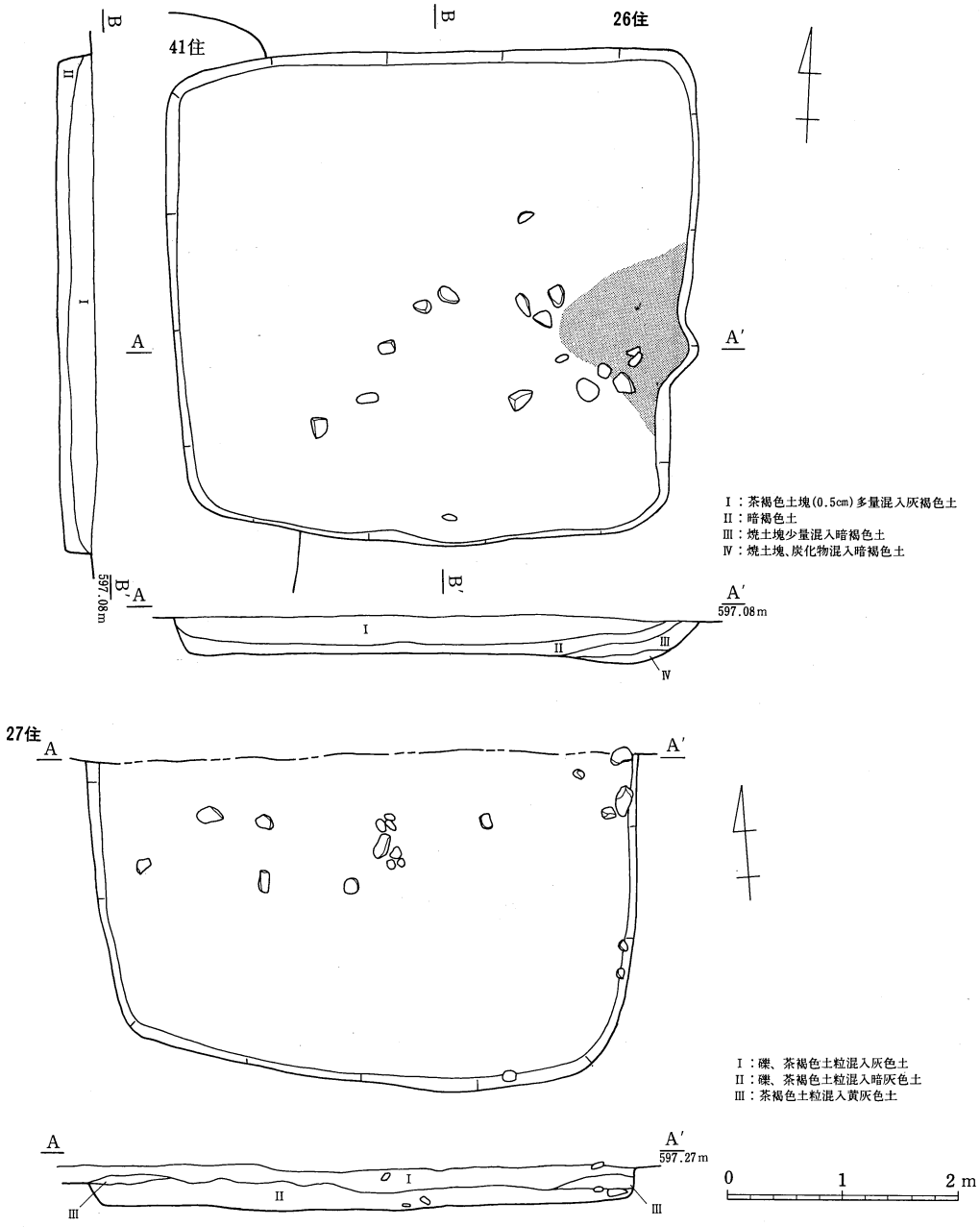
カマドは東壁中央やや南よりに壁を僅かに掘り込み構築されている。袖等の施設はもたない為か焼土は被熱部を中心に110cm（東西）×155cm（南北）の範囲に広がる。ピットは検出されなかった。

遺物には混入した須恵器の他、土師器甕類、内黒埦、坏、灰釉陶器もありX期に該当する。

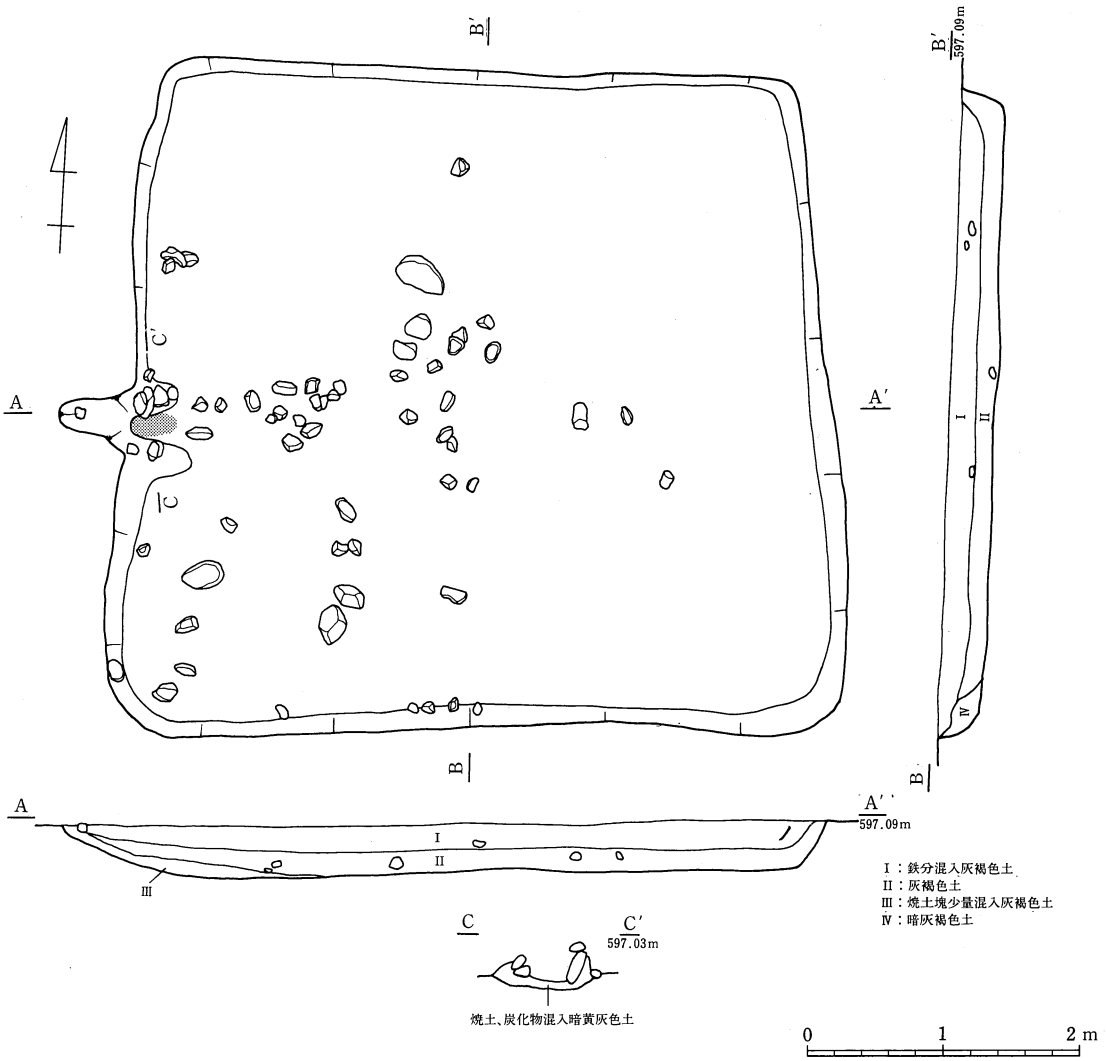
第27号住居址

本址は3地区中央北側に位置し盛土のため南半部しか検出できなかった。規模は東西4.8mを測る。壁はやや斜めに立ちあがり、検出面迄は床面から東壁付近で30cm、西壁付近で20cmと東壁がわずかに浅い。検出面では周辺に礫が多いのに対し覆土は礫は少なく上層が灰色、下層が暗灰色を呈していた。床面は平坦であり鉄分が沈澱している中央部はかなり堅緻であった。カマドは焼土等まったく見られず調査範囲内では検出できなかった。

遺物は少なく、生焼けの須恵器坏、土師器甕類、内黒坏、埦、灰釉の碗、瓶などでX期を与えたい。



第23図　第26・27号住居址



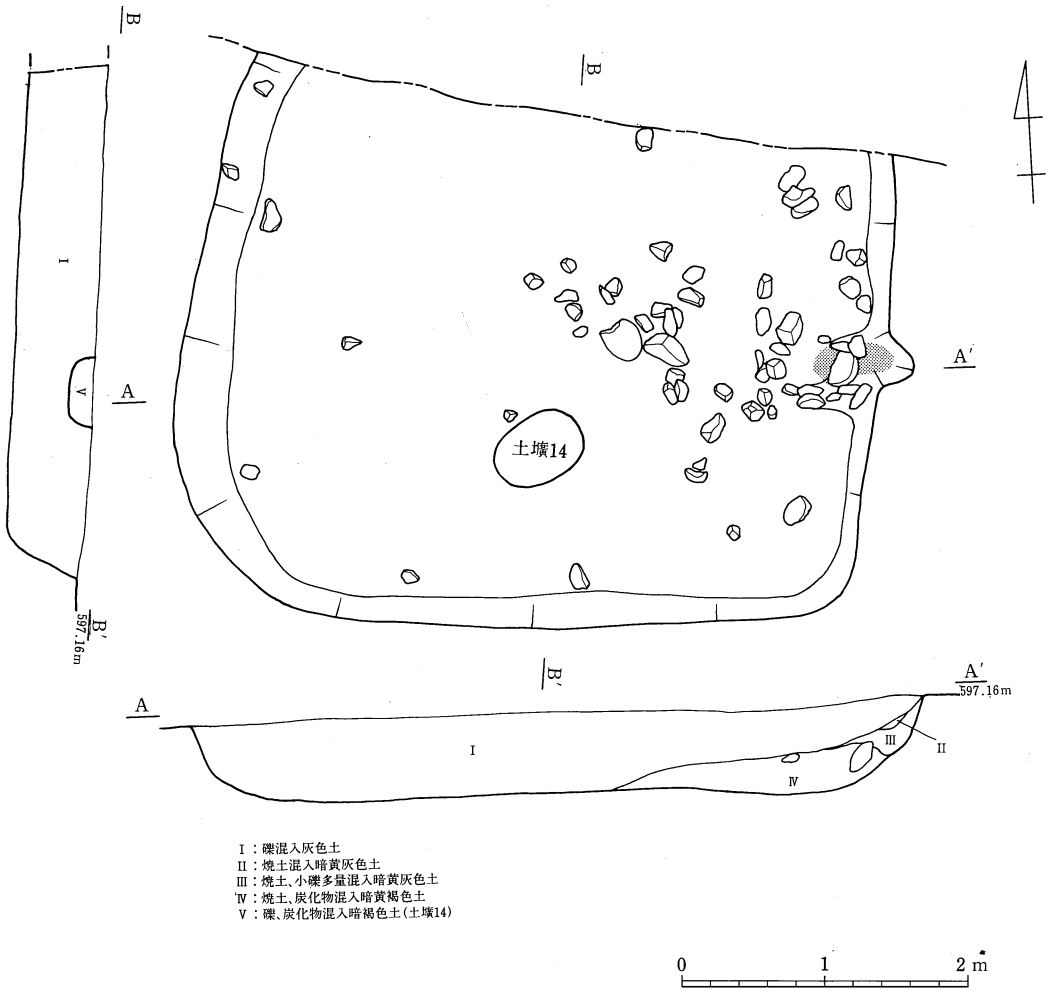
第24図　第28号住居址

第28号住居址

本址は３地区中央やや西よりに位置する。規模は5.2×4.9mで、主軸方向はＮ－99.5°－Ｗを示す。平面形は南壁が東西にわずかに長く台形様を呈す。壁高は30～35cmで礫を露呈する南壁を除き三方は土質で明瞭にわかる。覆土は灰褐色土で中層～下層にかけて拳～小児頭大の礫と炭化材片が多く混入している。床面は２～10cm大の礫上にあり褐色で堅く良好な状態であった。

カマドは西壁中央に構築された石芯カマドである。煙道は長さ50cmが存在する。焼土はカマド被熱部にごく少量見られる程度であった。なおピットは全く検出していない。

遺物は比較的多く、須恵器の手付長頸壺、生焼けの坏、土師器に坏、内黒坏、埦、灰釉陶器の三日月高台の碗などを見る。供膳形態もこれらの種類が混在し、本址にはＸ期を与える。なお床面上から布目痕の丸瓦を１点、他に鞴の破片、不明鉄器、溶滓などを得ている。



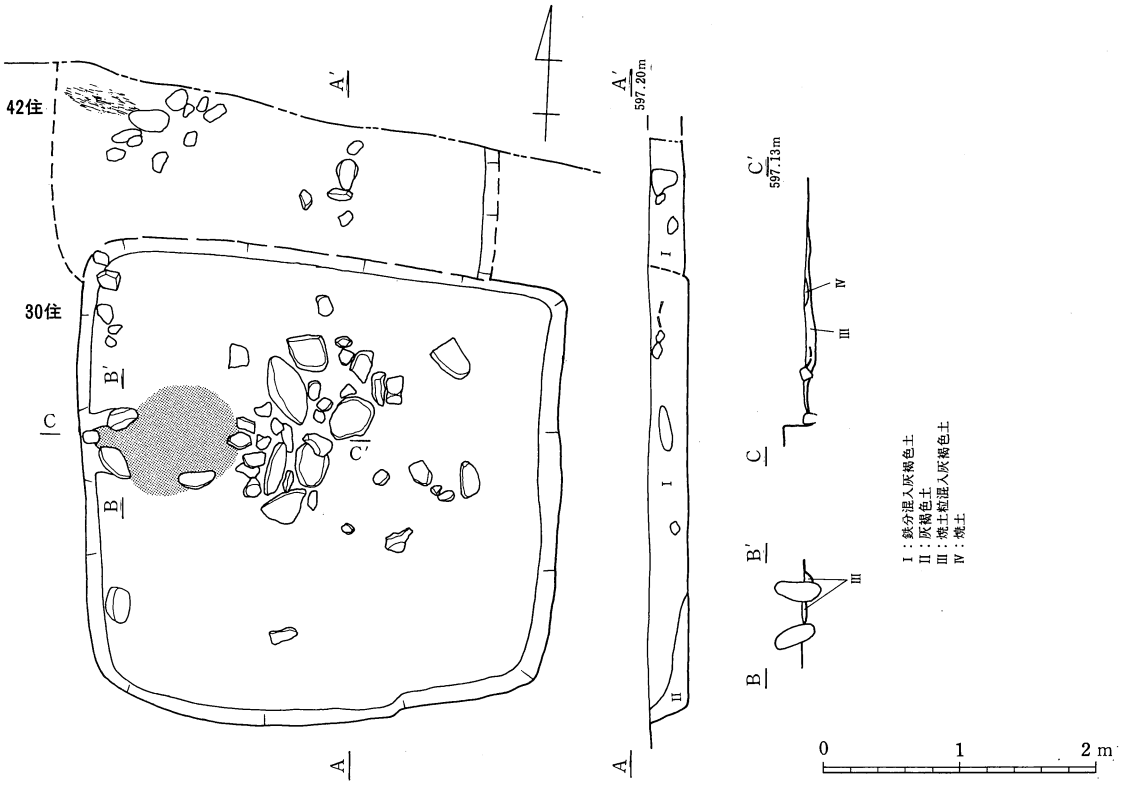
第25図　第29号住居址

第29号住居址

本址は3地区中央北西寄りに位置する。盛土のため南側7割程しか検出できなかった。又住居址中央南の覆土中には土壙14がある。規模は東西4.9mを測り、主軸方向はN－100°－Eを示す。平面形は隅丸方形を呈すと思われる。壁はやや斜めに立ちあがり特に西壁は緩やかである。床面から検出面迄は住居址中央部で55cmと深い。本址は1～15cm大の礫を多量に含む茶褐色土中に検出され、覆土は他の住居址とは異なり灰色の強いもので、上層から中層東側より中央に拳大～小児頭大の礫が混入、下層にも拳大の石が多い。床面は自然礫直上にあり鉄分沈澱が特に激しく平坦であるが堅くはない。なお床面下は砂利層となる。

カマドは東壁中央に構築され花崗岩を数個袖石として埋設し、炭化物が付着している。両袖の間隔が短かく石組カマドと考える。煙道はない。焼土は被熱部にわずかに見られた程度であった。

遺物はかなり多く、須恵器の生焼けの坏、甕、壺、土師器の坏、内黒坏、埦、小形甕、甕、鉢、灰釉陶器の碗、瓶などで供膳形態は土師器内黒坏が中心をなす。他にも鞴の破片、鉄製紡錘車を見る。土器からして本址はIX、X期に該当する。



第26図　第30・42号住居址

第30号住居址

本址は３地区北西よりに位置し、42住より新と理解した。規模は3.5×3.4mを測り、主軸方向はN－93°－Wを示す。平面形は方形を呈し南側がやや胴を張る。床面から検出面迄は約30cmを測り、東壁は礫が露出する。東にある29住と同様礫を多量に含む茶褐色土中に検出され、灰褐色の覆土中には小児頭大～50cm程の非常に大きな石を混入する。床面は土質となり平坦であるが堅くはない。床面下は砂利層となる。

カマドは２ヶの石を袖石として埋設した石芯カマドで西壁中央に設けられている。焼土は被熱部及びカマド前に広がる。

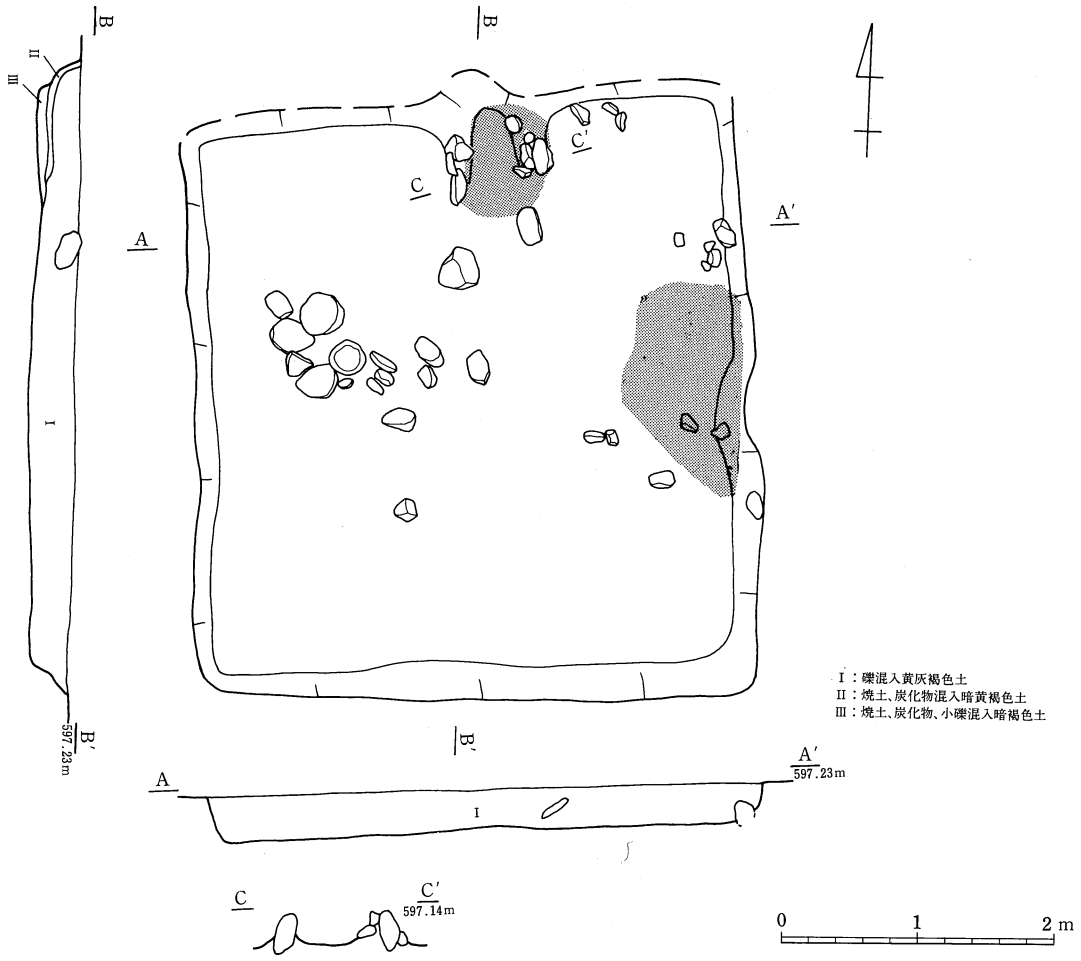
遺物は多く、土師器内黒坏、埦、甕類などよりX期とするが、他にIX期の甕、蓋なども見られた。

第42号住居址

南側は30住に切られ北側半分は盛土のため検出できない。主軸方向はN－90°－Wを示そうか。本址プランは判然とせず西壁は遺物と炭化物と若干の焼土により、又東壁は自然礫の出現でかろうじてつかめる程度であった。床面は平坦であるが堅くなく自然礫直上でとめた。

カマドは調査範囲内では検出できなかったが、壁際の焼土とその周囲に遺物が集中するのでこれを一応カマドと解釈した。

遺物は須恵器の生焼け無台坏他、土師器内黒坏、内黒埦、坏、埦、甕などがあり、X期とする。



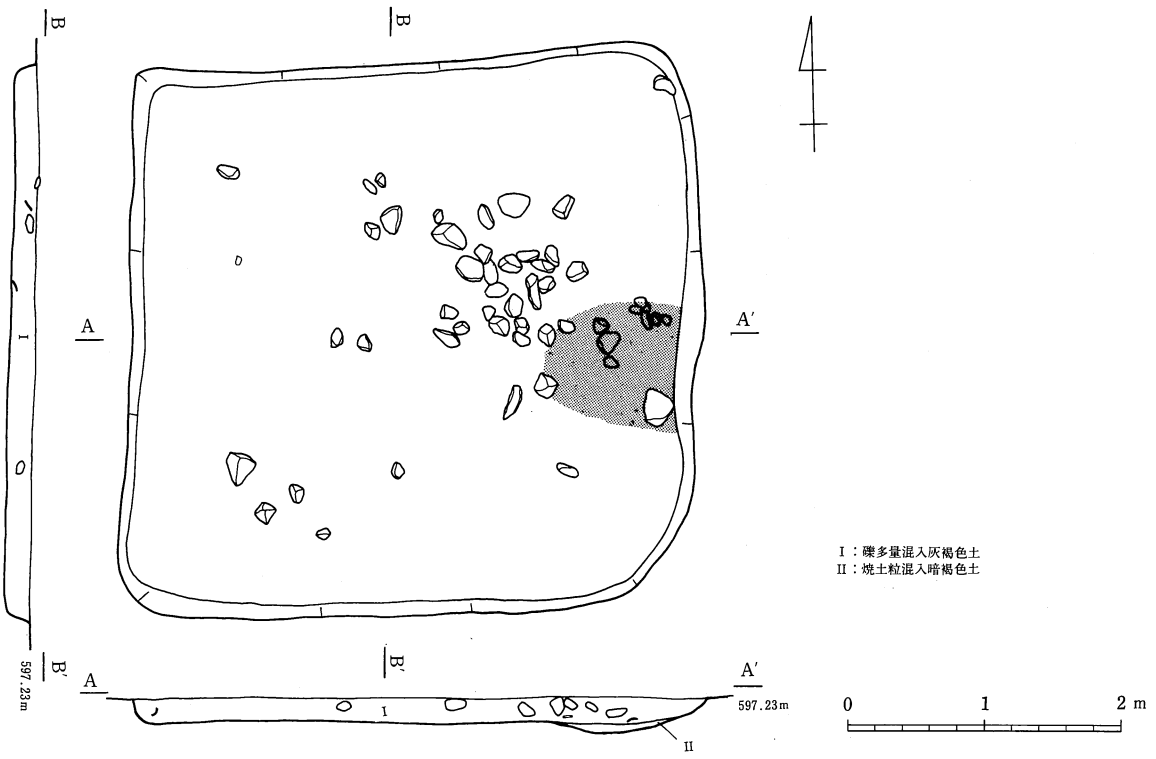
第27図　第31号住居址

第31号住居址

本址は３地区南西隅に位置し北側に32住が検出されている。検出面では覆土と周辺土色に差がないためプランが判然とせず西・南部にトレンチを入れようやく南・西壁をつかむことができた。又北壁はカマド・床面より想定した。規模は4.4×5.3mを測り端正な方形プランを呈する。主軸方向は、N－12.5°－Wを示す。壁はやや斜めに立ちあがり床面から検出面迄は住居址中央で33cm程である。覆土は礫混入黄灰色土で住居址中央～西側、床面上にまで人頭大の大きな石が見られた。床面は平坦であるが自然礫層の上に薄く土がのる程度で堅くはなかった。

カマドは石芯カマドで北壁中央に設けられており燃焼空間一杯に焼土が広がる。又東壁中央より床面上には多くの遺物とともに多量に堆積した焼土が見られた。特別な施設はないが旧カマドが存在したのであろうか。なおピットは認められない。

遺物は須恵器で無台・有台坏、蓋、長頸壺、土師器の甕という一群と、土師器の内黒埦、内黒坏の一群があり、前者ではV・VI期に、後者ではX期に属する。時期については再検討を要する。



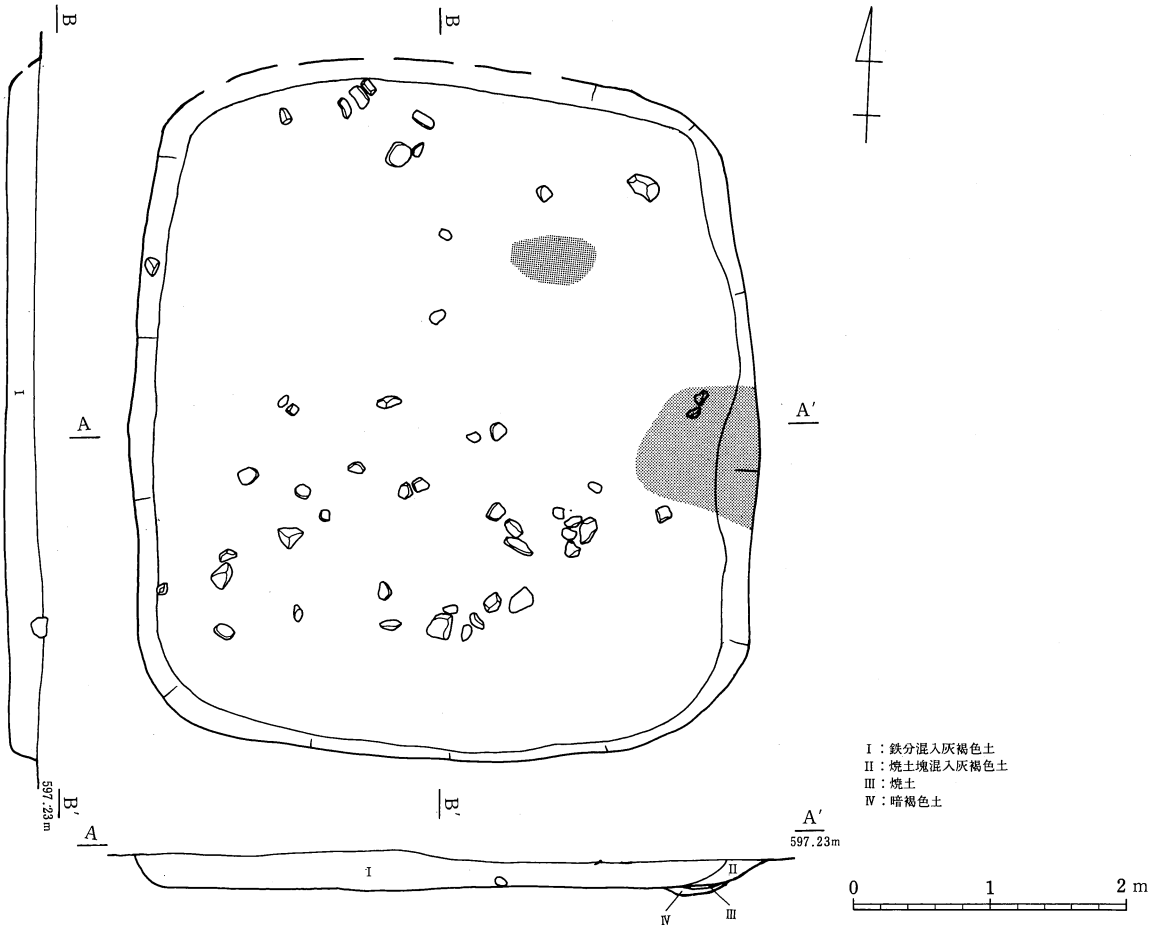
第28図　第32号住居址

第32号住居址

本址は３地区西端に位置し東側に建物址16が検出されている。規模は4.2×4.0mを測り、主軸方向はＮ－88.5°－Ｅを示す。平面形は北側がやや内湾した方形を呈する。壁はやや斜めに立ちあがり床面から検出面迄は住居址中央部で16cm程である。覆土は灰褐色土で土質であるが砂利～小児頭大の石を多く含む。遺構周囲では南・西側に礫が特に多く、南・北側は茶褐色土となっていた。床面は平坦であるが堅くなく自然礫直上でとめた。

カマドは東壁の中央やや南寄りに設けられている。特に施設等はないが壁際にやや大ぶりの花崗岩の平石が１個ありその石を袖石として利用していたと考えられる。

遺物は覆土中から多く床面に至ってはカマド南側にわずかに見られる程度であった。須恵器と土師器で須恵器は糸切り底の無台坏が量的に中心をなす。他には有台坏、長頸壺、壺などがあり、混入遺物と思われる横瓶も存在する。土師器は甕がほとんどで以上の遺物より本址にはⅥ・Ⅶ期を該当させる。



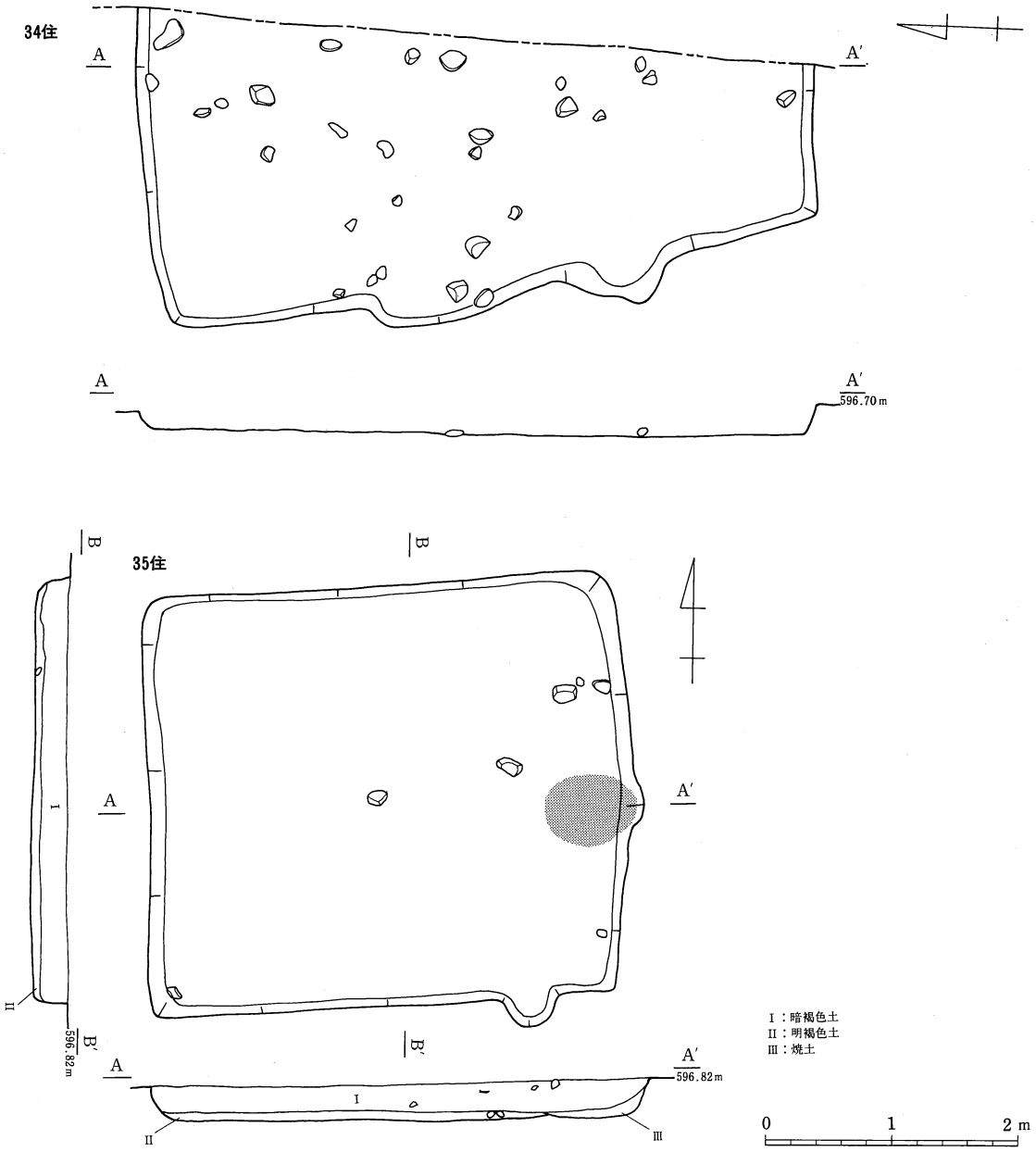
第29図　第33号住居址

第33号住居址

本址は３地区西側に位置する。規模は4.6×5.1mを測り、主軸方向はN－87°－Wを示す。平面形は隅丸方形を呈する。壁は斜めに立ち上る。床面から検出面迄は住居址中央部で18cm程である。周囲は礫を多量に含む茶褐色土で３地区のうちでも特にこの周辺が表土から礫まで浅い。覆土は灰褐色土を呈し土質となっている。周辺の住居址に見られるような大きな礫は含まず小ぶりな石が散在する。床面は平坦で、一部堅い箇所もあるが全体的にそれほど堅さは感じられない。

カマドは、東壁中央の焼土の広がる部分と考える。カマドに伴う施設は全く見られなかった。又カマド北西床面上からも焼土が僅かに検出された。

遺物には壺、鉢の他無台の坏がある。この坏にはヘラ切りと糸切りの底部が見られ、時期決定にはやや疑問が残る。土師器には坏、小形甕、甕等があり、本址には一応Ⅴ～Ⅶの時期を与える。又カマド北側床面上に拳大のベニガラがあった。



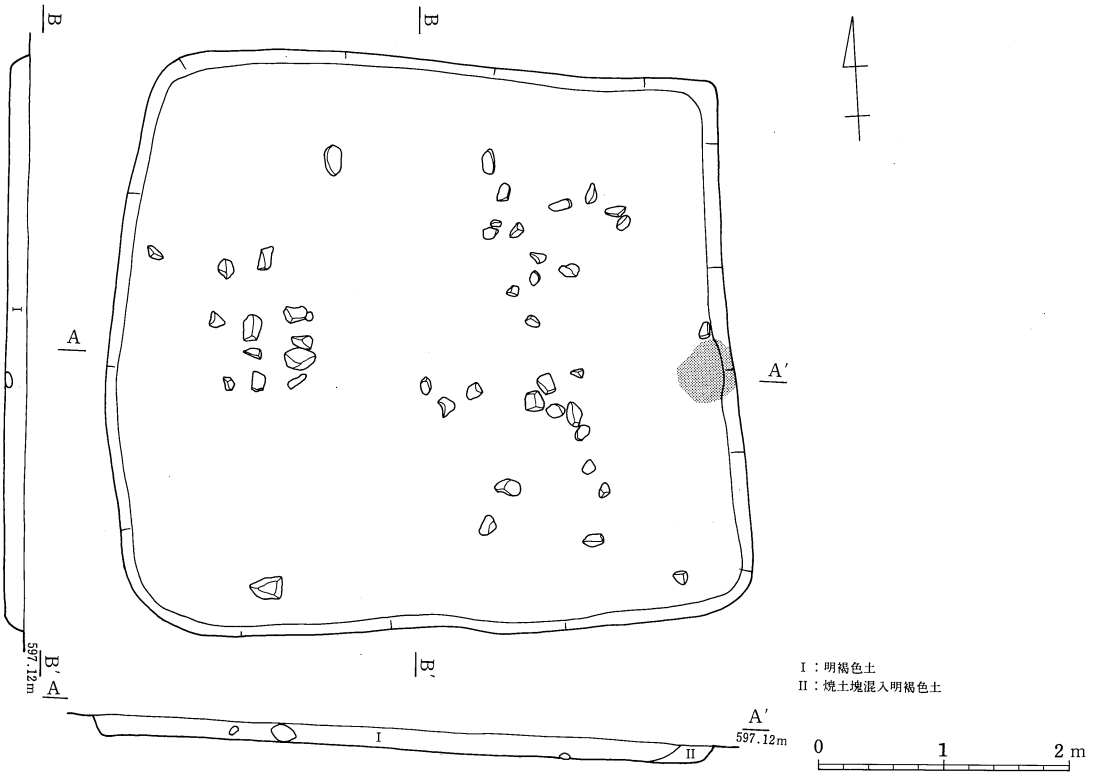
第30図　第34・35号住居址

第34号住居址

本址は3地区東端に位置し、盛土の為西側3割程しか検出できなかった。規模は南北5.4mを測り、壁高は12～24cmである。礫のない黄褐色土中に検出され、覆土はローム塊混入黄褐色土で他の住居址とは全く異なる。又覆土中にはやや大ぶりの石が散在し床面は軟弱で起伏が激しい。

カマドは調査範囲からは検出されず、焼土・ピットも見当らない。

遺物は少量で須恵器生焼けの坏、土師器坏、内黒坏、他には灰釉陶器の碗、皿がある。この碗は三日月高台を有し、体部中位に回転ヘラケズリを残し、釉薬はハケ塗りでこれらよりX期とする。



第31図　第36号住居址

第35号住居址

本址は３地区南東に位置する。南西に検出した建物址15との切り合い関係は不明である。規模は3.8×3.4mと小形で主軸方向はＮ－86°－Ｅを示す。平面形は方形を呈するが南東に小さな突出を設ける。床面から検出面までは28～30cmを測る。周囲は褐色土で暗褐色土を覆土とし明確にプランを把握できた。床面は黄褐色を呈し平坦で中央部は堅く良好であった。尚覆土中には礫は殆ど見られない。

カマドは東壁中央にあり壁上部をやや削り取っただけの簡単なもので焼土も小さくまとまる。

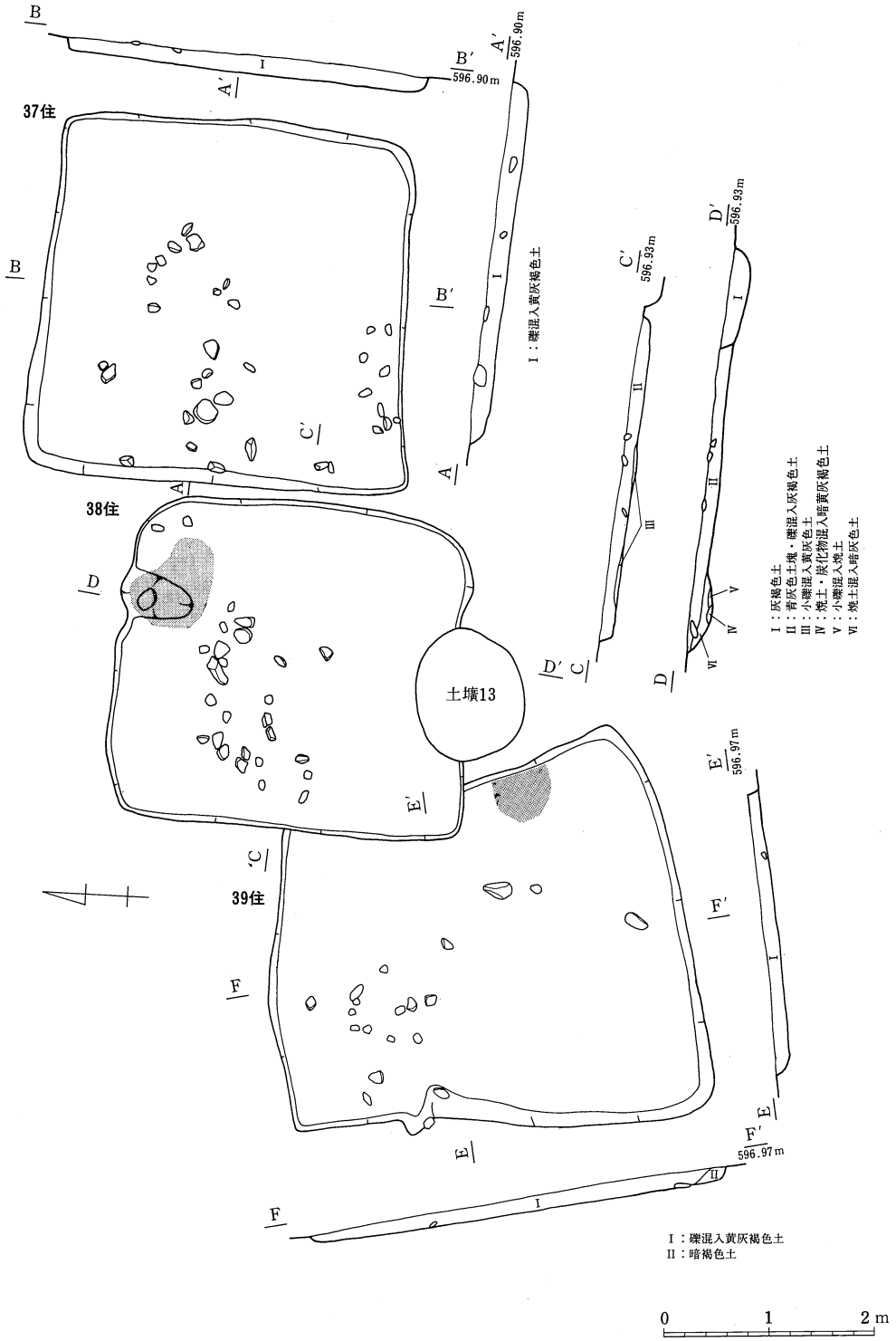
遺物は少なく須恵器有台・無台坏、蓋、長頸壺、土師器内黒坏、甕などである。Ⅶ期とする。

第36号住居址

本址は３地区中央に位置する。規模は5.0×4.6mを測り主軸方向はＮ－95.5°－Ｅを示す。平面形は方形を呈し西側がやや胴を張る。壁は斜めで、壁高は15～17cmである。周囲は大礫を少量含む褐色土で他の住居址とは異なる明褐色の覆土であった。又覆土中には礫が一様に散在する。床面は軟弱でカマドの焼土より確認した。

カマドは東壁中央焼土が極僅かに広がる部分である。

遺物は僅かで須恵器の有台・無台坏があり、体部に沈線を施した特異なものもある。Ｖ～Ｘ期？



第32図　第37・38・39号住居址

第37号住居址

本址は３地区中央東寄りに位置する。西側には38住が隣接する。規模は3.4×3.5mと小形である。平面形は方形を呈すが南西隅のみ僅かに角張る。壁はやや斜めに立ち上り特に西壁は他の壁に比べ緩やかである。壁高は12～18cmと低い。礫混入褐色土中に検出され覆土は礫を含む粘性の黄灰色土で明瞭にプランをつかむことができた。又覆土中には拳大～小児頭大の石を含んでいる。床面ははっきりとせず礫直上を床とした。平坦であるが堅くはない。

カマド・焼土は検出されなかった。

遺物は西壁際に僅か見られる程度であった。須恵器の生焼けの無台・有台坏、土師器の甕、内黒坏、灰釉陶器の三日月高台をもつ碗などで、供膳形態もこれらが混在した。これらより本址はX期前後と考える。

第38号住居址

本址は３地区中央東寄りに位置する。39住北東隅を切り南壁中央は土壙13に切られる。規模は3.1×3.4mとかなり小形である。主軸方向はN－5°－Eを示す。平面形は方形を呈すが南西隅がやや角張る。壁は斜めに立ち上り、床面から検出面までは住居址中央部で12cmを測りかなり浅い。覆土は灰褐色土を呈し37住と似るかそれより若干黒っぽく明瞭にプランをつかむ事ができた。又覆土中には拳大～小児頭大の石を含んでいる。床面は判然とはせず礫直上を床とした。平坦であるが堅くはない。

カマドは北壁中央やや東よりに焼土がありやや掘り凹められた燃焼部から東側へ広がっている。尚特別な施設は見当らない。

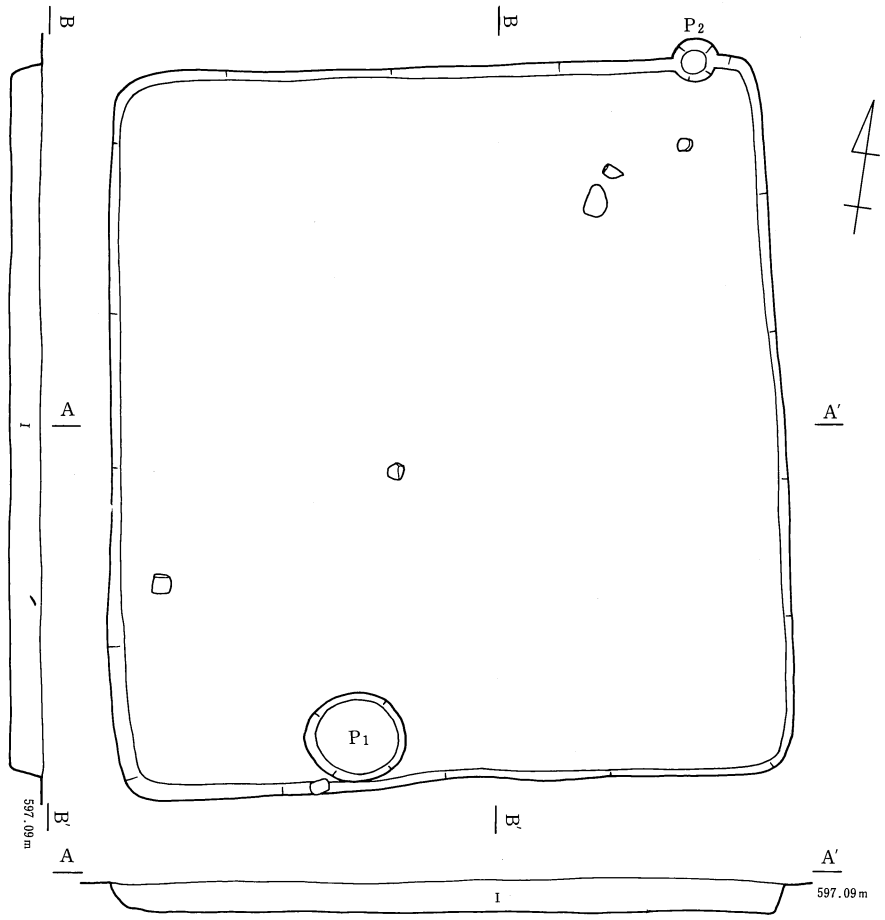
遺物はカマドと推定される焼土付近に僅かに見られる程度である。須恵器の有台・無台坏を中心として短頸壺、耳の部分に孔がある四耳壺でこれらからはVI～VIIIという時期を考える。

第39号住居址

本址は北東隅を38住に切られ検出された。規模は3.4×4.0mを測る。平面形は南壁が東西に長い台形様を呈すが西壁中央北よりに小さな突出部がある。壁は斜めに立ち上り、壁高は８～14cmとかなり低い。覆土は黄味をおびた灰褐色土で、37住に近い土色である。床面は礫直上を床とした。平坦であるが堅さは全く感じられない。

焼土は東壁中央やや南よりから床面にかけて、僅かに広がる。床を掘りくぼめた様子もなくこの少量の焼土だけでカマドと判断するには少し疑問が残る。

遺物は非常に少なく図示できたものは灰釉の碗のみである。X期と考える。



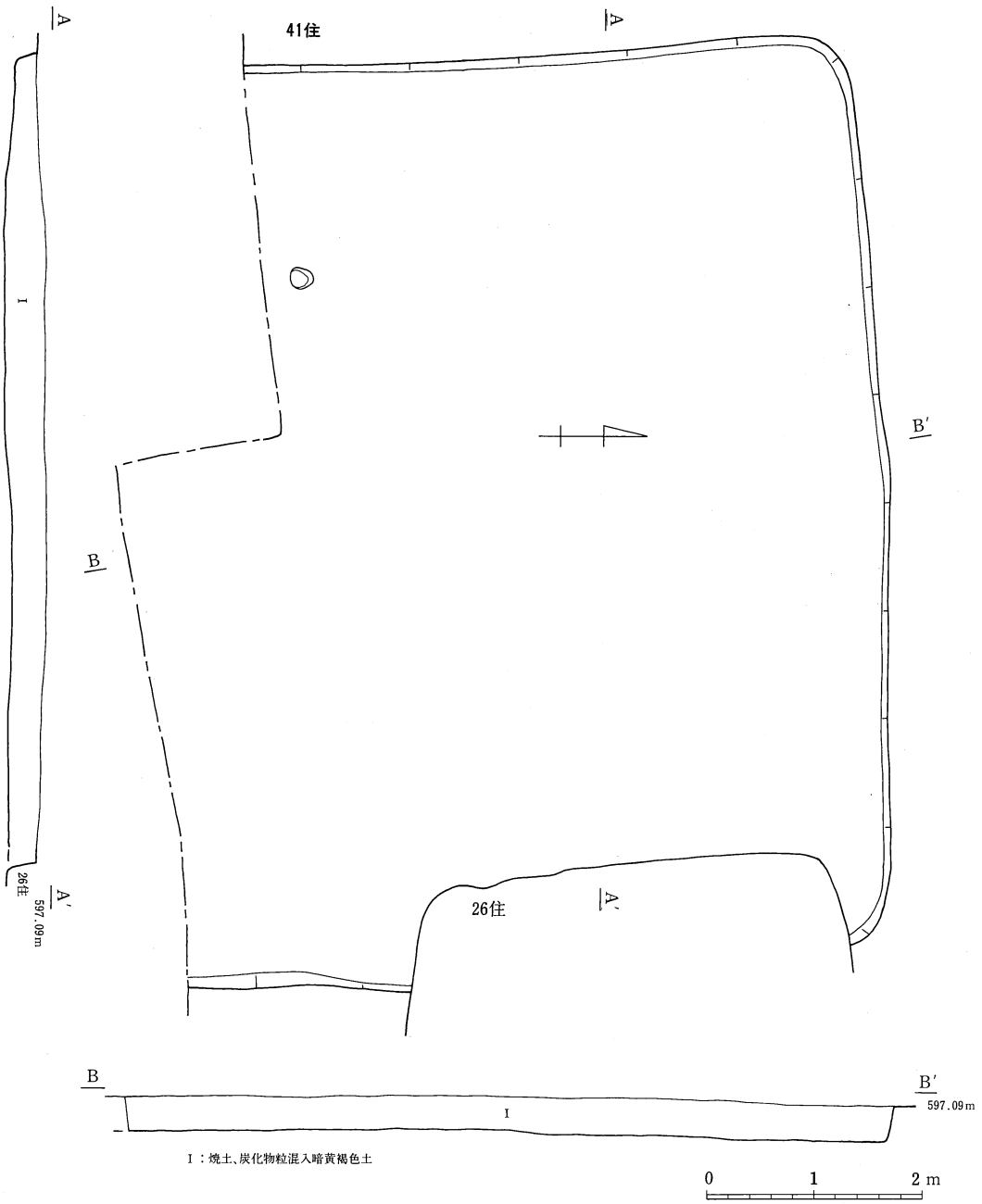
第33図　第40号住居址

第40号住居址

本址は3地区中央に位置する。検出面は礫を含まない暗褐色土で、覆土はこれとほとんど土色に差がない。少量の焼土粒と炭化物粒を含む土が分布する範囲をプランとして捉えた。規模は5.0×5.3mを測り端正な方形を呈する。壁は斜めに立ちあがり壁高は20～25cm程である。床面は礫混入土の直上にやや堅い平坦な面があり、このレベルでピットも検出でき、ここを生活面とした。覆土中にみられる炭化物・焼土はカマドにつながるものではなく、カマド内によく見られる焼土あるいはそれに関わると思われる施設はまったくなかった。

ピットはP_1（76×66×21cm）、P_2（34×32×25cm）の2ヶ検出されたが北東隅壁際のP_2は本址に伴うものかは不明である。又P_1はどのような性格のものか不明である。

遺物には須恵器の有台・無台坏、蓋、甕、長頸壺などと、土師器の坏、内黒坏、甲斐型坏、武蔵型甕、小形甕、甕等がある。供膳形態からすると須恵器類が主となりV期、内黒坏ではVII期を示す。



第34図　第41号住居址

第41号住居址

本址は３地区中央に位置しており、東壁を26住に切られ北西には40住が近接する。なお南側は農道があるため調査が実施できなかった。検出面では40住同様、覆土と周辺土色との差がほとんどなく検出に時間を費やしたのであるがそれでも明瞭に分からず東西に２本南北に１本のトレンチを入れて、かろうじて平面形と床面を確認することができた。規模は東西8.6mを測り今回の調査で検出された住居址の中で最も大きいものであった。壁は、北壁を見るかぎりほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は23cm程である。覆土は焼土・炭化物粒を含む暗黄褐色土の単層で、礫はほとんど含まれていない。また床面は、平坦であるが堅くはなく、自然礫上に土が薄く乗った程度の状況であった。なお、西壁から中央にかけては礫を含みベッド状にわずかに高くなっている箇所がみられた。

カマドは調査範囲内では検出されておらず、覆土中より床面にかけて見られた焼土、炭化物粒もカマドと関連するものとは捉えられなかった。過去の調査を含めて南側に構築されたカマドの例は全くないことから考えると、本址のカマドは第26号住居址によって破壊されたとも考えることができよう。

ピットも住居址の規模からみてあって当然と考えられるが、全く検出されておらず礎石的なものも見られなかった。また住居址周辺からもピットは検出されていない。

遺物は割合に多いが床面遺物は僅かでほとんどが覆土中からのものである。土器と鉄器とがあり、土器には須恵器と土師器、それに本址を切る26住のものと思われる灰釉陶器の碗がある。須恵器から見ると、蓋、無台・有台の坏、長頸壺、四耳壺、甕、鉢などが存在し、土師器には甲斐型坏、底部から体部下半までヘラケズリを見せる内黒坏、武蔵型甕、小形甕等が混在する。供膳形態としては須恵器の坏が中心をなし、甲斐型の坏と内黒坏が僅かに混入しはじめる。このような様子から本址はVI期に含める。

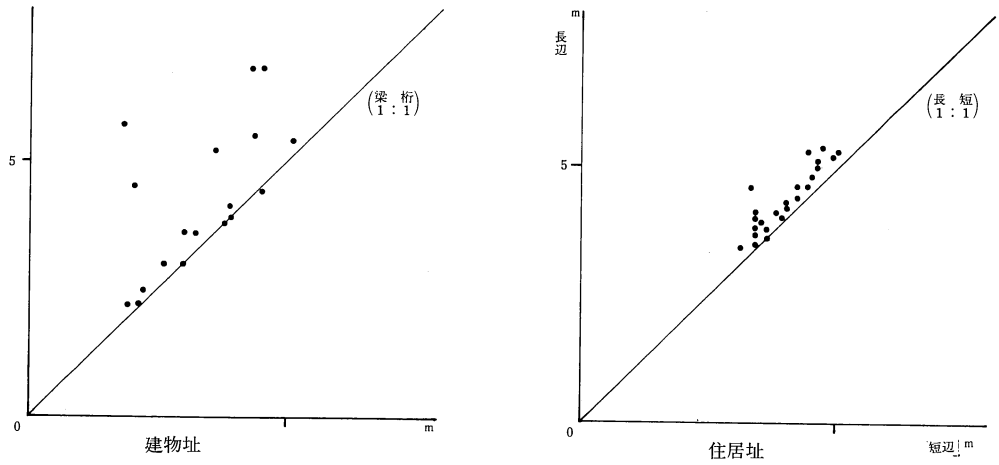
2．建物址・柵列

1）建物址

今回の調査で検出された掘立柱建物址は1地区3棟、2地区12棟、3地区4棟の計12棟である。本項ではこれらの規模、構造、集落内でのあり方等について窺い得ることを簡単にふれたい。

まず建物址の規模についてみると1間×1間が3棟（建12・16・19）、2間×1間が4棟（建11・15・17・18）、2間×2間が8棟（建2・3・5・6・8・10・13・14）、3間×2間が3棟（建1・7・9）、4間×3間が1棟（建4）存在する。このうち建4と建9は桁の西側柱列がそれぞれ3間・2間で、東側柱列より1間少なくなっている。1間×1間・2間×2間が多いこともあり平面形は方形と長方形がほぼ半々ずつである。柱間寸法はほとんどが1.6～2.4mで、面積は建19の4.2m²から建4の30.6m²までが存在する。例外もあるが、1間×1間は柱間寸法約2.2mで面積約5m²、2間×1間はバラつきの大きい柱間寸法で面積約10m²、2間×2間は柱間寸法約1.8～2mで面積約15m²、3間×2間・4間×3間は柱間寸法1.6～2.4mで面積は今回の調査では大形の20m²以上の建物に収束されそうである。このうち1間×1間の建物址は今回の調査で検出された竪穴住居址より小型であるが、それ以外の建物址は規模に大差はない。特に2間×2間の建物址は竪穴住居址と規模・平面形においてほとんど差異が認められない（第35図）。したがって建物址の寸法・規模にそれほど厳密な規格があったとは考えられない。むしろこのグラフからは竪穴住居址により規格性が認められそうである。

建物の構造では総柱式は2間×2間の2棟（建2・13）のみで他は全て側柱式の建物であった。柱穴の掘方は全て坪掘で平面形はバラつきのある建1を除いて全てが円形のものである。また建2・3では四隅の柱穴が大きく掘られている。柱痕の観察ができたものは二段底を呈すものに多い。



第35図　建物址・住居址相関図

次に集落内での建物のあり方について検討を加えたい。今回の調査では19棟の建物址に対し竪穴住居址は43軒検出されている。これらは混在しており１地区を除いて近接している。特に２地区東では建５・９・17、建６・７・11と建物址同志、また竪穴住居址間の重複がみられる。これらの状況から竪穴住居址と建物址がセットとなって存在したことが予想される。また１地区と３地区では面積15m²以上の建物址が存在しないのに対し、２地区ではほとんどが15m²以上の建物址であることなど建物のあり方には相違がみられる。建物の時期については僅かな切り合い関係と、柱穴内からの出土遺物からでは漠然とした時期しか求められなかった。まず１地区では建18の遺物がIV期以前を示しており、近接し主軸方向の同じ建12も近い時期と考える。２地区では建４が12住に切られIII・IV期以前に、建６・７・11が14住に切られVI・VII期以前に位置づけられる。なお出土遺物では建７が最も古い段階を示している。また建１は遺物がV期以前の様相を示しており南にある２住がIV～V期で該当し、主軸方向もN－11°－WとN－80.5°－Eで対応する。同様に出土遺物と位置、主軸方向から建３が11・12・13住、建５が５・14住、建10が３・４住あたりと関連が求められそうである。３地区では建15の遺物がIV期以前を示しているが周辺で該当する時期の竪穴住居址は確認していない。建16・19は主軸方向が若干異なるが周辺のV～VII期の竪穴住居址と、建14も周辺のX期の竪穴住居址との関連が考えられる。

以上19棟の建物址について概観してきたが充分な分析・検討ができず、特に建物の性格と集落内での位置づけに課題が残った。最後に島立地区ではここ数年の調査で多数の建物址が検出されいるので、今回の調査で検出された建物址を昭和59・60年の松本市教育委員会の島立南栗遺跡の調査で検出された建物址と比較して、その特徴を列記すると以下のとおりである。

１、規模が小さい。

２、２間×２間の建物址が多い（59年－15棟中２棟、60年－11棟中１棟）。

３、方形の掘方をもつ建物址が存在しない（59年－15棟中５棟、60年－11棟中５棟）。

また特殊な例として全柱穴に焼土がみられた建10があげられる。柱穴内に炭化材等がなく検出面でも異常が認められないこと等から火災建物とは考え難いが、このような状態を示す理由は検討が必要であろう。

２）柵列

柵列は２地区南東、３地区北西隅に各１基を検出した。ともに４ヶのピットより成りほぼ南北方向を示す。１は６住の西に検出され90×80×52cmの範囲のピットで、規模は4.2mを測り深くしっかりとしている。このうち２ヶは二段底に柱痕を残す。２は自然礫中にあり90×72×26cmの範囲内のピットで浅く規模は4.4mを測る。２基とも覆土中に遺物はみられず時期決定は不可能である。

表1　建物址・柵列一覧表

No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模(cm) No.	長径	短径	深さ	柱穴 平面形	柱穴備考	建物址所見
1	長方形 側柱式	N 11° W	3間×2間 5.5×4.7(4.0)	桁 1.7~2.0 梁 1.9~2.4	1	70	68	40	方形	柱痕については，ピット底面よりの深さを表わす	2地区，南西に位置する。 P1覆土中に，20m大の礫あり。 P3，P13は覆土異なり関係ないピットと考える。
					2	74	50	40	長方形		
					3	72	64	32	不整円形		
					4	72	60	32	長方形		
					5	96	76	36	不整円形		
					6	70	64	32	不整方形		
					7	70	(65)	39	(〃)		
					8	60	58	41	不整円形	P7より新	
					9	70	62	30	長方形		
					10	86	70	36	不整円形		
					11	74	70	39	不整方形		
					12	62	60	35	方形		
					13	90	80	43	不整円形		
2	方形 総柱式	N 10° W	2間×2間 3.0×3.0	桁 1.5 梁 1.5	20	70	60	61	楕円形	柱痕あり(9)	2地区，南東に位置する。 柱穴の掘り方は円形で，特に四隅のものが深くしっかりしている。 P20，21，22，26は浅い2段底を呈し鉄分を沈澱させた柱痕が観察出来る。
					21	62	52	57	不整円形	柱痕あり(7)	
					22	70	60	60	不整円形	柱痕あり(7)	
					23	44	42	38	円形		
					24	38	36	31	円形		
					25	54	52	33	円形		
					26	74	64	58	楕円形	柱痕あり(11)	
					27	44	36	37	不整円形		
					28	80	68	49	楕円形		
3	方形 側柱式	N 73° E	2間×2間 4.0(3.8)×3.9	桁 1.3~2.0 (2.5) 梁 1.9~2.0	34	60	50	29	楕円形		2地区東側に位置する。 P41がやや南により，P40~41の柱間寸法が大きくなっている。柱穴の掘り方は円形で特に四隅のものが大きい。P35~40は二段底を呈し，柱痕が観察できた。
					35	44	42	29	円形	柱痕あり(5)	
					36	58	52	30	円形		
					37	38	34	26	円形		
					38	72	54	27	楕円形		
					39	46	40	32	円形		
					40	56	52	33	円形	柱痕あり(6)	
					41	60	60	31	不整円形		
4	長方形 側柱式	N 15° W	3(4)間×3間 6.8×4.6(4.4)	桁 1.7~3.2 梁 1.5~1.6	14	90	82	58	円形	15住貼床下	2地区東端に位置し，土壙 3.4を切り12住に切られる。 桁の柱間は中央の2ヶを広く取ってあり，東では，その間に1ヶ柱穴（P50）が入る。 柱穴の掘り方は円形で，比較的大きくしっかりしている。 P47は2段底を呈し鉄分が沈澱した柱痕が
					42	92	76	55	不整楕円形		
					43	90	64	40	不整楕円形		
					44	102	70	39	不整楕円形		
					45	64	50	38	楕円形		
					46	60	52	26	楕円形		
					47	64	64	48	円形	柱痕あり(13)	

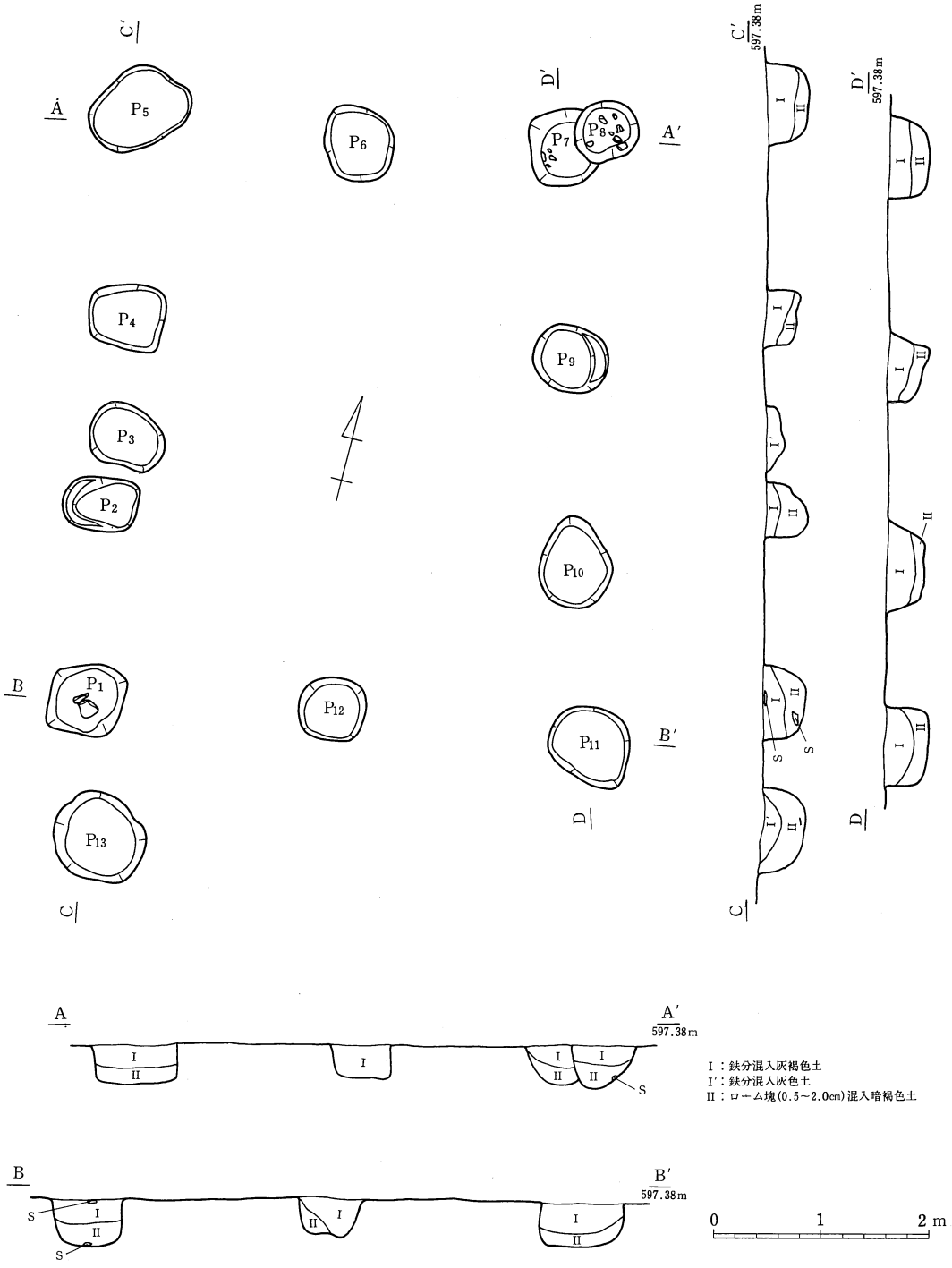
No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模(cm) No.	長径	短径	深さ	柱穴 平面形	柱穴備考	建物址所見
					48	95	80	50	楕円形		観察出来る。
					49	72	66	52	円形		
					50	60	58	26	円形		
					51	88	78	57	楕円形		
					54		60	28	楕円形か	P43より旧	
					55		60	40	楕円形か	P51より旧	
					193						
5	方形 側柱式	N 11°W	2間×2間 4.1×3.9(3.5)	桁 1.8~2.3 梁 1.5~2.0	56	54	53	23	円形		2地区中央やや東寄りに位置し，建17にきられる。 柱穴の掘り方は，円形で比較的小さく浅い。
					57	48	46	17	円形		
					59	(46)	40	15	(不整円形)		
					60	44	44	21	円形		
					61	58	50	28	不整円形		
					62	54	48	27	円形		
					63	66	54	29	楕円形		
					64	52	52	16	不整円形		
6	方形 側柱式	N 6°W	2間×2間 5.4×5.2(5.0)	桁 2.4~3 梁 2.4~2.6	66	62	62	42	円形		2地区，東側に位置し，建7を切り，14住にきられる。 柱穴の掘り方は円形で比較的深くしっかりしている。P70底に花崗岩がある。
					67	66	54	40	不整円形		
					68	74	66	56	不整円形		
					69	68	64	31	円形		
					70	88	64	34	不整円形		
					71	80	68	39	不整円形		
					72	78	60	39	不整円形		
7	長方形 側柱式	N 1°E	3間×2間 6.8×4.2	桁 2.0~2.5 梁 2.0~2.2	73	73	(54)	(40)	(楕円形)		2地区東側に位置し，建6，14住に切られる。 P73，74に対応する柱穴は，検出されなかった。柱穴の掘り方は円形。
					74	52	(48)	31	(円形)		
					75	(60)	48	41	(楕円形)		
					76	54	54	29	不整円形		
					77	60	60	27	不整円形		
					78	60	52	33	楕円形		
					79	54	44	22	楕円形		
8	台形？ 側柱式	N 5°W	2間×2間	桁 2.2 梁 1.3~2.3	87	72	68	26	不整円形		2地区北東に位置する。 15住床面を精査したが，柱穴は検出されずP93覆土も，他の柱穴と同様であった。従って柱間寸法にバラつきがでるが2×2間で，15住との切り合いはないと考える。柱穴の掘り方は円形で浅い。 P91，92はそれぞれこぶし大石3~4個を覆土中に含む四隅のピットはいずれもやや深い。
					88	62	50	17	不整円形		
					89	90	80	20	不整円形		
					90	70	64	15	不整円形		
					91	68	66	23	円形		
					92	76	68	21	円形		
					93	64	54	13	楕円形		
9	方形	N 16 W	3(2)間×2間 4.4×4.6(4.4)	桁 1.4~2.3 梁 2.3	101	54	50	19	不整円形		2地区中央に位置し，建17にきられる。 東側柱穴4ヶ，西側柱穴3ヶ検出されてい
					102	60	48	24	楕円形		

No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法	柱穴規模(cm) No.	長径	短径	深さ	柱穴 平面形	柱穴備考	建物址所見
	側柱式				103	62	54	32	楕円形		る。柱穴の掘り方は円形。
					104	54	48	26	楕円形	柱痕あり(4)	
					105	82	78	23	不整円形		
					106	62	54	27	楕円形		
					107	58	48	21	楕円形		
					108	56	44	15	不整楕円形		
					109	86	48	22	不整楕円形		
10	長方形 側柱式	N 3° W	2間×2間 5.2×3.6	桁 2.6・5.2 梁 1.7~2.0	113	44	42	16	円形		2地区，中央やや北西寄りに位置する。 柱穴の掘り方は，円形でやや小型，すべての覆土中に焼土塊が混入している。梁，桁は南側の柱間寸法が大きく，その部分東側にはP120，121があり，覆土も上記同様で，確かに建物に伴うものである。P113にこぶし大石2個あり。
					114	48	42	26	不整円形		
					115	46	44	32	不整円形		
					116	50	48	20	不整方形		
					117	50	45	18	不整円形		
					118	44	40	16	不整円形		
					119	56	44	10	不整楕円形		
					120	24	22	11	不整楕円形	梯子用	
					121	24	22	11	長方形	ピット	
11	長方形 側柱式	(N 81° E)	2間×1間 4.6×2.0	桁 2.2~2.4 梁 2.0	80	52	52	23	円形		2地区東側に位置する。 柱穴の掘り方は円形で小さい。14住に切られていよう。
					81	46	42	30	円形		
					82	42	42	22	円形		
					83	52	48	23	不整円形		
12	方形 側柱式	N 60° E	1間×1間 2.5×2.2	桁 2.5 梁 2.2	152	134	96	61	不整楕円形		1地区北側に位置する。 柱穴の掘り方は円形で大きくしっかりしている。
					153	104	88	53	不整楕円形	柱痕あり(8)	
					157	104	96	48	不整円形		
					158	100	94	58	不整円形		
13	方形 総柱式	N 12° W	2間×2間 3.6×3.2	桁 1.8 梁 1.6	166	64	62	57	円形		1地区北側に位置する。 柱穴の掘り方は円形で深くしっかりしている。 P172に対応する，北西隅の柱穴は検出されなかった。
					167	76	52	46	不整方形		
					168	62	56	59	不整円形		
					169	70	64	59	不整円形		
					170	72	64	60	不整円形		
					171	68	66	64	不整円形		
					172	68	56	66	楕円形	柱痕あり(9)	
					173	70	64	62	不整円形		
14	方形 側柱式	N 5° W	2間×2間 3.8×3.8	桁 1.9 梁 1.9	180	82	76	31	不整楕円形	柱痕あり(38)	3地区東側に位置する。 柱穴の掘り方は円形で，桁にあたる柱穴は規模が大きくP181，185は小さい。 P183に対応する柱穴は，検出されなかった。
					181	50	49	34	不整円形		
					182	68	62	26	不整円形		
					183	86	84	30	円形		
					184	88	74	24	楕円形		
					185	46	44	20	円形		

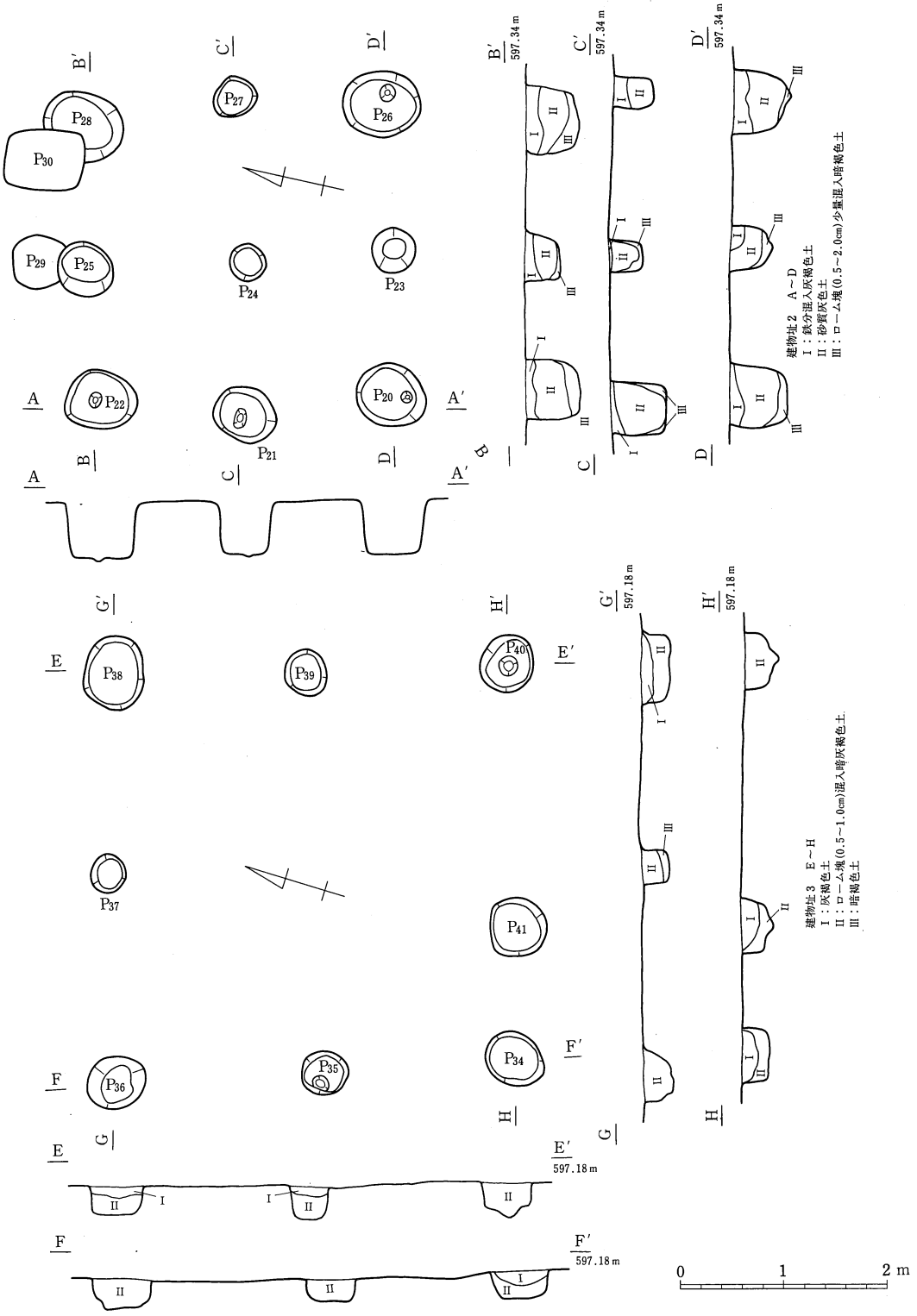
No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模(cm) No.	長径	短径	深さ	柱穴 平面形	柱穴備考	建物址所見
					186	68	68	29	円形		
15	長方形 側柱式	N 8°W	2間×1間 3.6×3	桁 1.8 梁 3.0	195	72	66	30	不整円形		3地区南東に位置し，土壙15を切る。 柱穴の掘り方は円形。35住との切り合いは 柱穴が検出されず不明。
					196	76	70	23	不整円形		
					197	70	68	31.5	円形		
					198	72	62	24	長方形		
					199	70	69	32	不整円形		
16	方形 側柱式	N 2°E	1間×1間 2.2×2.1	桁 2.2 梁 2.1	217	62	56	18	不整円形		3地区西側に位置する。 柱穴の掘り方は円形で浅い。P218 は覆土 中に20cm大の石あり。
					218	82	69	14	不整楕円形		
					219	68	60	17	不整楕円形		
					220	66	56	11	不整楕円形		
17	長方形 側柱式	N 78°E	2間×1間 5.7×1.8	桁 2.4~3.2 梁 1.8	52	42	36	22	円形		2地区中央に位置し，建5，9を切る。 柱穴の掘り方は，円形で小さい。 覆土は灰褐色土の単層
					58	60	54	15	不整楕円形		
					110	34	32	11	円形		
					111	54	48	25	不整円形		
					112	34	28	13	楕円形		
18	長方形 側柱式	N 60°E	2間×1間 3.0×2.6	桁 1.5 梁 2.6	154	80	78	46	不整円形		1地区北側に位置する。 柱穴の掘り方は円形で大きい。P155 は二 段底を呈し，深い柱痕（黒褐色土）が観察 出来た。
					155	86	72	70	不整楕円形	柱痕あり(22)	
					156	100	88	56	不整楕円形		
					162	78	70	48	円形		
					163	92	55	39	長方形		
					164	100	85	34	不整楕円形		
19	側柱式	N 87°W	1間×1間 2.2×1.9	桁 2.2 梁 1.9	222	68	64	21	円形		3地区北西際に位置する。 P222 に対応する柱穴は検出されなかった。 柱穴の掘り方は円形
					223	55	46	18	楕円形		
					224	64	58	30	不整円形		

柵　列

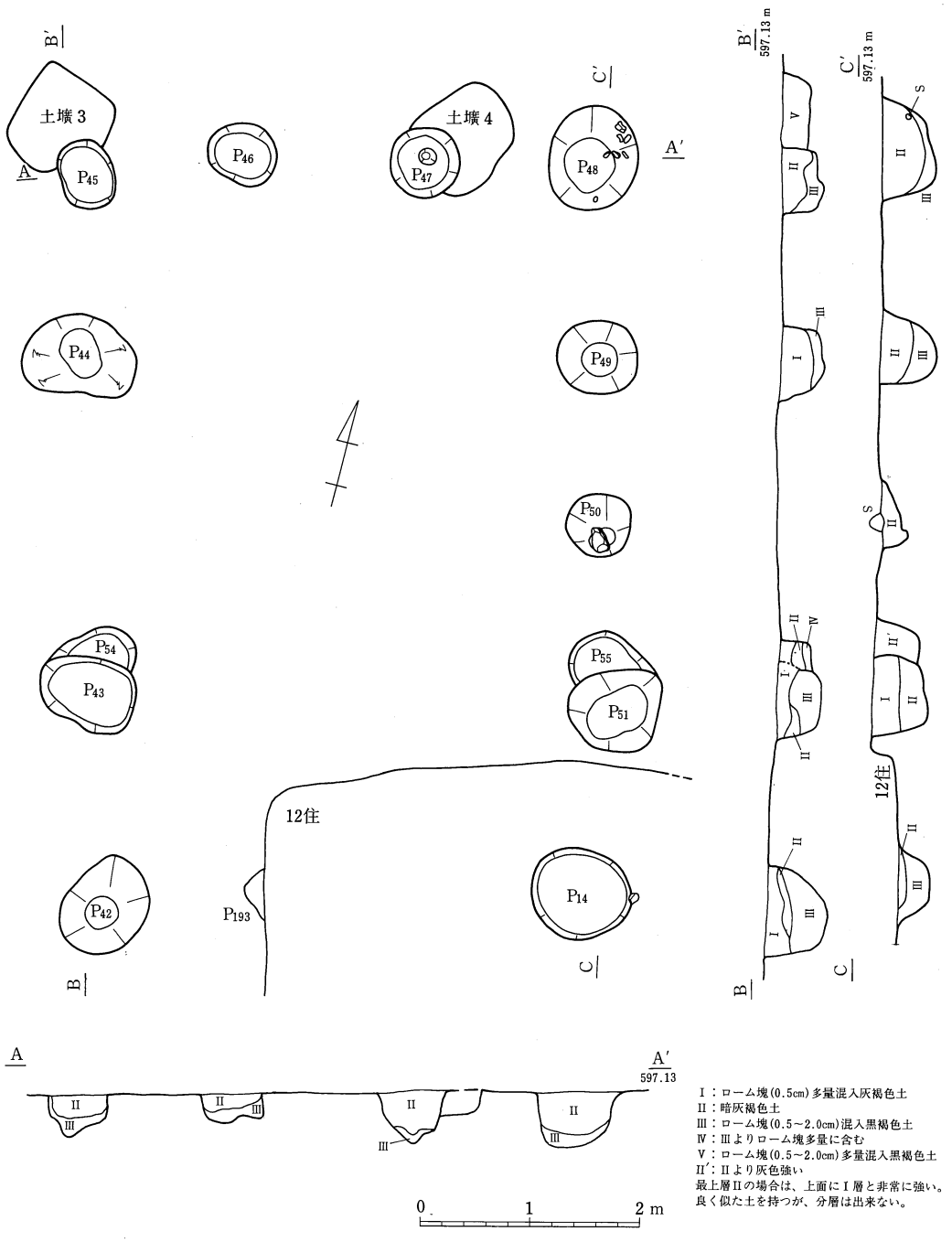
No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模(cm) No.	長径	短径	深さ	柱穴 平面形	柱穴備考	柵列所見
1		E 8°W	3間 4.2	1.3~1.5	15	66	60	39	方形		2地区南東に位置する。 掘り方は円形で深い。
					16	84	80	43	不整円形	柱痕あり(10)	
					17	90	75	52	楕円形	柱痕あり(10) (9)	
					18	56	52	41	円形		
2		E 10°W	3間 4.4	1.5	225	68	60	26	不整円形		3地区北西隅に位置する。 掘り方は円形で浅い。
					226	90	72	16	不整円形		
					227	67	60	16	円形		
					228	70	68	14	円形		


C
A
P5
P6
D
P7
P8
A′
C′
597.38m
D′
597.38m
P4
P9
P3
P2
P10
B
P1
P12
P11
B′
D
P13
C
A
A′
597.38m
I：鉄分混入灰褐色土
I′：鉄分混入灰色土
II：ローム塊(0.5～2.0cm)混入暗褐色土
B
B′
597.38m
0
1
2 m

第36図　建物址 1

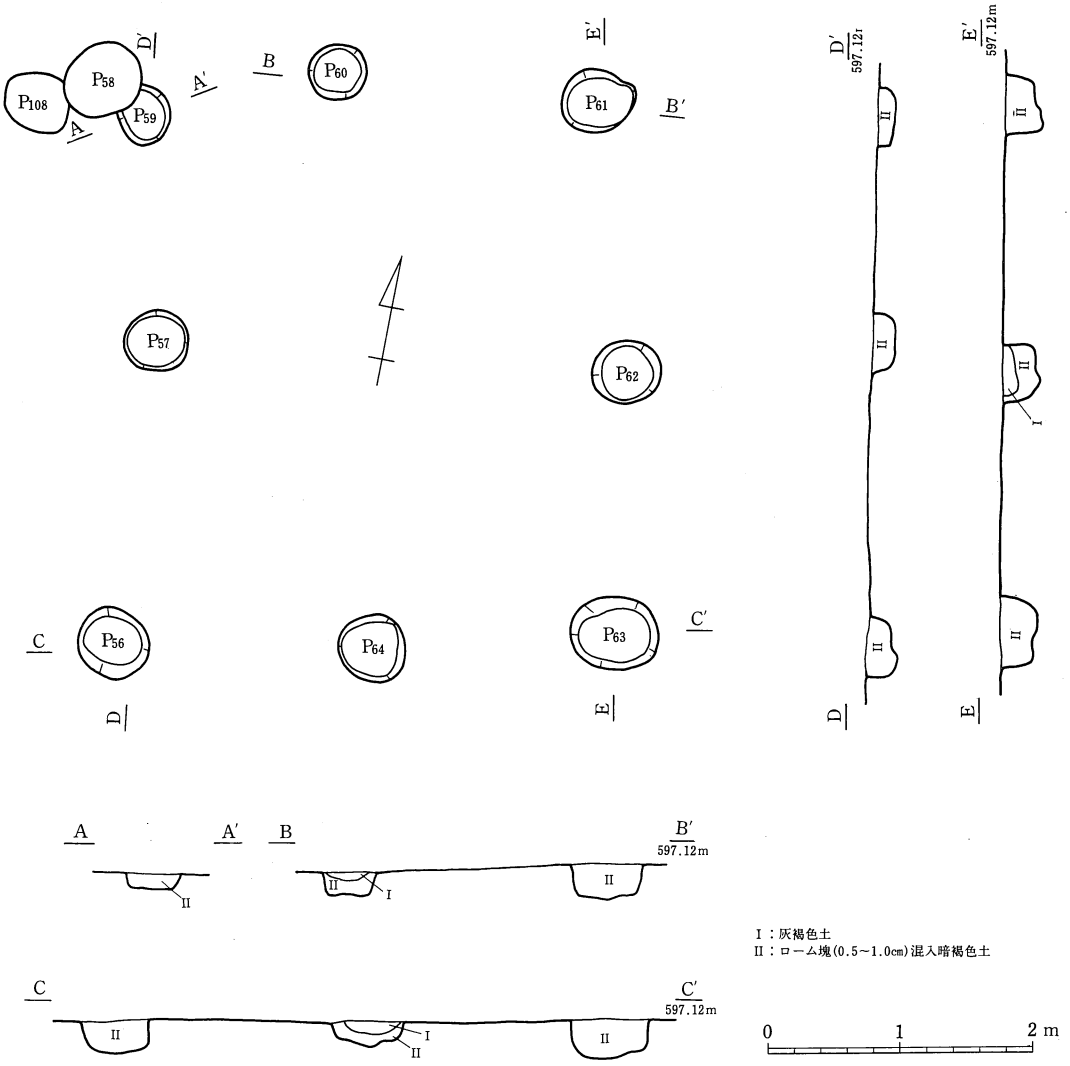

P28
P30
P27
P26
P29
P25
P24
P23
P22
P20
P21
P38
P39
P40
P37
P41
P36
P35
P34
597.34m
597.18m
建物址2　A～D
Ⅰ：鉄分混入灰褐色土
Ⅱ：砂質灰色土
Ⅲ：ローム塊(0.5～2.0cm)少量混入暗褐色土
建物址3　E～H
Ⅰ：灰褐色土
Ⅱ：ローム塊(0.5～1.0cm)混入暗灰褐色土
Ⅲ：暗褐色土
0
1
2 m

第37図　建物址2・3

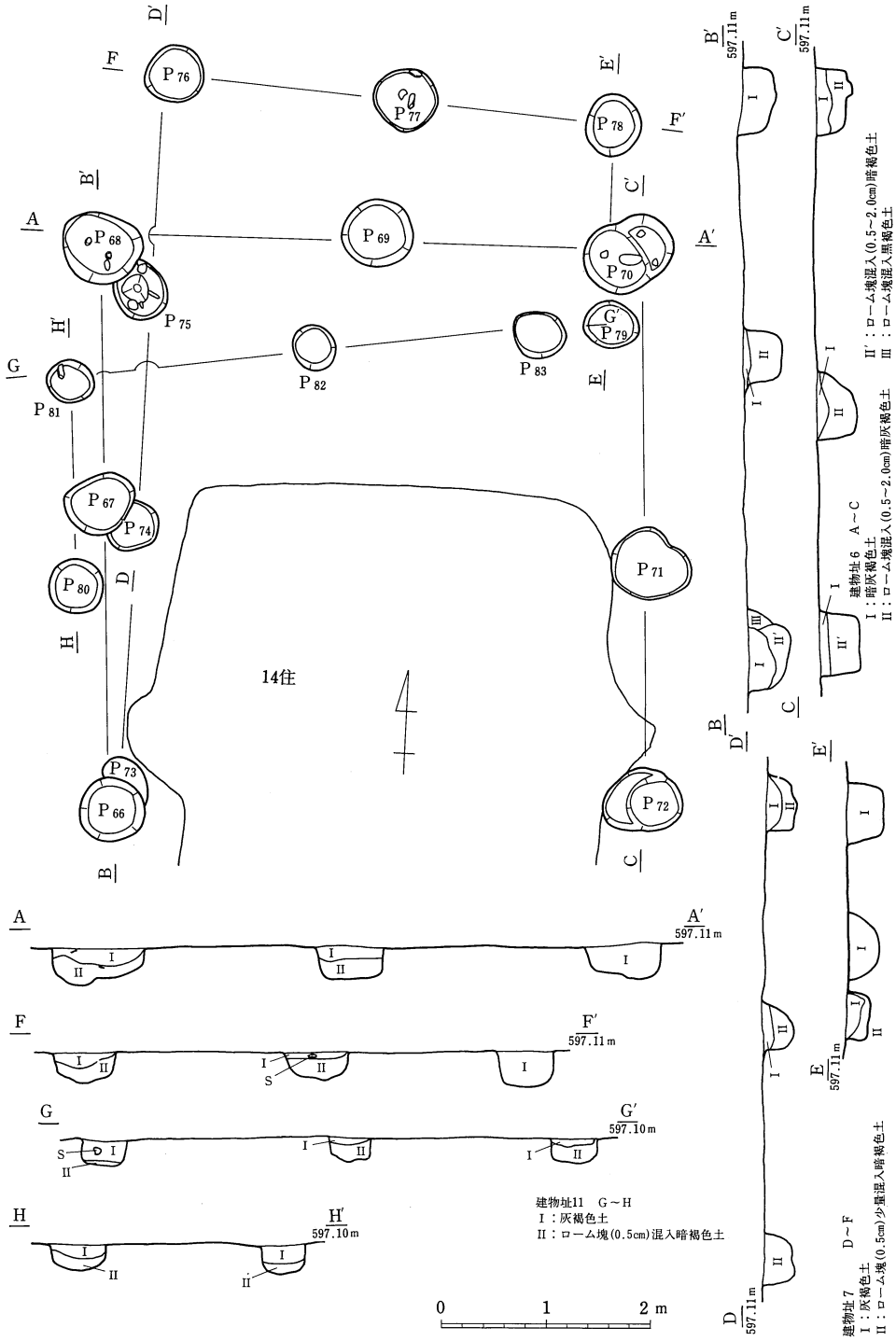


Ⅰ：ローム塊(0.5cm)多量混入灰褐色土
Ⅱ：暗灰褐色土
Ⅲ：ローム塊(0.5～2.0cm)混入黒褐色土
Ⅳ：Ⅲよりローム塊多量に含む
Ⅴ：ローム塊(0.5～2.0cm)多量混入黒褐色土
Ⅱ′：Ⅱより灰色強い
最上層Ⅱの場合は、上面にⅠ層と非常に強い。
良く似た土を持つが、分層は出来ない。

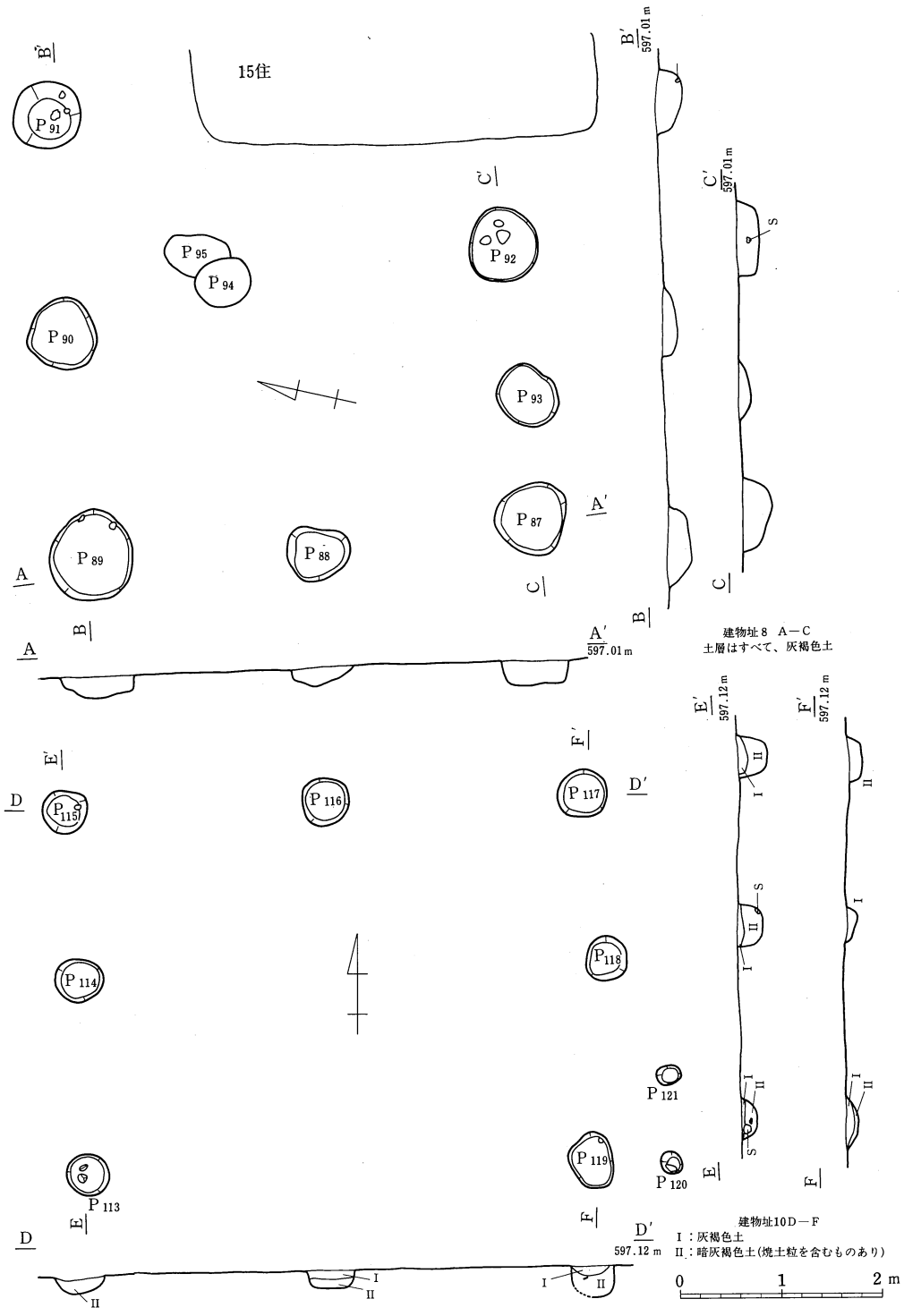
第38図　建物址 4


P58
P108
P59
P60
P61
P57
P62
P56
P64
P63
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
597.12m
I：灰褐色土
II：ローム塊(0.5～1.0cm)混入暗褐色土
0
1
2 m

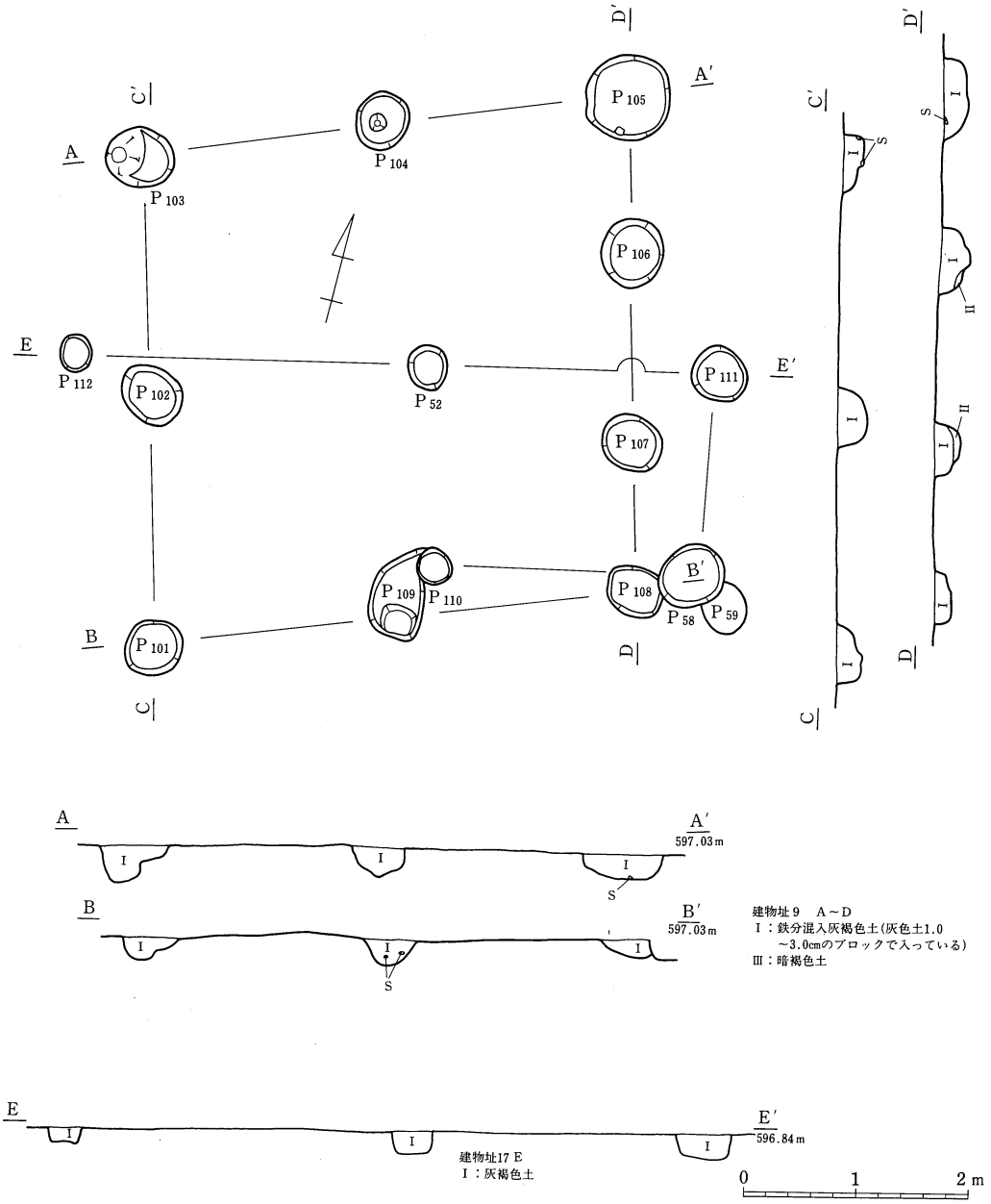
第39図　建物址 5



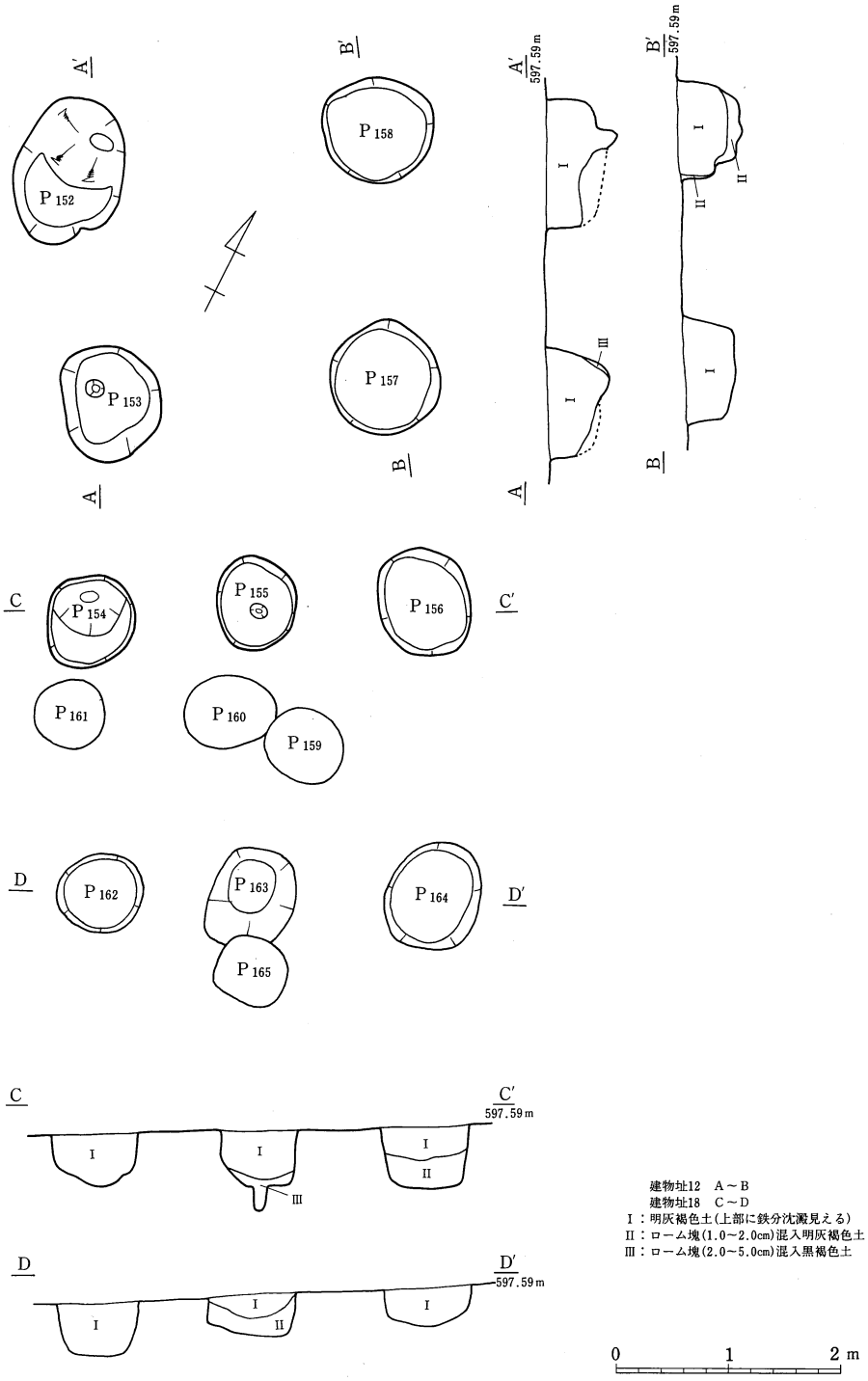
第40図　建物址 6 ・ 7 ・ 11


15住
P 91
P 92
P 93
P 94
P 95
P 90
P 87
P 88
P 89
P 115
P 116
P 117
P 114
P 118
P 121
P 119
P 120
P 113
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
597.01m
597.12m
S
I
II
建物址8 A－C
土層はすべて、灰褐色土
建物址10D－F
I：灰褐色土
II：暗灰褐色土(焼土粒を含むものあり)
0
1
2 m

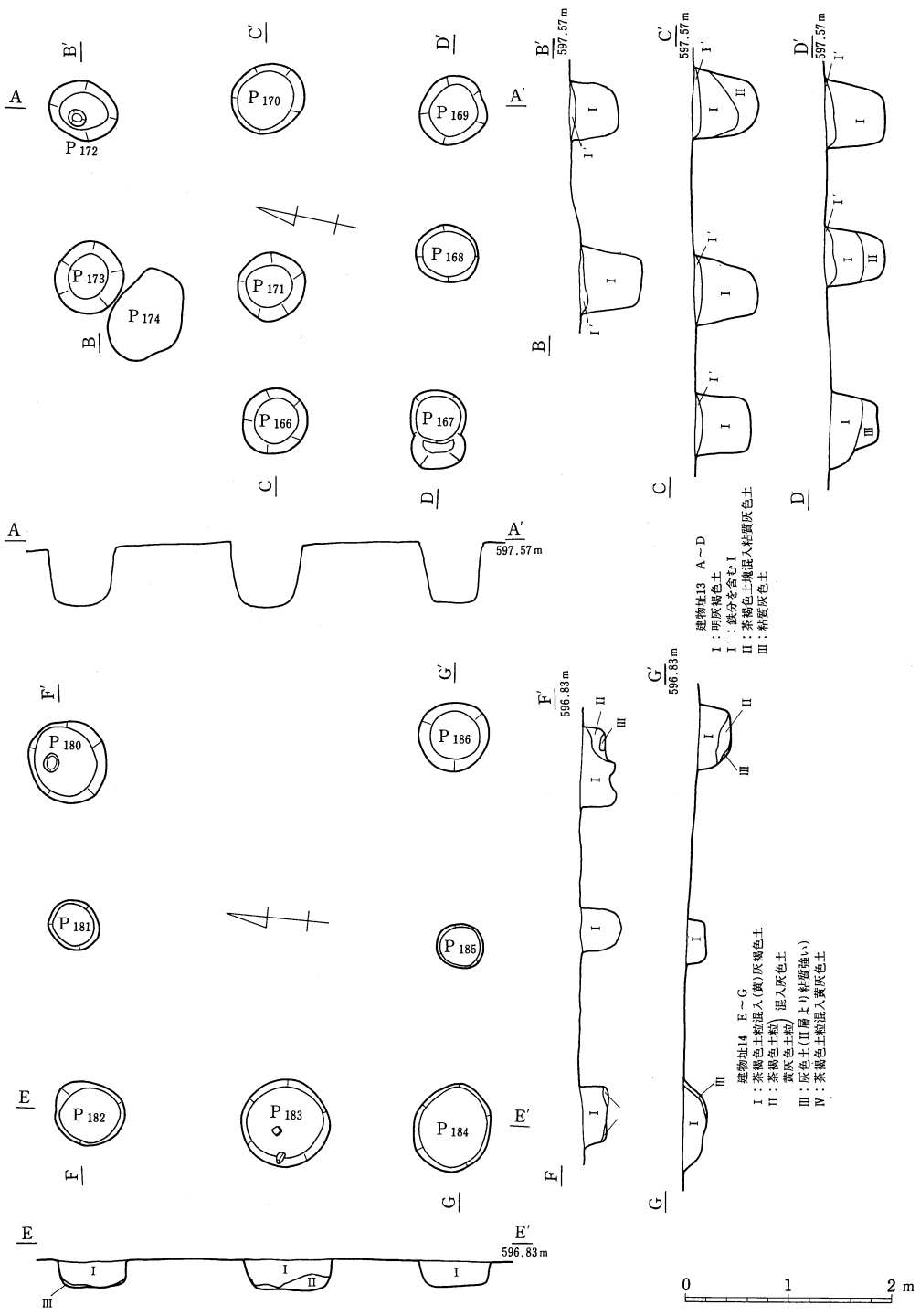
第41図　建物址８・10


A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
P 101
P 102
P 103
P 104
P 105
P 106
P 107
P 108
P 109
P 110
P 111
P 112
P 52
P 58
P 59
597.03m
596.84m
S
I
II
建物址9　A～D
Ⅰ：鉄分混入灰褐色土(灰色土1.0
～3.0cmのブロックで入っている)
Ⅲ：暗褐色土
建物址17 E
Ⅰ：灰褐色土
0
1
2 m

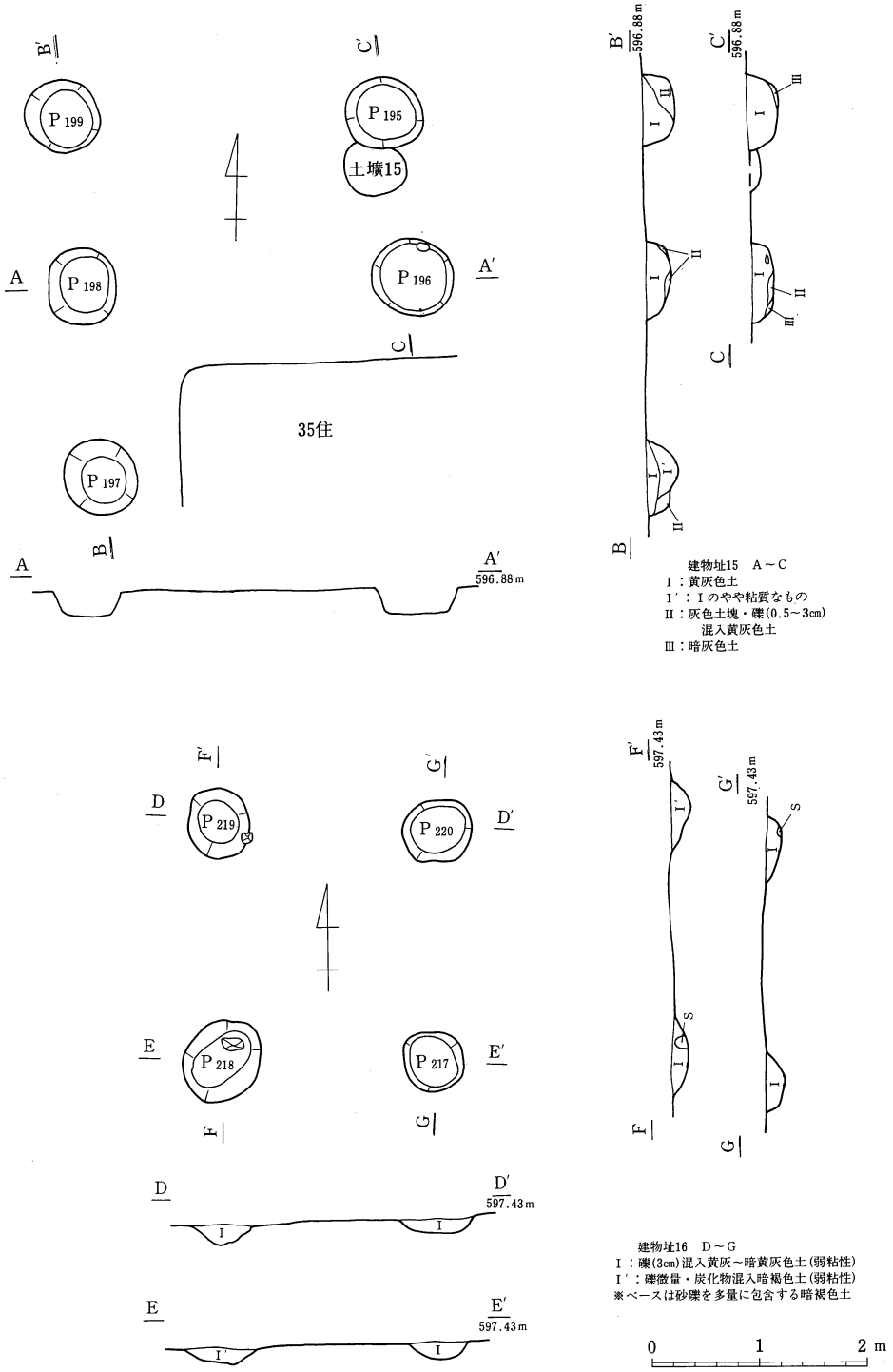
第42図　建物址 9 ・17



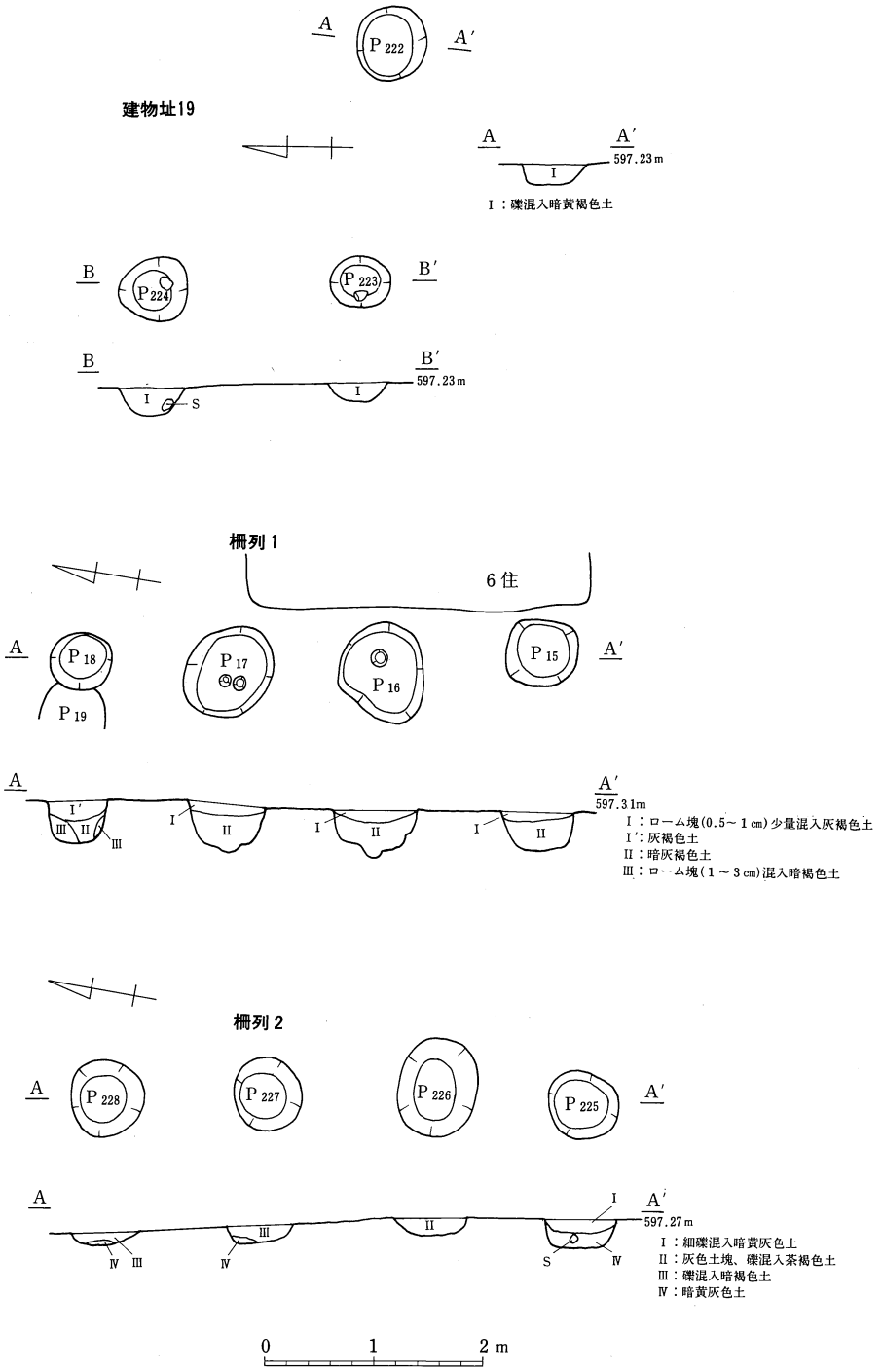
第43図　建物址12・18



第44図　建物址13・14



第45図　建物址15・16



第46図　建物址19・柵列 1 ・ 2

3．土壙・溝

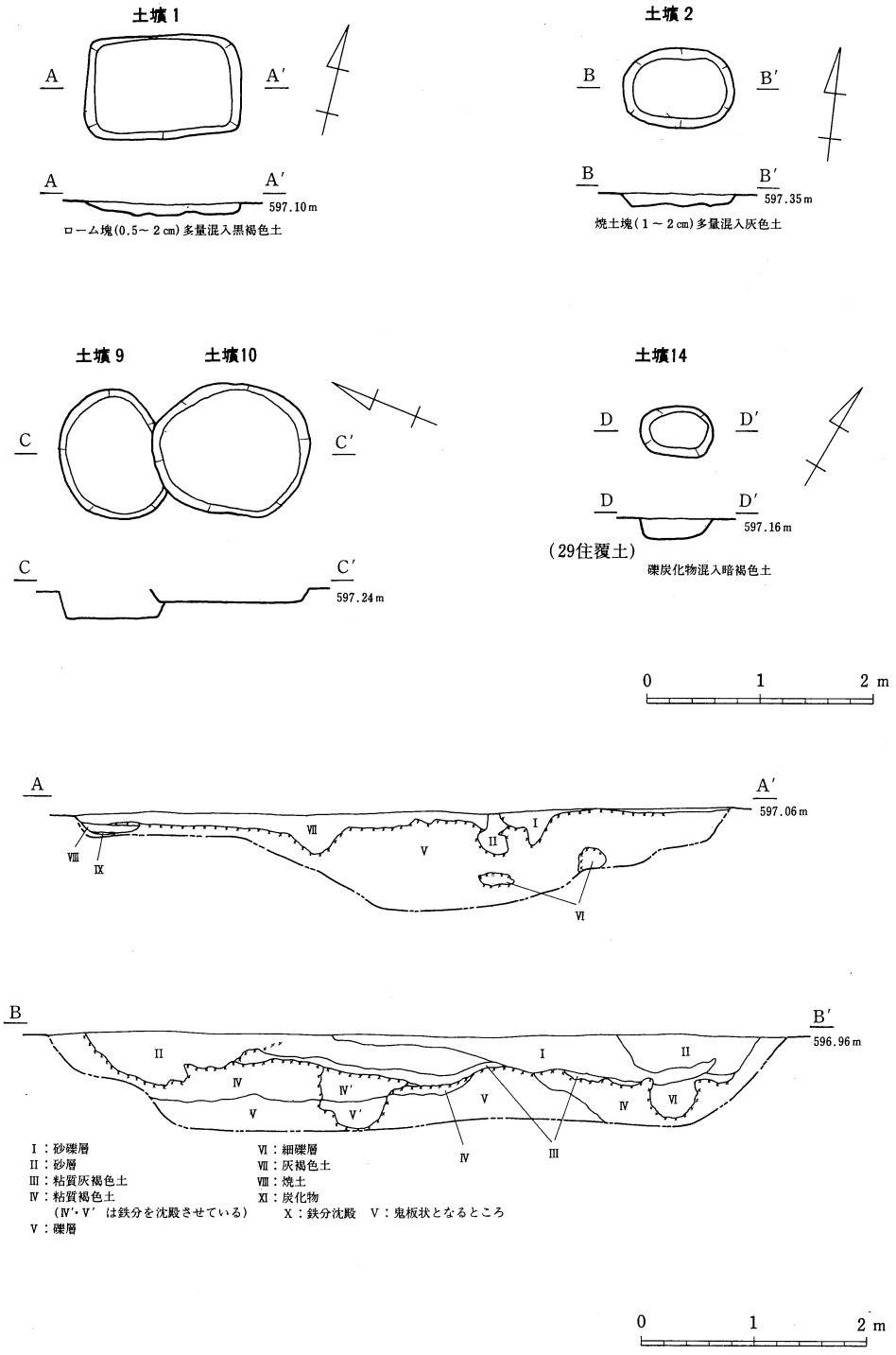
1）土壙

今回の調査でピット・土壙の総数は251基である。これらのうち建物址・柵列として把えたものが142基、残り109基のうち規模の大きいもの、遺物を多く含むもの等を土壙として扱った。地区別にみると1地区からは全くなく、2地区13基、3地区5基を検出した。これらの平面形は長方形2、楕円形8、その他8である。規模は最大の10で139×112cmを測るが、長軸が60cmに満たないものまで様々である。覆土は2地区東のものは概して黒褐色、同西では灰色系、3地区東では黄褐色と場所により異なっている。以下図示したものを中心に特徴的なものについて若干ふれておく。

1は2地区南東に位置する。136×90cmの均衡のとれた長方形を呈し7住を切る。検出面よりの深さは10cmと浅いが覆土はローム塊を多量に含む黒褐色で直後埋没の可能性がある。墓址であろうか。2は2地区西にあり98×70cmの楕円形を呈す。深さは10cm程で覆土は焼土を含む灰色土である。遺物は土師器の甕、小型甕の破片を多く出土し、時期はIV期以前とする。9は2地区西にあり10に切られ、114×90cm程の楕円形を呈すものと推測する。遺物はVIII・IX期に該当する土師の坏片を出土している。なお10は遺物が皆無である。14は3地区西に位置し64×45cmと小型の楕円形を呈し29住を切る。検出面よりの深さは14cmを測り、覆土は礫を含む暗褐色土で炭化物が混じる。遺物は29住と非常に近似しX期に該当する土師器埦の高台を出土した。16は3地区東、建15の北に位置し80×56cmの不整形である。遺物は非常に多く土師器の埦、生焼けの須恵器の坏がみられX期を与える。17は16住に切られ全容は明らかでない。縄文時代晩期に属する深鉢の胴下半4分の1量程の出土をみた。縄文時代に属する唯一の遺構である。以上この17を除くと覆土等より2地区に比較的古いものが集中し、3地区に新しいX期のものが集中していることがわかる。

2）溝

溝は2地区北に東西に走るものを唯1本検出した。幅は6.7～7.6mで西から東へ向けて流れた自然流路である。数ヶ所にトレンチを入れ断面を観察したところ、鉄分の沈澱等により数次にわたり左右に流れを変えた様子が窺える。周囲には15～19住および建8・10等の諸遺構が見られるが、これらの遺構とある程度の間隔をとっていることからこれらの諸遺構より古い時期からの存在が考えられる。なお断面を見ると溝際に焼土および炭化物が認められた。周囲の精査を試みたが、同一検出面ではプランを確認できず、現検出面の時期とはかなり隔てた時期の遺構と思われる。なおこれについては未調査のため溝の成立時期を断定することはできなかった。遺物は多く須恵器の高坏、長頸壺、土師器では内黒埦、坏、甕、灰釉碗等があり、この他に馬歯が見られた。


土壙 1
A
A′
597.10m
ローム塊(0.5～2cm)多量混入黒褐色土
土壙 2
B
B′
597.35m
焼土塊(1～2cm)多量混入灰色土
土壙 9
土壙10
C
C′
597.24m
土壙14
D
D′
597.16m
(29住覆土)
礫炭化物混入暗褐色土
0 1 2 m
597.06m
I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
596.96m
I：砂礫層
II：砂層
III：粘質灰褐色土
IV：粘質褐色土
(IV′・V′ は鉄分を沈殿させている)
V：礫層
VI：細礫層
VII：灰褐色土
VIII：焼土
XI：炭化物
X：鉄分沈殿 V：鬼板状となるところ

第47図　土壙・溝

第3節　遺　　物

1　土器

1）　出土土器の概要

今回の調査では、各種の遺構覆土・底面および検出面から多量の土器の出土をみた。出土状態については、第20号住居址の例を除くと、遺構内に一括廃棄または配列した特殊な場合はみられず、ほとんどが小破片から一括品までが各遺構の覆土中および床面より、あまり偏りなく出土する状態であった。出土土器の種別の構成についてみると、土師器、須恵器、灰釉陶器が大部分を占め、微量の縄文土器、弥生土器が伴っている状況であり、縄文土器の一括品が1点、遺構から出土した以外は、縄文・弥生土器が主体的に出土した遺構はない。土師器、須恵器、灰釉陶器は、形態および製作手法上の特徴からみて、少量の古墳時代末期のものを含むが、その他はすべて当地方の奈良・平安時代の土器様式の中に位置づけられるものである。以下の記述は専らこの土師器、須恵器、灰釉陶器に的を絞って進める。

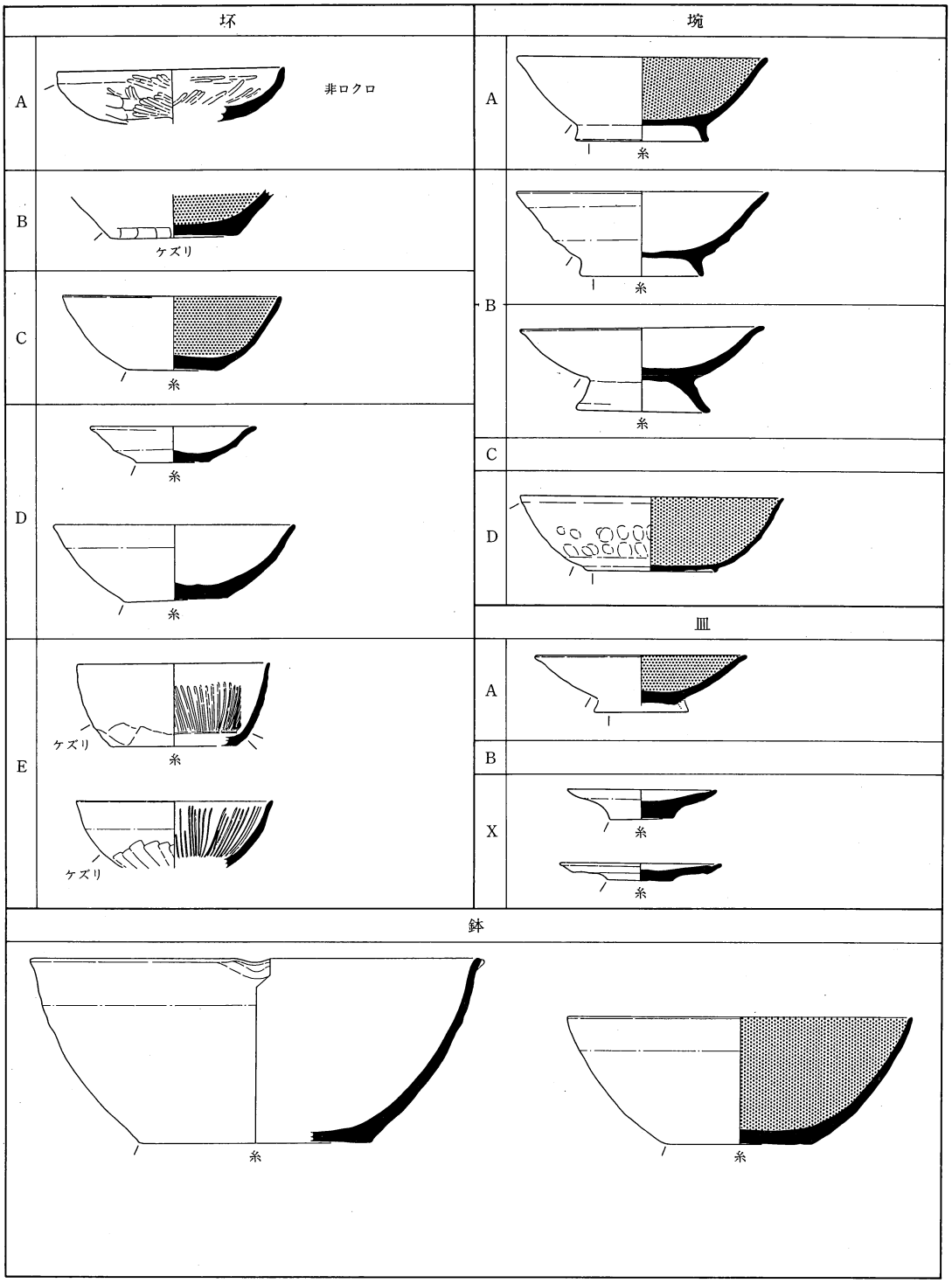
2）　出土土器の提示

各遺構および検出面から出土した土器のうち外形の図化可能なものの大部分については出土地点ごとにまとめて、すべてを提示した（第52～89図）。総点数719点にのぼる。図中の成形・調整等の表現については第49図の様に模式化を図るように務めた。また図中の通し番号の横に「S」または「K」とあるものは、その土器がそれぞれ須恵器、灰釉陶器であることを示し、なにもないものが土師器である。図示した個々の土器のデータは観察表にしてまとめ、統一を図った。表中の項目で「種別」は土師器、須恵器等の別を示したもので、後述する焼成の悪い須恵質の土器（須恵器坏E）もここでは須恵器とした。また、「器形」は次段の「3）出土土器の器種分類」の内容に伴うものであり、「残存度」は図化する際の水平の基準線を求めた口縁部（底部）の残存度合いである。「色調」について灰釉陶器のみは「内面」の項に釉調を記してある。

次に、各遺構毎の出土土器（群）の様相の提示については、従来のように図化可能なもののみによってでは、これを忠実に行い難いという認識に基づき(1)、当該遺構出土のすべての土器を可能な限り器種分類・細分し、それら毎の計量（重量の測定あるいは破片数の数え上げ等）により行うべきと考える。ただし今回は時間的制約と資料数の問題によりそれが完全に果たせないので、図化したものによって大枠で推定した各時期段階（第3章第4節）を遺構の記述において示すに止めたい。

3）　出土土器の器種分類

各種別における、坏や甕等、従来用いられている大まかな器種の中に、更に外形・手法上の共通



第48図　土師器食膳具の器種細分

性を有する小群が認められる。器種を細分しこの小群を規定、把握することにより、以後の土器記述の便を図るとともに、個々の土器間の器種内における共通点と相違点を明確にし、前段で述べた各遺構毎の出土土器の様相を器種組成の量的な比率で示す作業により細かい視点が与えらることになる。

具体的な分類・細分の方法は、まず土師器、須恵器、灰釉陶器を従来使用されている坏、甕などの呼称で大枠に分け（形式）それらが更にいくつかの群により構成されていると見なせた場合、細分していく（小形式）。この時の観点は、主に外形と、観察できる成形、調整痕の比較とに基づいている。この方法と内容は、基本的には南栗遺跡第三次調査の器種分類（文献１）を踏襲したものである。このため当遺跡では今回は偶然出土しなかったが、南栗遺跡で既に出土しており、その時期に存在すると推定される器種、器形が空番となって組成の中に含まれることもあるので、そこは南栗遺跡の例を参照されたい。土器観察表の器種の覧の表記は本項の内容と対応する。

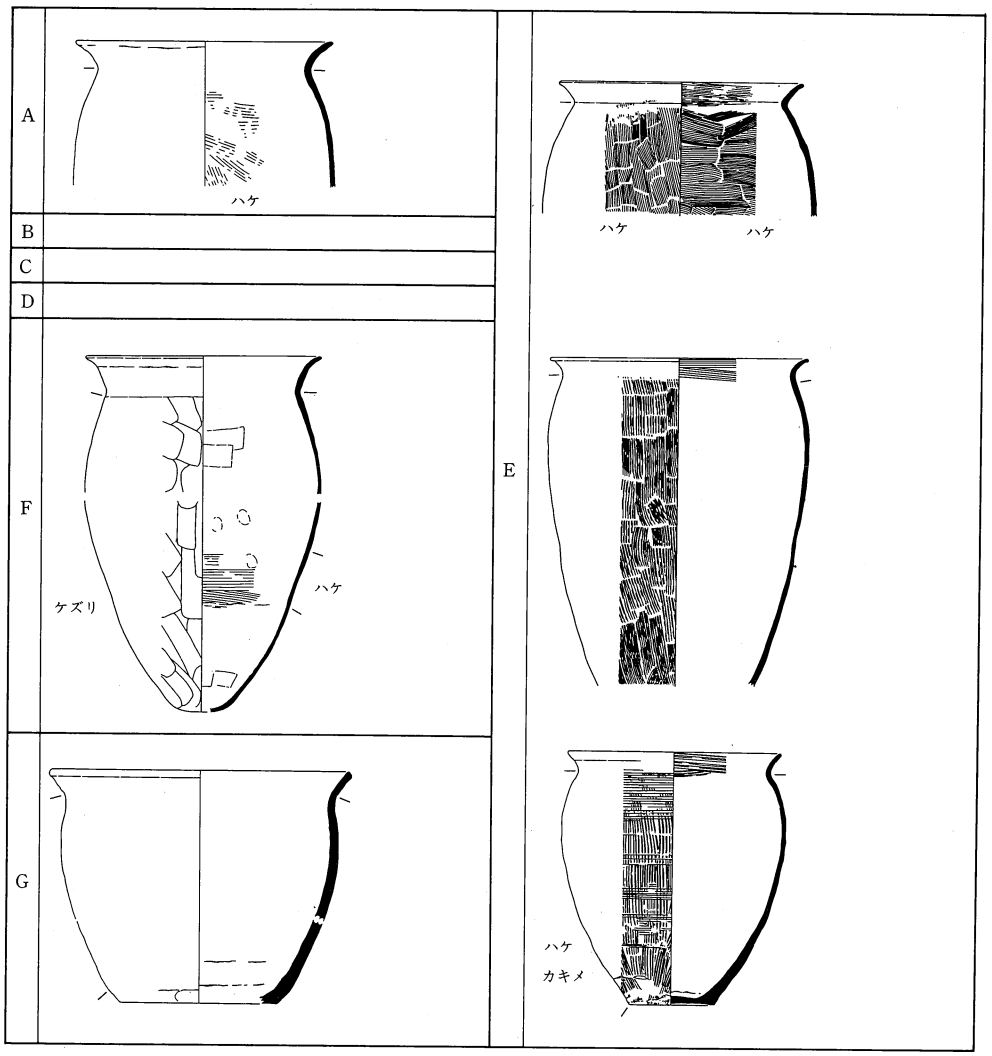
①　土師器

坏・埦・皿・鉢・甕・小形甕・高坏等の存在が認められる。坏・埦類には黒色土器(2)と呼称される内面黒色処理されるものが多数あるが、ここでは土師器として扱う。

坏・埦・皿・鉢等の食膳具の器種細分は第48図の通りである。埦Ｃ・皿Ｂは今回の調査で良好な個体が得られなかったため図示していない。坏Ｂは全形を示せるものがなかったため部分図となっている。更にこの細分図を使用するにあたり、いくつかの留意点がある。第１に、坏Ａは他の坏との区分の基準が単にロクロ不使用ということであるため、南栗遺跡（文献１）では、今回に較べて、内黒のものとそうでないもの、体部に稜をもつもの、等の多様性があった。第２に、坏Ｃおよび埦Ａには図示した個体と相似の外形をとりながら、ひとまわり大きい寸法をもつものが存在する（挿図２）。同様に坏Ｄも大小に寸法が分化しているが、先の場合と分化の方向や、外形が異なるため両方を図示した。第３に、坏Ｅの２者の違いは寸法分化のためではなく、時期差による急激な型式変化によるものと考えられているため、双方を示してある。第４に、埦Ｂの下段に示した高台が足高となる個体は、本来独立した器種としてここから分離される可能性があるが、今のところ資料が少ないため系譜の検討が不充分で、便宜的に埦Ｂに含めたものである。第５に皿Ｘは、埦Ｂの足高高台のものと同様の理由で、便宜的に一括した。

甕の器種細分は第49図の通りである。甕Ｂ・甕Ｃ・甕Ｄは良好な一括品に恵まれなかった。甕Ａ・甕Ｇも全体的に出土量は僅少である。甕Ｅは今回出土の甕の大部分を占めている。この甕Ｅは、胴部外面に密に縦のハケメが施される比較的薄手のもの、として一括したが、口縁部・胴部内面の調整や外形に多様性がみられ、更に細分が可能である。また、甕Ｅの胴部上半の縦位のハケメが消えて、ロクロナデ、時にカキ目のつくものが少数存在する。若干検討の余地があるので今回は細分図に示さなかったが、独立したひとつの器形をなしていくものと考えられる（468）。

小形甕の器種細分は第50図の通りである。小形甕Ａ・小形甕Ｂ・小形甕Ｄは南栗遺跡その他でそ



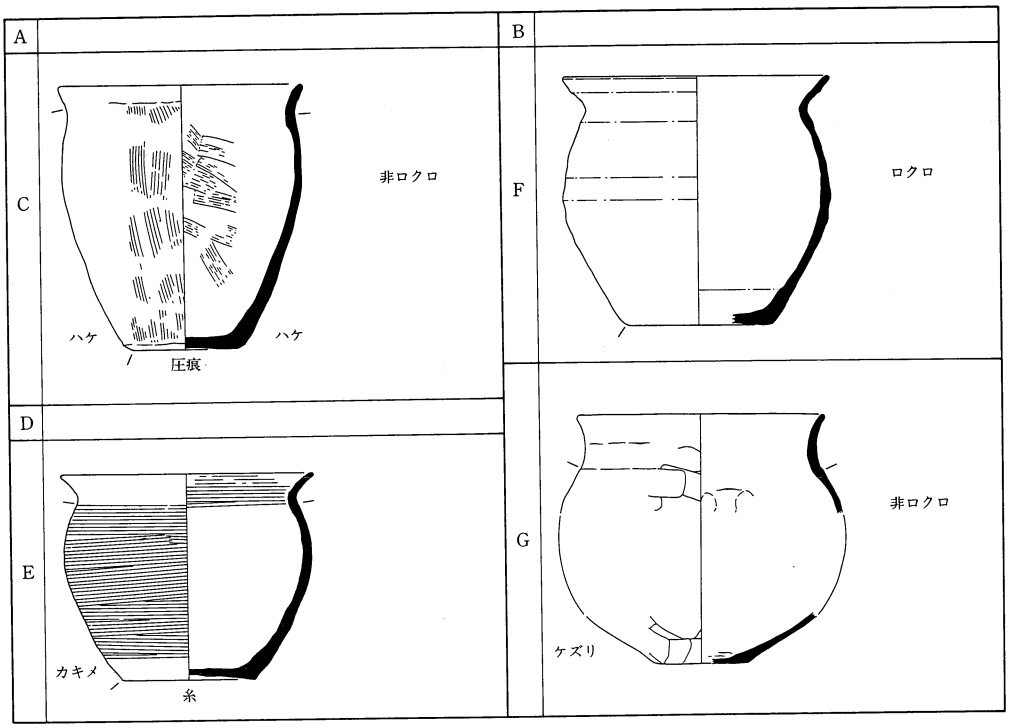
第49図　甕の器種細分

の存在が認められているが今回は確認できる良好な例がない。小形甕Cも出土数は僅少である。小形甕Eには、基本的な外形や調整手法は共通するが、口径・底径の大きさ、胴部の形態等が形式変化し若干異なった外形からの印象をうけるものも多く、更に細分が可能である。この小形甕Eと小形甕Fで今回出土の小形甕の大部分を占めるが、いずれも寸法のバラツキの幅が大きい。

以上の他に、高坏（673･674）、耳皿（333）、器種不明のもの（436）等の土師器があるが少量で、細分は行なわない。

② 須恵器

蓋・坏・高坏・長頸壺・短頸壺・瑯・擂鉢・四耳壺・大小各種の甕・環状把手付壺・鉢・横瓶・小瓶等多様な器種がみられる。しかし全形を知り得るものは蓋・坏類がほとんどである。これらのみ器種の細分が行える（第51図）。



第50図　小形甕の器種細分

蓋では、坏Aと組み合わさる蓋Aの出土がなかった。蓋Bも少量である。蓋Cは最も出土量が多く、口径等の寸法、つまみや端部の屈曲の形態に多様性があり、更に細分できる可能性がある。

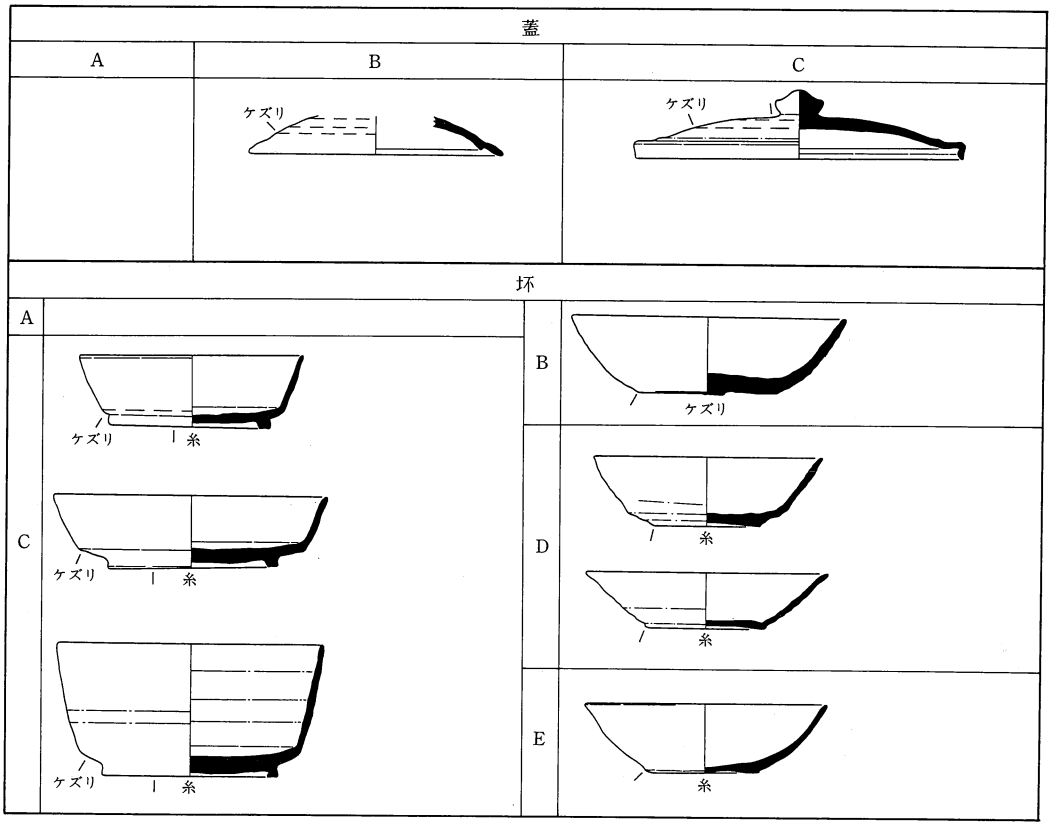
坏では、坏A（立ち上がり部と蓋受けを有し、蓋Aとの組み合わせが想定されているもの）がみられない。坏Bも多様性がなく、南栗遺跡で4種に細分した内の「坏B－2」が若干出土している程度である。これに対し有台の坏C、糸切りの坏Dは多数出土している。坏Cでは図示した通り、大・小および深の他、小坏（626）さえ揃っており、坏Dでは二次底部面をもつもの（上段）から、底部より直線的に体部のひらく外形のもの（下段）までみられる。粗悪な胎土と軟質な焼成により規定される坏Eについては、出土例は多いが南栗遺跡で指摘した通り、色調・焼成の面で土師器坏Dとごく微妙な異なりをみせるだけのものも多い。外形も下段の須恵器坏Dよりもむしろ、土師器坏D（または坏B）に近いものがあり、ここでは南栗遺跡の結果に従い便宜的に須恵器の一種としてひとつの器形に独立させておくが、今後、見直しが必要となる可能性がある。

③　灰釉陶器

碗・皿・長頸瓶がある。土師器・須恵器に較べて出土量は少ない。碗に寸法の大小が認められる他は、今回の資料では細分の要素はない。

3)　その他の土器

微量であるが縄文土器、弥生土器が出土しているのでここで触れたい。718は土壙17から出土した。縄文時代晩期末の深鉢で外面がケズリ後ミガキ、内面は口縁付近がケズリ後ミガキ、それ以下がケ



第51図　須恵器食膳具の器種細分

ズリを行っているのが観察できる。大形の破片であり、土壙17に伴う時期のものであろう。719は第28号住居址（平安）の覆土から出土した縄文中期中葉の深鉢片である。器面の磨滅が著しいがこの時期の資料については、今回調査地から南東へ500m程はなれた昭和59年度の調査地の古代の検出面より約1m下層で多数の出土をみており(3)、案外、付近に遺物の存在する可能性もあろう。弥生土器は、P_{145}内と2地区の検出面から小破片が数点出土している。P_{145}のものは壺の大きく外反して開く口縁端部で、外面に口唇から垂れ下がるように凸帯が貼りつけられていた痕があり、口縁端部のみ赤色塗彩がみられる。2地区検出面出土のものは、外面を赤色塗彩され、内面に細かいハケメをもつ壺の胴部片と、内外にハケメをもつ破片である。いずれも後期に属するものと考える。

5）古瓦

第28号住居址床面より丸瓦一片のみが出土している。上下端部が欠損しており残存部の最大幅は15.1cmである。器厚は比較的厚く1.9cmを計る。粘土板巻きつけによる成形と思われる。凸面には太さ2～3mmの縄叩き目痕、凹面には荒い布目痕が残っている。二分割の後左右端部はケズリ調整が行われている。酸化焔焼成によるものであるが硬質である。胎土には長石が混入する。

註1　文献1：松本市教育委員会　1986　『島立南栗遺跡』P79

2　小笠原好彦　1971　「丹塗土師器と黒色土師器――土師器における二次的表面加工の問題について――」『考古学研究』18－2

3　文献2：松本市教育委員会　1985　『島立南栗・北栗遺跡、高綱中学校遺跡、条里的遺構』

表2　出土土器観察表

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
1	1住	須恵器	蓋C	12.8	—		1/6	淡黄灰～灰	淡黄灰～灰	ロクロナデ	
2	〃	〃	坏D	13.0	5.8	3.8	1/3	黄灰～灰	黄灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
3	〃	〃	〃B	12.0	4.6	3.7	1/6	〃	黄灰～灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
4	〃	〃	〃B		4.6		(1/2)	淡灰	淡黄灰	ロクロナデ，底部ヘラ切り	底面にヘラ記号あり
5	〃	〃	〃D		6.2		(完)	淡黄灰	〃	ロクロナデ，底部ヘラ切り	
6	〃	〃	〃B		—		(1/6)	淡黄灰～灰	淡黄灰～灰	ロクロナデ，回転ヘラケズリ	
7	〃	〃	〃C		8.1		(1/4)	暗灰	暗灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	
8	〃	〃	〃C	16.0	9.0	6.2	1/12	暗灰～灰	灰紫	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部外周回転ヘラケズリ	
9	〃	〃	〃C	15.8			1/6	暗灰	暗灰	ロクロナデ	
10	〃	土師器	〃D		5.8		(1/4)	茶褐～淡褐	暗褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
11	〃	〃	〃C	18.5			1/12	茶褐～黄褐	黒	ロクロナデ	内黒
12	〃	〃	埦A		6.2		(完)	茶褐	黒～茶褐	ロクロナデ，胴内面ミガキ，付け高台のちヨコナデ，底部回転糸切り	内黒
13	〃	灰釉	碗	13.8	7.3	4.3	1/8	灰白	灰白	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	
14	〃	〃	〃		6.6		(1/4)	〃	〃	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	
15	〃	須恵器	短頸壺	11.2			1/5	暗灰～黄灰	暗灰～灰	ロクロナデ	
16	〃	〃	壺					黄灰～灰	黄灰～暗緑灰	ロクロナデ，胴外面下半回転ヘラケズリ	
17	〃	〃	長頸壺					暗灰～緑灰	黄灰～灰	ロクロナデ	自然釉
18	〃	〃	高坏					灰	暗灰	ロクロナデ	
19	〃	土師器	小形甕		6.4		(完)	茶褐	黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
20	〃	〃	〃E	11.4			4/5	茶褐～褐	〃	ロクロナデ，カキ目	
21	〃	〃	〃E		6.7		(完)	茶褐～暗褐	茶褐	ロクロナデ，カキ目，底部回転糸切り	
22	〃	〃	〃G	9.2	6.0	8.3	1/3	茶褐～褐	淡黄褐	ナデ，口縁強いヨコナデ，ヘラケズリ，底部ヘラケズリ	
23	〃	〃	甕E		7.8		(1/10)	茶褐～黒	茶褐～黒	胴外面ハケ目・内面ナデ，底部ナデ	
24	〃	〃	〃E	20.2			1/7	茶褐～暗褐	茶褐～暗褐	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴外面ハケ目・内面ナデ	
25	〃	〃	〃E	21.1			1/3	茶褐～黒	茶褐～黒	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴外面ハケ目・内面ナデ	
26	〃	〃	〃E	18.4			1/2	〃	茶褐	口縁ヨコナデ・内面ハケ目，胴外面ハケ目のちカキ目・内面ナデ，底部ナデ	口縁外反
27	〃	須恵器	壺?	21.8			1/8	暗灰紫	淡黄灰～灰	口縁ロクロナデ	内外面自然釉
28	〃	〃	甕	35.0			1/20	黄緑～緑	黄緑～暗緑	ロクロナデ，波状文	自然釉
29	〃	〃	〃					黄緑～灰	淡灰紫～淡褐	口縁ロクロナデ，胴外面平行タタキ目・内面同心円文あて具痕	外面自然釉
30	2住	〃	蓋		—			灰白	灰白	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	外面自然釉
31	〃	〃	〃C	17.4	—		1/5	暗灰	灰	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	
32	〃	〃	〃C	20.6	—		1/5	灰	〃	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	
33	〃	〃	坏B	12.0	5.0	3.9	1/4	黄灰～灰	黄灰～灰	ロクロナデ，底部ヘラ切り	

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm)			残存度 口縁(底部)	色調		成形・調整・形態の特徴	備考
				口径	底径	器高		外面	内面		
34	2住	須恵器	坏B	12.1	7.6	3.8	1/3	灰	暗灰	ロクロナデ，底部ヘラ切りのちナデ	
35	〃	〃	〃B	12.4	6.0	3.8	1/5	灰白	灰白	ロクロナデ，底部ヘラ切りのちナデ	
36	〃	〃	〃B	14.2	8.1	3.6	1/5	暗灰	暗灰	ロクロナデ，底部ヘラ切りのちナデ	
37	〃	〃	〃B		7.3		(1/3)	〃	淡茶褐	ロクロナデ，底部ヘラ切りのちナデ	
38	〃	〃	〃B	13.5	8.5	4.5	1/4	黄灰～灰	淡黄灰	ロクロナデ，底部ヘラ切りのちナデ	
39	〃	〃	〃B	14.6	8.5	4.6	1/3	淡灰白	淡灰白	ロクロナデ，底部ヘラ切りのちナデ	
40	〃	〃	〃B		8.7		(1/3)	灰	灰	ロクロナデ，底部ヘラ切り	
41	〃	〃	〃B		8.3		(1/3)	灰白	灰白	ロクロナデ，底部ヘラ切り	
42	〃	〃	〃B	15.2	9.6	4.8	(1/3)	暗灰～灰	灰	ロクロナデ，底部ヘラ切りのちナデ	
43	〃	〃	〃C	15.5	10.1	3.7	1/2	暗灰	〃	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	
44	〃	〃	〃C	14.9	10.1	3.3	1/12	淡灰～暗灰	灰白	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	
45	〃	〃	〃C		10.6		(1/8)	暗灰	暗灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	
46	〃	〃	〃？	18.0			1/10	〃	〃	ロクロナデ	
47	〃	〃	〃C	14.4	8.5	6.0	1/15	淡灰白	淡灰白	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ	
48	〃	〃	壺		11.2		(1/5)	黄灰～灰	灰	ロクロナデ，胴部下端回転ヘラケズリ，底部ナデ	
49	〃	〃	〃		12.5		(1/6)	灰白	灰白	胴部外面回転ヘラケズリ・内面ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ	
50	〃	〃	擂鉢		7.9		(1/2)	茶灰	茶灰～灰	ロクロナデ，底部回転糸切りのちナデ	
51	〃	〃	甕	10.4			1/6	暗褐灰	黄灰	ロクロナデ	内外面自然釉
52	〃	土師器	小形甕C	11.9			2/3	茶褐～暗褐	茶褐～黒	口縁ヨコナデ，胴部外面ハケ目・内面ナデ	炭化物付着
53	〃	〃	甕E	20.6			1/3	淡黄茶褐	淡黄茶褐	口縁ヨコナデ・内面ハケ目，胴部外面縦位のハケ目・内面横位のハケ目	
54	〃	〃	〃E		7.6		(1/4)	淡茶褐	黄褐	胴部外面ハケ目・内面ナデ，底部ナデ	木葉痕
55	〃	〃	〃E		7.4		(1/3)	茶褐～黄褐	茶褐～褐	胴部外面ハケ目・内面ナデ・下端内外面ハケ目のちナデ，底部ナデ	
56	〃	〃	〃E		9.7		(1/5)	茶褐～暗褐	黄褐～暗褐	胴部外面ハケ目，下端ハケ目のちナデ，内面板ナデ，下端ハケ目，底ナデ	
57	〃	須恵器	〃	29.1			(1/5)	灰	暗灰	ロクロナデ，胴部外面平行タタキ目・内面あて具痕	
58	3住	〃	蓋C	15.1	—		(1/8)	淡黄灰	淡黄灰	ロクロナデ，天井部回転ヘラケズリ	
59	〃	〃	坏D	13.5	7.2	3.8	1/3	暗灰	暗灰	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	
60	〃	〃	〃D	13.2	7.0	3.9	1/6	黄灰	黄灰	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部に二次底部面	
61	4住	〃	〃D	12.4			1/3	暗茶褐～暗灰	暗茶褐	ロクロナデ	
62	〃	〃	〃D	13.4			1/2	茶褐～黒	茶褐	ロクロナデ	
63	〃	〃	〃D		6.4		(完)	暗灰～灰	暗灰～灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	火ダスキ
64	〃	〃	〃D	13.7	6.7	4.2	1/4	茶褐～暗灰	茶褐～暗灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
65	〃	〃	〃D	13.7	6.8	4.2	5/6	灰	灰	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部に二次底部面	
66	〃	〃	〃C		8.5		(完)	淡茶灰	淡茶灰～暗褐	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
67	4住	須恵器	坏C	12.3	9.0	4.1	1/10	淡灰～暗灰	淡灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	
68	〃	〃	〃C	14.1	9.3	7.2	1/6	暗灰～灰	暗灰～灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	火ダスキ
69	〃	〃	〃C	15.3	10.6	6.9	2/3	明灰～暗灰	明灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部ヘラ切りのち回転ヘラケズリ	
70	〃	土師器	小形甕		5.5		1/4	暗灰	暗灰～灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
71	〃	〃	甕	21.4			1/4	茶褐～黒	淡褐	ロクロナデ，胴部外面タタキ目・内面あて具痕	
72	5住	須恵器	蓋C	12.0	—		1/10	灰紫	薄青灰	ロクロナデ	
73	〃	〃	坏D	12.4	3.2	3.1	1/6	青灰	青灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
74	〃	〃	〃D	11.6	4.2	3.3	1/6	〃	薄青灰～灰紫	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	
75	〃	〃	〃D	11.8			1/2	青灰～灰紫	青灰～灰紫	ロクロナデ	
76	〃	〃	〃D	12.7			1/5	青灰	青灰	ロクロナデ	重ね焼き痕
77	〃	〃	〃D	12.4			1/6	薄青灰	薄青灰	ロクロナデ	
78	〃	〃	〃D	12.5	5.1	3.5	1/3	薄青灰～黒褐	薄灰紫	ロクロナデ，底部回転糸切り	
79	〃	〃	〃D	13.0	6.3	2.9	1/5	灰紫	灰紫	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	
80	〃	〃	〃D	13.0	5.6	3.5	1/4	黄燈	黄燈	ロクロナデ，底部回転糸切り	
81	〃	〃	〃D	13.2	6.5	3.4	1/3	灰紫～青灰	灰紫	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	
82	〃	〃	〃C	10.2	3.2	3.7	1/10	薄黄灰～薄青灰	黄褐～緑灰	ロクロナデ，体部外面下端ヘラケズリ，底部回転糸切り	
83	〃	〃	壺		7.7		(完)	青灰	青灰～薄青灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転糸切り	
84	〃	〃	坏C		5.5		(完)	青灰～薄青灰	〃	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転糸切り	
85	〃	〃	〃C	18.0			1/8	灰紫	薄青灰	ロクロナデ	
86	〃	〃	〃C	9.4			1/3	灰紫～黒灰	〃	ロクロナデ	
87	〃	土師器	〃C		7.9		(完)	赤燈～黄燈	黒	ロクロナデ，体部内面放射状のヘラミガキ，底部回転糸切り	内黒
88	〃	〃	〃C	11.0			1/8	黒褐～褐	〃	ロクロナデ，体部内面放射状のヘラミガキ	内黒
89	〃	〃	〃C	11.7			1/8	赤橙～褐	〃	ロクロナデ，体部内面放射状のヘラミガキ	内黒
90	〃	〃	〃C	10.1	6.0	3.4	1/5	茶褐～黒褐	〃	ロクロナデ，体部内面放射状のヘラミガキ，底部回転糸切り	内黒
91	〃	〃	〃C	12.8	5.2	4.0	1/5	赤橙	〃	ロクロナデ，体部内面放射状のヘラミガキ，底部回転糸切り	内黒
92	〃	〃	〃C	15.2	7.0	5.3	1/3	褐～黒褐	〃	ロクロナデ，体部内面放射状のヘラミガキ，底部回転糸切り	内黒
93	〃	須恵器	高坏	19.3			1/3	薄青灰	薄灰紫	ロクロナデ，坏部外面下半回転ヘラケズリのちナデ，突帯部貼り付け	
94	〃	土師器	甕？					赤燈	赤燈	ロクロナデ	甕の脚部？
95	〃	〃	小形甕E		5.8		(完)	黄燈	〃	ロクロナデ，胴部外面カキ目・下半ヘラケズリ，底部ヘラケズリ	
96	〃	〃	〃E		6.6		1/10	赤褐～黒褐	黄燈	ロクロナデ，胴部外面カキ目，底部観察不可能	
97	〃	〃	甕E	20.1			1/8	赤燈～淡赤燈	濃赤燈～赤燈	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面ハケ目・内面ハケ目・ナデ	
98	〃	〃	〃E	20.2			1/8	淡赤燈	濃赤燈	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面ハケ目・内面ナデ	炭化物付着
99	〃	〃	〃E	22.3			1/5	赤燈	黄燈	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面ハケ目・内面ナデ	

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
100	5住	土師器	甕E	21.1			1/6	淡赤燈～黄燈	暗赤燈	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面縦位のハケ目・内面横位のハケ目	
101	〃	〃	〃E	22.1			1/8	赤燈	赤燈	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面縦位のハケ目・内面横位のハケ目	
102	〃	〃	〃F	16.6			1/8	〃	〃	口縁強いヨコナデ，胴部外面ヘラケズリ・内面ナデ	
103	〃	〃	〃F	16.3			1/4	〃	〃	口縁強いヨコナデ，胴部外面ヘラケズリ・内面ナデ	
104	〃	〃	〃F	20.4			1/3	黄燈	暗赤燈	口縁強いヨコナデ，胴部外面ヘラケズリ・内面ナデ	
105	〃	須恵器	短頸壺		16.9		(1/2)	青灰～灰	暗緑	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	自然釉
106	〃	〃	甕	24.2			1/10	青灰	青灰～灰紫	ロクロナデ	
107	〃	〃	〃		17.5		(1/20)	青灰～黄灰	赤紫	胴部の外面平行タタキ目・内面同心円文あて具痕のちナデ，底部ナデ	
108	6住	〃	坏D	12.1	6.1	4.0	1/8	暗灰	暗茶灰	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	
109	〃	〃	〃D	12.5	6.4	3.7	4/5	〃	暗灰	ロクロナデ，胴部内面工具を用いてロクロナデ，底部回転糸切り	火ダスキ
110	〃	〃	〃D	13.0	7.3	3.8	2/3	灰	灰	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	火ダスキ
111	〃	〃	〃C		10.0		(1/6)	暗灰	暗灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	
112	〃	土師器	甕E	21.1			1/4	淡茶褐	淡茶褐	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面ハケ目・内面ナデ，口縁内湾気味	
113	〃	〃	〃E		8.0		(3/4)	暗褐	茶褐	胴部外面ハケ目・内面ナデ，底部ナデ	
114	〃	須恵器	壺	21.6			1/5	暗灰～灰	暗灰～灰	ロクロナデ	
115	〃	〃	甕	48.5			1/15	黄灰～暗灰	黄灰～暗灰	ロクロナデ，胴部外面平行タタキ目・内面ナデ？	
116	7住	〃	蓋C	14.4	—	2.4	1/3	暗灰～灰	暗灰～灰	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	
117	〃	〃	坏C	13.1			1/4	茶褐	暗褐	ロクロナデ，底部外周回転ヘラケズリ	
118	〃	〃	〃D	12.7	5.9	4.1	1/8	灰～褐紫	暗灰～灰	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	火ダスキ
119	〃	土師器	小形甕F	9.0	4.9	7.5	完	茶褐～黒	黒	ロクロナデ，底部ハケ状のもので同じ方向にナデている	
120	〃	〃	〃E	10.0	6.1		1/10(完)	〃	茶褐～黒	ロクロナデ，胴部内外面カキ目，底部ナデ	
121	〃	〃	〃F	12.5			1/8	暗褐～黄褐	暗褐～黄褐	ロクロナデ	
122	〃	〃	甕E		9.4		(1/2)	茶褐～黒	淡黄褐	胴外面ハケ目・内面ナデのちハケ目・外面下端ヘラケズリ，底部ナデ	
123	〃	〃	〃E	21.5			1/15	茶褐	黄褐	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面縦位のハケ目・内面横位のハケ目	
124	8住	〃	〃		6.8		(1/4)	黄褐	〃	ナデ	
125	〃	〃	〃F	21.5			1/5	暗褐	赤褐	口縁強いヨコナデ，胴部外面ヘラケズリ・内面ナデ	
126	9住	須恵器	坏D		5.6		(1/3)	灰	灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
127	〃	〃	〃D	13.0	5.1	3.1	1/4	〃	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り	
128	〃	〃	〃D	12.9	5.8	3.1	1/2	〃	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り	
129	〃	〃	〃D	12.7	6.0	3.4	1/4	赤褐	赤褐	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	
130	〃	〃	〃D	12.8	5.2	3.7	1/5	灰褐～橙褐	灰褐～橙褐	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	
131	〃	〃	〃C	14.7	9.2	4.0	2/3	黒褐～赤褐	黄褐	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	
132	〃	土師器	〃C	14.4			1/5	赤褐	黒	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ	不完全な内黒

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
133	9 住	土師器	坏C	15.9			1/3	黒褐	黒	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ	内黒
134	〃	〃	〃C	16.5	7.5	4.7	1/2	赤褐	〃	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ，底部回転糸切り	内黒
135	〃	須恵器	短頸壺	8.8			1/4	灰	灰褐	ロクロナデ	
136	〃	土師器	高坏					橙褐	黒	坏部底面ナデ，接合部外面ナデ，脚部内面ヘラケズリ	内黒
137	〃	〃	小形甕E	13.2			1/6	暗褐	暗褐～黄褐	ロクロナデ，口縁内面ハケ目，胴部外面カキ目	
138	〃	〃	甕E		7.6		(1/3)	赤褐	赤褐～黒褐	胴部外面ハケ目・内面ナデ，底部ナデ	
139	〃	〃	〃E	22.1			1/5	〃	赤褐	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面ハケ目・内面ナデ，口縁内湾気味に外反	
140	〃	〃	〃E		9.6		(1/3)	赤褐～黒褐	橙褐	胴部外面ハケ目・内面ナデ，底部ナデ	
141	〃	〃	〃E	22.4			1/4	橙褐～赤	橙褐～赤	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面ハケ目・内面ナデ	
142	〃	須恵器	甕	30.2			1/7	灰白	灰白	ロクロナデ	
143	〃	〃	〃	27.9			1/15	暗灰～灰	灰	ロクロナデ	
144	10 住	〃	蓋C	14.7	—		1/7	灰	〃	ロクロナデ	
145	〃	〃	坏	13.4			1/10	〃	〃	ロクロナデ	
146	〃	土師器	〃E	11.7	7.9	4.6	1/4	赤褐	赤褐	ロクロナデ，体部下半外面手持ちヘラケズリ，内面放射状のミガキ，底部手持ヘラケズリ	
147	〃	〃	小形甕E		6.6		(完)	〃	暗褐	ロクロナデ，胴部外面カキ目，底部回転糸切り	
148	〃	〃	〃		6.5		(完)	黄褐	黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切りのちナデ	
149	〃	〃	〃	14.5			1/4	赤褐	赤褐	口縁ヨコナデ・内面ハケ目，胴部内外面ハケ目	
150	〃	〃	〃	17.1			1/6	黄褐	黄褐	口縁ヨコナデ，胴部外面ハケ目	
151	〃	〃	甕E	11.4			1/4	赤褐～黄褐	赤褐～黄褐	胴部外面ハケ目・内面ナデ，底部ナデ	
152	11 住	須恵器	蓋C	17.5			1/8	灰白	灰白	ロクロナデ	
153	〃	〃	〃C	13.6			1/8	〃	〃	ロクロナデ	自然釉，天井部内面ヘラ記号
154	〃	土師器	甕G	44.3	13.6		1/2	黄燈～橙	黄褐	ロクロナデ，胴部内面細いカキ目状のロクロを用いた調整痕・外面下端ヘラケズリ	
155	〃	〃	〃A？					黄褐	黄褐～黄燈	ナデ	
156	12 住	須恵器	蓋B	9.2	—		1/8	暗灰	暗灰	ロクロナデ，端部内面かえり，天井部外面回転ヘラケズリ	
157	〃	〃	坏D				完	灰白	灰白	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直接的に外開	
158	〃	土師器	甕A	21.6			1/6	赤燈～黄褐	暗赤褐	口縁ヨコナデ，胴部外面磨滅，内面ハケ目	
159	〃	〃	小形甕C	12.3	5.9	14.9	2/5	赤褐	黄燈	口縁ヨコナデ，胴部外面ナデのち縦位のハケ目，内面ナデとハケ目	
160	13 住	須恵器	蓋C	14.7	—		1/8	灰白	灰白	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	外面自然釉
161	〃	〃	坏B	14.6	7.5	4.3	2/5	暗黄褐～灰	薄青灰	ロクロナデ，底部ヘラ切り未調整	
162	〃	土師器	〃C	15.7	7.8	5.9	1/2	黄燈～橙	黒	ロクロナデ，体部内面細い横方向のヘラミガキ，底部手持ちヘラミガキ	内黒
163	〃	須恵器	広口壺		9.4		(完)	暗灰	暗灰白	ロクロナデ，胴部内面工具を用いてロクロナデ，底部内面ナデと押さえ，外面板等の圧痕	
164	14 住	〃	蓋C	16.7	—		1/3	青灰	青灰	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	
165	〃	〃	〃C	17.1	—	3.4	1/8	黒褐	〃	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
166	14 住	須恵器	蓋C	13.5	—	2.8	1/2	青灰	青灰	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	
167	〃	〃	坏	9.9			1/8	〃	〃	ロクロナデ，体部外面下半回転ヘラケズリ	
168	〃	〃	〃	11.2			1/10	淡青	淡青	ロクロナデ	重ね焼き痕
169	〃	〃	〃	11.8			1/8	淡青～青灰	青灰	ロクロナデ	
170	〃	〃	〃D		7.2		(1/2)	灰紫	灰紫	ロクロナデ，底部回転糸切り	
171	〃	〃	〃D	12.6	5.2	3.4	1/5	青灰	青灰～黄灰	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	
172	〃	〃	〃C		9.0		(1/5)	〃	青灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部外周回転ヘラケズリ	
173	〃	土師器	〃E	10.5			1/4	赤燈	赤燈	ロクロナデ，体部内面放射状のヘラミガキ	
174	〃	〃	小形甕		6.8		(完)	明茶褐～赤燈	黄燈	ロクロナデ，底部回転糸切り	
175	〃	〃	〃C	13.3			1/10	赤褐	茶褐～褐	口縁ヨコナデ・内面ハケ目，胴部外面ハケ目・内面ナデ	
176	〃	〃	甕F	15.0			1/8	赤燈～茶褐	赤褐	口縁強いヨコナデ，胴部外面ヘラケズリ・内面ナデ	
177	〃	〃	〃E		10.4		(1/8)	明茶褐～黒褐	明茶褐	胴部外面縦位のハケ目・下端ヘラケズリ・内面ナデ，底部ナデ	
178	〃	〃	〃E	21.1			1/8	赤燈～黄燈	〃	口縁ヨコナデ，胴部内外面ハケ目（不明瞭），口縁内湾気味に外反	
179	〃	須恵器	壺	21.3			1/6	黄褐～黒褐	黄褐～灰紫	ロクロナデ	口縁内外面自然釉
180	16 住	土師器	坏C		5.6		(1/5)	茶褐	黒	ロクロナデ，底部回転糸切り	内黒
181	〃	〃	甕		6.7		(1/10)	茶褐～黄褐	黒～褐	ナデ	
182	〃	〃	〃E		8.3		(1/5)	黒褐～茶褐	黒褐～茶褐	胴部外面ハケ目のちナデ・内面ハケ目下端ナデ，底部ナデ	木葉痕
183	〃	〃	〃F	19.9	4.2		1/5	淡黄褐～暗褐	茶褐～暗黄褐	口縁強いヨコナデ，胴部外面ヘラケズリ・内面板ナデ，ハケ目（不明瞭）、底部ヘラケズリ	炭化物付着
184	〃	〃	小形甕G	13.9	5.3		1/6	茶褐	茶褐	口縁強いヨコナデ，胴部外面ヘラケズリ・内面ナデ，底部ヘラケズリ	
185	〃	須恵器	壺		8.7		(1/4)	灰	黄灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
186	15 住	〃	坏D	12.3	5.8	3.8	1/3	青灰	青灰	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部に二次底部面	
187	〃	土師器	甕E		10.0		(1/3)	暗褐	橙	胴部外面ハケ目，下端ナデまたはヘラケズリ，内面磨滅，底部ナデ	
188	〃	〃	〃E		9.1		(1/3)	黄褐	黄燈	胴部外面ナデ，内面ハケ目，底部ナデ	
189	〃	〃	〃E					橙	橙	胴部外面縦位のハケ目，内面縦横位のハケ目	
190	17 住	須恵器	坏E	11.7	5.4	2.9	1/6	暗灰	暗灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
191	〃	土師器	〃C	12.4	5.1	3.5	1/8	黄燈	黒	ロクロナデ，体部内面雑な横方向ミガキ，底部回転糸切り	内黒
192	〃	〃	〃C	13.2	4.5	4.1	1/2	赤橙～橙	黒～黒褐	ロクロナデ，体部内面雑な不整方向のミガキ，底部回転糸切り	内黒
193	〃	〃	〃C	12.4	4.7	4.4	1/4	黄褐～黄燈	黒	ロクロナデ，体部内面放射状のヘラミガキ，底部回転糸切り	内黒
194	〃	〃	埦A	13.6			1/6	灰褐～黄褐	〃	ロクロナデ，体部内面放射状のヘラミガキ，底部回転糸切り	内黒
195	〃	〃	〃A	16.5			1/6	黄燈	燈	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ	
196	〃	〃	〃A		6.6		(2/5)	〃	黒	付け高台のちヨコナデ，体部内面ヘラミガキ，底部回転糸切り（不明瞭）	内黒
197	〃	〃	〃A		6.2		(1/3)	薄橙	〃	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ，付け高台のちヨコナデ，底部ナデ	内黒
198	〃	灰釉	碗		3.3		(完)	灰白	(淡緑半透明)	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転糸切り	

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm)			残存度 口縁(底部)	色調		成形・調整・形態の特徴	備考
				口径	底径	器高		外面	内面		
199	17住	土師器	鉢	22.5			1/10	黄褐～赤褐	暗褐	ロクロナデ，体部内面横位のヘラミガキ	不完全な内黒
200	〃	〃	小形甕F	12.2			1/8	暗黄褐～灰褐	薄燈	ロクロナデ	
201	〃	〃	〃E	39.8			1/8	暗赤褐	暗褐	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面カキ目・内面ロクロナデ	
202	〃	〃	甕E		9.0		(1/6)	黄燈	赤褐～黄褐	胴部外面ハケ目のちまばらなカキ目・内面指おさえ・ナデ・下端ハケ目，底部ナデ	
203	18住	〃	坏D	12.3	5.8	2.9	1/4	〃	黄燈～黄灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
204	〃	〃	〃D	11.8	6.1	3.1	1/4	〃	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り	
205	〃	〃	〃D	12.9	6.9	3.2	4/5	燈灰～燈	燈灰～燈	ロクロナデ，底部回転糸切り	
206	〃	〃	〃D	13.5			1/5	黄燈	黄燈	ロクロナデ	
207	〃	〃	小形甕E	13.0			1/4	〃	〃	ロクロナデ，胴部外面カキ目	
208	〃	〃	〃		10.2		(1/5)	黄燈～褐	黒褐	ロクロナデ，底部磨滅	
209	19住	〃	坏D	10.5	4.2	2.8	1/8	淡茶褐	淡茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
210	〃	〃	〃D	12.0	5.7	3.2	1/3	暗褐～黄褐	黒～茶黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
211	〃	〃	〃D	12.7	5.8	3.4	1/6	黄褐～茶黄褐	淡黄褐～淡暗褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
212	〃	〃	〃D	12.2	5.9	3.3	3/4	茶褐～黒	茶褐～黒	ロクロナデ，底部回転糸切り	
213	〃	〃	埦B		6.3		(1/2)	〃	暗褐	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	
214	〃	〃	?		3.5		(1/3)	暗茶褐～茶褐	茶褐	ナデ？	器形不明
215	〃	灰釉	碗	13.8	6.5	3.2	3/4	淡灰～淡緑灰	淡灰～淡緑灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	刷毛塗り
216	〃	〃	〃	13.2	6.2	2.7	1/2	〃	〃	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	刷毛塗り
217	〃	〃	〃		6.4		(1/4)	淡黄灰～淡緑灰	淡黄灰～淡緑灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	刷毛塗り
218	〃	〃	〃		6.3		(完)	淡灰～淡緑灰	淡灰～淡緑灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリのちナデ	
219	〃	須恵器	横瓶	11.0			(1/3)	暗赤褐～暗黒灰	暗灰～緑	ロクロナデ	
220	〃	土師器	小形甕F	15.0	7.8	14.1	1/3	茶褐～黒	黄褐～黒灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	炭化物付着
221	〃	〃	甕E		11.0			茶褐～暗褐	茶褐～黒	胴部外面ハケ目・内面指ナデ，底部指ナデ	
222	20住	灰釉	碗		6.2		(完)	淡黄	淡黄	ロクロナデ，胴部外面下半ヘラケズリのちナデ，付け高台，底部外周ナデ・中央回転糸切り	釉なし
223	〃	〃	〃	15.0			1/3	淡褐	淡褐	ロクロナデ	釉なし
224	〃	〃	〃		6.1		3/4	淡灰	淡灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転糸切り	
225	〃	〃	〃		6.4		(完)	〃	〃	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部外周手持ちヘラケズリ・中央回転糸切り	
226	〃	土師器	皿	8.8	3.6	1.7	2/3	茶褐	茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
227	〃	〃	〃	9.5	3.6	1.6	1/4	明黄褐	明黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
228	〃	〃	〃	9.5	3.4	1.0	完	明黄褐～黒褐	明黄褐～黒褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
229	〃	〃	坏D	9.5	2.3	1.9	1/4	茶褐	茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
230	〃	〃	〃D	9.7	4.0	1.8	1/5	明茶褐	明茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
231	〃	〃	〃D	9.4	3.4	2.6	完	黄褐	黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm)			残存度 口縁(底部)	色調		成形・調整・形態の特徴	備考
				口径	底径	器高		外面	内面		
232	20住	土師器	坏D	9.8	3.8	2.4	1/4	明茶褐	茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
233	〃	〃	〃D	9.6	4.2	2.1	完	茶褐～暗茶褐	茶褐～暗茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
234	〃	〃	〃D	9.4	3.9	2.0	1/4	明茶褐	明茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
235	〃	〃	〃D	10.0	4.2	2.1	2/3	〃	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り	
236	〃	〃	〃D	9.7	4.2	2.3	1/3	明黄褐	明黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
237	〃	〃	〃D	10.1	4.2	2.3	完	明茶褐	明茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切りのち軽くナデ	
238	〃	〃	〃D	9.3	2.5	4.6	完	〃	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り	
239	〃	〃	〃D	10.3	4.6	2.2	4/5	黄褐	黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
240	〃	〃	〃D	10.5	3.5	2.1	1/2	茶褐～黄褐	黄褐～黒褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
241	〃	〃	〃D	10.2	3.7	2.3	2/3	明黄褐～淡褐	明黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
242	〃	〃	〃D	10.8	7.1	2.2	1/4	茶褐	茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
243	〃	〃	〃D	11.0	5.0	2.9	2/3	明褐	明褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
244	〃	〃	〃D	11.6	4.6	2.6	2/3	黄茶褐	茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
245	〃	〃	〃		5.9		(完)	茶褐	〃	ロクロナデ，底部内面中央指ナデ・外面ヘラ切り	
246	〃	〃	〃D	15.2	5.7	3.7	2/3	茶褐～暗褐	茶褐～暗褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
247	〃	〃	〃D	14.1	6.1	4.5	1/2	明茶褐	明茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
248	〃	〃	〃D	14.0	5.6	4.7	1/4	茶褐	茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
249	〃	〃	埦B	14.3	7.4	5.0	4/5	黄茶	黄茶	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部ロクロナデ	
250	〃	〃	〃B	14.3	6.3	4.6	2/3	黄茶～暗褐	黄茶～暗褐	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部ロクロナデ	
251	〃	〃	〃B	15.0			1/3	赤褐	赤褐	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部ロクロナデ	
252	〃	〃	〃B	15.3	6.8	5.1	2/3	黄茶	黄茶	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部ロクロナデ	
253	〃	〃	〃B		7.3		(完)	黄茶～黒	〃	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部ロクロナデ	
254	〃	〃	〃B		8.8		(2/3)	明褐～茶褐	黒	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部ロクロナデ	
255	〃	〃	〃B	15.6			1/4	黄褐	黄褐	ロクロナデ	
256	〃	〃	〃B	18.0			1/7	橙褐	橙褐	ロクロナデ	
257	21住	須恵器	坏E	13.1	6.1	3.1	(完)	淡黄褐	淡黄褐～淡茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
258	〃	〃	〃E	13.7	6.4	3.7	2/3	暗灰～黄褐	暗灰～黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
259	〃	〃	〃E	14.0	4.3	4.5	(1/3)	暗灰～淡黄褐	淡暗灰～淡黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
260	〃	土師器	坏D	12.9	5.0	4.0	1/4	茶褐～暗茶褐	茶褐～暗茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切りのちナデ	
261	〃	〃	〃D	13.2	5.9	4.1	1/4	黄褐	茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
262	〃	〃	〃D	14.7	6.7	5.1	(2/3)	茶褐	黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
263	〃	〃	埦A	13.9			1/4	淡黒～淡黄茶	黒	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ，付け高台，底部外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	内黒
264	〃	〃	埦A	14.9	7.8	5.2	1/6	茶褐～暗灰	黒	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ，付け高台，底部外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	内黒

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
265	21 住	土師器	埦A	14.4	6.4	5.1	1/3	淡黄褐～暗褐	暗褐～灰褐	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ，付け高台，底部外周回転ヘラケズリ？中央回転糸切り	
266	〃	灰釉	碗	15.2	7.1	5.5	2/3	淡黄褐～淡灰	淡黄灰～淡灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	
267	〃	土師器	小形甕	12.0			1/5	茶褐～茶黄褐	茶褐～黒	ロクロナデ，口縁内面カキ目・胴部外面ヨコナデ	
268	〃	〃	甕		9.9		(1/5)	茶褐	黒～茶褐	胴部外面磨滅・内面指ナデ，底部磨滅	炭化物付着
269	〃	〃	〃E	42.4	11.6	29.2	2/3	黄褐～暗茶褐	暗褐～暗茶褐	口縁ヨコナデ・内面ハケ目，胴部外面ハケ目のちまばらなカキ目・下端ヘラケズリ，内面ヨコナデ	
270	〃	〃	片口鉢	26.4	13.8	11.0	1/5	茶褐～淡茶褐	暗褐～茶褐	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ，底部回転糸切り	
271	22 住	須恵器	坏C	12.3	7.6	3.9	(2/3)	暗灰	暗灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	
272	〃	〃	坏	13.3			1/4	淡灰～灰	淡灰～灰	ロクロナデ	
273	〃	〃	坏C		10.6		(1/6)	淡灰	淡灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	
274	〃	土師器	小形甕F	12.9			1/5	茶褐～暗褐	茶褐～暗褐	ロクロナデ	
275	〃	〃	甕F	23.8			1/8	黄茶	茶褐	口縁強いヨコナデ，胴部外面ヘラケズリ・内面ナデ	
276	〃	〃	〃E	17.5			1/5	黄茶～茶	茶褐～黒	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面ハケ目・内面ナデ，口縁外反	
277	〃	〃	〃E	20.6			1/6	淡茶褐	黄褐	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面ハケ目，内面上半カキ目・下半ナデ？，口縁外反	
278	〃	〃	〃E	22.8			1/3	黄褐～茶褐	黄褐～茶褐	口縁ヨコナデ・内面ナデ，胴部外面ハケ目・内面ナデ，口縁外反	
279	23 住	須恵器	坏E		4.8		(完)	赤燈～薄黄燈	赤橙～淡黄燈	ロクロナデ，底部回転糸切り	
280	〃	〃	〃E		6.2		1/3	淡褐	淡褐	ロクロナデ	
281	〃	〃	〃E		13.5		1/4	〃	〃	ロクロナデ	
282	〃	〃	〃E	12.8	5.5	3.6	2/3	黒灰～灰橙	黒灰～灰橙	ロクロナデ，底部回転糸切り	
283	〃	〃	〃E	13.0	5.1	3.8	4/5	黄褐	黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
284	〃	〃	〃D	13.6			1/8	青灰	青灰	ロクロナデ	
285	〃	土師器	〃D	11.8	6.0	3.0	1/3	橙褐	橙褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
286	〃	〃	〃D	11.9	5.1	3.5	完	明橙褐～黒褐	明橙褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
287	〃	〃	〃C		5.6		(完)	赤褐	黒	ロクロナデ，体部内面放射状のヘラミガキ，底部回転糸切り	内黒
288	〃	〃	〃D	12.8	5.7	3.4	1/2	灰橙	灰橙	ロクロナデ，底部回転糸切り	
289	〃	〃	〃D	11.8	4.6	3.8	1/5	橙褐	灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
290	〃	〃	〃D	11.9	5.6	3.8	2/3	灰橙褐	灰橙褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
291	〃	〃	〃D	12.6	5.6	3.1	1/3	橙褐	橙褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
292	〃	〃	〃D	12.3	4.9	3.8	完	黄灰～黒褐	黄灰～黒褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
293	〃	〃	〃D	12.7	5.5	3.7	1/2	灰橙	灰橙	ロクロナデ，底部回転糸切り	
294	〃	〃	〃C	12.4			1/6	黄褐	黒	ロクロナデ，体部内面ミガキ	内黒
295	〃	〃	〃C	11.4			1/4	暗褐	〃	ロクロナデ，体部内面放射状のミガキ	内黒
296	〃	〃	〃C	12.6			1/4	〃	〃	ロクロナデ，体部内面ミガキ	内黒
297	〃	〃	埦A					暗褐～灰褐	黒	ロクロナデ，体部内面放射状のミガキ，底部回転糸切り	内黒

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm)			残存度 口縁(底部)	色調		成形・調整・形態の特徴	備考
				口径	底径	器高		外面	内面		
298	23 住	土師器	埦A		7.2		(1/2)	赤褐	黒	体部内面ミガキ，付け高台のちヨコナデ，底部回転糸切り	内黒
299	〃	〃	〃A		7.8		(完)	淡橙褐	黒	ロクロナデ，体部内面放射状のミガキ，付け高台のちヨコナデ，底部回転糸切り	内黒
300	〃	〃	〃B	14.5			1/2	灰橙～暗褐	灰橙	ロクロナデ，底部回転糸切り	
301	〃	〃	〃B	13.6			1/3	灰白	灰白	ロクロナデ	
302	〃	〃	〃A	13.9	7.2	4.6	4/5	淡黄褐	淡黄褐	ロクロナデ，体部内面放射状のミガキ，付け高台のちヨコナデ，底部回転糸切り	内黒
303	〃	〃	〃B	14.9	7.1	5.0	1/2	暗褐	橙褐	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転糸切り	
304	〃	灰釉	碗	13.8	6.3	4.1	1/4	灰白	灰白	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	刷毛塗り
305	〃	〃	〃		5.6		2/3	〃	〃	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	底部墨書
306	〃	〃	〃	14.0	6.6	4.0	1/2	〃	〃	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	刷毛塗り
307	〃	〃	〃	12.8	6.2	3.0	1/4	〃	〃	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	刷毛塗り
308	〃	〃	〃		8.5		3/4	〃	〃	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	
309	〃	土師器	小形甕E		7.5		3/4	暗褐～橙褐	灰黄	ロクロナデ，胴部内外面カキ目，底部回転糸切り	
310	〃	〃	〃		8.4		1/4	赤褐	赤褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
311	〃	〃	〃	9.8			1/4	暗褐～褐	暗褐～褐	ロクロナデ	
312	〃	灰釉	壺		10.0		1/4	灰白	灰白	ロクロナデ，胴部外面下端回転ヘラケズリ，底部回転糸切り	
313	〃	〃	長頸瓶					灰	灰	ロクロナデ	
314	〃	土師器	甕	21.0			1/10	赤褐	赤褐	ロクロナデ，口縁内面ハケ目	
315	24 住	〃	坏		5.4		(完)	橙	黒灰	底部内面ミガキ，外面回転糸切り	内黒
316	〃	〃	〃C	13.1	5.9	3.1	3/4	淡灰	黒灰	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
317	〃	〃	〃C	12.2			1/4	赤褐	黒	ロクロナデ，体部内面ミガキ	内黒
318	〃	〃	〃C	12.4	4.2	3.9	1/4	黒褐～黄褐	黒褐	ロクロナデ，体部内面放射状のミガキ（不明瞭），底部回転糸切り	内黒
319	〃	〃	〃C	13.4	4.8	3.8	3/4	〃	〃	ロクロナデ，体部内面上半横位のミガキ・放射状のミガキ，底部回転糸切り	内黒
320	〃	〃	〃D	12.8	5.2	3.9	1/2	橙褐	黄褐～黒褐	ロクロナデ，回転糸切り	
321	〃	〃	〃C	12.8	7.0	4.5	1/3	黄褐	黒褐	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
322	〃	〃	〃C	13.2	6.4	4.4	1/2	黄褐～暗褐	黒	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
323	〃	〃	〃D	13.1	5.5	4.0	1/4	暗褐	暗褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
324	〃	〃	〃C	12.7	6.4	4.5	2/3	黒褐～黄褐	黒	ロクロナデ，体部内面放射状のミガキ（不明瞭），底部回転糸切り	内黒
325	〃	〃	〃C	13.3	5.5	4.5	1/3	黒灰～黄褐	〃	ロクロナデ，体部内面放射状のミガキ（不明瞭），底部回転糸切り	内黒
326	〃	〃	〃C	13.8			1/6	黄褐	黄褐	ロクロナデ，体部内面放射状のミガキ	
327	〃	〃	〃C	12.8			1/3	〃	黒	ロクロナデ，体部内面放射状のミガキ	内黒
328	〃	〃	〃C	13.0	5.6	4.3	1/18	〃	〃	ロクロナデ，体部内面放射状のミガキ，底部回転糸切り	内黒
329	〃	〃	〃D	13.8	5.4	4.0	1/3	〃	黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
330	〃	〃	埦A		5.4		(3/4)	橙～茶灰	黒灰	ロクロナデ，体部内面ミガキ，付け高台のちヨコナデ，底部回転糸切り	内黒

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm)			残存度 口縁(底部)	色調		成形・調整・形態の特徴	備考
				口径	底径	器高		外面	内面		
331	24住	土師器	埦A	13.5	7.0	4.9	1/4	黄褐～黒褐	黒褐	ロクロナデ，体部内面放射状のミガキ（不明瞭），付け高台のちヨコナデ、底部回転糸切り	内黒
332	〃	〃	坏D	13.4	6.2	5.5	1/3	橙褐	黒褐～黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
333	〃	〃	耳皿	6.1	4.9		4/5	黒灰	黒灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	内外面黒色処理
334	〃	〃	埦A		5.6		(完)	暗褐	黒	体部内面ミガキ，付け高台のちヨコナデ，底部回転糸切り	内黒
335	〃	灰釉	碗		6.5		(2/5)	灰	灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	
336	〃	土師器	鉢	23.6	9.6	9.5	1/5	茶褐～橙	黒灰～橙	ロクロナデ，体部内面ミガキ（不明瞭），底部回転糸切り（不明瞭）	内黒
337	〃	〃	小形甕F	14.1			1/10	橙	黒灰～茶褐	ロクロナデ	
338	〃	〃	〃E	12.4			1/3	赤褐	茶褐	ロクロナデ，口縁内面ハケ目・胴部外面ハケ目	
339	〃	〃	甕E		9.8		(1/5)	黒褐～赤褐	赤褐～茶褐	胴部外面ハケ目・ナデ，内面ナデ，底部ナデ	
340	〃	〃	〃E	20.0			1/8	明褐	暗褐	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面ハケ目（不明瞭）・内面ナデ	
341	25住	須恵器	坏E	12.3	5.6	3.0	1/3	暗褐	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り	
342	〃	〃	〃E	12.0	5.4	3.2	1/9	赤褐	赤褐	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部に二次底部面	
343	〃	〃	〃E	11.2	4.9	3.3	1/2	黄褐	黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部に二次底部面	
344	〃	〃	〃E	13.0	5.6	3.8	1/6	赤褐	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り	
345	〃	土師器	〃D	12.6	5.5	2.7	1/9	暗灰褐	暗灰褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
346	〃	〃	〃？		5.5		(1/3)	黄褐	黒	ロクロナデ，体部内面ヨコヘラミガキ，底部回転糸切り	内黒未製品
347	〃	〃	〃C	16.8			1/2	赤褐	〃	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ	内黒
348	〃	〃	埦		7.1		(1/2)	〃	〃	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転糸切り	内黒
349	〃	〃	〃B		7.3		(2/3)	黄褐	黄褐	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ	
350	〃	〃	〃A	17.0	7.6	6.5	1/3	赤褐～暗褐	黒	ロクロナデ，体部内面放射状のヘラミガキ，付け高台のちヨコナデ，底部磨滅	内黒，底部穿孔
351	〃	灰釉	碗		8.4		(1/3)	灰	灰	ロクロナデ，付け高台のちロクロナデ，底部回転ヘラケズリ	刷毛塗り，重ね焼痕
352	26住	須恵器	蓋C	12.7	—		1/5	青灰	青灰	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	自然釉，重ね焼痕
353	〃	〃	〃C	16.8	—	3.5	1/3	〃	〃	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	
354	〃	〃	坏D	13.0			1/6	薄青灰	薄青灰	ロクロナデ	
355	〃	〃	〃C		6.2		(1/3)	濃青灰～灰紫	灰白	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転糸切り	
356	〃	土師器	〃C		4.5		2/3	暗褐～橙褐	黒褐～赤褐	ロクロナデ，体部内面不整方向のミガキ，底部回転糸切り	
357	〃	〃	〃C	13.1	5.2	4.2	1/3	黄褐	黒	ロクロナデ，体部内面縦黄のヘラミガキ，底部回転糸切り	内黒
358	〃	〃	〃C	12.9	4.8	3.7	4/5	薄黄褐～赤褐	〃	ロクロナデ，体部内面ミガキ（不明瞭），底部回転糸切り	内黒
359	〃	〃	〃C	12.7	5.5	3.9	2/3	薄橙	〃	ロクロナデ，体部内面雑な不整方向のミガキ，底部回転糸切り	内黒
360	〃	〃	〃C	15.9	6.5	5.4	1/2	薄黄橙	〃	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ，底部回転糸切り	内黒
361	〃	〃	埦A	12.7			1/8	〃	〃	ロクロナデ，体部内面不整方向のヘラミガキ，底部回転糸切り	内黒
362	〃	〃	〃A	14.3	8.1	5.3	1/3	薄橙～橙	〃	ロクロナデ，体部内面中央放射状のミガキ・端部横位のヘラミガキ	内黒
363	〃	灰釉	〃	17.1			1/8	灰白	(灰白～黄灰白)	ロクロナデ，体部外面下半回転ヘラケズリ	刷毛塗り

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
364	26 住	灰釉	皿	13.4	5.5	3.0	1/2	灰白	(白色不透明)	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリのちヨコナデ	
365	〃	〃	碗		6.5		(1/6)	〃	(〃)	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリのちヨコナデ	重ね焼痕
366	〃	土師器	小形甕E	13.8			1/8	黄橙	橙褐～黄橙	ロクロナデ，口縁内面カキ目・胴部外面カキ目	
367	〃	〃	〃E		7.2		(1/2)	暗褐～黄褐	暗灰褐	ロクロナデ，胴部外面カキ目，底部回転糸切り	
368	〃	〃	〃F		8.4		(1/2)	黄燈～赤燈	黄燈	ロクロナデ，底部磨滅	
369	〃	須恵器	四耳壺		11.8		(1/3)	青灰	灰白～暗灰	胴部外面平行叩き目・内面叩きのナデ磨消，底部外面圧痕・内面ナデ指おさえ	
370	〃	〃	甕	63.4			1/10	暗青灰	暗灰～暗灰白	ロクロナデ，口縁ヨコナデ，櫛描波状文，突帯貼りつけ	
371	27 住	〃	坏E	12.9			1/4	灰	灰	ロクロナデ	
372	〃	〃	〃E	13.2	5.6	3.5	1/15	黄褐	黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
373	〃	〃	〃E	12.7	5.9	4.0	1/4	赤褐	赤褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
374	〃	土師器	〃C	14.3	5.6	5.0	1/4	〃	黒	ロクロナデ，体部内面横位のヘラミガキ，底部回転糸切り	内黒
375	〃	〃	埦A		6.0		(完)	暗褐	〃	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ，底部回転糸切り	内黒
376	〃	灰釉	〃	13.4			1/6	灰	灰	ロクロナデ，体部外面下半回転ヘラケズリ	刷毛塗り
377	〃	土師器	小形甕		5.4		(完)	黄褐～暗褐	黄褐～暗褐	ロクロナデ，底部回転糸切りのちナデ	炭化物付着
378	〃	灰釉	長頸瓶					明灰	明灰	ロクロナデ	
379	〃	土師器	小形甕	17.2			1/8	赤褐	赤褐	ロクロナデ，口縁内面カキ目	
380	〃	〃	〃	18.9			1/6	〃	黄褐	ロクロナデ，口縁内面カキ目	炭化物付着
381	〃	〃	甕	22.0			1/3	黄褐～暗褐	暗褐	口縁外面ロクロナデ・内面カキ目，胴部外面刷毛目・内面ナデ	
382	28 住	須恵器	坏E	13.0	5.7	3.7	1/2	黄褐～黄灰	黄褐～黄灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
383	〃	〃	〃E	12.2	5.7	3.7	1/4	淡褐～淡黄褐	淡褐～淡黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
384	〃	〃	〃E	12.7	6.3	3.9	2/3	茶褐～暗褐	茶褐～暗褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
385	〃	土師器	〃C		4.7		(完)	黄褐	黒	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
386	〃	〃	〃		5.6		1/3	〃	茶褐～黄褐	ロクロナデ，体部外面下端ケズリ，底部ケズリ？	
387	〃	〃	〃D	12.2	4.6	3.7	1/3	暗褐～黄褐	暗褐～黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
388	〃	〃	〃C	12.1	6.9	4.2	2/3	黒～黄褐	黒	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
389	〃	〃	〃D	13.1	5.6	4.2	1/2	黄褐～淡褐	黄褐～淡褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
390	〃	〃	〃C	13.1	6.0	3.8	2/3	黒～黄褐	黒	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
391	〃	〃	〃C	15.3	6.9	5.0	完	黄褐	暗褐～茶黄褐	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
392	〃	〃	埦A	14.0	6.9	4.6	1/4	黒～黄褐	黒	ロクロナデ，体部内面ミガキ，付け高台のちヨコナデ，底部ナデ	内黒
393	〃	〃	〃A		6.7		(完)	黒～淡黄褐	〃	ロクロナデ，体部内面ミガキ，付け高台のちヨコナデ，底部回転糸切り	
394	〃	〃	〃A		6.0		(完)	〃	〃	ロクロナデ，体部内面ミガキ，付け高台のちヨコナデ，底部ナデ	
395	〃	灰釉	碗	13.8			1/5	灰白	(淡灰緑)	ロクロナデ，体部外面下半回転ヘラケズリ	刷毛塗り
396	〃	〃	〃	19.0	8.2	5.9	2/3	〃	〃	ロクロナデ，体部外面下端回転ヘラケズリ付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ、刷毛塗り	28・29住の遺構間接合

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
397	28 住	灰釉	碗		5.4		(1/4)	灰白	灰白	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，体部外面下半から底部回転ヘラケズリ	
398	〃	須恵器	長頸壺		7.2		(1/5)	黒～灰紫	黄灰～暗灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
399	〃	〃	把付長頸壺					暗灰	灰	ロクロナデ	
400	〃	土師器	小形甕	19.3			1/5	茶褐	黄褐	ロクロナデ	
401	〃	〃	甕E	22.1			1/3	〃	黒～黄褐	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面ハケ目のちまばらなカキ目・内面上半カキ目下半ナデ	炭化物付着
402	〃	〃	小形甕F	16.2			1/4	黄褐～黒	茶褐～暗褐	ロクロナデ	
403	〃	〃	鉢？	31.6			1/10	茶褐	茶褐	ロクロナデ，体外面カキ目	磨滅が激しい
404	29 住	須恵器	坏E		5.6		(1/3)	淡黄灰	淡黄灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
405	〃	〃	〃E		6.2		(1/3)	淡灰	淡灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
406	〃	〃	〃E	12.5	5.0	3.7	2/3	黒～淡灰	黒～淡灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
407	〃	土師器	〃C		5.5		(完)	淡黄褐	黒	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
408	〃	〃	〃C		5.1		(2/3)	茶褐～暗褐	〃	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
409	〃	〃	〃C		5.2		(1/2)	茶褐	〃	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
410	〃	〃	〃C	13.0	5.5	4.2	完	明茶褐～明赤燈	黒～暗赤燈	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ，底部回転糸切り	内黒未製品
411	〃	〃	〃D	13.8	5.7	3.8	1/3	茶褐～暗灰	茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	体部外面墨書
412	〃	〃	〃C？		5.7		(完)	淡黄褐	黒	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
413	〃	〃	〃C	12.4	4.4	4.0	1/4	茶褐～黒	〃	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
414	〃	〃	〃C	12.7	6.0	4.3	完	茶褐～暗褐	〃	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
415	〃	〃	〃C	12.9	5.8	4.4	1/3	茶褐～淡灰褐	〃	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
416	〃	〃	〃C	14.4	6.3	4.7	1/4	黒～茶褐	〃	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
417	〃	〃	〃C	13.0	5.2	4.8	1/2	〃	〃	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
418	〃	〃	〃	14.7			1/3	淡茶褐	淡茶褐	ロクロナデ，体部外面下半ケズリ？	
419	〃	〃	〃C	16.7	6.5	5.5	1/8	茶褐～暗灰	黒	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
420	〃	〃	埦A		6.3		(完)	茶褐	〃	体部外面磨滅・内面ミガキ，付け高台のちヨコナデ，底部ケズリのちナデ	内黒
421	〃	〃	〃A	13.1	5.8	5.0	1/5	〃	〃	ロクロナデ,体部外面下半ヘラケズリ?内面ミガキ，付け高台のちヨコナデ、底部ケズリのちナデ?	内黒
422	〃	〃	〃A	14.2	5.8	4.7	1/8	茶褐～暗褐	〃	ロクロナデ,体部内面ミガキ,付け高台のちヨコナデ･底部外周ケズリのちナデ,底部回転糸切り	内黒
423	〃	〃	〃A	13.0			1/5	黄褐～暗褐	黒～茶褐	ロクロナデ，体部内面ミガキ，付け高台のちヨコナデ･底部外周ケズリのちナデ、底部回転糸切り	不完全な内黒
424	〃	〃	〃A		6.8		(完)	茶褐	黒	ロクロナデ，体部内面ミガキ，付け高台のちヨコナデ･底部外周ケズリのちナデ、底部回転糸切り	内黒
425	〃	〃	〃A	15.2	6.1	5.5	1/2	茶褐～黒	〃	ロクロナデ，体部内面ミガキ，付け高台のちヨコナデ，底部外周ケズリのちナデ、底部ナデ	
426	〃	〃	坏C	15.1	6.3	4.9	1/4	暗褐～茶褐	〃	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	底部内面暗文
427	〃	〃	？	15.5	7.6	4.4	1/4	暗赤燈	〃	型押しのち口縁ヨコナデ，高台貼り付け，指頭圧痕，体部内外面，底部ヘラミガキ	内黒，器種不明
428	〃	〃	？	16.9	7.7	4.1	1/10	暗赤燈～明褐	〃	型押しのち口縁ヨコナデ，高台貼り付け，指頭圧痕，体部内外面，底部ヘラミガキ	内黒，器種不明
429	〃	灰釉	碗	14.6			1/8	灰白	(黄灰)	ロクロナデ，体部外面下半回転ヘラケズリ	刷毛塗り

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
430	29住	灰釉	碗	16.8	6.9	5.5	1/3	灰白	(薄緑半透明)	ロクロナデ，胴部外面下半回転ヘラケズリ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	刷毛塗り
431	〃	〃	皿	16.4	7.1	4.0	1/5	淡黄灰	(淡緑灰)	ロクロナデ，胴部外面下半回転ヘラケズリ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	漬け掛け
432	〃	〃	長頸瓶	12.6			1/6	灰白	(緑灰)	ロクロナデ	刷毛塗り
433	〃	須恵器	壺	17.4			1/4	黄灰～緑灰	暗灰	ロクロナデ	口縁自然釉
434	〃	〃	〃		10.5		(1/3)	灰	黄灰	ロクロナデ，底部ナデ	
435	〃	〃	小形甕		6.9		(2/3)	黄灰～暗灰	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り	
436	〃	土師器	鉢?	29.4			1/6	赤橙～黄燈	暗赤燈	ロクロナデ，口縁面取り・外面上半ヨコナデ・下半ケズリ	
437	〃	〃	小形甕E	10.6			1/8	黄橙	橙	口縁内外面カキ目（不明瞭），胴部外面ロクロナデ・内面ロクロナデ	炭化物付着
438	〃	〃	甕E		11.4		(1/8)	赤燈～暗赤燈	赤燈～暗赤燈	胴部外面ハケ目・下端ナデ・内面ナデ，底部ナデ	
439	〃	〃	〃E	22.3			1/5	赤燈～黄燈	黄燈	口縁ヨコナデ・面取り・内面カキ目，胴部外面ハケ目・内面ナデ	
440	〃	須恵器	〃	37.1			1/8	黄灰	黄灰	ロクロナデ	
441	〃	〃	〃	57.2			1/5	黄灰	黄灰～灰	ロクロナデ，頸部外面ナデ・内面指ナデ，胴部平行叩き目・内面あて具痕（不明瞭）	
442	30住	〃	〃	53.4			1/15	青灰～薄青灰	青灰～薄青灰	ロクロナデ，胴部外面平行叩き目のちロクロナデ	口縁端部内外面自然釉
443	〃	〃	〃		25.8		1/3	薄青灰	青灰	胴部外面平行叩き目・内面，底部ナデ	自然釉
444	〃	〃	蓋B	12.2			1/10	灰紫	薄青灰	ロクロナデ，内面端部かえり，天井部外面回転ヘラケズリ	外面自然釉
445	〃	〃	〃B	12.0			1/10	青灰	〃	ロクロナデ，内面端部かえり，天井部外面回転ヘラケズリ	
446	〃	〃	坏E		5.8		(完)	茶褐色～橙	黒褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
447	〃	〃	〃E		5.0		(完)	黄褐～黒褐	茶褐～黒褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
448	〃	〃	〃E	13.0	7.0	3.7	1/10	黄褐	〃	ロクロナデ，底部磨滅	
449	〃	〃	〃E	12.2	6.4	4.0	1/8	黄褐～橙	黄燈	ロクロナデ，底部回転糸切り	
450	〃	〃	〃E		5.6		3/4	茶褐～黒褐	黒褐～赤褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
451	〃	〃	〃E	12.2	7.4	3.7	1/5	黒褐～黄褐	黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
452	〃	土師器	〃C	12.1			1/3	茶褐	黒	ロクロナデ，体部内面ミガキ	内黒
453	〃	〃	〃C		6.5		(完)	黄褐	〃	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
454	〃	〃	〃C		5.0		(完)	黒褐～茶褐	黒褐	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
455	〃	〃	〃C	12.8			1/10	黄褐	〃	ロクロナデ，体部内面ミガキ	内黒
456	〃	〃	?		4.2		(完)	茶褐	黒褐	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
457	〃	須恵器	坏E	12.4	7.0	3.5	1/5	黄褐～茶褐	黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
458	〃	土師器	坏C	12.9	5.9	4.2	3/4	黄褐～橙	黒褐	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
459	〃	〃	?		6.0		(完)	茶褐～黄褐	黒褐～赤褐	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
460	〃	〃	坏C	13.6			1/8	橙～黒灰	黒灰	ロクロナデ，体部内面雑なミガキ	内黒
461	〃	〃?	坏	12.5	5.3	4.0	3/4	茶褐	茶褐～黒褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
462	〃	〃	坏C	11.9	5.4	5.0	3/5	橙～黄褐	黒灰	ロクロナデ，体部内面雑なミガキ，底部回転糸切り	内黒

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
463	30住	土師器	埦B		6.4		(完)	茶褐～黄褐	茶褐	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転糸切り	
464	〃	〃	〃A		6.4		2/3	茶褐	黒	体部内面ミガキ，付け高台のちヨコナデ，底部回転糸切り	
465	〃	〃	〃A		7.0		(完)	茶褐～黒褐	黒灰	ロクロナデ，体部内面ミガキ，付け高台のちヨコナデ，底部回転糸切り	内黒
466	〃	〃	小形甕E	16.8	11.3		1/8	暗茶褐～灰褐	茶褐～暗褐	ロクロナデ，口縁内面カキ目，胴部外面カキ目，底部磨滅	炭化物付着
467	〃	〃	甕F	20.9			1/6	赤橙～橙	赤橙～暗赤橙	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面のちナデ？・内面ナデ	
468	〃	〃	〃E	18.8	10.0	30.7	1/10	黒褐～赤褐	赤褐	口縁ロクロナデ，胴部外面上半ナデ・下半ハケ目・内面ナデ，底部内面指ナデ・外面ナデ	42住と接合
469	31住	須恵器	蓋C	13.8	—		1/5	黄灰	黄灰	ロクロナデ	
470	〃	〃	〃C	17.6	—	3.8	1/2	淡緑灰～淡灰紫	淡灰紫～暗灰	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	
471	〃	〃	坏B	10.8	5.2	3.3	1/6	淡灰～灰	淡灰	ロクロナデ，底部ヘラ切り	
472	〃	〃	〃D	12.7	6.3	4.1	1/5	淡灰～暗灰	淡灰～暗灰	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	火ダスキ
473	〃	〃	〃D	13.0	7.1	4.3	2/3	暗褐～灰	暗褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	火ダスキ，重ね焼痕
474	〃	〃	〃D	12.4	5.9	4.1	3/4	暗灰～灰	暗灰～灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	火ダスキ，重ね焼痕
475	〃	〃	〃D	12.5	6.0	4.1	2/3	〃	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り	火ダスキ，重ね焼痕
476	〃	〃	〃D	13.1	8.4	4.5	4/5	淡灰～淡黄灰	淡灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
477	〃	〃	〃D	13.7	6.5	4.1	2/3	黄灰～暗灰	黄灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
478	〃	〃	〃C	12.1	8.6	4.9	4/5	黄灰～灰	黄灰～灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	火ダスキ
479	〃	土師器	〃D	11.3	4.7	3.5	1/8	茶褐	茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
480	〃	〃	〃D	10.4	4.6	3.1	1/6	黄褐～茶褐	黄褐～茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
481	〃	〃	〃D	11.9	5.8	3.5	1/4	〃	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り	
482	〃	〃	〃D	12.0	6.4	2.9	1/5	〃	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り	
483	〃	〃	〃D	11.9	5.6	3.7	1/8	〃	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り	
484	〃	〃	〃C		5.2		(完)	茶褐～暗灰	黒	ロクロナデ，底部内面ヘラミガキ・外面回転糸切り	内黒
485	〃	〃	埦A		8.5		(1/2)	茶褐～淡黒	〃	体部内面下端ヘラミガキ・付け高台のちヨコナデ	内黒
486	〃	〃	〃A		4.8		(1/2)	淡黄褐	〃	付け高台のちヨコナデ，底部内面ヘラミガキ・外面回転糸切り	内黒
487	〃	須恵器	長頸壺	7.6			1/4	淡緑灰～灰	淡緑灰～灰	ロクロナデ	自然釉
488	〃	土師器	甕E		8.4		(1/2)	茶褐～黒	茶褐	胴部外面ハケ目のちナデ，内面横位のハケ目，底部木葉痕	
489	〃	須恵器	小瓶	3.4	4.9	7.2	完	薄灰紫～薄青灰		ロクロナデ，底部回転ヘラケズリ	自然釉
490	32住	〃	坏D	12.7	5.9	4.1	1/8	黄灰	黄灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
491	〃	〃	〃D	13.5	6.1	3.2	1/4	淡灰～灰	淡灰～灰	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	重ね焼痕
492	〃	〃	〃D	12.6	6.0	3.1	1/2	暗灰～灰	灰	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	重ね焼痕
493	〃	〃	〃D	12.8	5.5	3.6	1/8	灰	黄灰	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	
494	〃	〃	〃B	14.0	8.1	3.6	1/5	〃	灰～黄灰	ロクロナデ，底部ヘラケズリ	火ダスキ
495	〃	〃	〃D	12.3	6.1	3.7	完	淡黄灰～淡灰	淡黄灰	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	火ダスキ

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm)			残存度 口縁(底部)	色調		成形・調整・形態の特徴	備考
				口径	底径	器高		外面	内面		
496	〃	〃	坏D	14.7	7.3	3.7	1/2	暗灰～灰	暗灰～灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	火ダスキ
497	32 住	須恵器	〃D	12.9	5.3	3.8	2/3	〃	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	
498	〃	〃	〃C		8.3		(1/5)	黄灰～灰	黄灰～灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	
499	〃	〃	壺	15.6			1/6	暗灰	暗灰	ロクロナデ	
500	〃	〃	横瓶					暗灰～緑灰	暗灰～緑灰	口縁下端ロクロナデ，胴部外面平行タタキ目・内面あて具痕（不明瞭）	
501	〃	〃	壺		9.0		(完)	淡黄灰～淡緑灰	淡灰紫	胴部外面回転ヘラケズリ・内面ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	
502	〃	土師器	甕E		6.8		(1/4)	褐～黄褐	黄褐	胴部外面ハケ目・内面ナデ，底部ナデ	
503	〃	〃	〃E		8.4		(2/3)	淡褐～黒	黄褐～暗褐	胴部外面ハケ目・内面ハケ目，底部ナデ	
504	〃	〃	〃E	24.4			1/4	茶褐～暗褐	茶褐～暗褐	口縁ヨコナデ・内面ハケ目，胴部外面ハケ目・内面ナデ，口縁外反	
505	〃	〃	〃E	21.5			1/5	黄褐～茶褐	茶褐～褐	口縁ヨコナデ，胴部外面ハケ目・内面ハケ目のちナデ（不明瞭），口縁外反	
506	〃	〃	〃E	24.4			1/5	暗褐視～黄褐	暗褐	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面ハケ目・内面ハケ目のちナデ	
507	〃	〃	〃E	22.3			1/6	黄茶褐	暗褐～黄褐	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面ハケ目・内面タテナデ	
508	33 住	〃	坏E	11.8			1/8	濃赤燈～赤燈	赤燈	ロクロナデ	
509	〃	〃	〃D	12.8	5.3	3.7	1/3	淡青灰～黄紫	濃青灰～赤褐	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	
510	〃	〃	〃D	12.7	6.0	3.8	1/4	薄青灰～青灰	薄青灰～青灰	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	
511	〃	〃	〃B	13.3	7.3	4.0	1/6	薄灰紫	薄黄灰紫	ロクロナデ，底部ヘラ切りのちナデ（不明瞭）	
512	〃	〃	〃B	11.7	7.3	4.2	(1/2)	薄青灰～濃青灰	灰紫～黄紫	ロクロナデ，底部ナデ	
513	〃	〃	〃	14.3			1/8	黄紫	灰紫	ロクロナデ	
514	〃	土師器	坏C	16.2			1/8	淡赤橙	赤燈～黒	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ	不完全な内黒
515	〃	〃	〃C		6.6		(完)	赤橙～黄橙	黒褐～赤橙	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ，底部回転糸切り	不完全な内黒
516	〃	須恵器	鉢	21.6			1/10	黄紫	灰紫	ロクロナデ	
517	〃	土師器	小形甕E	16.7			1/15	褐	黄橙	ロクロナデ，口縁内面カキ目，胴部外面カキ目・内面ロクロナデ	
518	〃	〃	甕		8.4		(1/10)	赤橙～橙	褐	胴部外面ナデ・内面磨滅，底部木葉圧痕（不明瞭）	
519	〃	〃	小形甕E		6.0		(完)	濃赤橙	黄橙	胴部外面カキ目（不明瞭）・内面ロクロナデ，底部回転糸切り	
520	〃	〃	甕		7.0		(1/8)	赤橙	黄橙	胴部外面ナデ・内面ハケ目（不明瞭），底部木葉圧痕	
521	〃	〃	?		7.2		(1/10)	〃	赤橙	胴部外面ヘラミガキ・内面ナデ，底部木葉圧痕	
522	〃	須恵器	甕	14.4			1/8	薄青灰	濃青灰～青灰	ロクロナデ，胴部外面格子タタキ目	
523	34 住	〃	坏E		7.6		(完)	淡茶褐～黒	淡茶褐～黒	ロクロナデ，底部回転糸切り	
524	〃	土師器	坏C	11.5			1/6	黒～茶褐	黒	ロクロナデ，体部内面ミガキ	内黒
525	〃	〃	坏C	12.0			1/8	黄茶褐	茶褐	ロクロナデ，体部内面ミガキ	
526	〃	〃	坏C	13.4	6.5	4.1	1/5	黄褐	黒	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
527	〃	灰釉	皿?	14.6			1/8	灰白	(淡緑灰)	ロクロナデ	刷毛塗り
528	〃	〃	碗		8.8		(1/4)	〃	(〃)	ロクロナデ，体部外面下半回転ヘラケズリ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	刷毛塗り

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
529	〃	灰釉	碗	15.7			1/4	灰白	(淡緑灰)	ロクロナデ	
530	34住	〃	〃		8.4		(2/3)	淡灰	(黄灰)	ロクロナデ，体部外面下半回転ヘラケズリ，付け高台，底部外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	内面朱付着
531	〃	〃	〃		6.6		(1/4)	灰白	(淡緑)	ロクロナデ，体部外面下半回転ヘラケズリ，付け高台のちヨコナデ，底部ナデ	
532	35住	須恵器	蓋C	11.9	—		1/8	暗灰紫	暗灰紫	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	
533	〃	〃	坏D	12.1	5.8	3.9	1/5	暗灰～灰	暗灰	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部に二次底部面	重ね焼痕
534	〃	〃	〃D	13.3	6.2	4.1	2/3	〃	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部に二次底部面	
535	〃	〃	〃D		5.1		(1/4)	淡黄灰	暗褐灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
536	〃	〃	〃C		11.8		(1/8)	淡灰紫	淡灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部外周回転ヘラケズリ・内面回転糸切り	
537	〃	〃	〃C		11.1		(1/5)	暗黄灰～暗灰	淡黄灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	
538	〃	土師器	〃C	12.5	6.2	4.1	1/6	茶～淡褐	黒～茶	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
539	〃	〃	〃C		7.3		(2/3)	黄茶	黒～黄茶	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
540	〃	〃	鉢	20.6	8.8	7.5	1/2	黒～茶褐	黒～茶褐	ロクロナデ，体部内面ミガキ，底部回転糸切り	内黒
541	〃	〃	甕E	19.7			1/5	茶褐～暗褐	茶褐～暗褐	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面ハケ目・内面ナデ（板ナデ），口縁外反	
542	〃	〃	〃E	22.5			1/5	淡黄褐～褐	淡黄褐～褐	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部外面ハケ目・内面ナデ	
543	〃	須恵器	壺					暗灰紫	茶	ロクロナデ	外面自然釉
544	36住	〃	坏B		9.0		(1/6)	青灰	青灰	ロクロナデ，底部ヘラ切り	
545	〃	〃	〃C		9.2		(1/12)	灰	灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ	
546	〃	〃	〃C	14.5			1/18	黒褐	〃	ロクロナデ，体部外面沈線4本	
547	37住	〃	〃E	12.4	6.5	4.3	1/12	橙褐	橙褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
548	〃	〃	〃E	11.6	4.9	3.9	2/3	赤褐	黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
549	〃	〃	〃		5.2		(1/4)	灰	灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
550	〃	〃	〃C		8.9		(1/6)	〃	〃	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	
551	〃	土師器	〃C	12.6			1/10	黄褐	黄褐	ロクロナデ，体部内面ミガキ	内黒
552	〃	〃	甕E	22.0			1/6	黒褐～黄褐	赤褐	ロクロナデ，口縁内面カキ目，胴部内外面ハケ目，口縁外反	
553	38住	須恵器	坏D		5.2		(完)	灰	灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
554	〃	〃	〃D	12.7			1/4	〃	〃	ロクロナデ，底部回転糸切り	
555	〃	〃	〃C		10.9		(1/12)	暗褐	暗褐	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ	
556	〃	〃	短頸壺					黒灰	灰	ロクロナデ	
557	〃	土師器	小形甕		6.5		(完)	赤褐	橙褐	ロクロナデ，体部外面下端ヘラケズリのちナデ，底部静止糸切り（不明瞭）	
558	〃	須恵器	四耳壺					灰	灰	胴部外面タタキ目，内面不整方向のナデ，焼成前の穿孔	
559	39住	灰釉	碗		6.5		(1/4)	〃	〃	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転ヘラケズリ	
560	〃	〃	〃	15.7			1/12		(黄灰)	ロクロナデ	
561	40住	須恵器	蓋C	18.3	—		1/3	青灰	青灰	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
562	40 住	須恵器	坏D		5.3		(1/4)	灰紫	薄青灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
563	〃	〃	〃C		8.4		(1/6)	薄青灰	〃	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部回転糸切り	
564	〃	〃	〃C		9.8		(1/3)	淡青灰～淡灰紫	淡青灰～淡灰紫	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ	
565	〃	土師器	〃D	11.2	4.1	3.4	1/3	淡赤橙～薄褐	薄黄橙	ロクロナデ，底部回転糸切り	
566	〃	〃	〃C	12.7			1/8	黄橙	黒	ロクロナデ，体部内面ミガキ	内黒
567	〃	〃	〃E	11.3	7.3	4.9	1/8	橙	赤橙	ロクロナデのち体部外面ヘラミガキ・下半手持ちヘラケズリ，内面放射状・界線状のヘラミガキ，底部手持ちヘラケズリ	箱形
568	〃	〃	小型甕E		6.2		1/5	明茶褐～暗茶褐	〃	ロクロナデ，胴部外面カキ目，底部磨滅	
569	〃	〃	〃E	12.1			4/5	赤橙	黄橙	ロクロナデ，胴部外面カキ目・内面ハケ目（不明瞭）	
570	〃	〃	〃	13.8			1/6	明茶褐	明茶褐～赤	口縁ヨコナデ，胴部外面縦位のハケ目・内面磨滅	
571	〃	〃	甕		(8.4)		1/3	橙	黄橙	胴部外面ヘラケズリ・内面ハケ目（不明瞭），底部ナデ	
572	〃	〃	〃F		(5.1)		1/3	明茶褐～黄橙	赤橙	胴部外面ヘラケズリ・内面ナデ，底部ヘラケズリ	
573	〃	〃	〃E	22.9			1/10	黄橙	黄橙	口縁ヨコナデ，胴部外面ハケ目・内面ナデ	
574	〃	〃	〃	20.3			1/6	赤橙～黄橙	赤橙～黄橙	口縁面取り・ヨコナデ，胴部外面ハケ目・内面カキ目，口縁「く」の字状に外反	
575	〃	須恵器	壺		9.6		(1/8)	濃青灰	濃青灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ	
576	〃	〃	甕	29.7			1/15	灰紫	黄紫	ロクロナデ	
577	41 住	〃	蓋C		—			暗灰	暗灰	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	
578	〃	〃	〃C		—			淡灰～灰	淡灰	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	
579	〃	〃	〃C	12.9	—			灰	灰	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	
580	〃	〃	〃C	12.8	—		1/3	暗灰～灰	青灰	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	重ね焼痕，自然釉
581	〃	〃	〃C	13.3	—		1/10	暗灰～茶灰	暗灰	ロクロナデ	
582	〃	〃	〃C	16.5	—		1/4	暗灰～灰	淡灰～灰	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	重ね焼痕，自然釉
583	〃	〃	〃C	16.5	—		1/4	暗灰～黄灰	淡灰	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	重ね焼痕，自然釉
584	〃	〃	〃C	19.4	—		1/8	灰白	〃	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	
585	〃	〃	〃C	13.2		3.9	完	暗青灰～茶褐	暗灰	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	天井部内面ヘラ記号
586	〃	〃	坏C	10.8			1/8	黄灰	淡灰	ロクロナデ	
587	〃	〃	〃B		8.0		(1/3)	淡黄灰～灰	淡黄灰～灰	ロクロナデ，底部ヘラ切りのちナデ	
588	〃	〃	〃D	13.2	7.7	3.7	1/3	淡茶褐～黒	淡茶褐灰	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部直線的に外開	重ね焼痕，自然釉
589	〃	〃	〃D	13.4	7.5	4.2	1/4	淡灰	淡灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	重ね焼痕跡
590	〃	〃	〃D	14.1	7.6	4.6	1/7	淡灰～灰	淡灰～灰	ロクロナデ，底部回転糸切り，体部に二次底部面	
591	〃	〃	〃C	14.2			1/6	暗灰～灰	暗灰～灰	ロクロナデ	
592	〃	〃	〃C		6.7		(1/3)	暗灰～黄灰	黄灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ，底部外周回転ヘラケズリ・中央回転糸切り	自然釉
593	〃	〃	〃C		8.9		(1/6)	淡灰	淡灰	ロクロナデ，付け高台のちヨコナデ	
594	〃	土師器	〃E	11.5			1/3	橙	橙	ロクロナデ，体部外面下半手持ちヘラケズリ，内面放射状暗文	台形

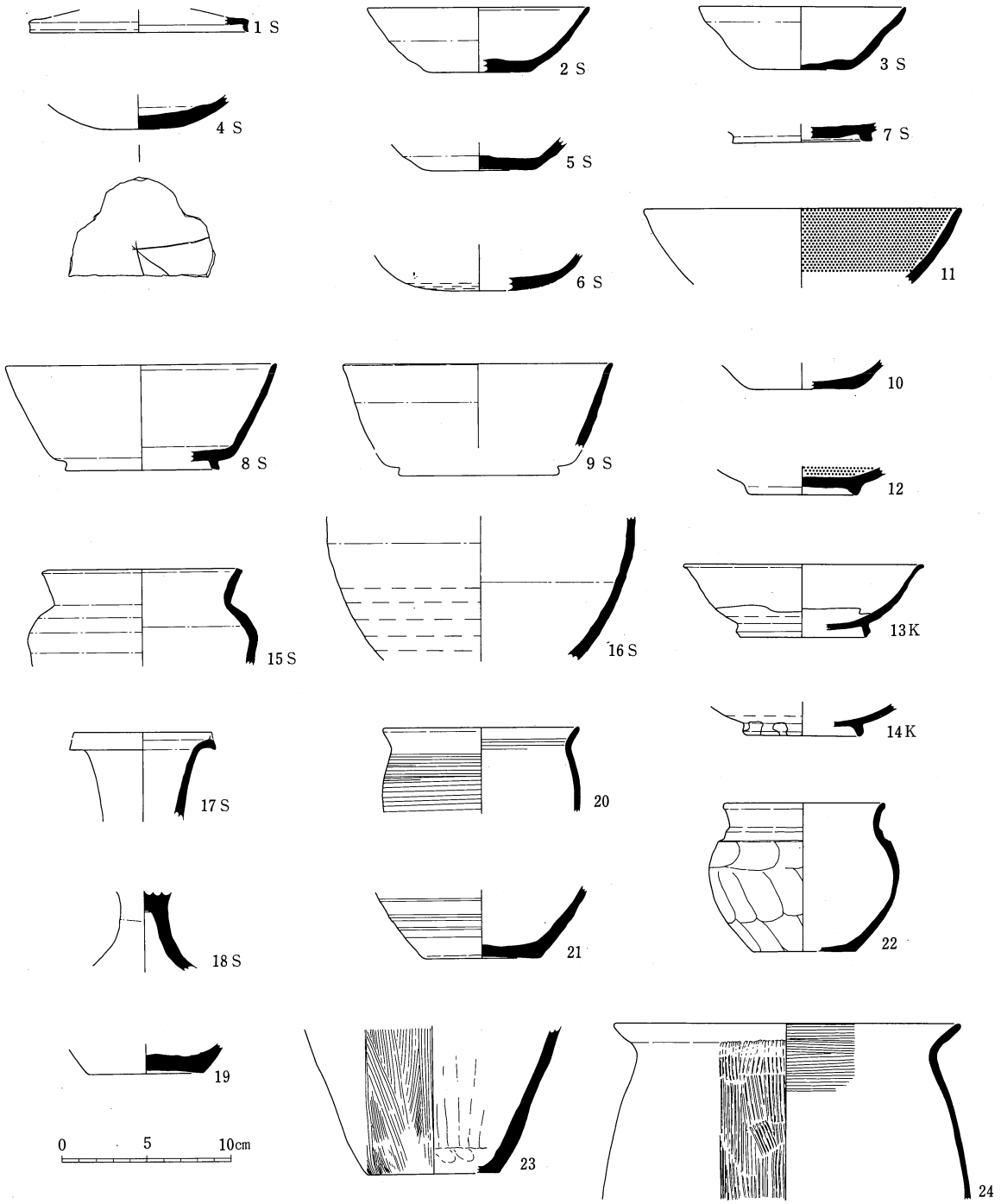
No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
595	41 住	土師器	坏B		7.4		(完)	茶褐	黒	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ，体部外面下端～底部手持ちヘラケズリ	内黒
596	〃	灰釉	碗	16.4			1/4	灰白	淡緑灰	ロクロナデ，体部外面下半回転ヘラケズリ	刷毛塗り
597	〃	須恵器	壺					黄灰白	緑灰～暗灰～灰	ロクロナデ	頸部のみ
598	〃	〃	〃		12.4		(1/4)	灰白～淡灰	淡緑白	ロクロナデ，胴部外面下部回転ヘラケズリ，付け高台，底部ナデ	
599	〃	土師器	小形甕F	15.0			1/8	茶	淡黄褐	ロクロナデ	
600	〃	〃	〃	15.0			1/8	黄褐～褐	黄褐～暗褐	ロクロナデ	炭化物付着
601	〃	〃	甕		8.2		(1/3)	暗褐～暗茶褐	暗褐～暗茶褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
602	〃	〃	〃		9.0		(1/3)	茶褐～暗茶褐	黄褐～暗黄褐	ロクロナデ	
603	〃	〃	甕F	23.0			1/10	茶褐～暗黄褐	黄褐	口縁部強いヨコナデ，胴部外面ヘラケズリ・内面ナデ，口縁「く」の字に外反	
604	〃	〃	甕E－3		22.6		(1/10)	茶褐	暗褐～淡褐	口縁ヨコナデ・内面カキ目，胴部内面ナデ・外面ハケ目、口縁外反	
605	〃	須恵器	四耳壺					暗灰～淡灰	淡灰	胴部外面叩キ目	
606	〃	〃	?		10.4		(1/6)	暗灰～灰	暗灰～淡緑灰	胴部下半～底部内面ロクロナデ，胴部下半外面叩キ目，底部ナデ	
607	〃	〃	鉢	19.2			1/10	暗灰～淡緑	暗灰	ロクロナデ	
608	〃	〃	甕	29.4			1/12	淡灰～淡緑灰	淡灰～淡緑灰	ロクロナデ，肩部外面叩キ目，肩部内面同心円文当て具痕	
609	42 住	〃	坏E		5.4		2/3	黄褐色	赤褐色	ロクロナデ，底部回転糸切り	炭化物付着
610	〃	〃	〃	12.4	4.6	3.3	1/5	黄褐色	赤褐色	ロクロナデ，底部回転糸切り	
611	〃	〃	〃	13.4	6.3	3.5	完	黄褐色	黄褐色	ロクロナデ，底部回転糸切り	
612	〃	〃	〃	13.2	4.8	4.3	1/2	橙～暗褐色	橙～暗褐色	ロクロナデ，底部回転糸切り	体部外面に刻書あり
613	〃	〃	〃	13.1	5.8	3.7	1/9	淡黄褐色	淡黄褐色	ロクロナデ，底部回転糸切り	
614	〃	〃	〃	13.5	5.0	3.7	1/3	淡黄褐色	淡黄褐色	ロクロナデ，底部回転糸切り	
615	〃	土師器	〃C	12.0			1/8	赤褐色	黒	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ	内黒
616	〃	〃	〃C	12.8			1/5	黄褐色	黒	ロクロナデ，体部内面ヨコ・タテのヘラミガキ	内黒
617	〃	〃	〃C	13.5			1/10	黄褐色	黒	ロクロナデ，体部内面ヨコのヘラミガキ	内黒
618	〃	〃	埦A	13.9			1/16	黄褐色	黒	ロクロナデ，体部内面ヨコ・タテのヘラミガキ	内黒
619	〃	〃	坏D	14.3			1/6	赤褐色	暗褐	ロクロナデ，体部内面タテのヘラミガキ，付け高台，底部回転糸切りのちヨコナデ	
620	〃	〃	埦A		6.0		(完)	赤褐色	黒	ロクロナデ，体部内面タテのヘラミガキ	不完全な内黒
621	〃	〃	〃	15.2	6.9	4.8	完	赤褐色	黒褐～褐色	ロクロナデ，体部内面ヨコ・タテのミガキ，付け高台，底部回転糸切り	
622	〃	〃	甕E－3		11.5		(1/3)	赤褐色	赤褐色	ロクロナデ，胴部外面ハケ目のちナデ	
623	溝 1	須恵器	坏D		6.3		(1/2)	薄黄燈	灰色	ロクロナデ，底部回転糸切り	
624	〃	〃	〃		6.7		(1/3)	青灰	濃青灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
625	〃	〃	〃	12.1			1/8	青灰	濃青灰	ロクロナデ	
626	〃	〃	〃C		6.0		(1/4)	青灰	青灰	ロクロナデ，付け高台，底部回転糸切りのち回転ヘラケズリ	
627	〃	〃	〃C		9.4		(1/8)	明橙	黄褐	ロクロナデ，付け高台，底部回転糸切り	

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
628	溝 1	須恵器	坏C		11.7		(1/3)	青 灰	灰 紫	ロクロナデ，付け高台，底部回転糸切りのち回転ヘラケズリ	
629	〃	〃	〃C	14.4	9.7	6.4	1/2	青 灰	青 灰	ロクロナデ，付け高台，底部回転糸切りのち回転ヘラケズリ	体部外面に自然釉
630	〃	土師器	〃B	15.6	8.5	5.5	1/5	赤 橙	黒	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ，底部回転糸切りのち手持ちヘラケズリ	内黒
631	〃	〃	〃D	12.2	5.9	3.7	1/5	黄 橙	暗赤褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
632	〃	〃	〃C		5.4		(完)	赤褐～暗褐	黒	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ，底部回転糸切り	内黒
633	〃	〃	〃D		6.3		(1/3)	明茶褐～薄黄褐	薄黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
634	〃	〃	〃C		7.0		(1/4)	黄 橙	黒	ロクロナデ，底部回転糸切り	内黒
635	〃	〃	〃C	13.6			1/10	黄橙～赤橙	黒	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ	内黒
636	〃	灰釉	碗		9.6		(完)	淡灰紫	黄 灰	ロクロナデ，体部下半回転ヘラケズリ，付け高台，底部回転ヘラケズリのちナデ，底部外面に朱による墨書	刷毛塗り
637	〃	須恵器	高坏					青灰～灰紫	青 灰	ロクロナデ，脚部内面しぼり痕	
638	〃	〃	長頸壺					青 灰	青 灰	ロクロナデ	頸部内外面自然釉
639	〃	〃	壺		7.8		(1/9)	青 灰	濃青灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
640	〃	土師器	甕E－3		11.3		(1/15)	暗 燈	赤褐色	胴部内面ナデ，胴部ハケ目，底部ナデ	
641	〃	〃	〃G	34.0			1/20	赤橙～橙	赤 橙	ナデ	
642	〃	須恵器	壺		12.9		(1/10)	薄灰白	灰 白	ロクロナデ，胴部外面下半回転ヘラケズリ，付け高台，底部ナデ	
643	〃	〃	〃		10.8		(1/8)	青灰～灰白	灰 紫	ロクロナデ，胴部下半回転ヘラケズリ，付け高台，底部回転ヘラケズリ	自然釉
644	建 7	〃	蓋B	13.5			1/10	灰 紫	黄 灰	ロクロナデ，端部内面にかえり、天井部外面回転ヘラケズリ	自然釉
645	〃	土師器	坏A	13.6			1/5	黒褐～明褐	黄褐～赤褐	体部内面ヘラミガキ・外面手持ちヘラケズリのちヘラミガキ，口縁部ヨコナデ	
646	〃	〃	〃A	20.4			1/10	赤 橙	黒	口縁部・体部内面ヘラミガキ・外面上半ヨコナデ・下半手持ちヘラケズリのちヘラミガキ	内黒，口縁部にスス付着
647	1地区検	須恵器	蓋C	20.5			1/10	暗 灰	灰	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	
648	〃	〃	坏D		8.0		(1/2)	灰	灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
649	〃	〃	〃		7.6		(1/4)	灰	灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
650	〃	〃	壺		5.7		(1/2)	灰	灰	ロクロナデ，底部回転糸切り	
651	〃	〃	坏C		10.1		(1/5)	暗 灰	灰	ロクロナデ，付け高台，底部回転糸切りのち回転ヘラケズリ	
652	〃	〃	長頸壺					暗 灰	灰	ロクロナデ	
653	〃	〃	甕	34.8			1/8	灰	灰	ロクロナデ，胴部外面叩キ目のちロクロナデ	
654	2地区検	〃	蓋B	13.3			1/10	灰 紫	灰 紫	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	
655	〃	〃	〃C	12.2			1/10	薄青灰	薄青灰	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	外面自然釉
656	〃	〃	坏B		7.0		(1/2)	橙～黄橙	黄 橙	ロクロナデ，体部外面下半回転ヘラケズリ，底部回転ヘラ切り	
657	〃	〃	〃		7.0		(1/6)	薄青灰	青 灰	ロクロナデ，底部回転ヘラケズリ	
658	〃	〃	坏D	13.2			1/10	灰 紫	灰 紫	ロクロナデ	
659	〃	〃	〃		8.2		(1/4)	灰 紫	灰 紫	ロクロナデ，底部回転糸切り	
660	〃	〃	〃	12.8			1/10	薄青灰	薄青灰	ロクロナデ	

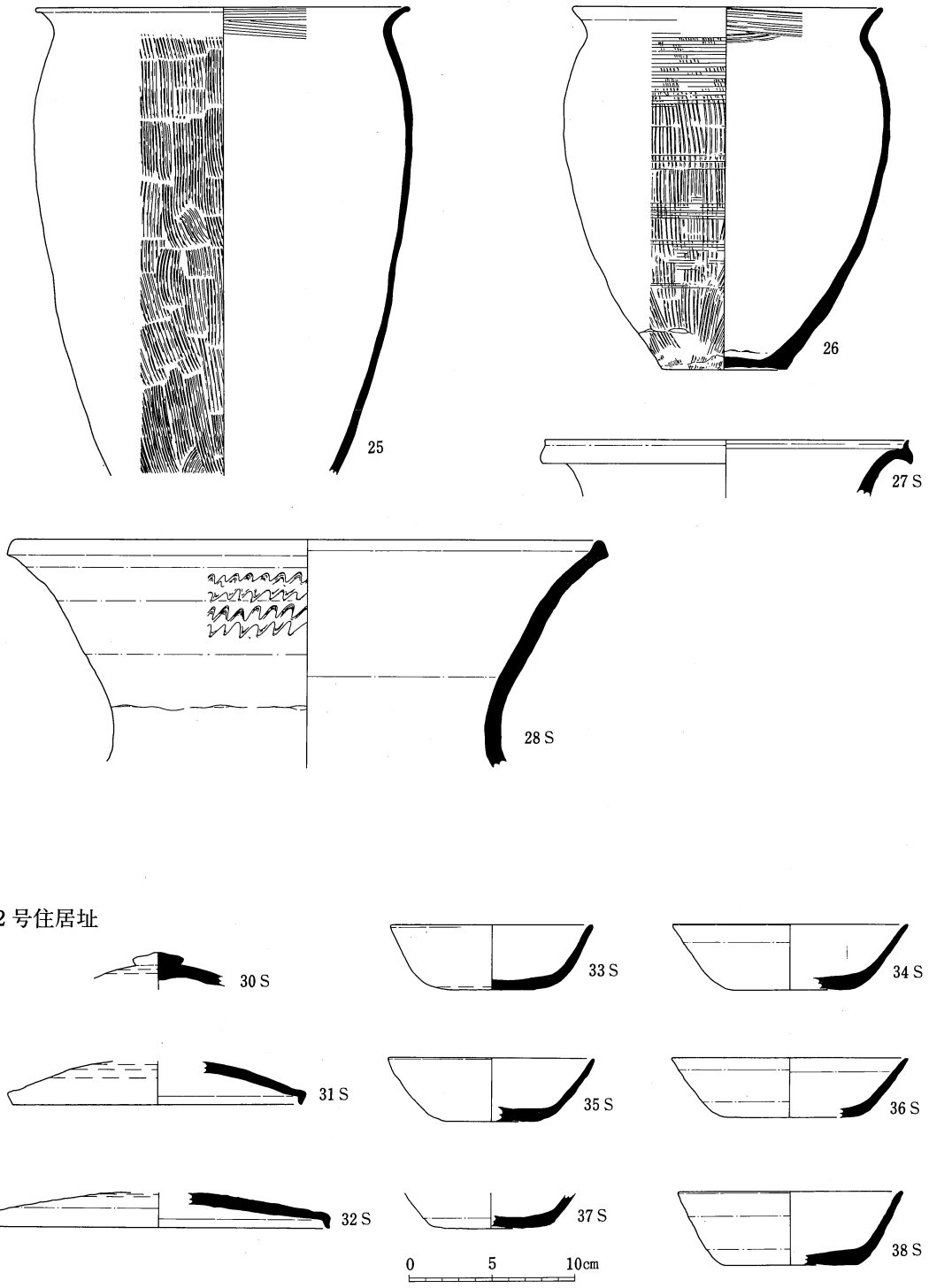
No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
661	2地区検	須恵器	坏C	14.3	8.8	4.0	1/6	薄青灰	薄青灰	ロクロナデ，体下部外面・底部回転ヘラケズリ，付け高台	
662	〃	〃	〃C	13.1	9.2	4.0	1/3	薄橙～黄橙	黄橙	ロクロナデ，付け高台，底部回転ヘラケズリ	
663	〃	〃	〃C	7.1			1/2	青灰	灰紫	ロクロナデ，付け高台，底部回転ヘラケズリ	
664	〃	〃	〃C		8.8		(1/2)	薄青灰	薄青灰	ロクロナデ，付け高台，底部回転ヘラケズリ	
665	〃	〃	〃C		6.6		(1/3)	青灰～薄青灰	薄青灰	ロクロナデ，付け高台，底部回転糸切り	
666	〃	〃	〃	19.2			1/10	青灰	灰紫	ロクロナデ	体部外面に自然釉
667	〃	〃	〃C		10.0		(1/3)	青灰	青灰	ロクロナデ，付け高台，底部回転ヘラケズリ	
668	〃	土師器	〃E		6.9		(1/10)	橙	橙	ロクロナデ，体部内面放射線状のヘラミガキ，体部外面下半・底部手持ヘラケズリ	
669	〃	〃	〃C	16.2			1/10	黄橙	黒	ロクロナデ，体部内面ヘラミガキ	内黒
670	〃	〃	〃D	12.2			1/10	黄橙	黄橙	ロクロナデ	
671	〃	須恵器	壺		7.2		(完)	薄青灰	薄青灰	ロクロナデ，胴部外面下半ヘラケズリ，付け高台	体部外面下半,底部外面,自然釉
672	〃	〃	〃	11.0			1/10	濃灰紫	薄青灰	ロクロナデ	頸部内面自然釉
673	〃	〃	高坏					青灰白	青灰白	ロクロナデ，脚部内面しぼり痕	
674	〃	土師器	〃		9.0		(1/3)	橙～赤橙	黄橙	ロクロナデ，底部内面ヘラミガキ	内黒
675	〃	〃	小形甕E	14.2	7.6	11.6	(1/6)	赤褐～暗赤褐	黄橙	ロクロナデ，口縁部内面・胴部外面カキ目	
676	〃	〃	甕E－3		7.7		(1/3)	暗赤褐～赤褐	橙	内面ナデ，胴部外面ハケ目・胴部下半手持ちヘラケズリ，底部ナデ	底部・木葉痕
677	〃	〃	〃		10.4		(1/4)	赤褐～淡赤褐	黄褐～褐	内面ナデ，底部内面ヘラケズリ，胴部外面ハケ目，胴下部手持ちヘラケズリ	
678	〃	〃	?	22.6			1/10	黄褐	黄褐	ロクロナデ	
679	〃	〃	甕E－3	22.0			1/8	赤褐～黄褐	赤褐～黄褐	ナデ，胴部外面ハケ目	
680	〃	須恵器	甕		6.7		(1/15)	青灰白	青灰白	胴部外面タタキ目・内面同心円文当て具痕，胴部内面下半ナデ・胴部外面下半回転ヘラケズリ	
681	〃	〃	鉢	24.2			1/10	灰紫	青灰	ロクロナデ	胴部にヘラ記号
682	3地区検	〃	蓋C					灰	灰	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	
683	〃	〃	坏E		5.2		(完)	燈褐	黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
684	〃	〃	〃E		5.8		(9/10)	赤褐	黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	底部中心よりややずれて有孔
685	〃	〃	〃D	12.6			1/11	淡灰	淡灰	ロクロナデ	
686	〃	〃	〃E	13.5	6.4	3.8	1/16	黄褐	灰褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
687	〃	〃	〃C		10.1		(1/6)	暗灰	灰	ロクロナデ，付け高台，底部回転ヘラケズリ	
688	〃	土師器	坏D	11.3	4.0	4.2	1/6	黄褐	黄褐	ロクロナデ	
689	〃	〃	〃B		8.0		(1/4)	黄褐	黒	内面ヘラミガキ，体部外面下半手持ちヘラケズリ	内黒
690	〃	〃	埦B		6.9		(完)	赤褐	暗褐	ロクロナデ，付け高台，底部回転糸切り	
691	〃	〃	〃B		7.4		(1/2)	赤褐	赤褐	ロクロナデ，付け高台，底部回転糸切り	
692	〃	〃	〃B		7.8		(完)	赤褐	赤褐	ロクロナデ，付け高台，底部回転糸切り	
693	〃	〃	〃A		6.0		(完)	赤褐	赤褐	ロクロナデ，体部内面タテのヘラミガキ，付け高台，底部回転糸切り	

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考
694	3地区検	土師器	埦A	15.8	6.2	5.9	1/6	黄褐	黒	ロクロナデ，体部内面タテのヘラミガキ，付け高台，底部回転糸切り	内黒
695	〃	〃	坏C		6.6		(1/2)	黄褐	黒	ロクロナデ，体部内面タテのヘラミガキ	内黒
696	〃	灰釉	碗		6.6		(1/3)	淡灰	淡緑	ロクロナデ，内外面に施釉，付け高台	重ね焼痕
697	〃	〃	〃		7.0		(完)	淡灰	淡緑	ロクロナデ，付け高台，底部回転ヘラケズリ	重ね焼痕
698	〃	〃	〃		6.4		(1/3)	淡灰	淡緑	ロクロナデ,体部外面下端回転ヘラケズリ,付け高台,底部回転ヘラケズリのちナデ	
699	〃	〃	〃		8.4		(1/2)	淡灰	淡緑	ロクロナデ，体部外面下端・底部回転ヘラケズリ，付け高台	重ね焼痕
700	〃	〃	皿	13.1	6.6	2.8	1/8	淡灰	暗淡緑	ロクロナデ，付け高台，底部回転糸切り	
701	〃	〃	〃	13.0	6.4	3.0	1/2	淡灰	淡緑	ロクロナデ,体部外面下半回転ヘラケズリ,付け高台,底部回転ヘラケズリのちナデ	重ね焼痕，刷毛塗り
702	〃	〃	碗		15.4		(1/2)	淡灰	淡緑	ロクロナデ，体部外面下端回転ヘラケズリ，付け高台	刷毛塗り
703	〃	〃	〃		7.1		(1/2)	淡灰	淡緑	ロクロナデ，体部外面下端回転ヘラケズリ，付け高台，底部回転ヘラケズリのちナデ	
704	〃	〃	皿	14.5			1/5	淡灰	淡緑	ロクロナデ	
705	〃	〃	碗		7.1		(1/3)	淡灰	淡緑	ロクロナデ，体部外面下端回転ヘラケズリ,付け高台,底部回転ヘラケズリのちナデ	
706	〃	須恵器	甕		-			青灰～薄青灰	青灰	ロクロナデ，注口部貼り付け，胴部外面回転ヘラケズリ	頸部・肩部自然釉
707	〃	〃	高坏					淡褐	淡褐	坏底部ロクロナデ，脚部外面ロクロナデ，脚部内面しぼり痕	
708	〃	灰釉	長頸瓶		7.3		(完)	淡灰	淡灰	ロクロナデ，胴部外面下端・底部回転ヘラケズリ，付け高台	
709	〃	土師器	小形甕		7.3		(1/2)	赤褐～黄褐	赤褐～黄褐	ロクロナデ，底部回転糸切り	
710	〃	〃	〃		8.0		(1/2)	黄褐	黄褐	ロクロナデ	
711	〃	〃	〃E	18.2			1/7	橙褐	橙褐	ロクロナデ，口縁内面・胴部外面カキ目	
712	〃	〃	〃	11.6	5.8	9.8	1/2	赤褐	黒	ロクロナデ，胴部外面カキ目・胴部内面下半・底部内面タテのヘラミガキ、底部回転糸切り	口縁のゆがみ顕著
713	〃	須恵器	甕	46.0			1/24	暗灰	灰	ロクロナデ	
714	排土中	〃	蓋C	19.8			1/3	薄青灰	薄青灰	ロクロナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	
715	〃	土師器	鉢		8.4		(1/2)	暗赤褐～赤褐	黒	ロクロナデ，体部内面タテのヘラミガキ，底部回転糸切りのちナデ	
716	〃	須恵器	壺	12.8			1/8	薄青灰	薄青灰	ロクロナデ	
717	〃	〃	甕	20.5			1/8	青灰～薄青灰	青灰～薄青灰	ロクロナデ，胴部外面叩き目のちナデ	

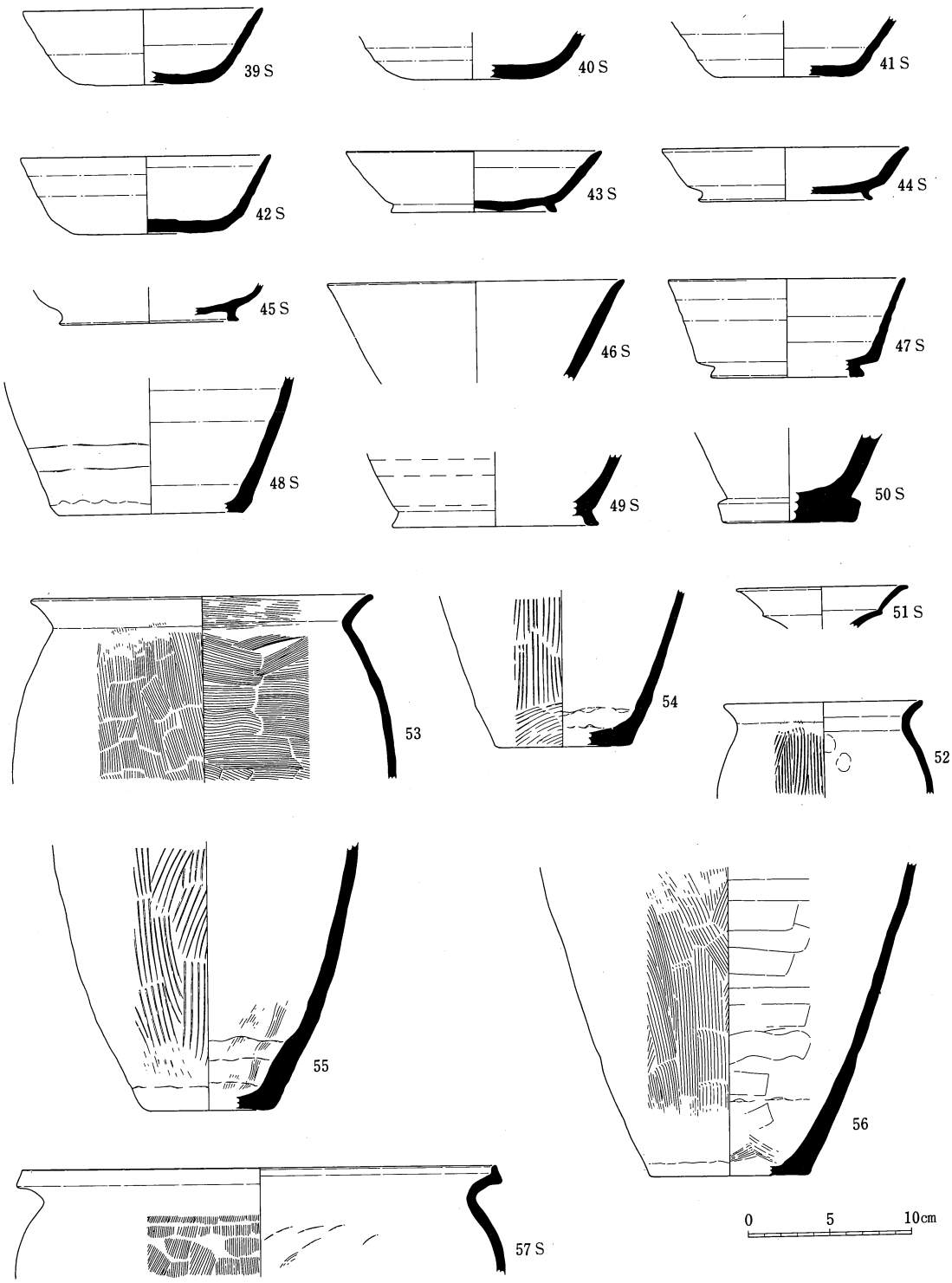
第１号住居址



第52図　土器実測図(1)

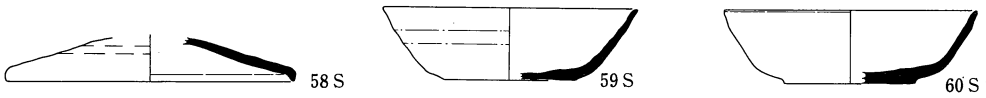


第53図　土器実測図(2)

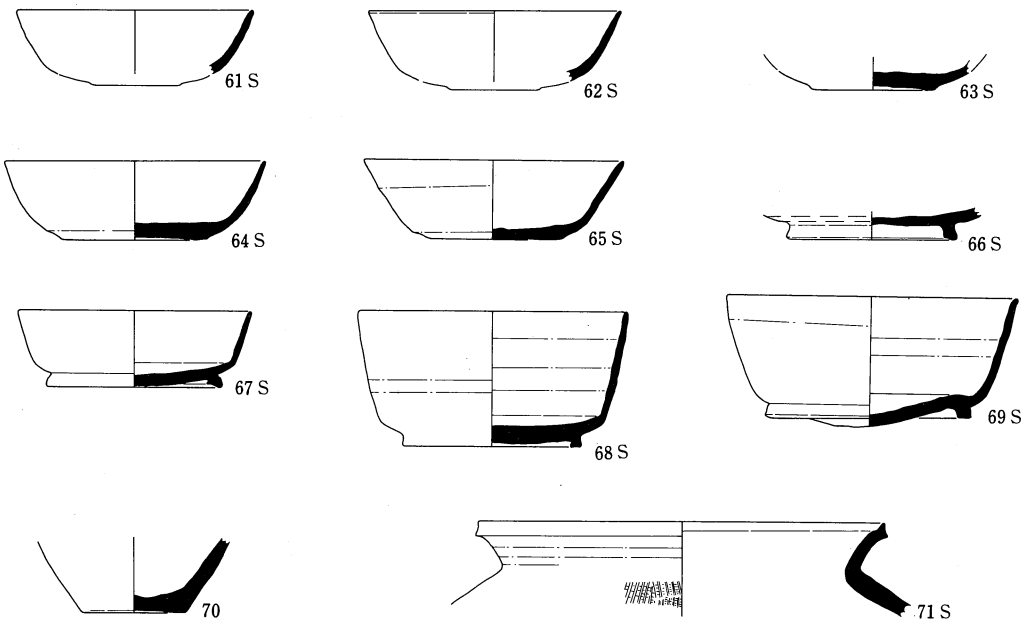

39 S
40 S
41 S
42 S
43 S
44 S
45 S
46 S
47 S
48 S
49 S
50 S
51 S
52
53
54
55
56
57 S
0
5
10cm

第54図　土器実測図(3)

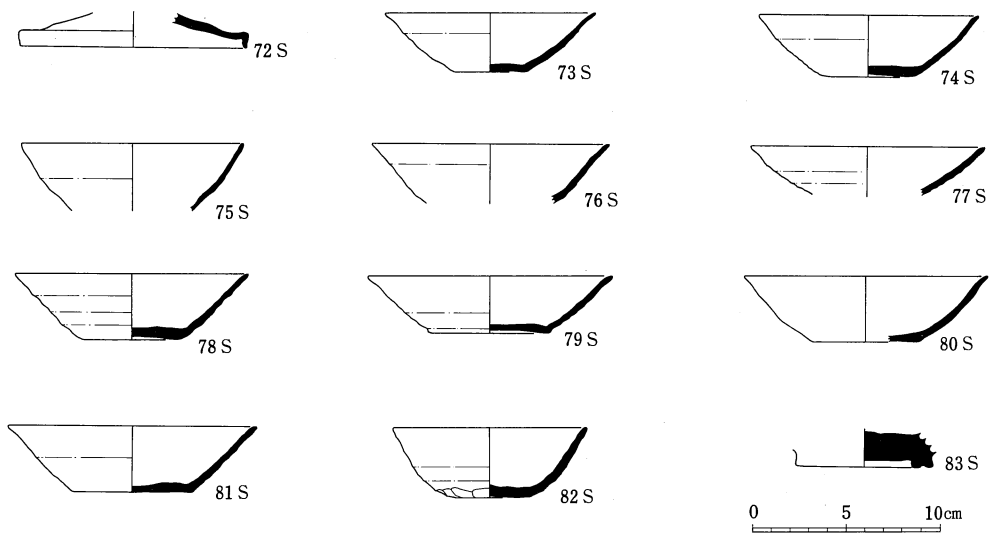
第3号住居址



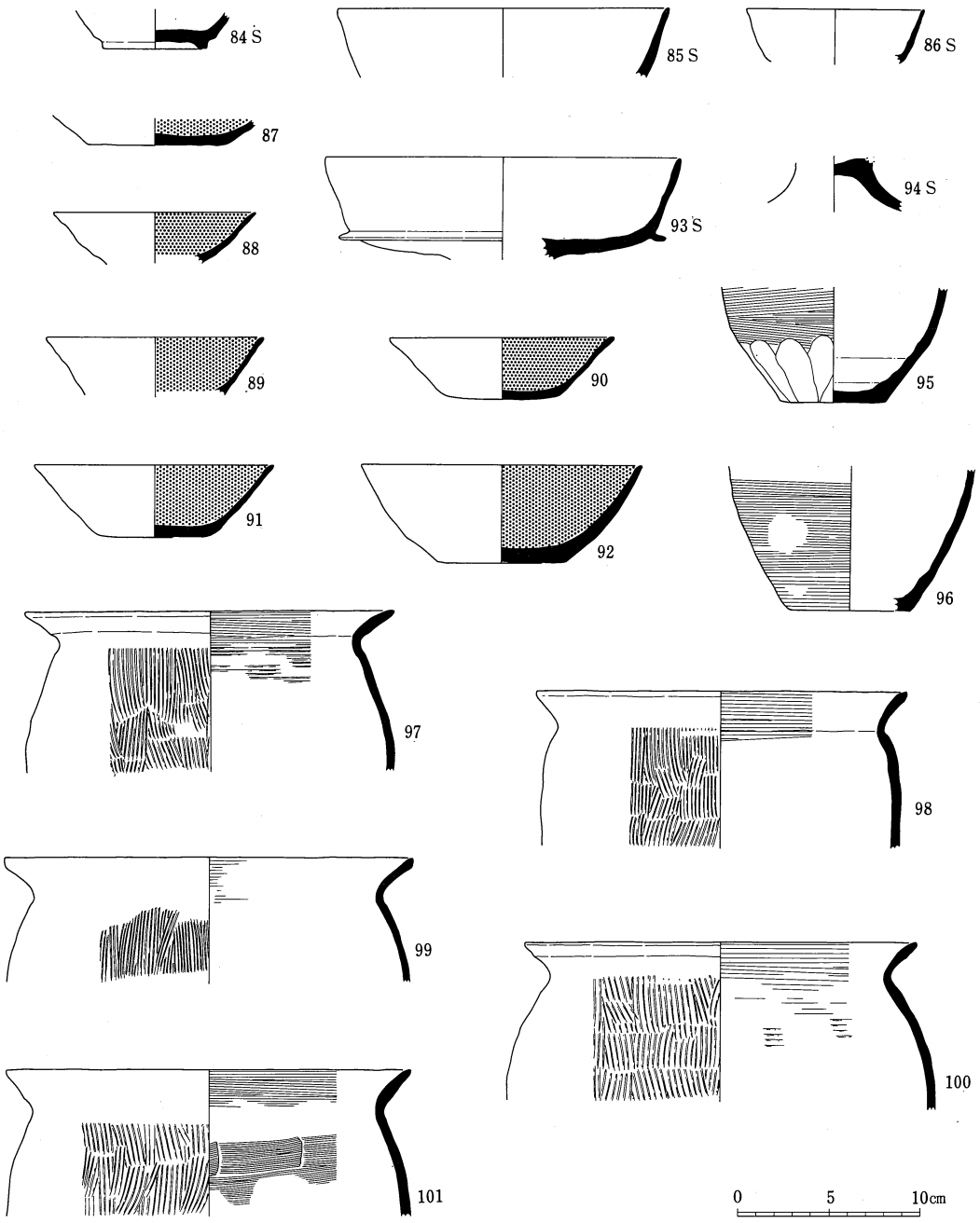
第4号住居址



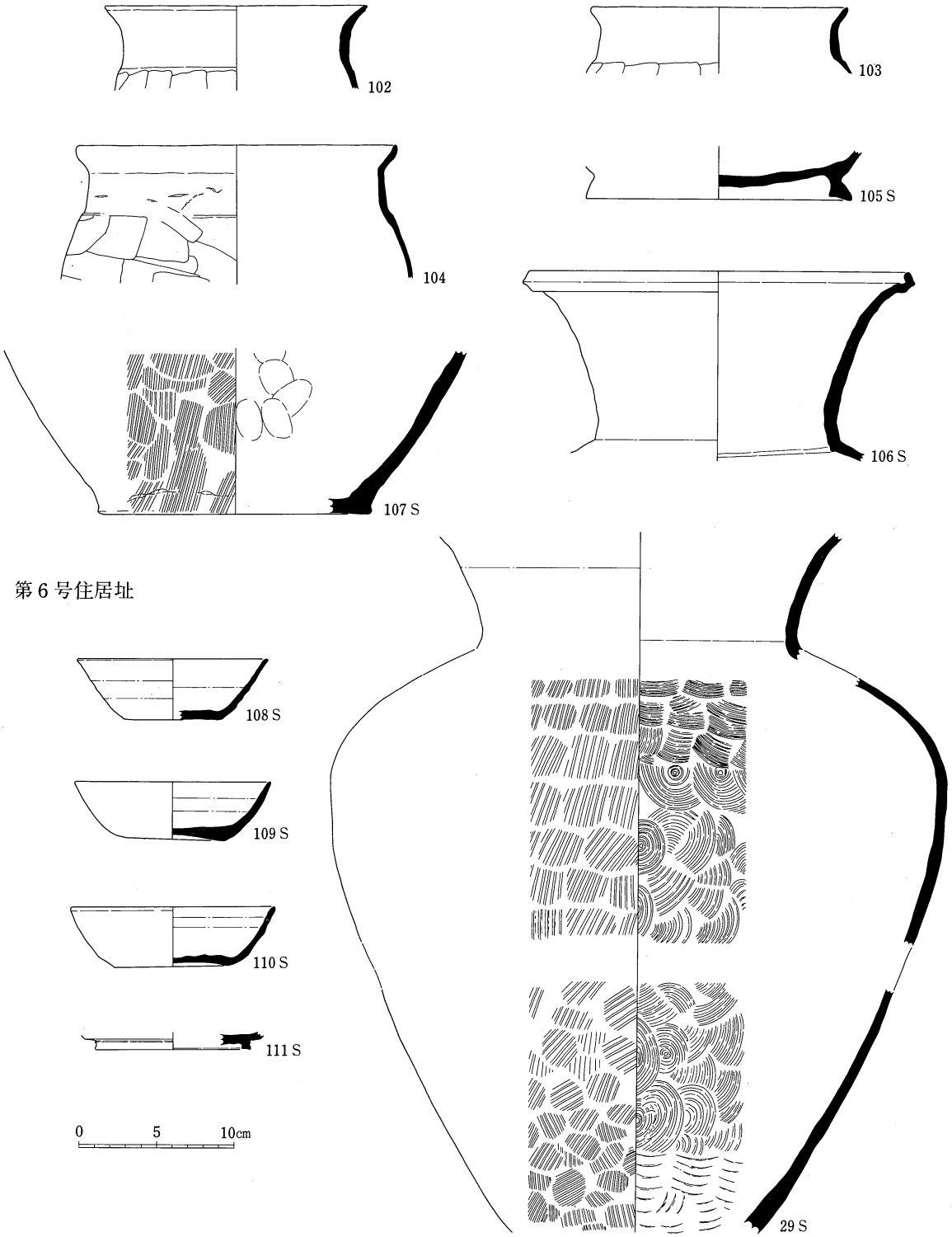
第5号住居址



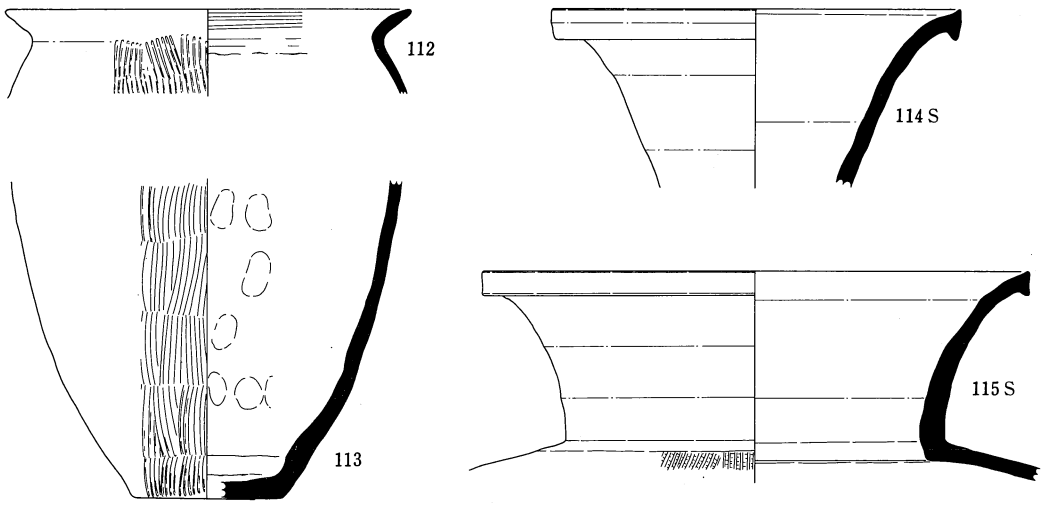
第55図　土器実測図(4)



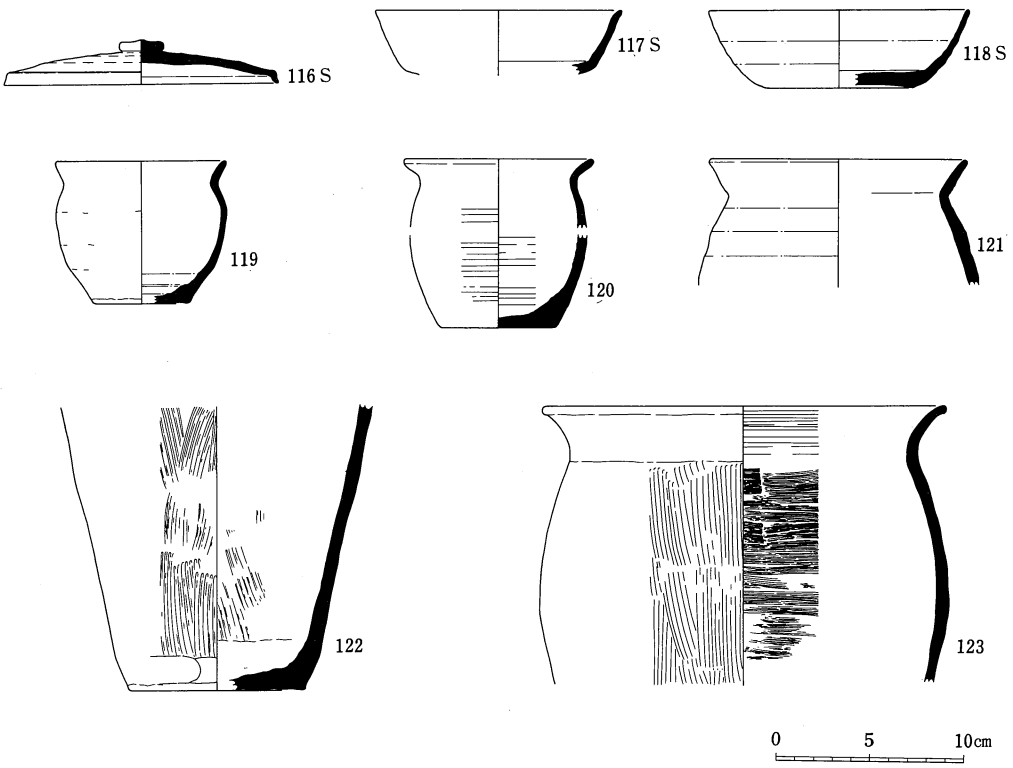
第56図　土器実測図(5)


102
103
104
105 S
106 S
107 S
第６号住居址
108 S
109 S
110 S
111 S
0
5
10cm
29 S

第57図　土器実測図(6)

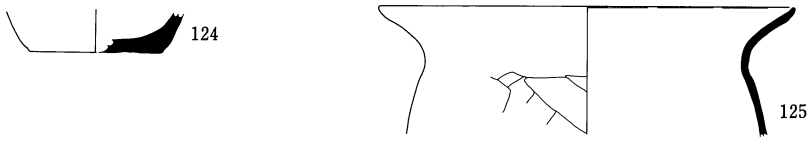


第７号住居址

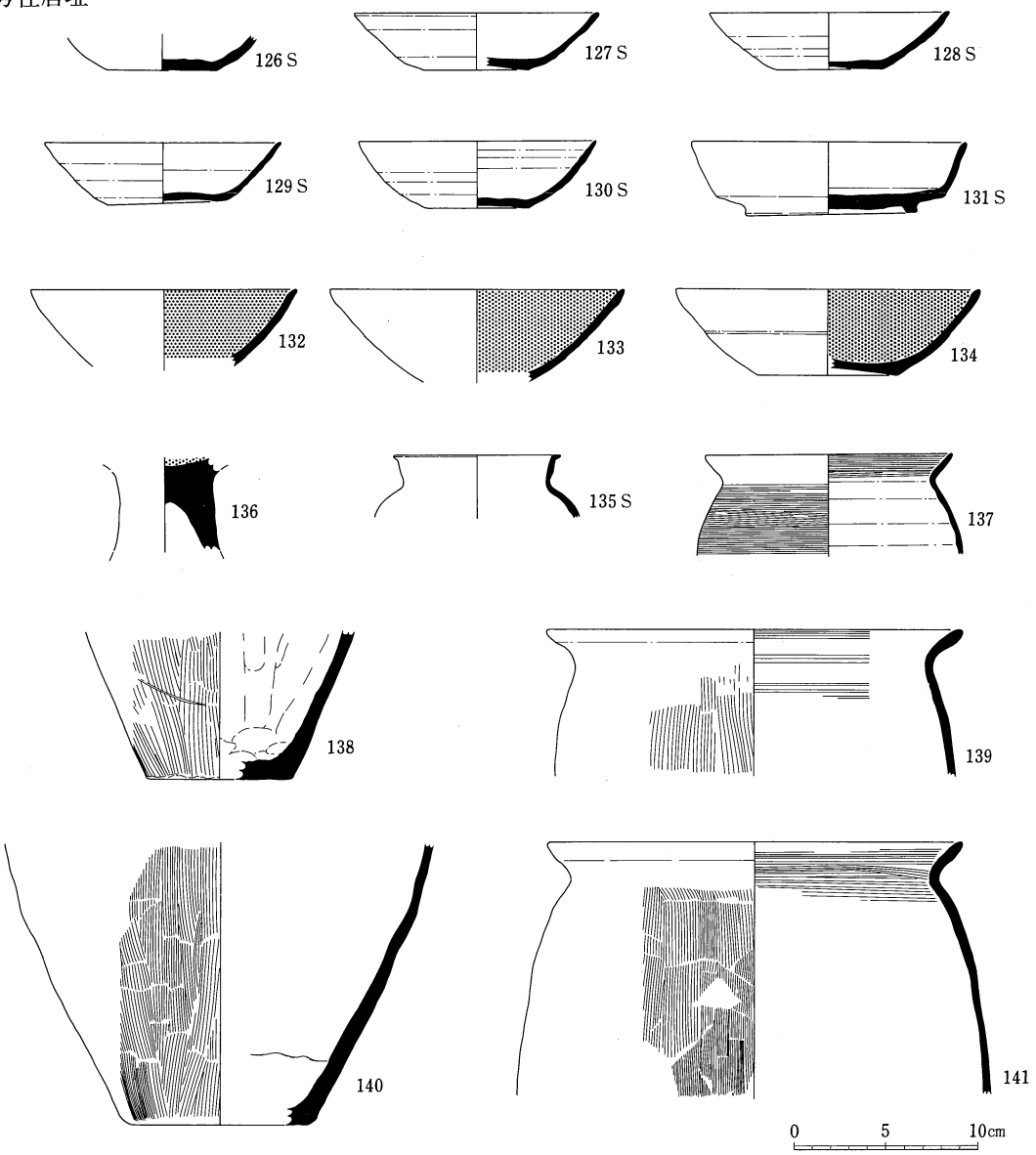


第58図　土器実測図(7)

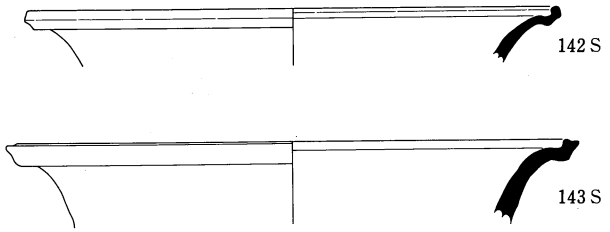
第 8 号住居址



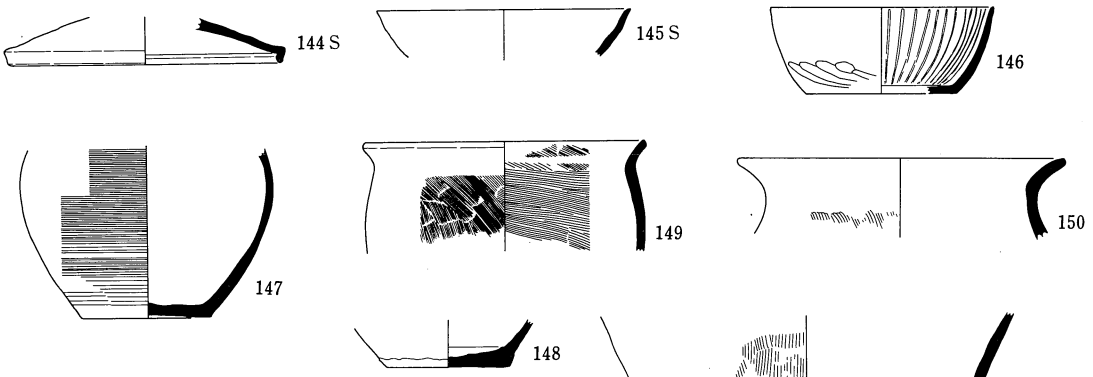
第 9 号住居址



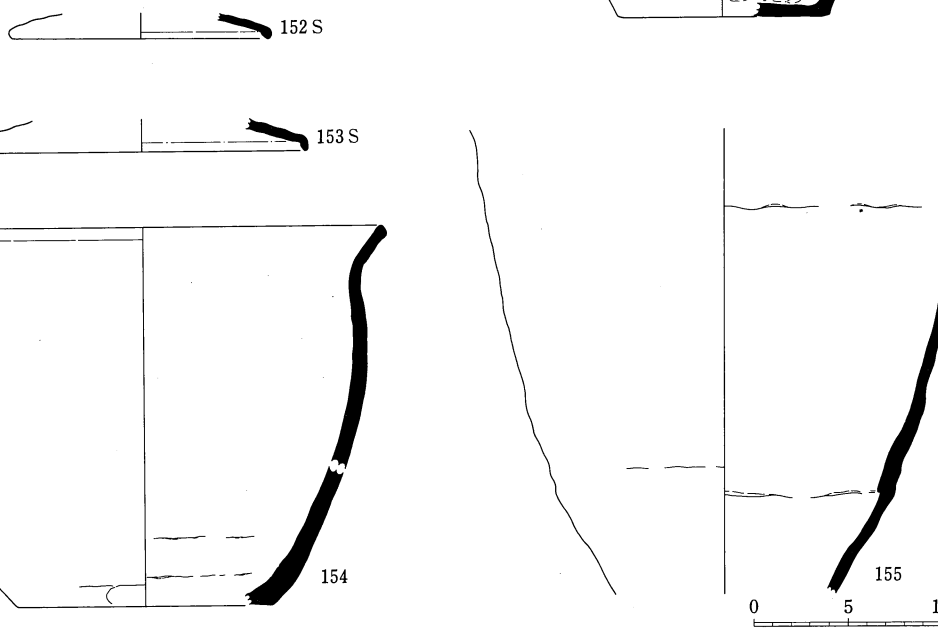
第59図　土器実測図(8)



第10号住居址

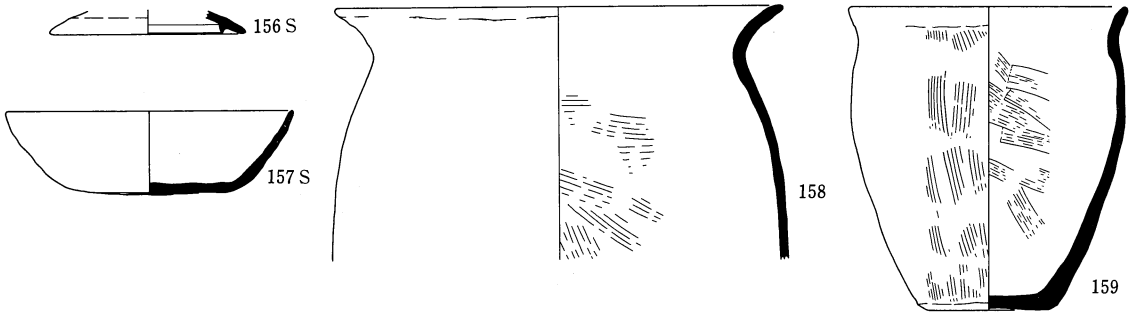


第11号住居址

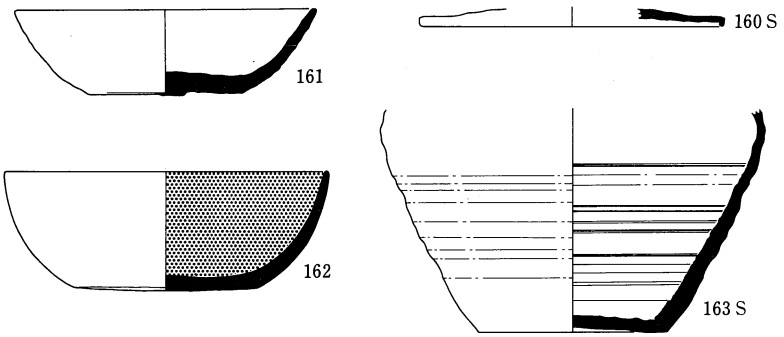


第60図　土器実測図(9)

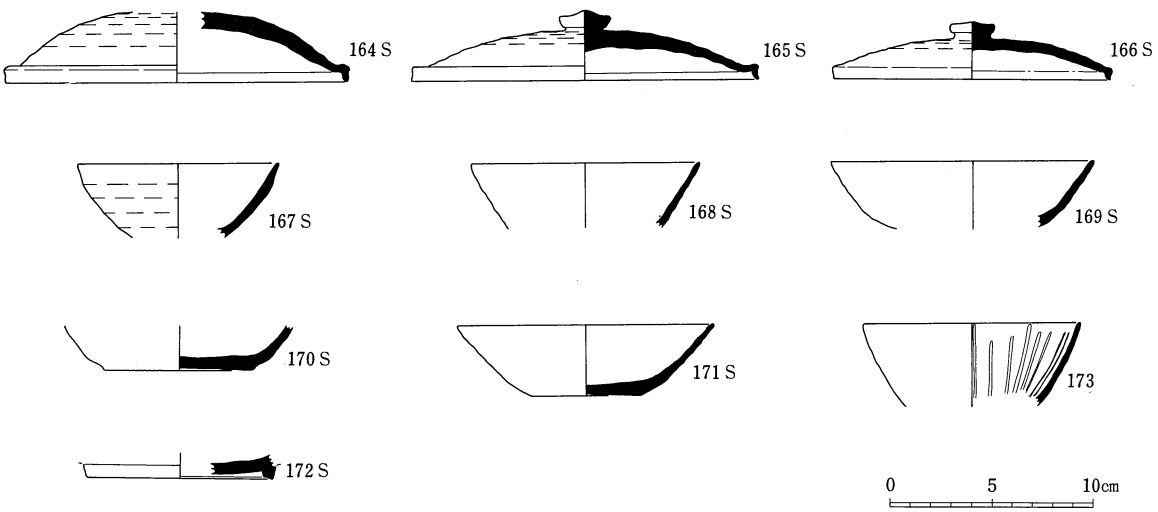
第12号住居址



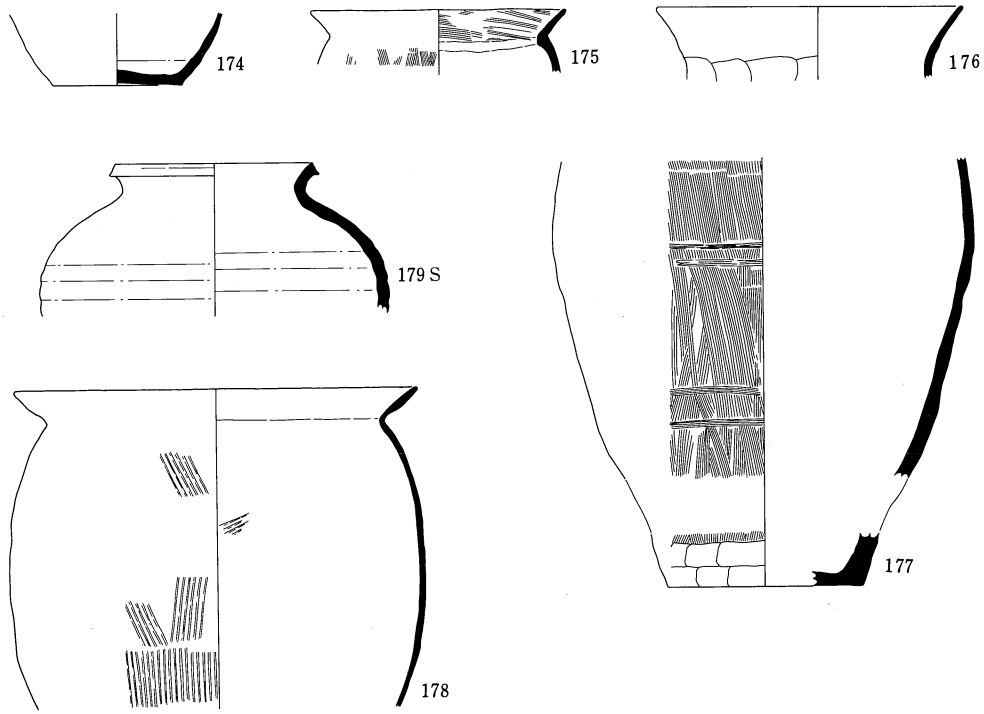
第13号住居址



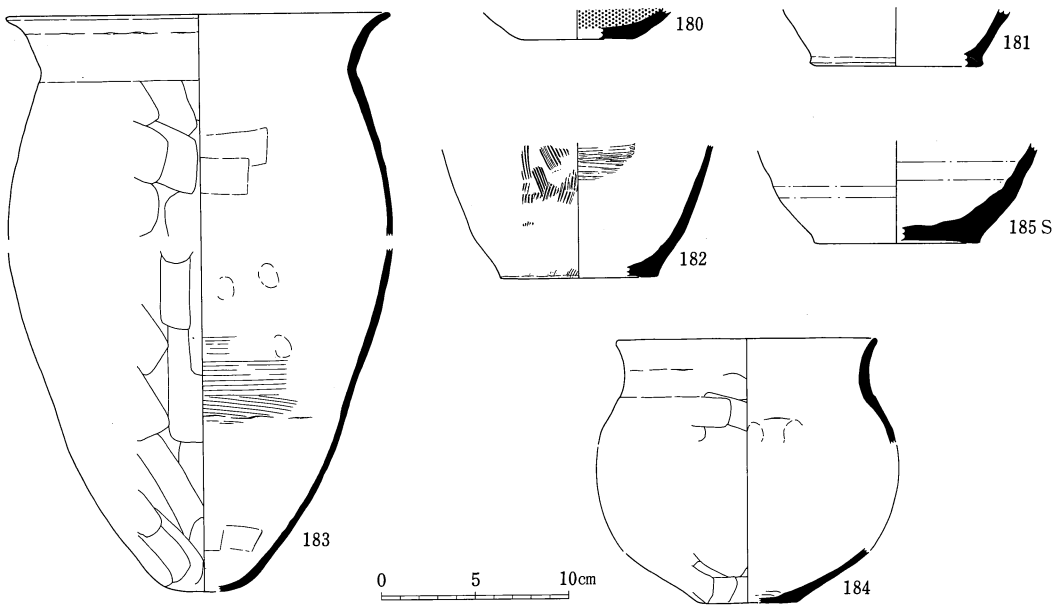
第14号住居址



第61図　土器実測図(10)

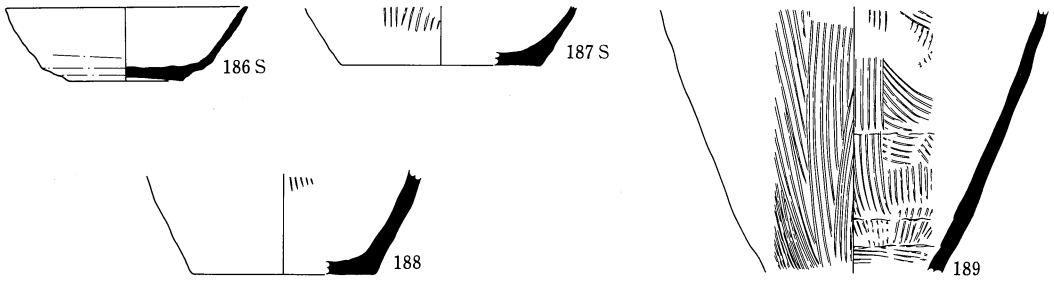


第16号住居址

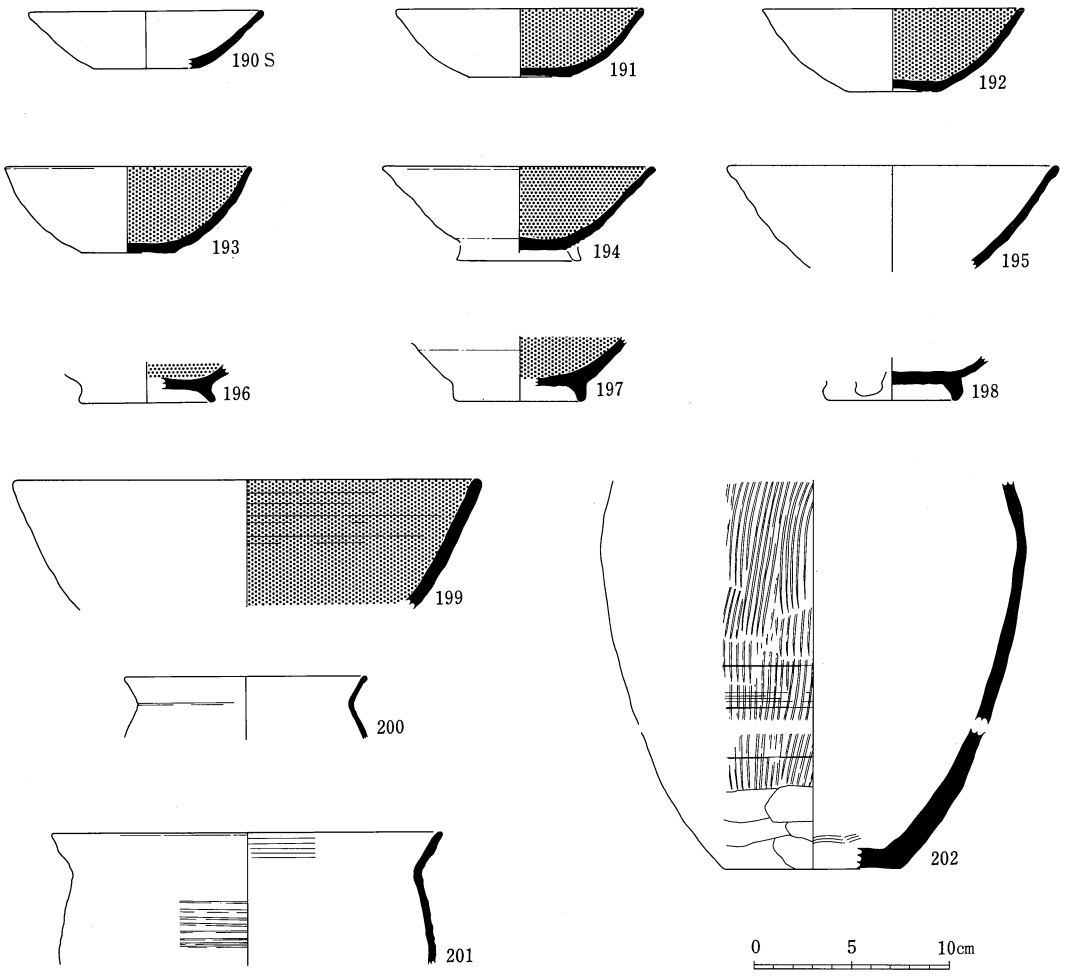


第62図　土器実測図(11)

第15号住居址

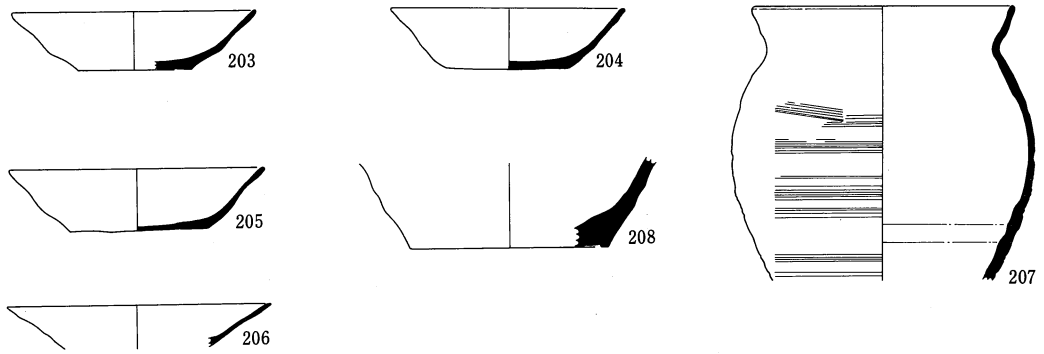


第17号住居址

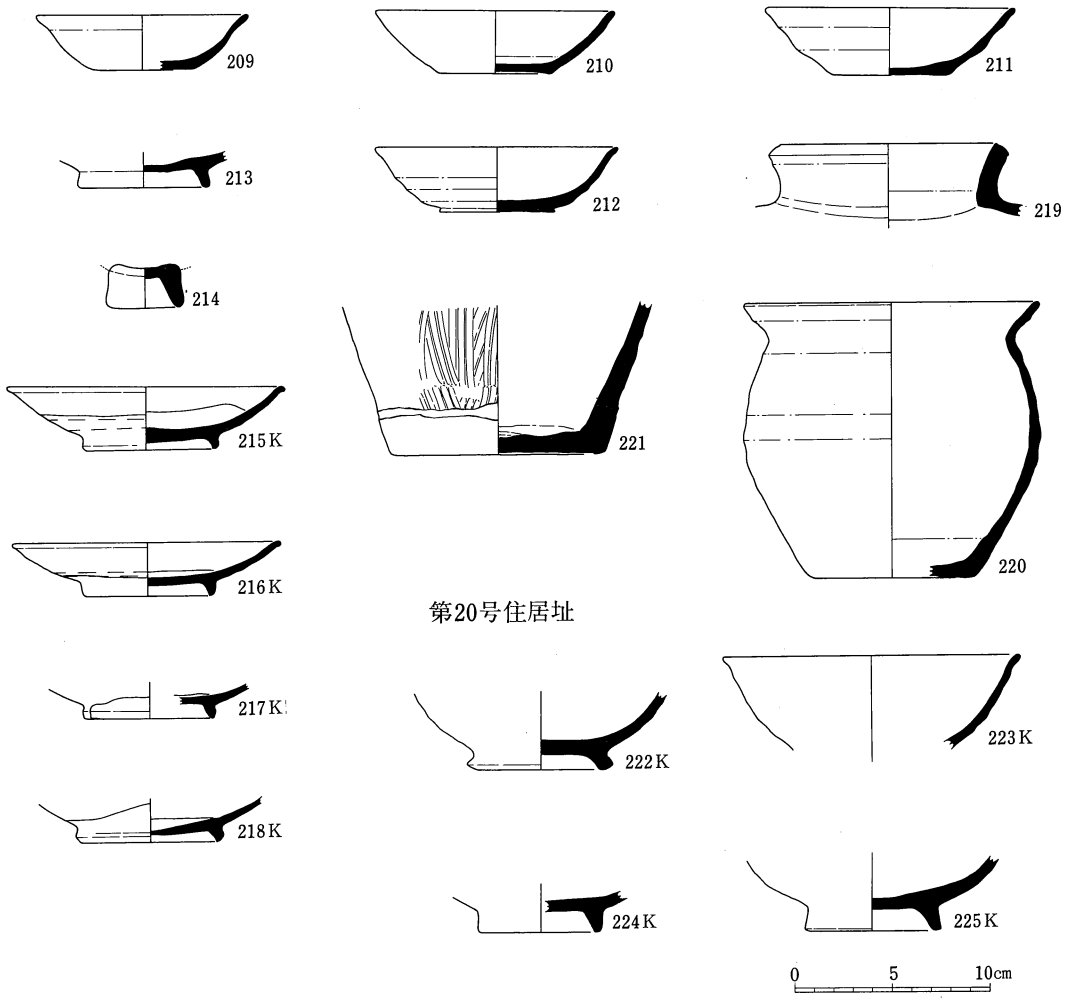


第63図　土器実測図(12)

第18号住居址

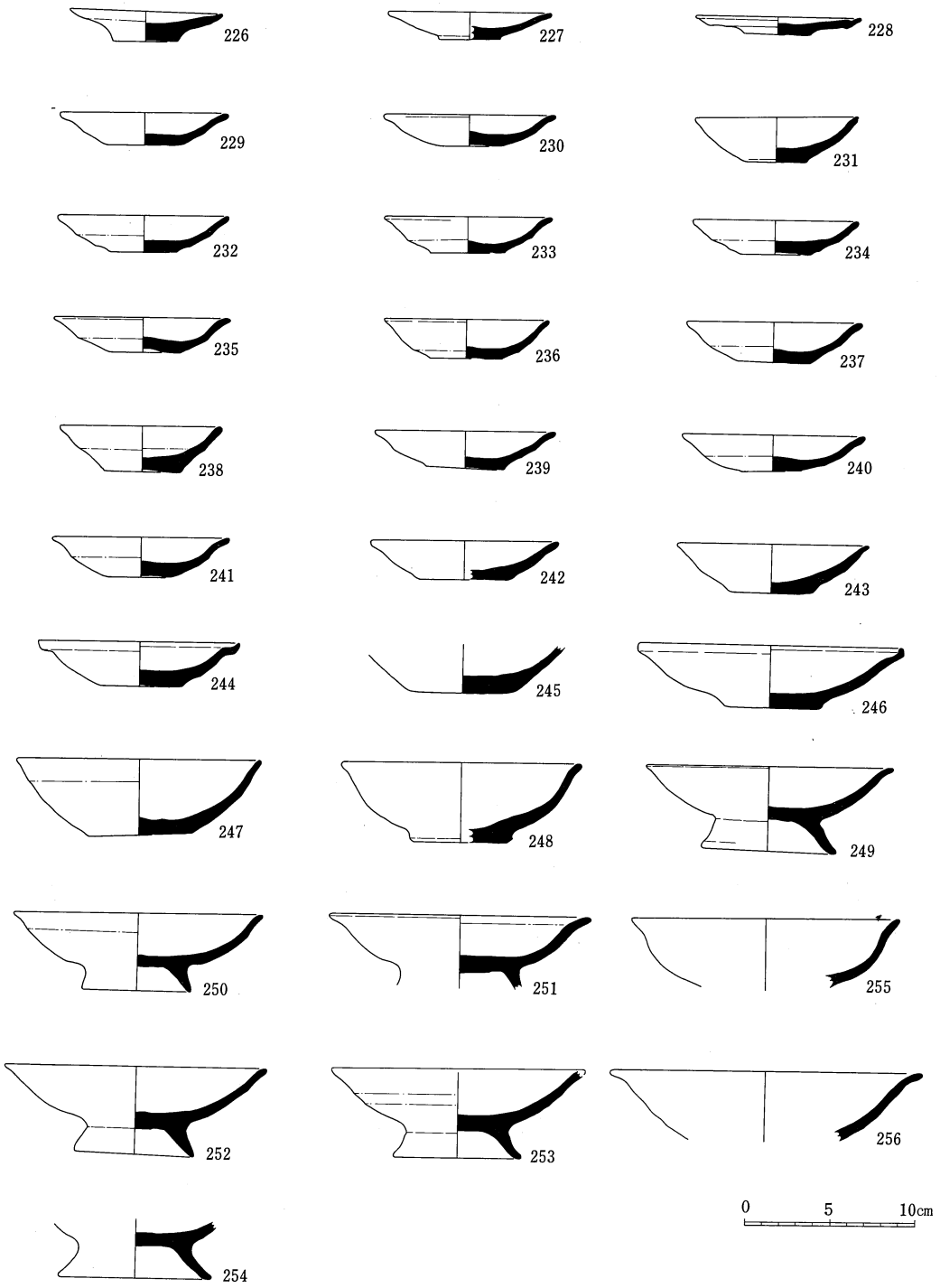


第19号住居址



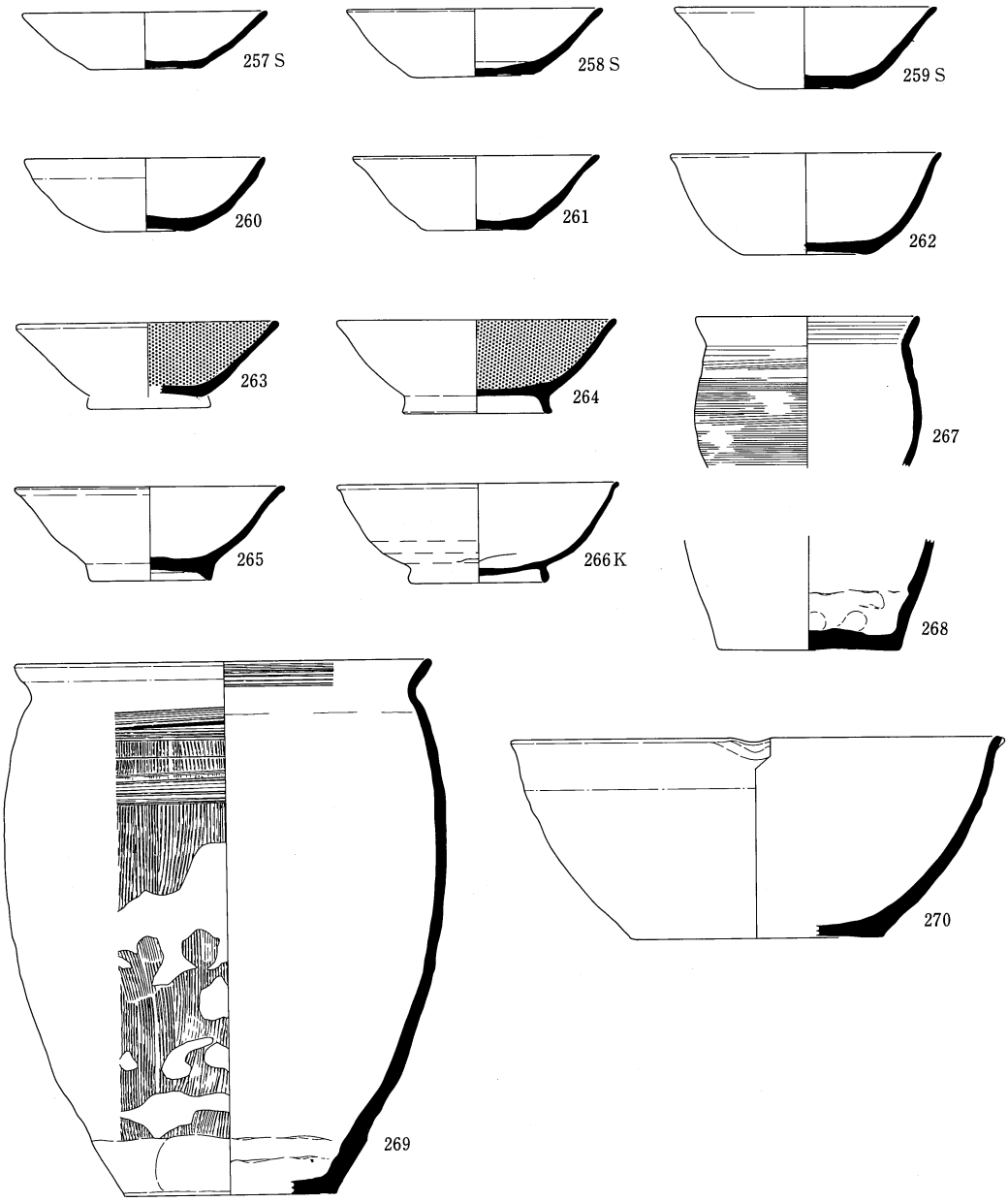
第20号住居址

第64図　土器実測図(13)

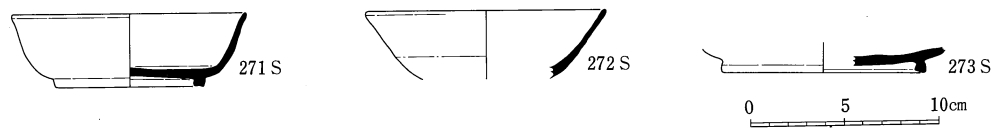


第65図　土器実測図(14)

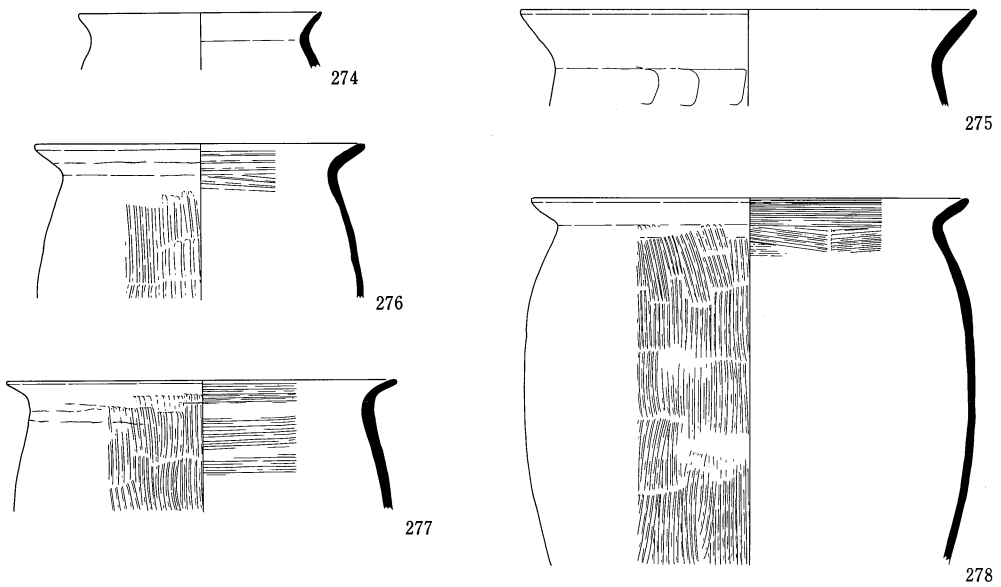
第21号住居址



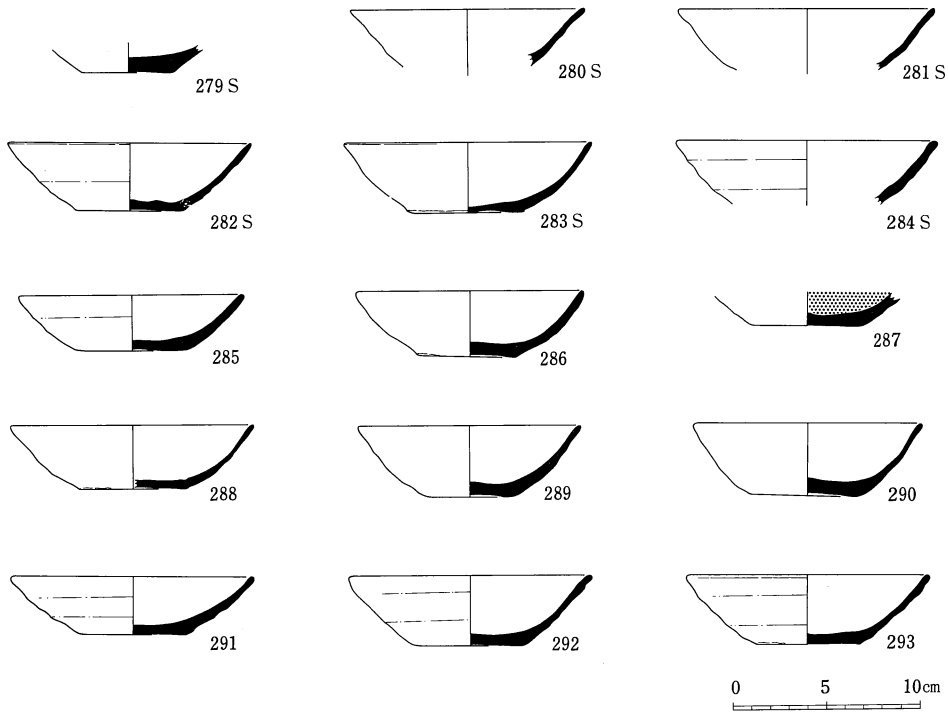
第22号住居址



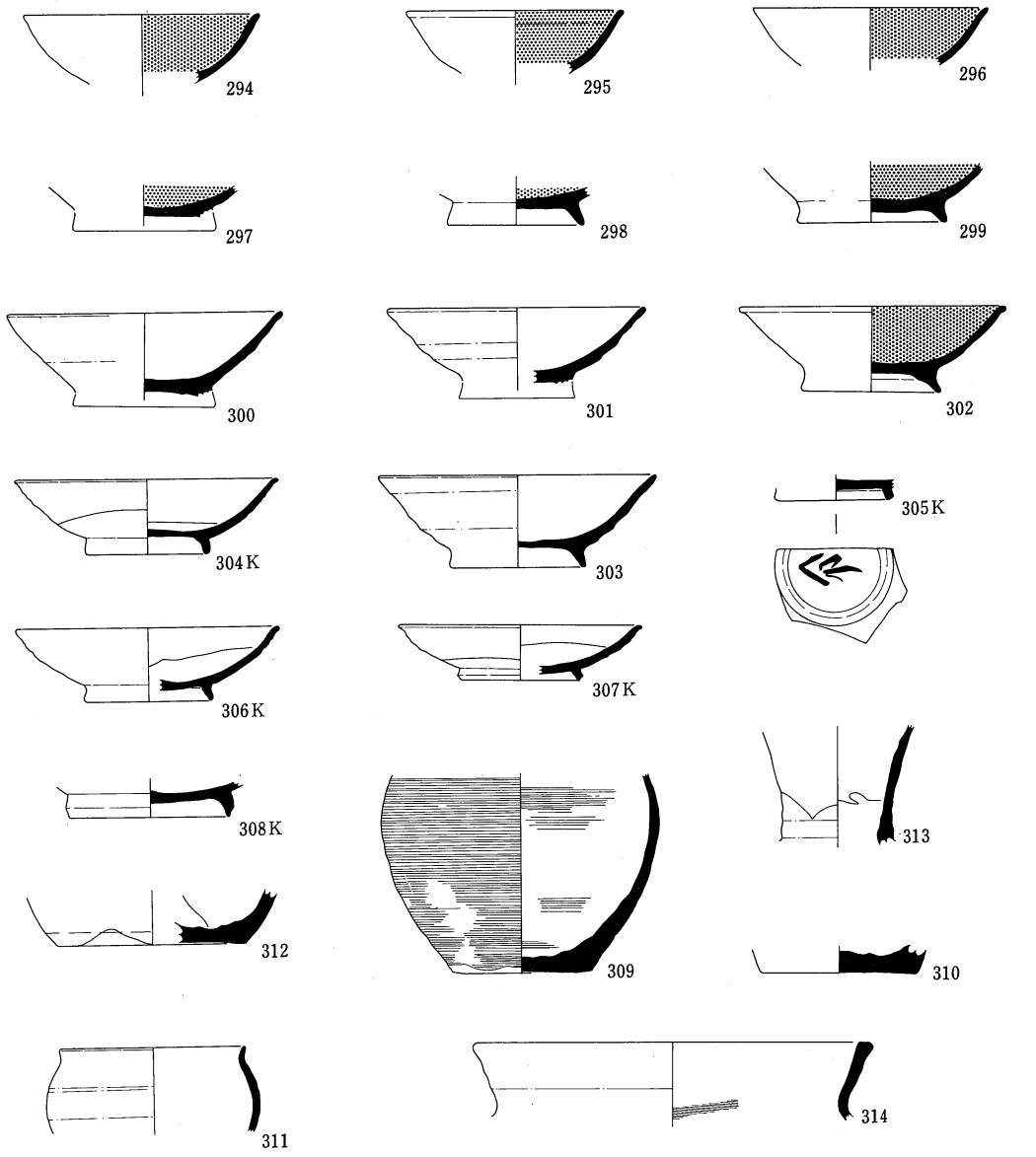
第66図　土器実測図(15)



第23号住居址

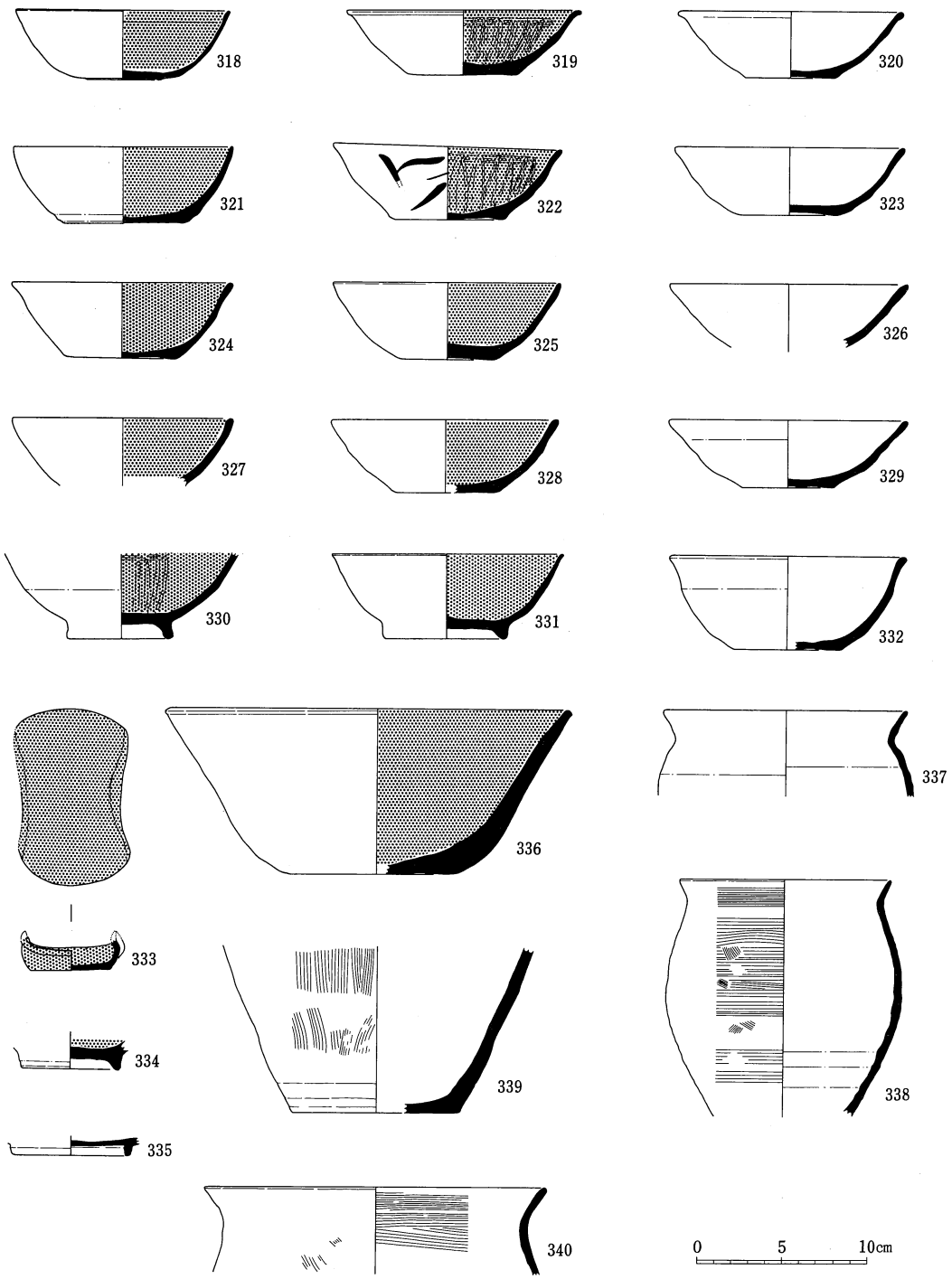


第67図　土器実測図(16)



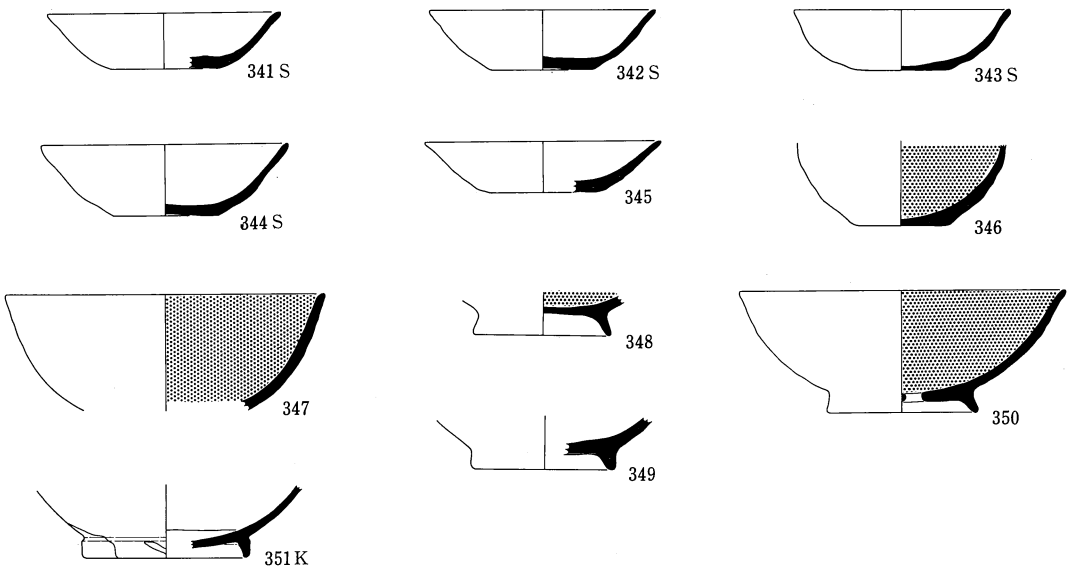
第24号住居址

第68図　土器実測図(17)

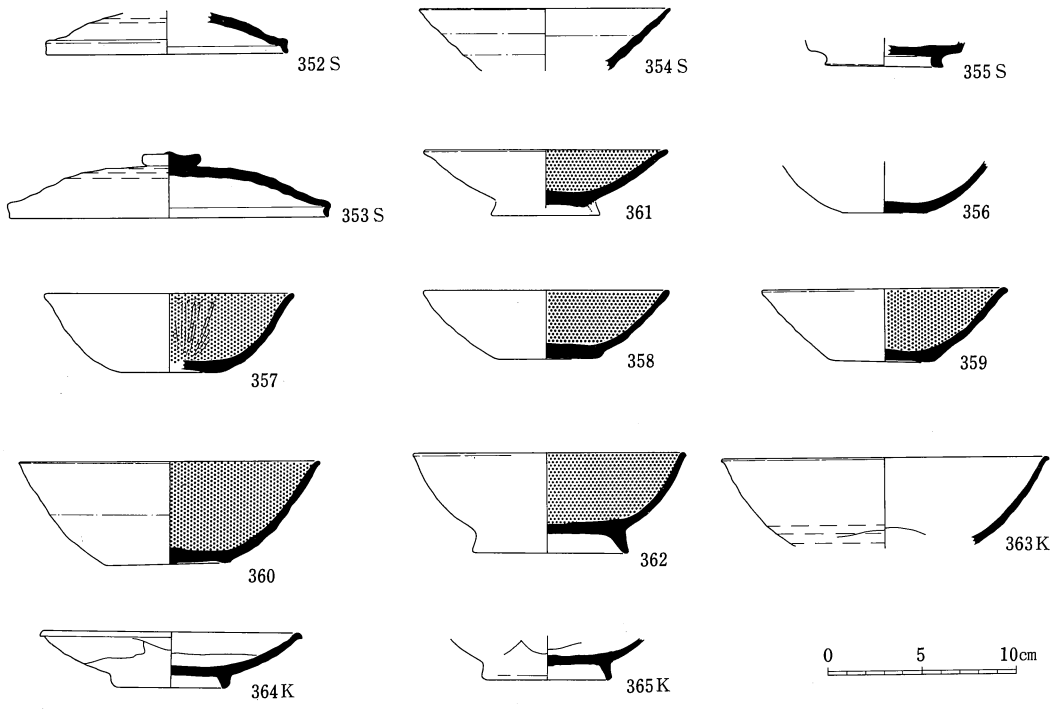


第69図　土器実測図(18)

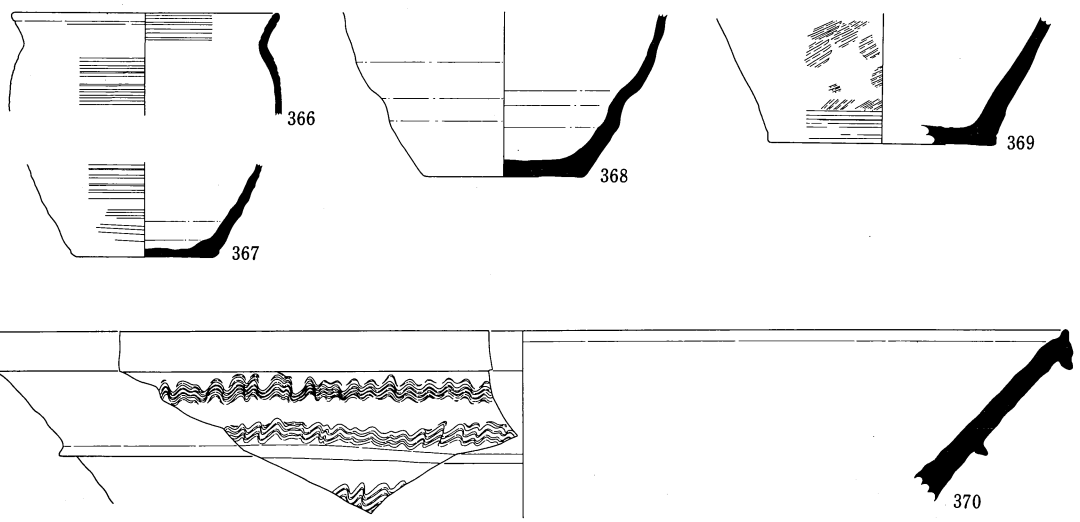
第25号住居址



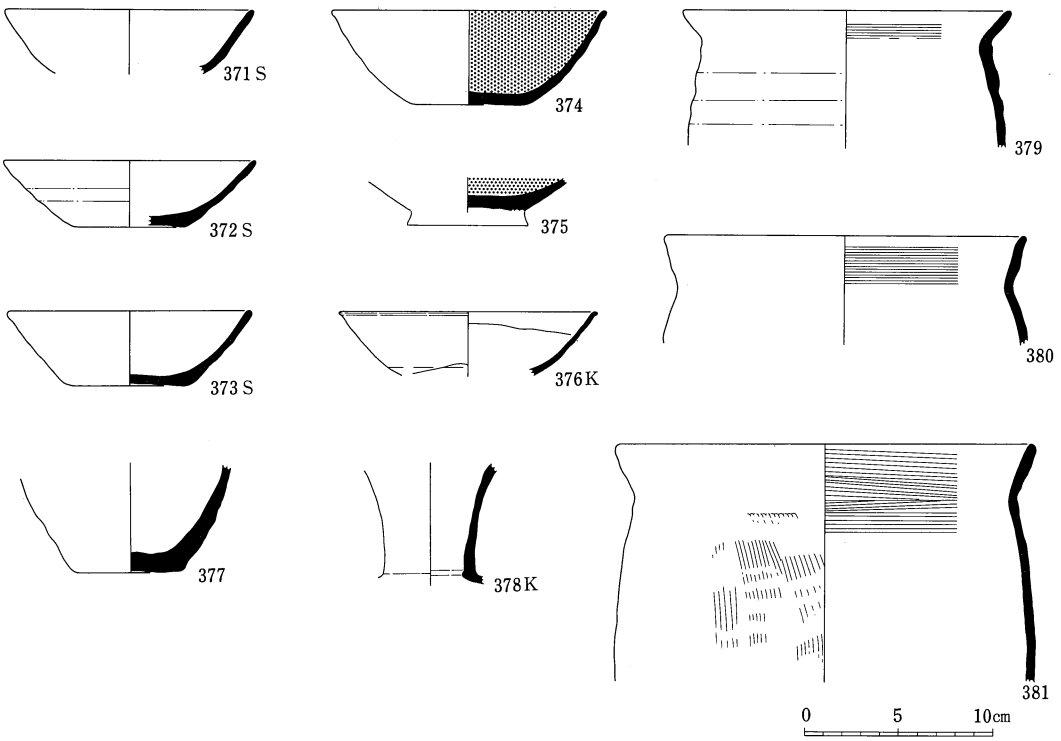
第26号住居址



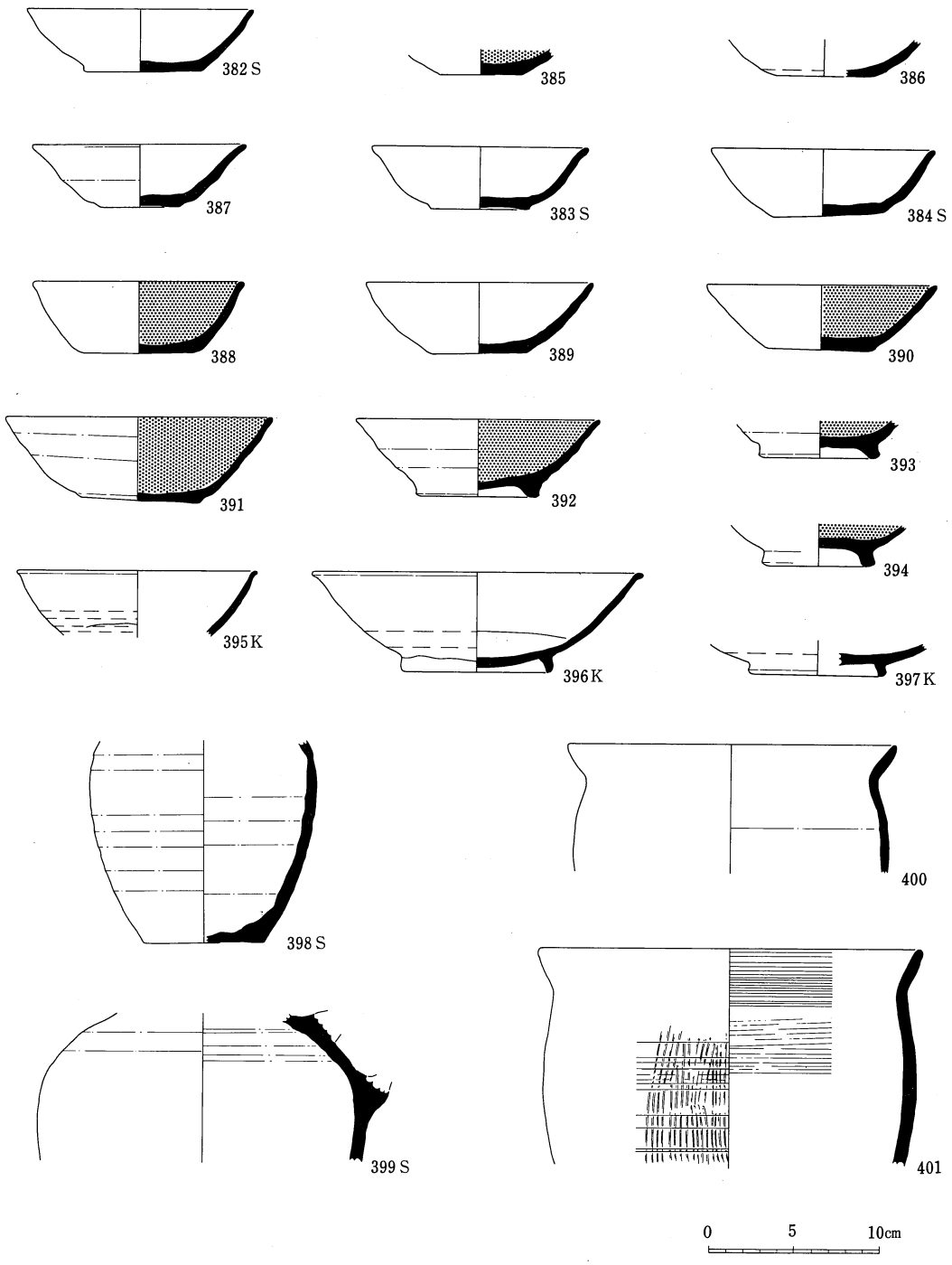
第70図　土器実測図(19)



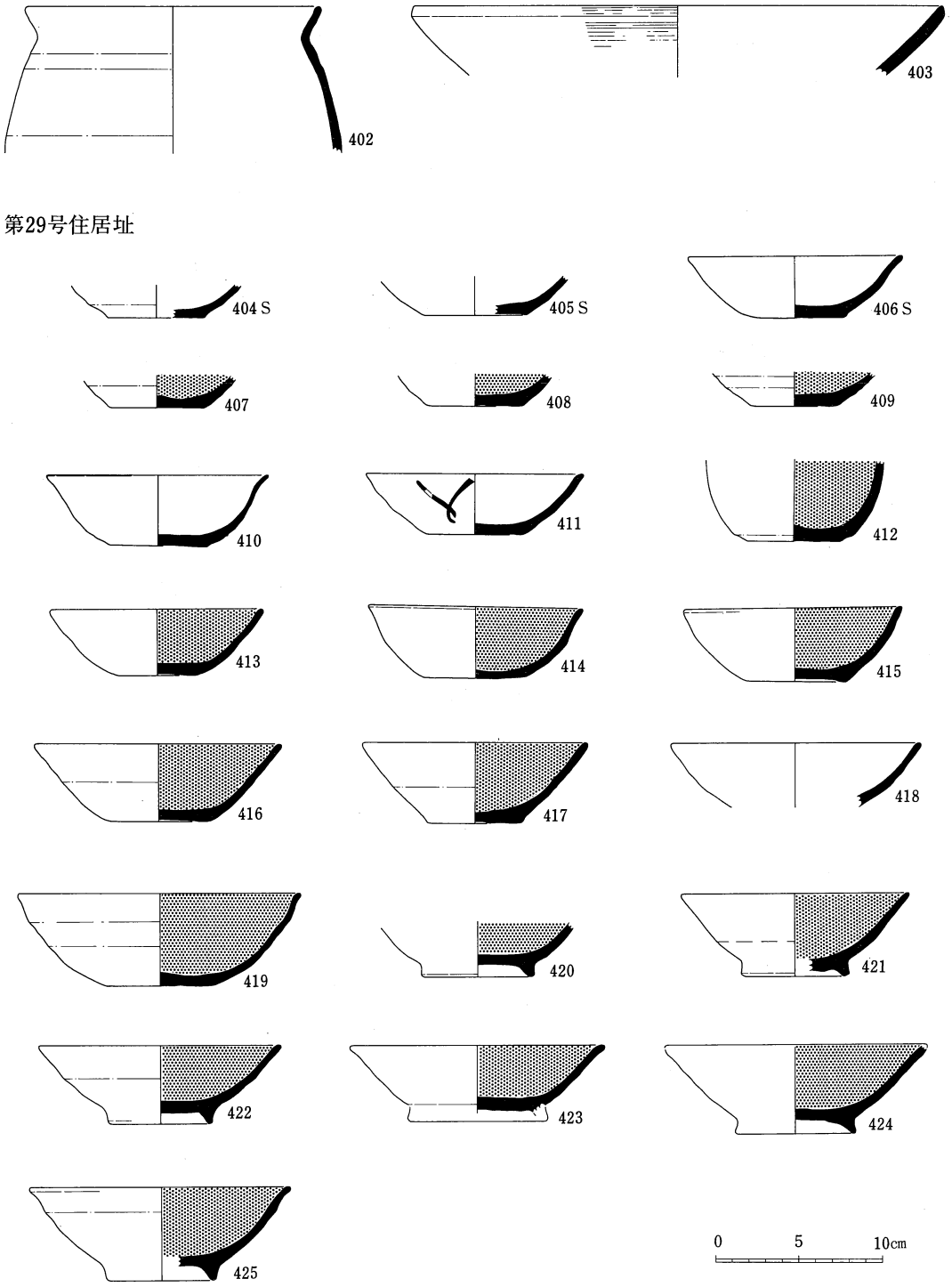
第27号住居址



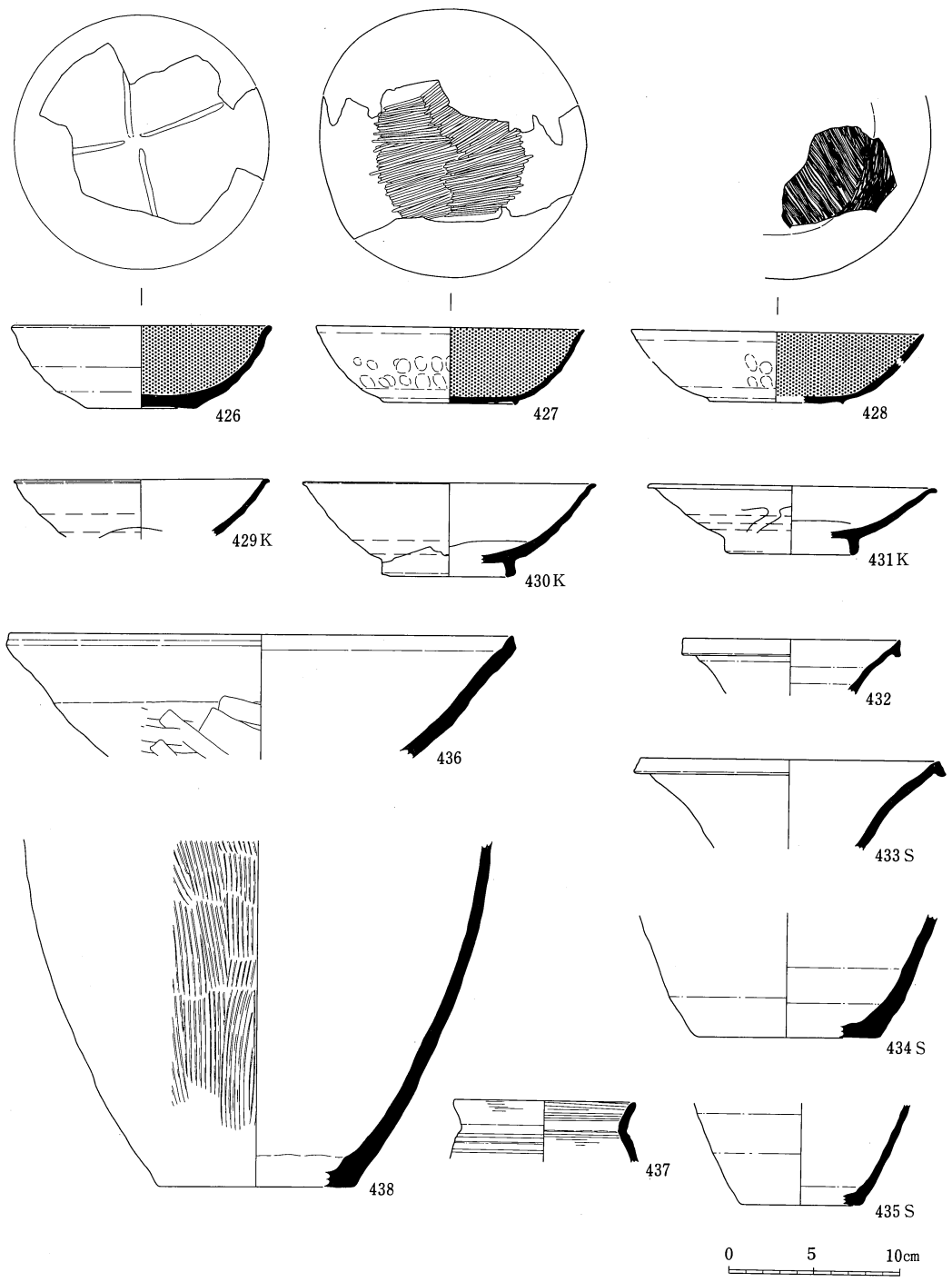
第71図　土器実測図(20)



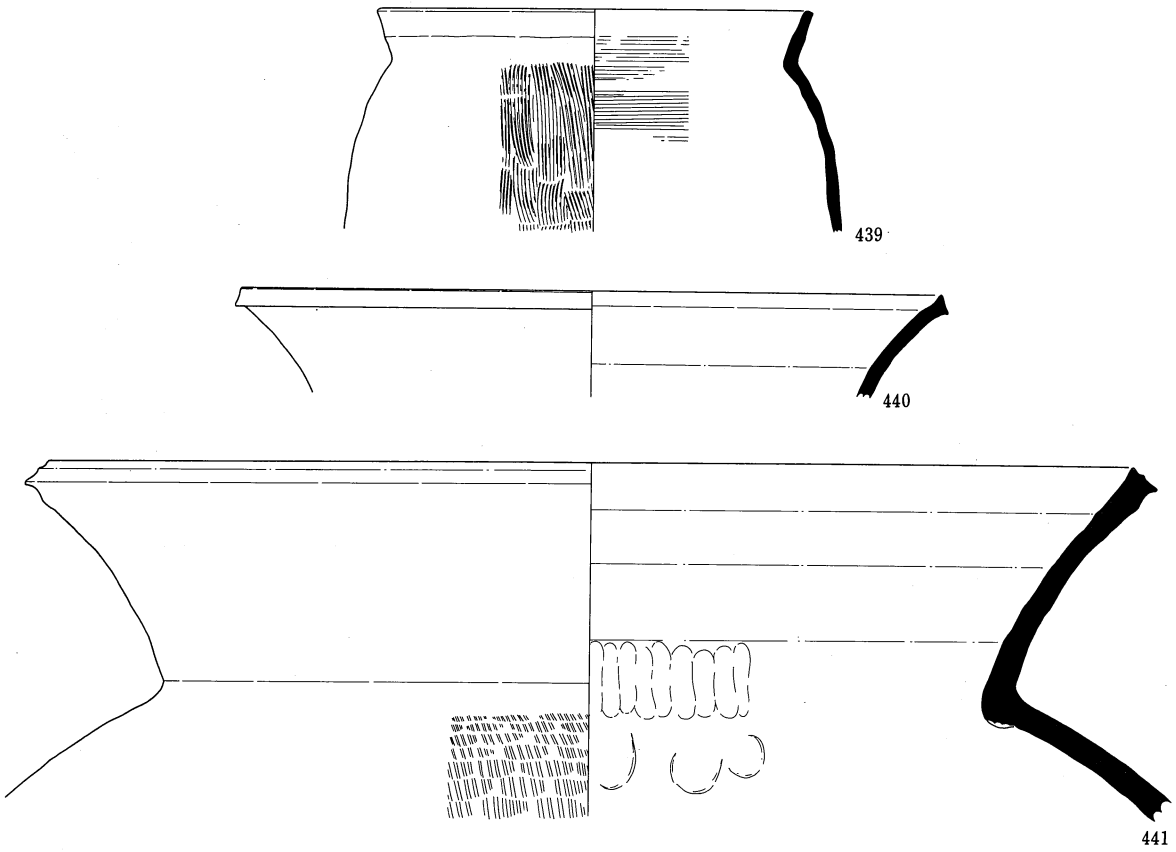
第72図　土器実測図(21)



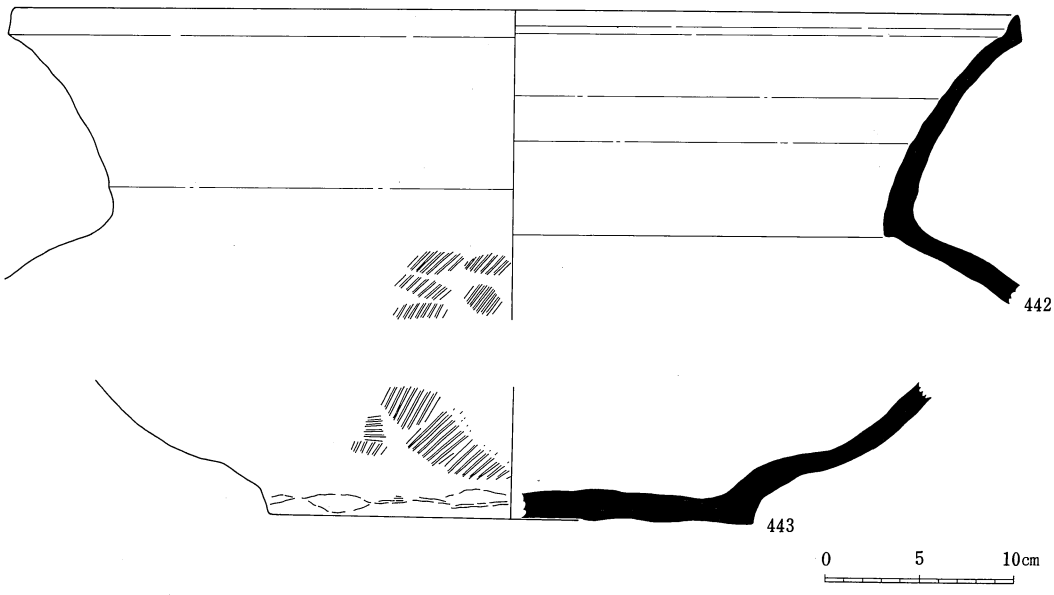
第73図　土器実測図(22)



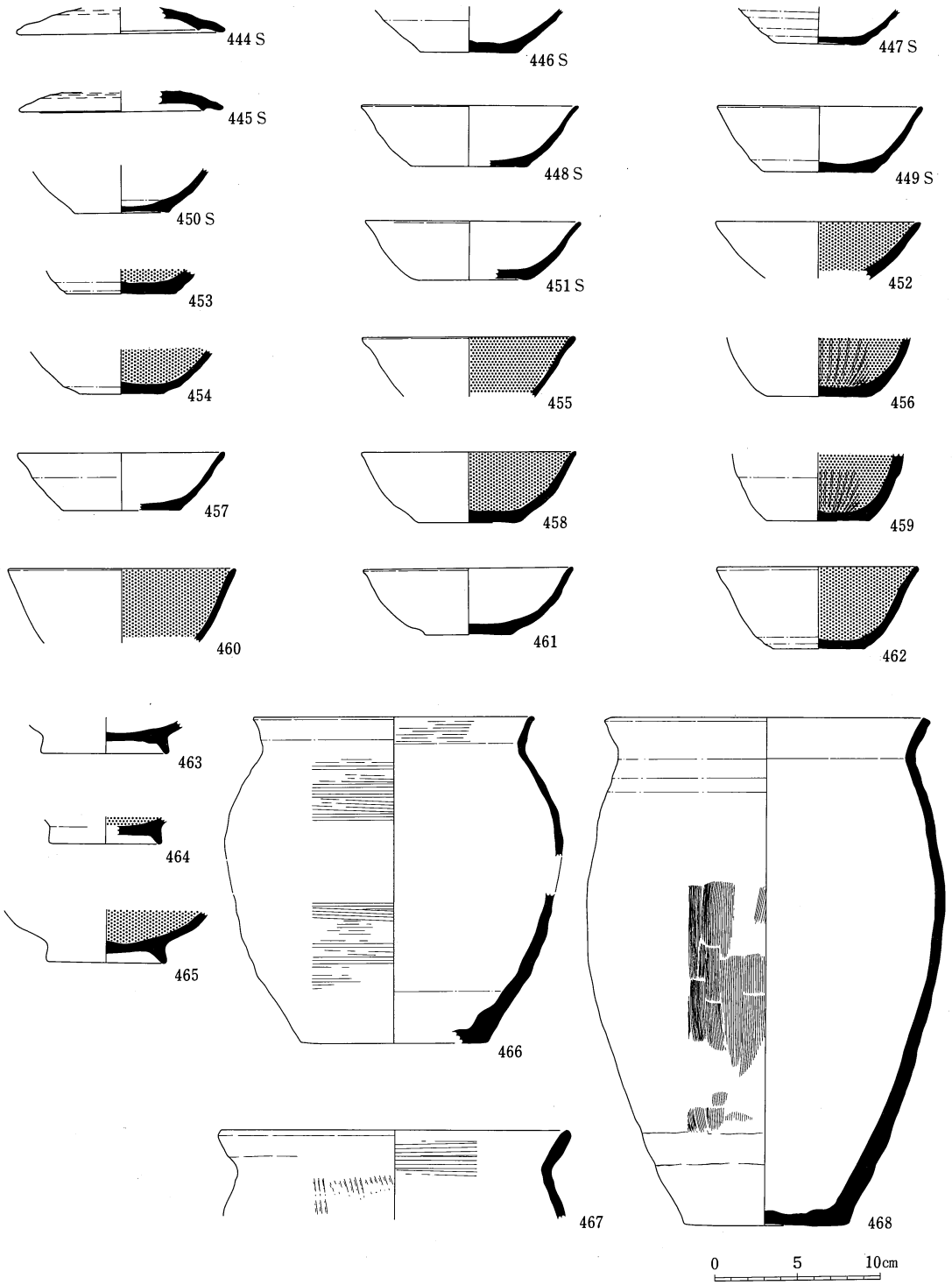
第74図　土器実測図(23)



第30号住居址

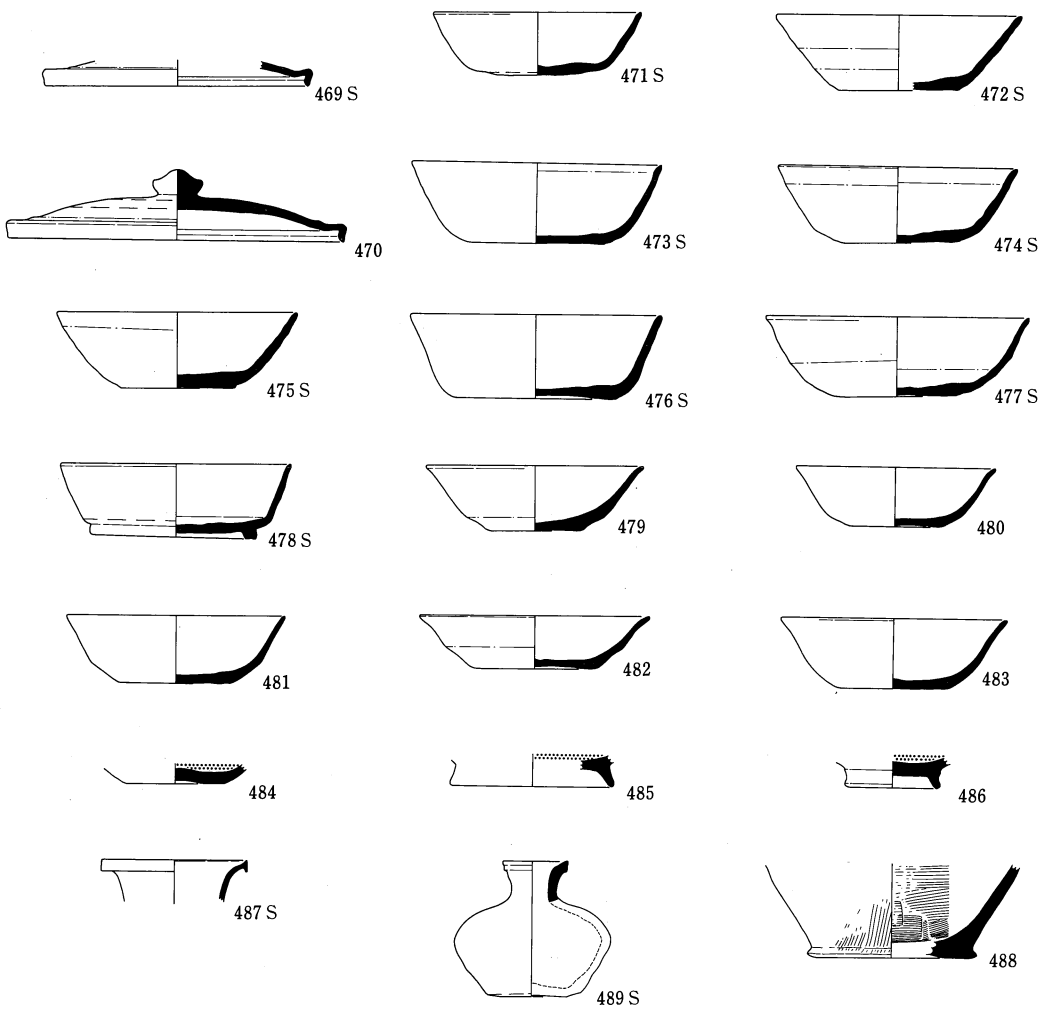


第75図　土器実測図(24)

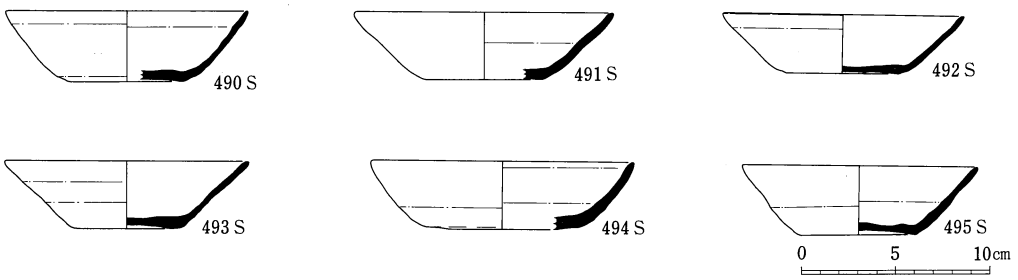


第76図　土器実測図(25)

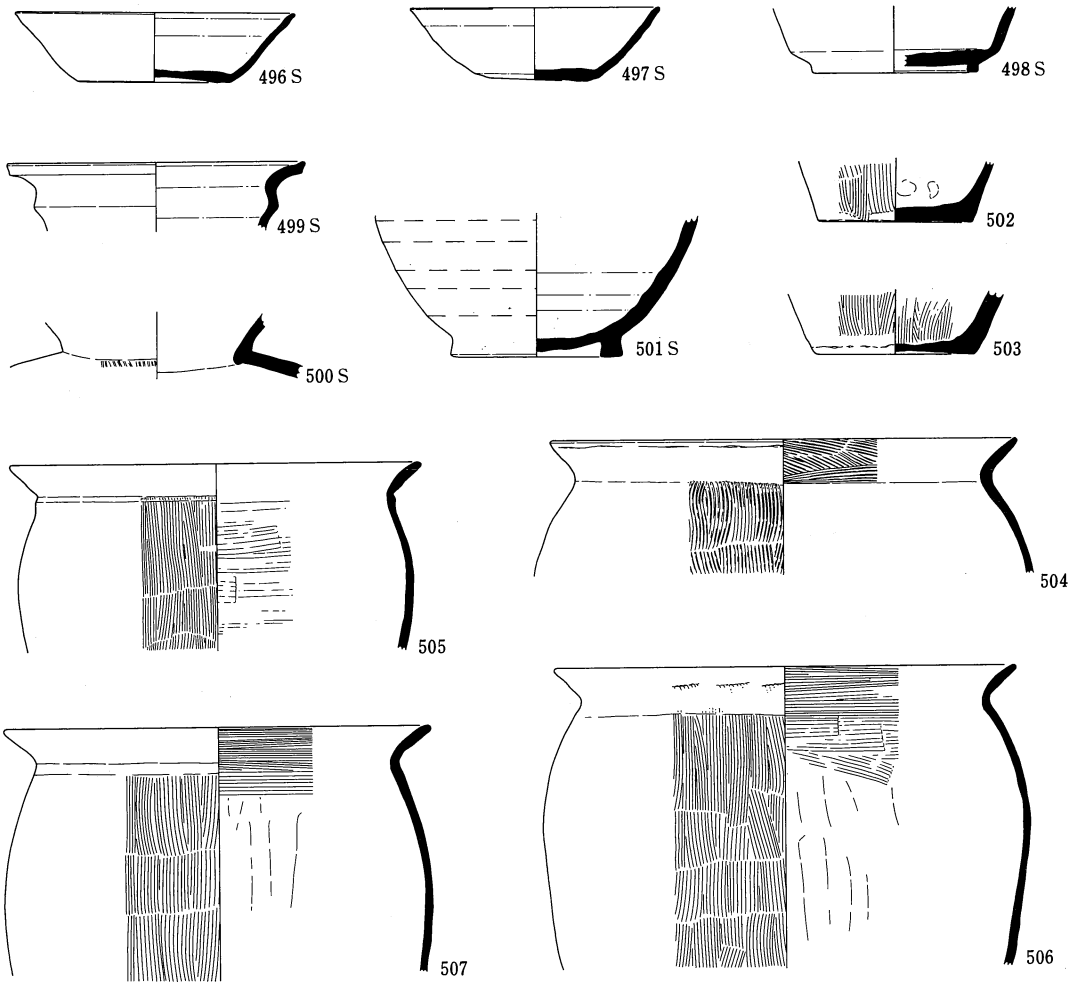
第31号住居址



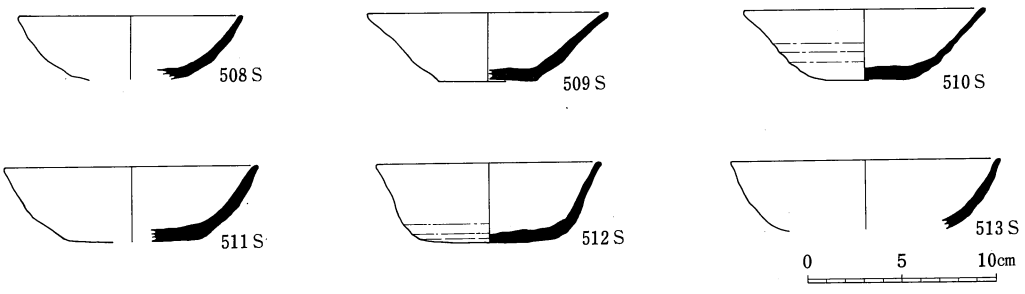
第32号住居址



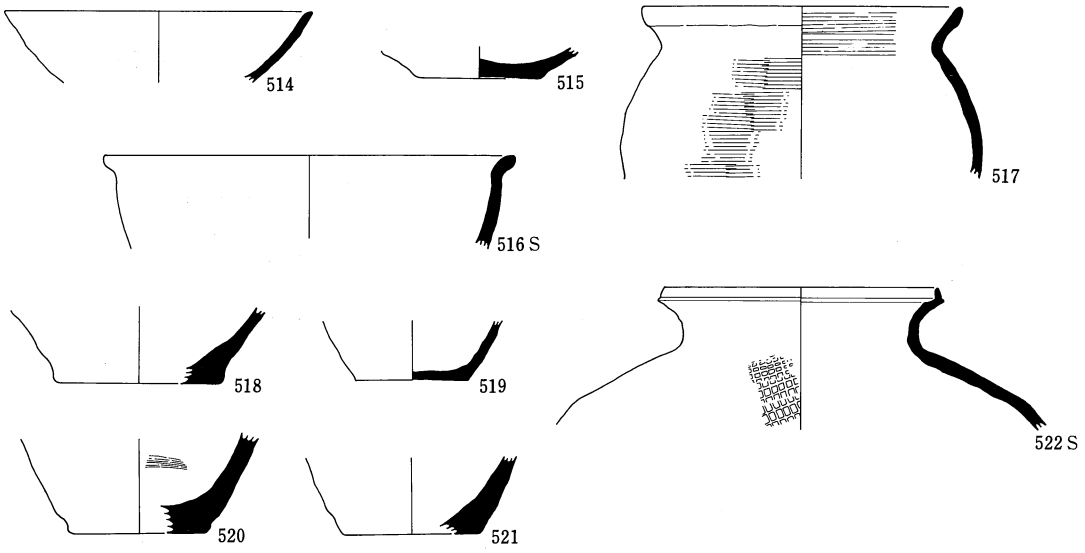
第77図　土器実測図(26)



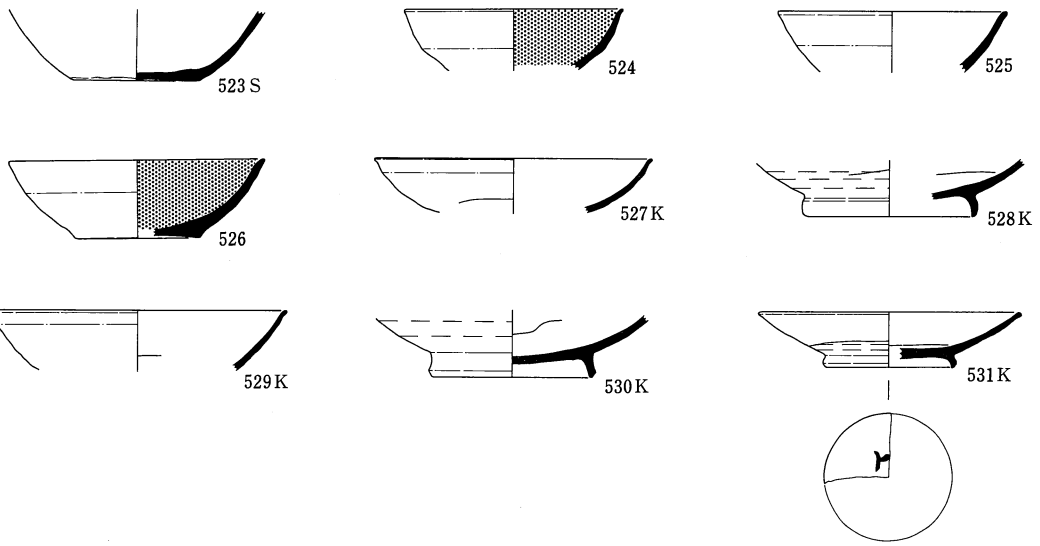
第33号住居址



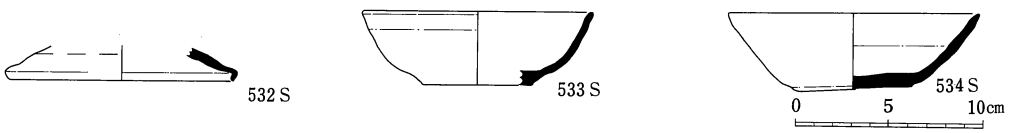
第78図　土器実測図(27)



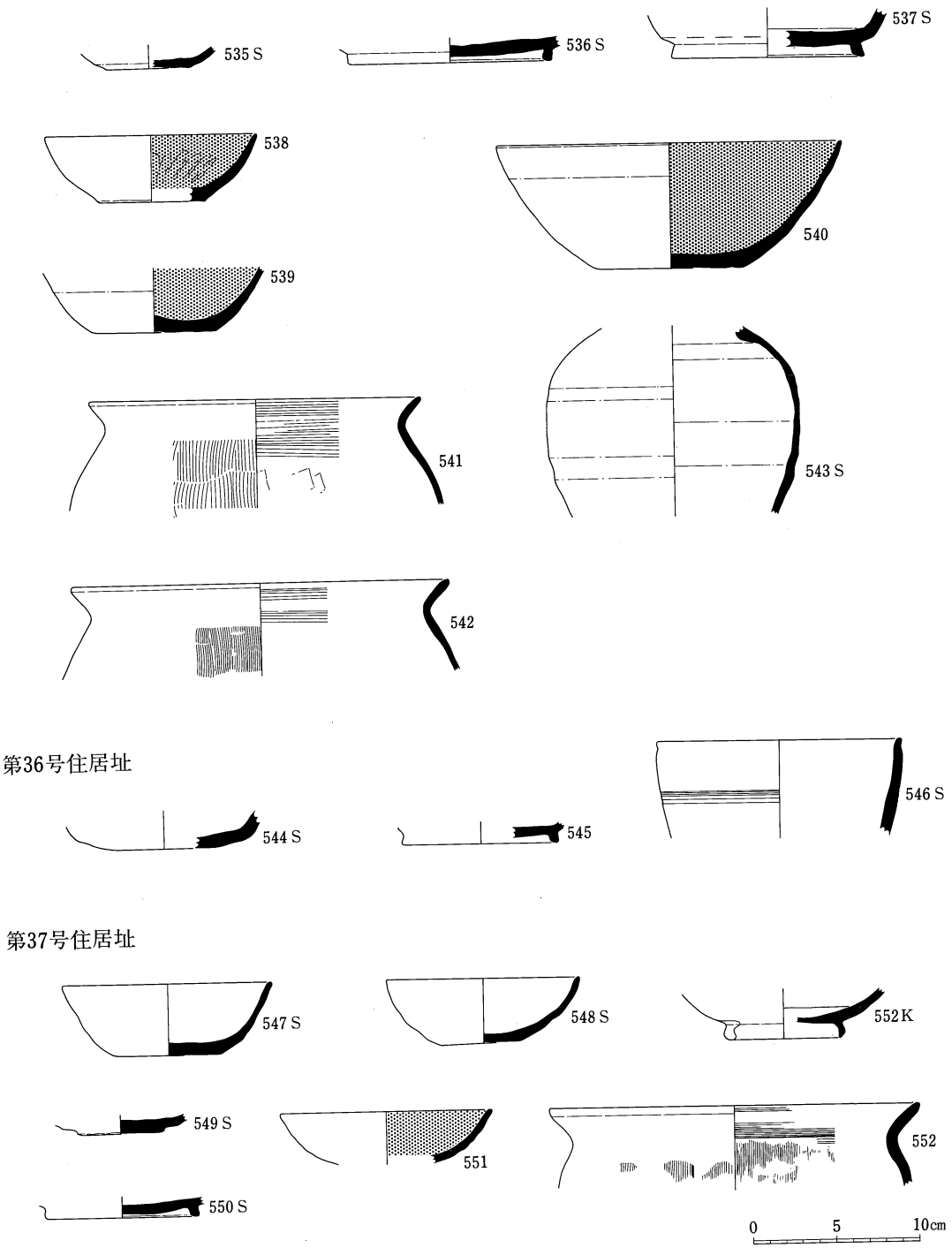
第34号住居址



第35号住居址

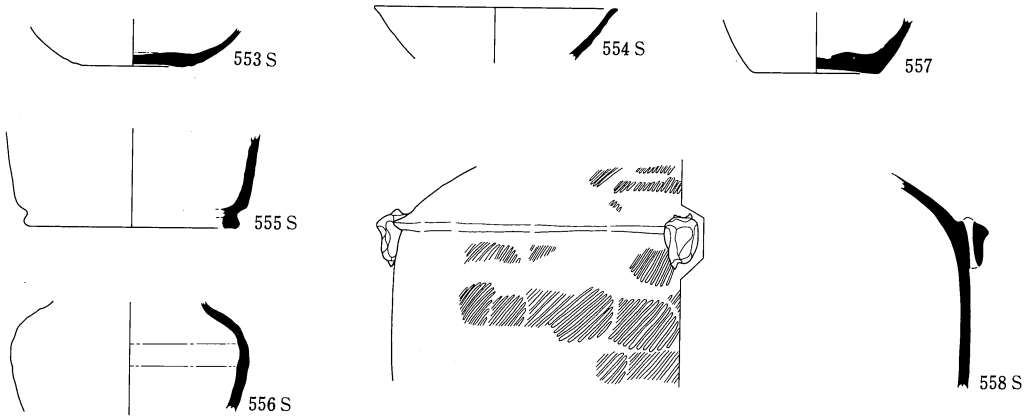


第79図　土器実測図(28)



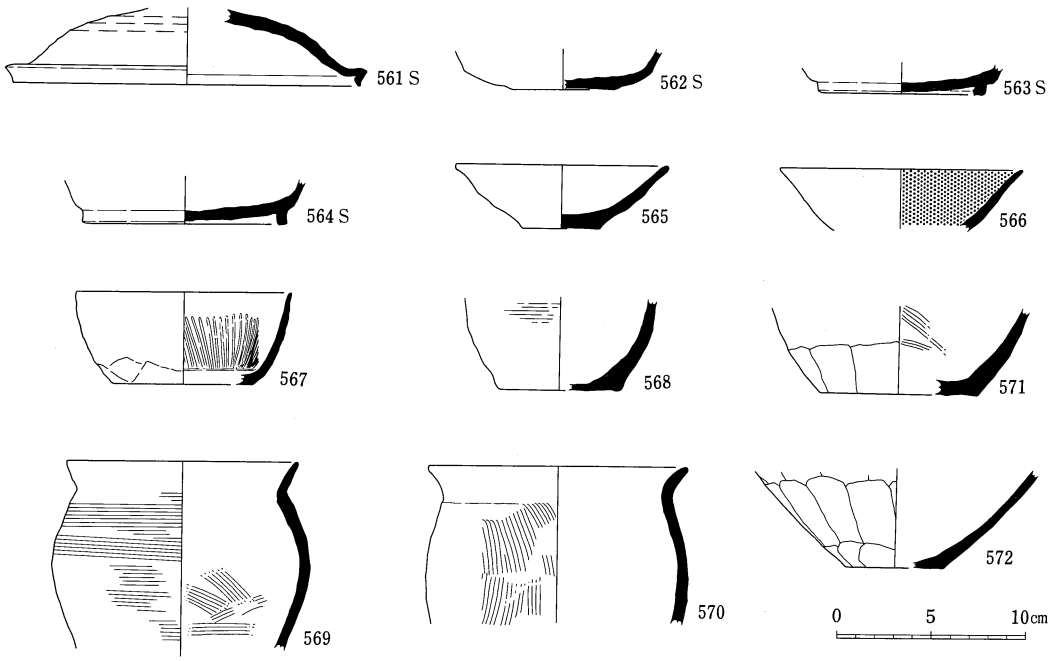
第80図　土器実測図(29)

第38号住居址

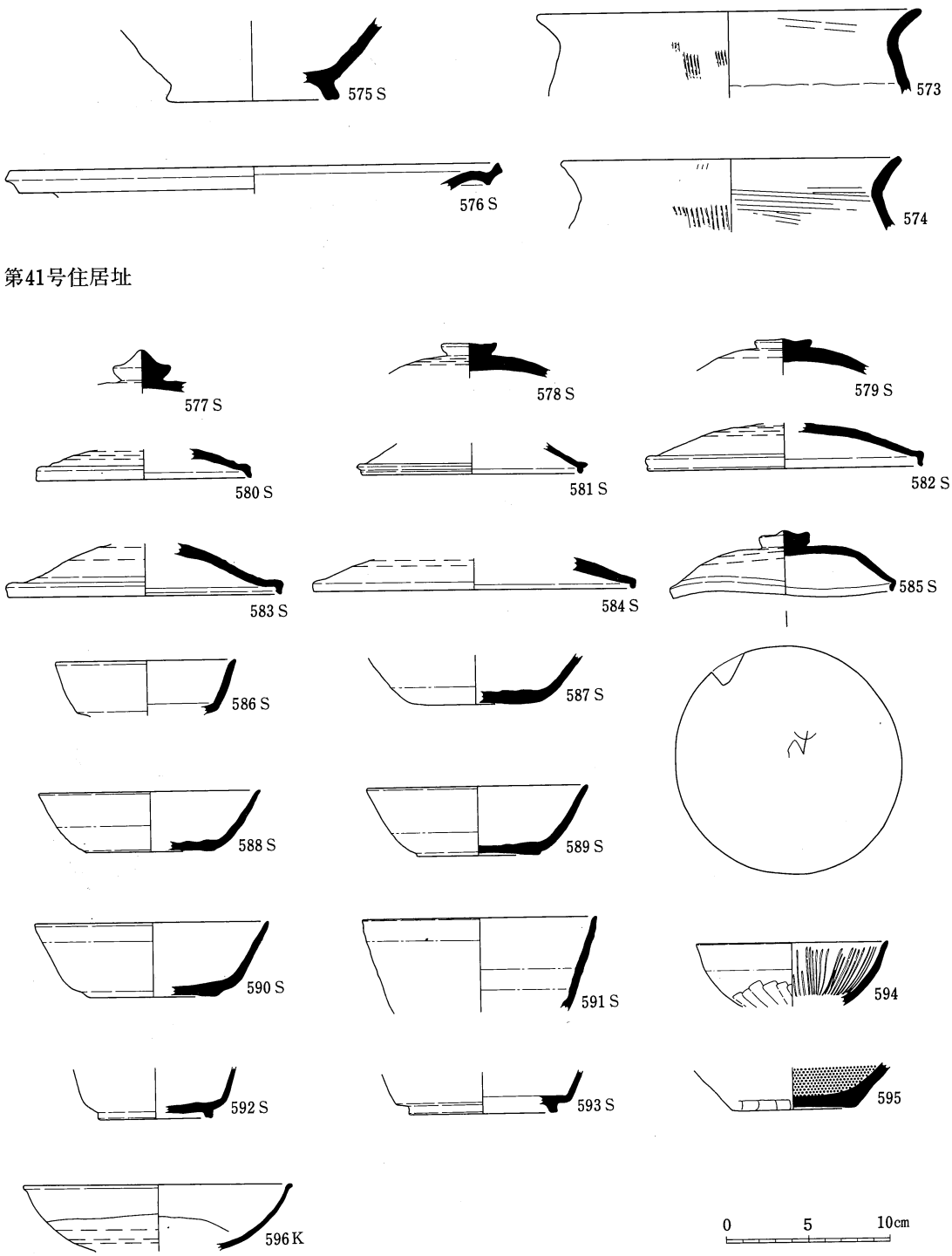


第39号住居址

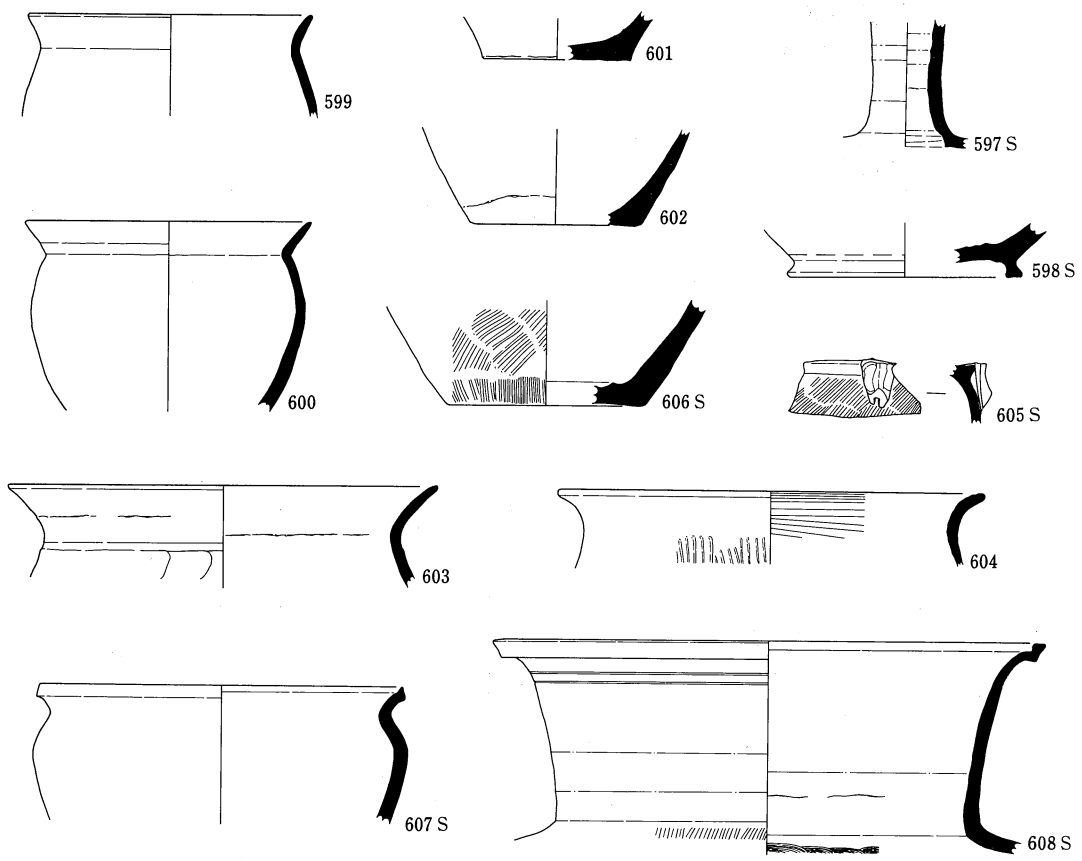
第40号住居址



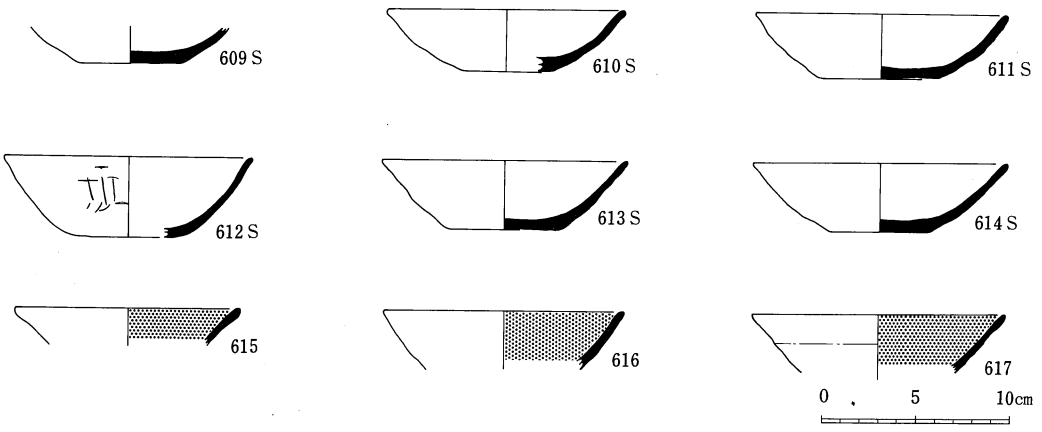
第81図　土器実測図(30)



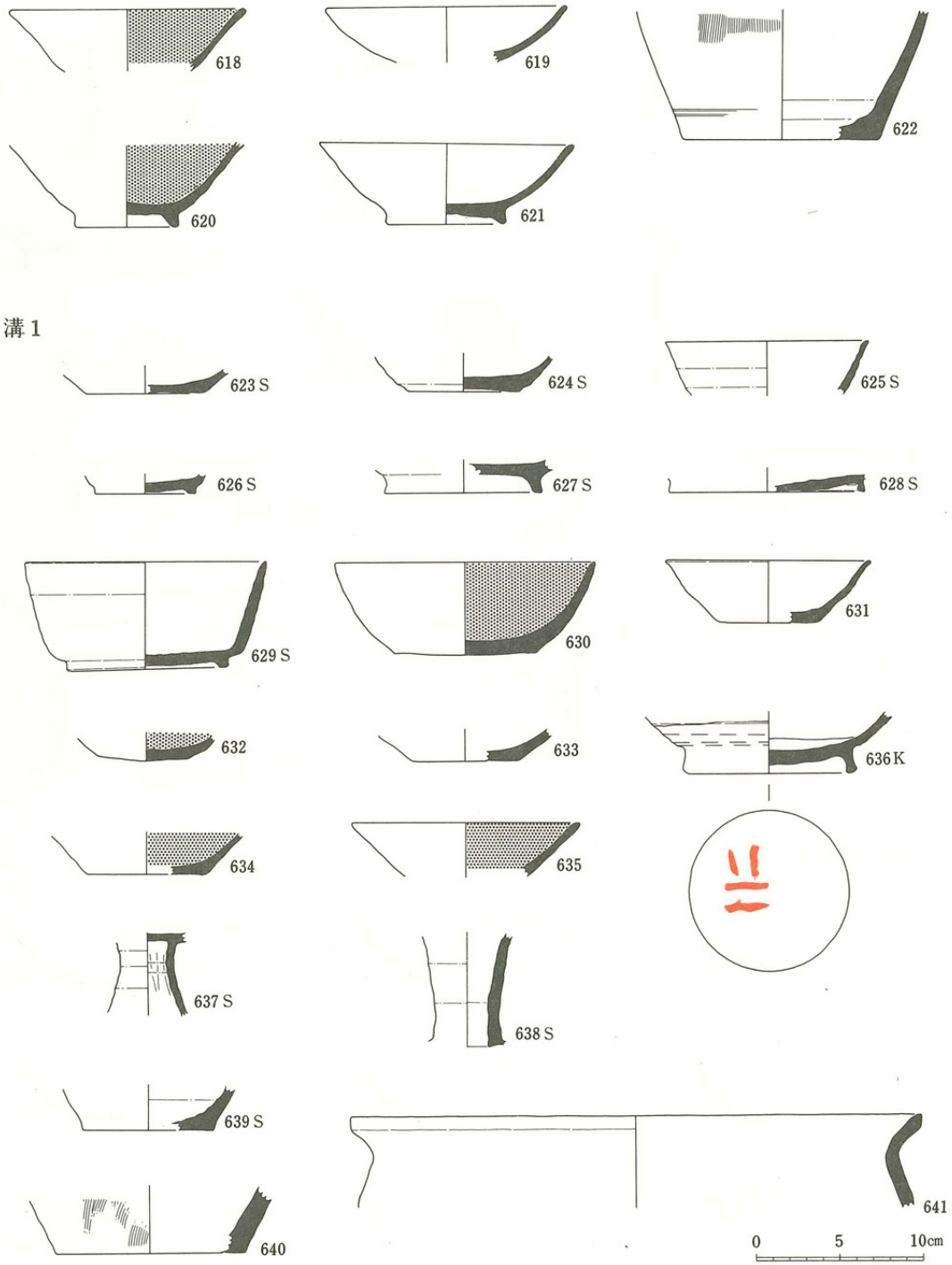
第82図　土器実測図(31)



第42号住居址



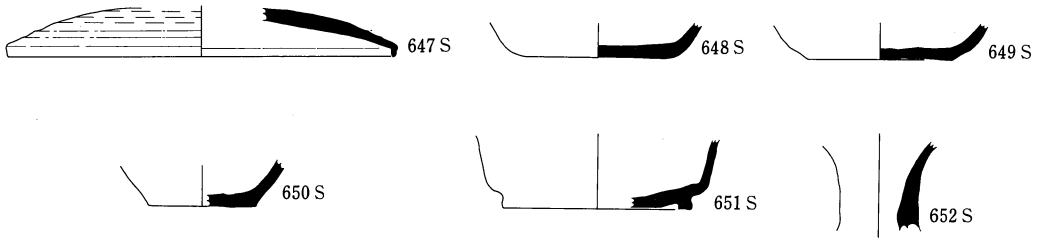
第83図　土器実測図(32)



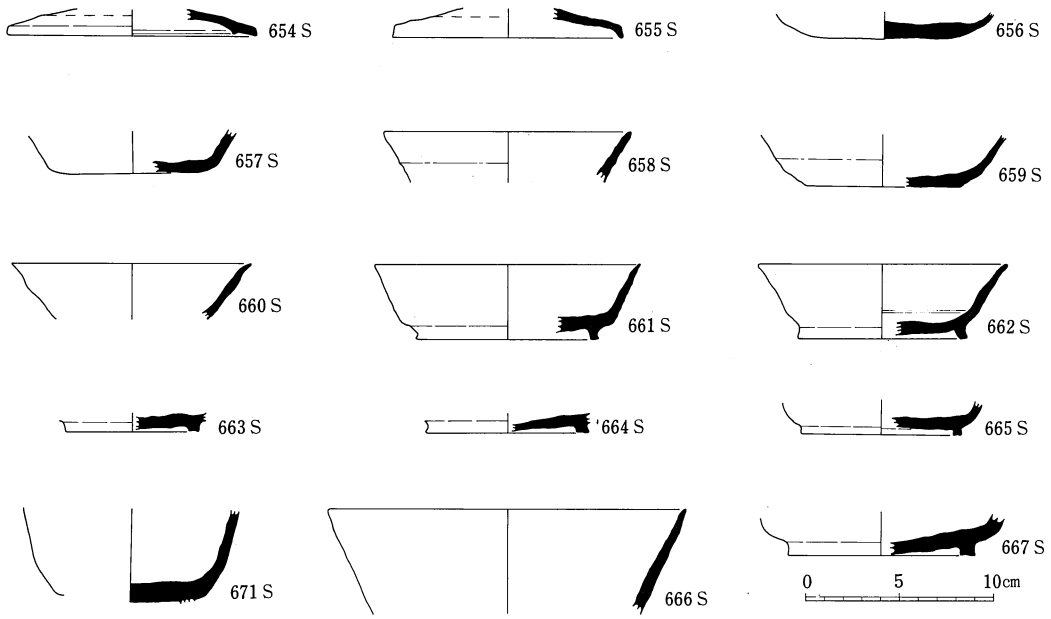
第84図　土器実測図(33)

建物址 7

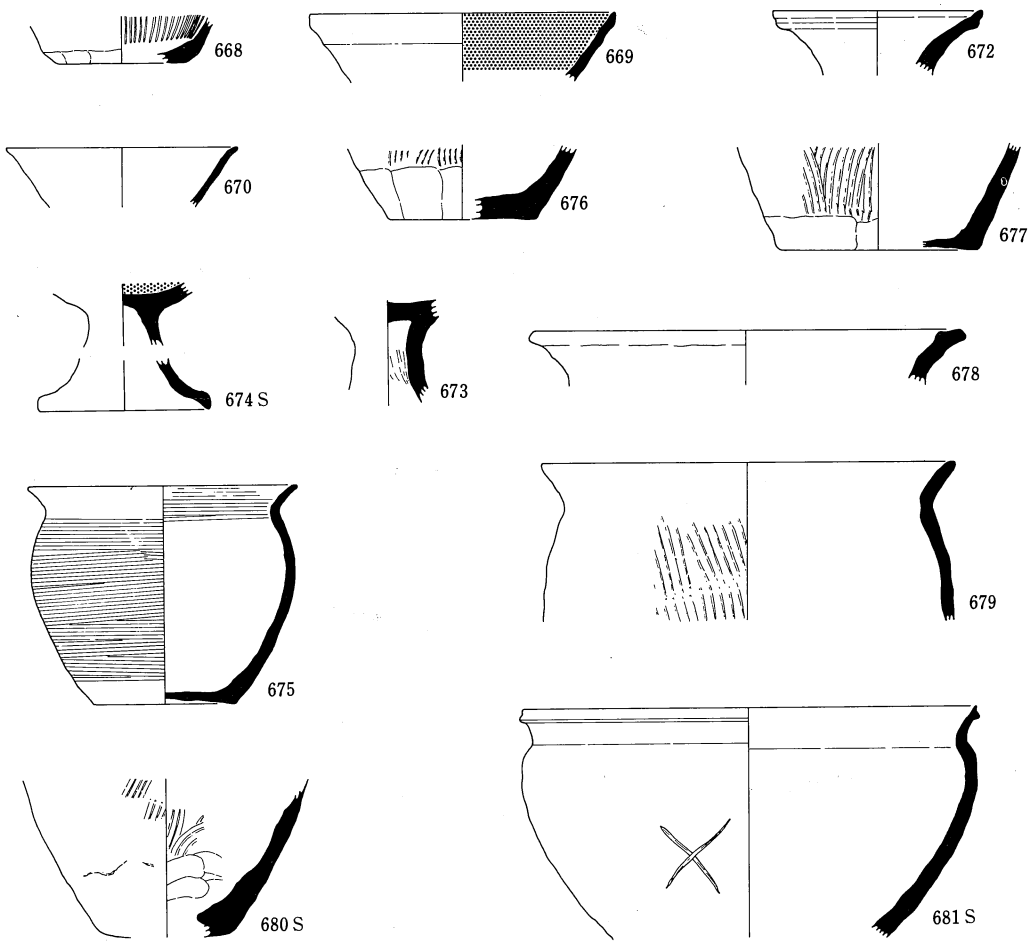
1 地区検出面



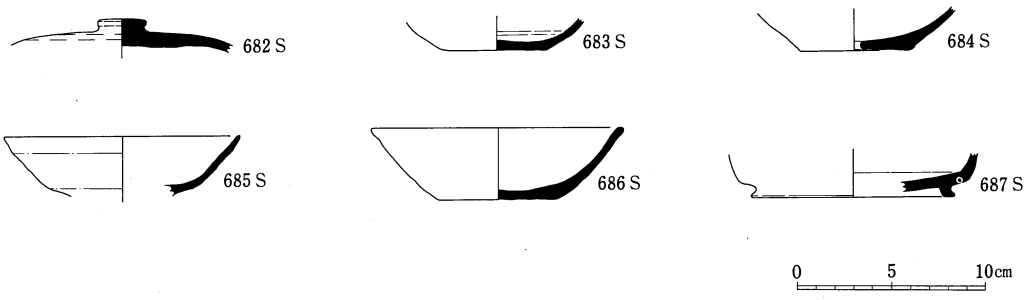
2 地区検出面



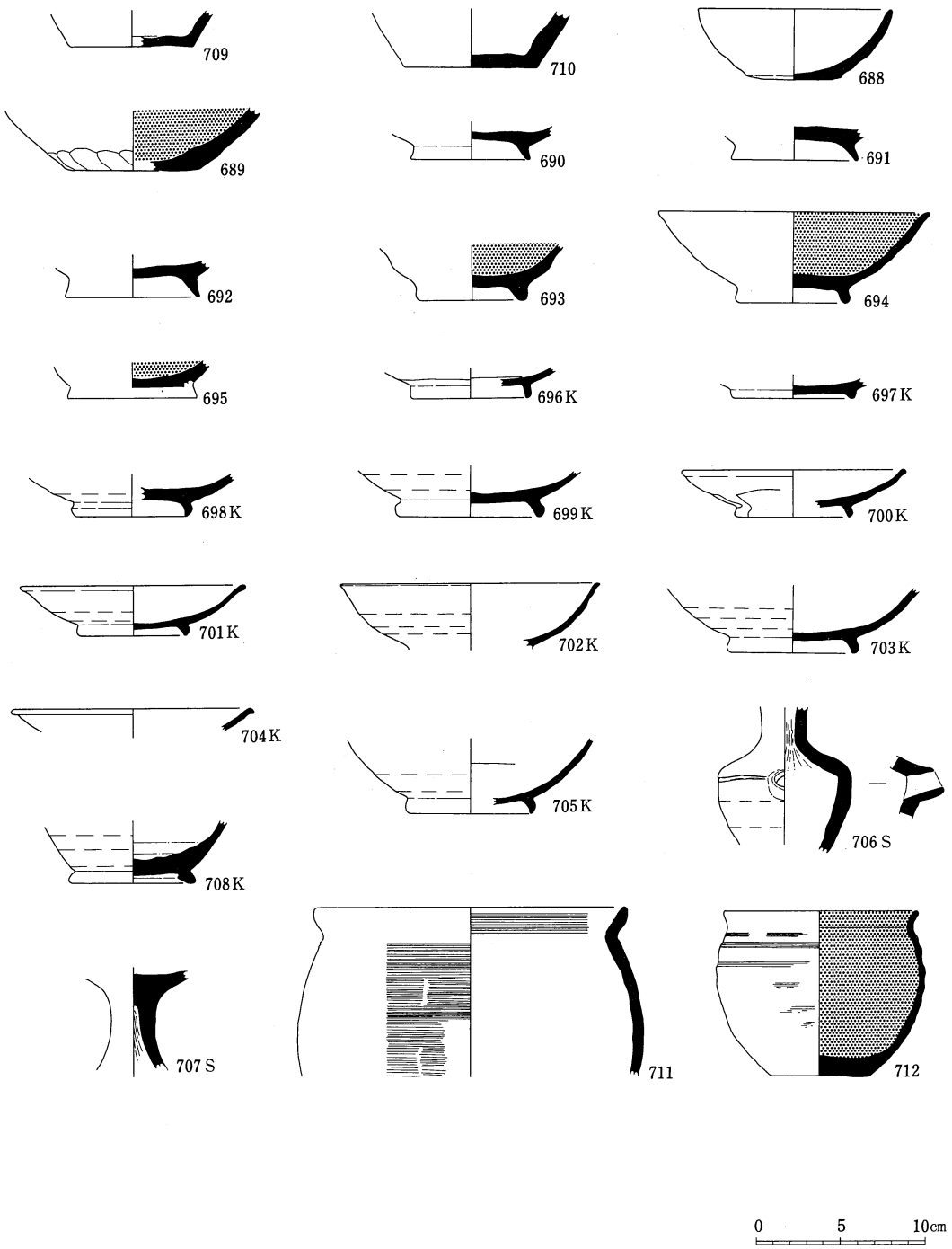
第85図　土器実測図(34)



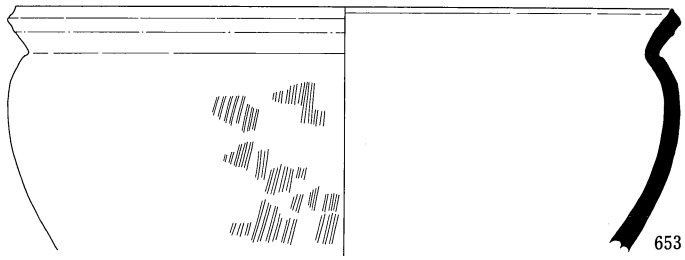
3 地区検出面

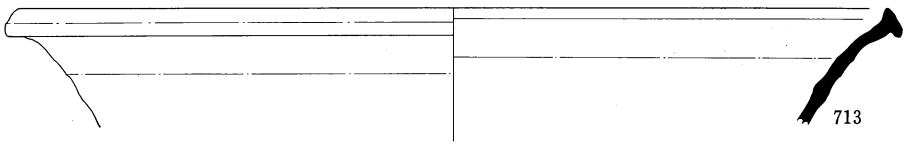


第86図　土器実測図(35)

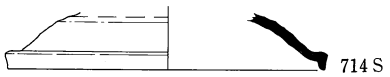


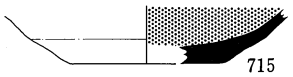
第87図　土器実測図(36)

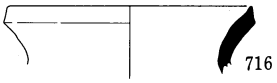


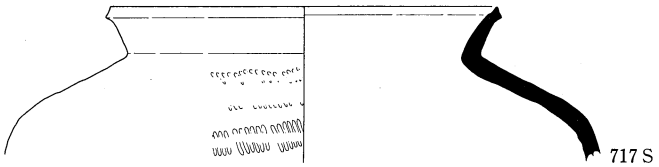


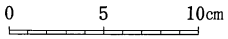
排土内



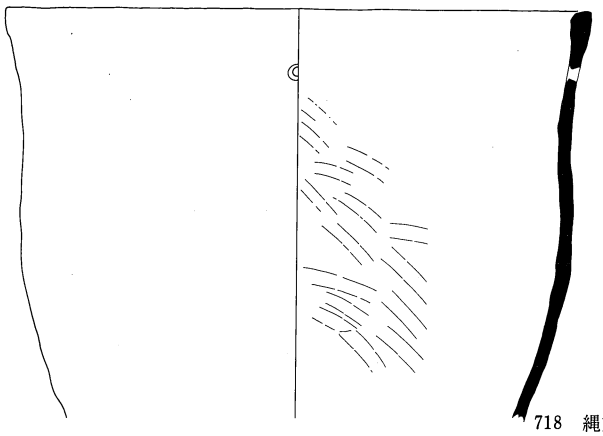






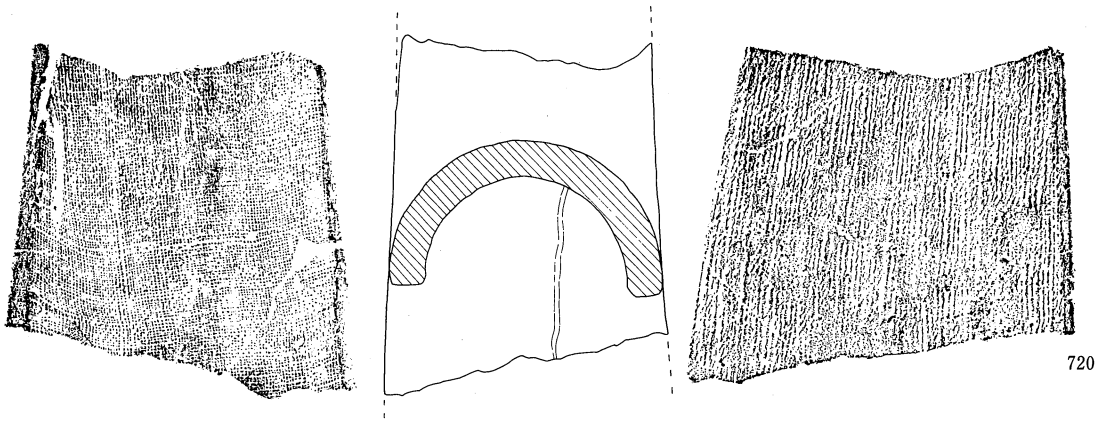


第88図　土器実測図(37)



718　縄文晩期

719　縄文中期



720

0　5　10cm

第89図　土器実測図(38)

2　銅製品・鉄器

銅製品としては帯金具が1点ある。近年の島立地籍では南栗遺跡より3点が出土した。(1)　1は縁辺を一部欠損しているが、3個の小突起をもつ半円形に近い形状をなしている。3個の小突起のうち裏面、左側下部はかろうじて突起の痕跡をうかがわせているが、縁辺部分が肥大しており小穴部分をも一部覆うような状態を示している。片側に何らその様な痕跡が認められないことから変形したものかと思われるが、詳細は不明である。

鉄器およびこれらに関する類のものは51点あり、内訳は鉄器33点、鉄滓15点、溶滓3点である。鉄器は腐蝕が著しく類別できたものは紡錘車、鑓鉋、刀子、鉄鏃、鋤頭等8種18点で残り15点は不明品として扱った。

紡錘車は3点ある。41号住居址からは2点あり11は軸部を一部欠損しており、他に紡錘車の軸と思われるもの（10）が見られるが、軸の径等から見ると11とは別個体と思われる。一方29号住居址の9は腐蝕が著しく進んでおり錘部のみである。

24は鑓鉋の一部と思われる。断面を見ても刃部の形状は分らない。茎部の一部を欠損しているものと思われる。

刀子は5・2が刃部と茎部の関係が比較的はっきりしている。共に茎よりも身の幅が刃部側に広くなっている。また5号住居址出土の6・7はそれぞれ刃部と茎部で同一個体であろう。

23号住居址出土の15は平根鏃である。鉄鏃はこの1点のみであり、平安後期においては稀有な遺物と言えるであろう。祭祀にでも使用していたものであろうか。

鋤頭は昭和59年度調査の南栗遺跡で2点出土している。28はU字形を呈し両端を欠損している。残存部分における全長が16cm程度で完形時の全幅は18cm弱と推定する。欠損箇所で見ると、一枚の板材を二つ折りにして端部を内側に折り返し木質部装着部分とした様子が窺える。

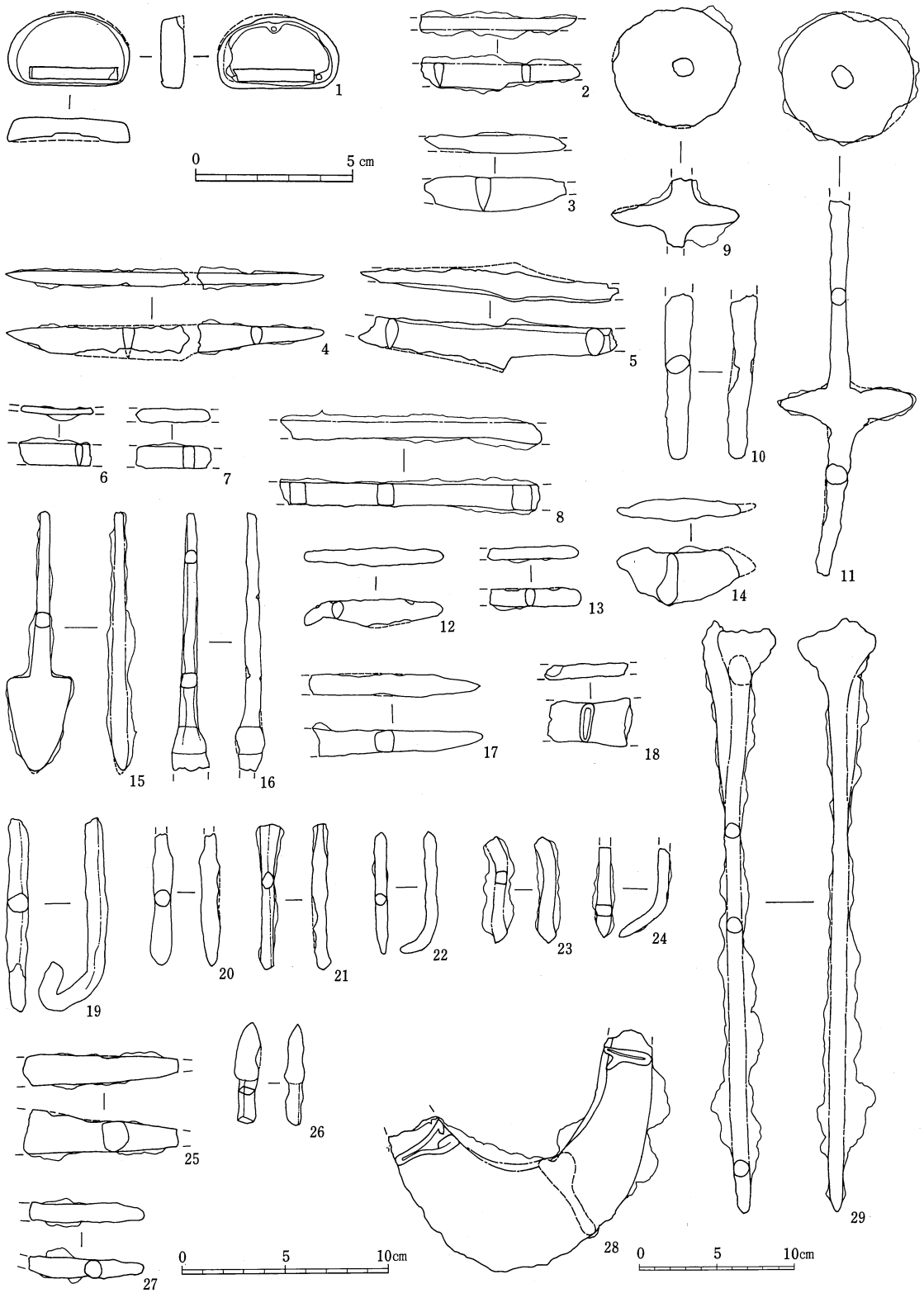
上述の他釘と火打金具、針および工具の一部と思われるものがあった。釘（21）は角釘で頭部が扁平になっていると思われる。

また不明品として扱ったもののうち29について若干ふれておく。断面円形の棒状の片端に塊状のものが付いており状態は完形となっている。塊状のものは上方から見ると2枚のプロペラが巴状に位置するように見えている。プロペラ状のものは先端部が刃の様に鋭いのか、或いは鈍状になっているのか腐蝕のため分らない。

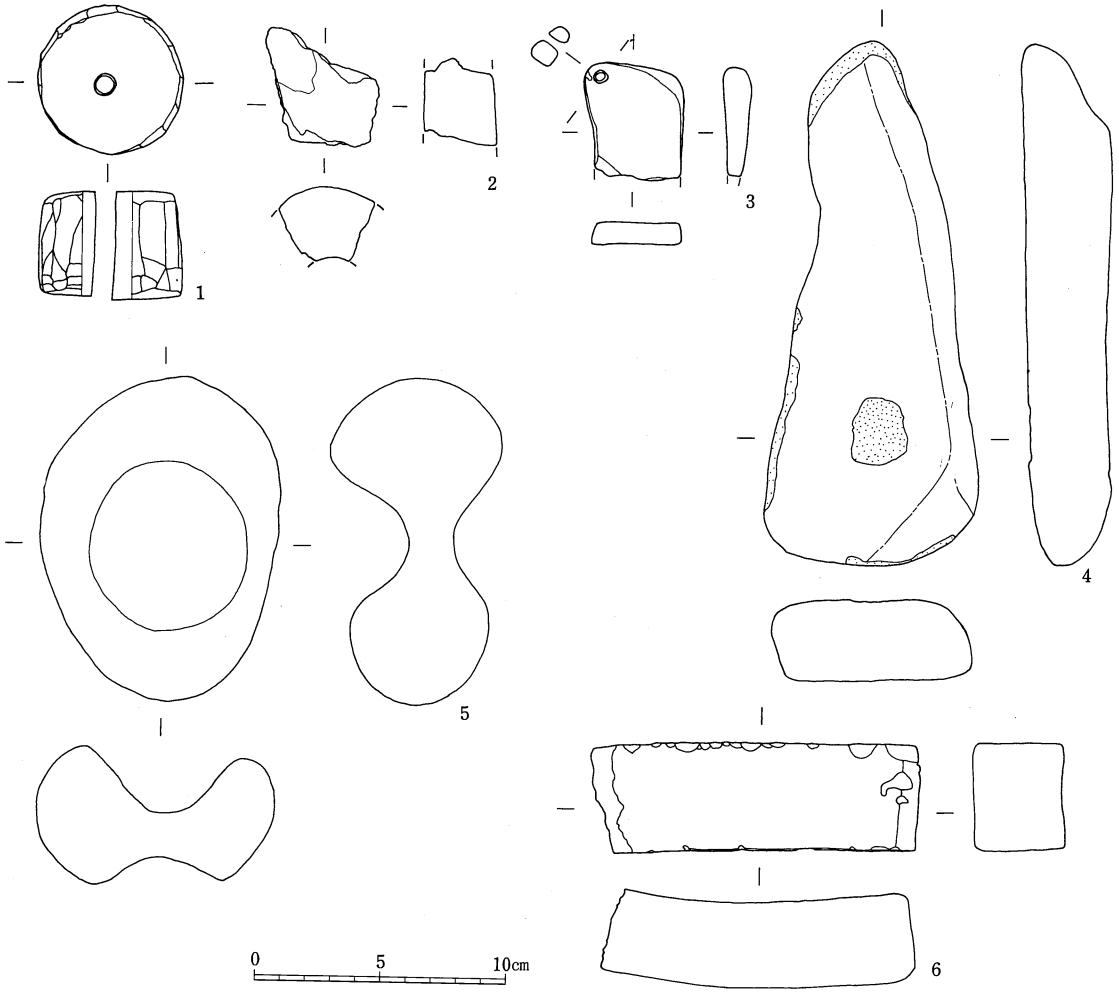
註1　昭和59年度調査分2点は方形状のもので、同60年度調査分1点は腐蝕が著しく種類の判別が勘だ困難であるが、帯金具の一部ではないかと思われる。

表3　銅製品・鉄器一覧表

出土遺構	種別	長さ (mm)	幅(径) (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考	図 No.
5 住	帯金具	39	(24)	8	(8.14)	銅製品，縁辺欠損	1
2 住	鑓鉋	44	7	6	5.55		24
〃	不明	50	12	8	7.56		26
〃	鉄滓				133.28		
5 住	刀子	(34)	11	3	(3.15)	身の一部	6
〃	刀子	(36)	11	7	(4.72)	茎の一部	7
6 住	茎か	(44)	10	5	(4.74)	一部	13
9 住	鉄滓				47.83		
14 住	不明	51	(7)	(5)	(9.39)		23
〃	鉄滓				26.67		
15 住	刀子	(77)	12	6	(13.85)	身一部欠損	2
〃	溶滓				4.91		
17 住	不明	(127)	13	10	(42.62)	工具か	8
20 住	角釘	70	9	8	6.82		21
〃	針か	59	5	−	3.46	J字状	22
〃	不明	30	26	18	(18.27)	素材か，土器付着　(重量は土器を含む)	
〃	鉄滓				242.40		
23 住	平根鏃	125	31	9	36.43		15
〃	刀子	(124)	22	(19)	(30.57)	身および茎欠損	5
〃	火打金具	(60)	26	11	(15.22)	片端欠損	14
〃	不明	(125)	19	14	(15.62)	工具か	16
〃	不明	(93)	10	9	(13.77)	J字状	19
〃	鉄滓				338		
24 住	不明	381	48/10		299.18	(径は太い端部と平均的なところとをとった)	29
25 住	鉄滓				71.28		
26 住	刀子か	(49)	14	6	(6.55)	身の一部	
27 住	鉄滓				159.65		
28 住	不明	(40)	22	6	(8.42)	両端欠損，中心部に鬆あり	18
〃	不明	(55)	8	−	(7.68)	釘か，片端欠損	27
〃	鉄滓				6.20		
〃	溶滓				32.00		
29 住	紡錘車	(33)	61	9	(70.91)	両軸部欠損	9
30 住	不明	(83)	10	9	(14.38)	工具か，片端欠損	17
31 住	刀子	154	16	7	16.21	中間一部欠損	4
32 住	不明	75	23	15	28.46	両端欠損	25
34 住	不明	53	42	12	39.49	素材か，板状	
35 住	鉄滓				17.58		
41 住	紡錘車	(181)	63	14	(85.98)	両軸端欠損，他に軸部3片あり (総重量7.26g)	11
〃	軸か	(81)	11	−	(13.59)	紡錘車の軸の一部か	10
〃	刀子	69	16	8	12.08	両端欠損	3
〃	刀子	68	15	7	9.65	身の一部	
〃	不明	67	13	8	5.72	先端曲折	12
溝 1	溶滓				2.60		
2地区検出面	鋤頭	(158)	(165)	21	(406)	両端欠損	28
〃	不明	(64)	7	−	(7.39)	工具か，先端扁平，他端(茎？)欠損	20
〃	不明	(33)	13	11	(7.96)	一部	
〃	鉄滓				463.47	2点	
3地区検出面	鉄滓				436.36	4点	


1
0
5 cm
2
3
9
4
5
10
6
7
8
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
5
10cm
28
0
5
10cm
29

第90図　銅製品・鉄器



第91図　土製品・石器

3　土製品・石器

今回出土した土製品・石器等は非常に少ない。1は14住出土の紡錘車の円盤部である。大きさは6.0×5.7cm、厚さは4.3、軸孔径0.8cmで周囲はヘラにより面取りされている。2は28住出土の鞴である。他にも1点（29住）あるがいずれも小片となっている。3は砥石である。この種のものとしては普遍的な粘板岩が使用されている。下半部を欠くが現寸4.7×4.0cm、厚さ0.6～1.1cmを計る。隅に紐穴が穿たれ、携帯用として用いたものと思われる。4は13住より得られた。20.9×8.6 厚さ3.2cm砂岩の細長い自然礫である。片面（平坦面）には2.8×2.0cmで被打痕が見られ両端部及び片側部に敲き石の如くのダメージがある。5は40住より得られた凹みをもつ石である。12.9×9.5cm 厚さ6.9（最薄部1.8）cm輝石安山岩製であるが縄文時代遺物のような磨きは周囲には見られない。6は表採遺物である。13.1×4.5、厚さ3.5cmでゆるやかに湾曲、一方は古い破損のままである。表面瓦製の如くに熱変の為のヒビ割れを生じ断面は黒灰色で長石・石英粒が中に見える。

第4節　小　結

土器について

土器の変化

第3章第3節で分類・細分した各器種・器形（一般の道具類についても）は、ある時期に祖形があらわれ、型式変化をとげながら絶対量（生産量・消費量）を増し、やがて減じ、ついには消滅する。各器種がそれぞれこの変化をたどりながら、その始点と終点をずらして横に並ぶのが土器（道具）の量と変化の相であるが、これを視覚化すると、まるで生物学で用いる種の消長を示す紡錘形を連らねる模式図と同一になる（挿図1）。

この模式図で対象を供膳形態の食器に絞ってみてみると、ある器種が最大幅を示して隆盛の時、それに代替する機能（この場合寸法・法量）のものは衰退し、あるいは消滅している。次に、先の隆盛した器種が衰えてくると、また同種に代替する器種が現れて盛んになっていく。消費地の生活の変化により別の機能が求められ、別の好みが起ると、先からある器種は別の器種へと変化をとげまた新しい器種が発生したりする。この時も、前代までの古い機能の器種は、同一機能のものに代替されたと同様に消滅していく。このような各器種の消長により模式図上にあらわれる量的な山と谷を把むことにより、時期がある程度捉えられると考える。

土器の共伴について

上記の認識に立って作業を進める上で、①同一器種の型式変化の組列の把握、②器種間の共伴性の認定、が問題となってくる。これらの点については南栗遺跡の報告[1]で若干の説明を加えたが、第2点について更に言及するなら、遺構内出土の土器であっても一括遺物とそうでないものの2者でしかなく、後者は、ある時代の1つの土層（包含層）に等しいとみなせる場合が多い。個々の遺物でみるならば遺構内の出土地点や状態によっていくつかのケースがあり、それぞれに廃棄や投棄、置き去りや転用等のパターンが見えてくる可能性があって、その面では必要な視点もあろう。しかし1つの遺構出土土器群を扱い、その時期の土器の様相を探っていく資料にするためにはかえって操作を困難にしてしまう。破片の大小や出土地点にかかわりなく、1つの遺構出土土器を総体として捉えて、各器種毎の存在の比率を計量により導き出し、その遺構（覆土層）がもつ土器の様相とする（図化可能な土器のみを提示した実測図は、この様相をある程度しか表していないし、時に誤認をまねく）。

北栗遺跡の土器の様相

この方法に、上記①の型式変化の視点を加えて、南栗遺跡では、住居址群が大きく4時期に分けられ、その各時期に伴う土器をある程度以上の確率で明らかにすることができた。今回も同様の操作を行い、結論を導き出すべきであったが、時間的な都合で土器の計量にまで至らなかった。この

ため、ここでは先の南栗遺跡の成果を援用しつつ、各住居址の図示、非図示の土器全体の様相を大雑把に捉え、各住居址の土器群の相対的な時期（遺構の覆土層の時期）を導き出した（挿図１）。

南栗遺跡では食器類の消長は、土師器坏Ａ・坏Ｃ・埦Ａ、須恵器坏Ｂ・坏Ｃ・坏Ｄが主体となって、次の段階が指摘できた。

①土師器坏Ａが主体となる時期

②須恵器坏Ｂが主体となる時期（須恵器坏Ｃが若干伴う）

③須恵器坏Ｄが主体となる時期（須恵器坏Ｃがかなり多数伴い、むしろ坏Ｃが主体ともいえる）

④土師器坏Ｃが主体となる時期

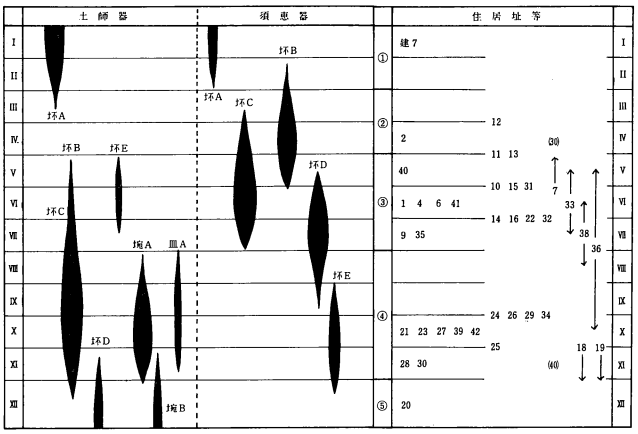
（⑤それ以降）[2]

遺物のみから見ると以上の様であったが、Ｓ59南栗遺跡の報告[3]ではこれに遺構の切り合いも絡めて、更に時期を細分した。この細分は、たとえば上記②の時期の古い要素、中間的なもの、新しい相、というのをそれぞれ区切って数字を付したという性格をもつ。ここに示した左欄の模式図はこれらに他の器種も加えてその消長がわかり易くしたもので、Ⅰ～XIIが細分、①～⑤が上記の段階分けであり、紡錘形の横幅は各器種の量を示すが厳密なものではない。右欄は今回調査した住居址等が現段階で位置づけられる時期である。細分の時期をまたぐものは両時期の様相があるもの、矢印で範囲が記されているのは、土器の時期が雑多で時期を決めかねるものである。

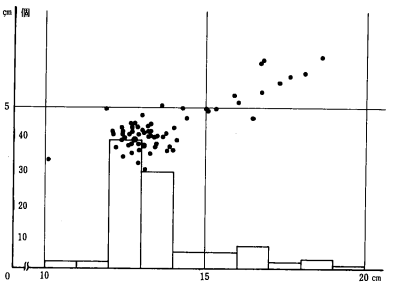
註１　松本市教育委員会　1986　『松本市島立南栗遺跡』

２　南栗遺跡では⑤段階はなかった

３　松本市教育委員会　1985　『松本市島立南栗・北栗遺跡　高綱中学校遺跡、条里的遺構』



挿図１　食器の変遷および住居址の時期



挿図２　土師器坏Ｃの寸法相関

遺構について

今回の調査で検出した遺構は１地区住居址３・建物址３、２地区住居址20・建物址12・柵列１、３地区住居址20・建物址４・柵列１で、他に土壙18、溝等である。各地区の検出面を概観すると１地区は全体に良好な土質、２地区は南東側土質で南西側は自然礫上に土が乗り、３地区は東端部土質で中央部は自然礫上に土が乗り西部では砂利層となる。全体に南東部から北西部へ行くに従い耕作土（有効土）が浅くなることが分かる。

特徴的な住居址についてみると、一部が調査区域外となる41住を除くと6.5×7.5mの２住が規模が大きい。時期もⅣ～Ⅴ期と古いもので遺物も多く非常に長い煙道をもつ。また今回主柱穴を検出できた唯１軒のものである。17住のカマドは重機削平部外に位置したため袖石・天井石などが当時のまま残っていた。壁掘込みのもの、石芯となっているものは多いが石組カマドは少なく、完全な状態で検出できたのは幸いであった。20住は今調査では最も新しいものでXII･XIII期に属する。主要遺物は西壁際床面上に置いた如くに出土した。また本址のカマドのみがコーナー（隅）に位置していた。

次に建物址についてみると19棟のうち総柱式は２棟である。１間×１間のものから４間×３間のものまであり、２間×２間が主流を成す。遺物･配置などから周囲の竪穴住居址と関連づけられた。３間×２間の７は際立って古く遺物は７世紀後半の様相を示すが、今回調査した竪穴住居址にこの時期のものは存在しない。また10は２間×２間の側柱式で南東隅に２ヶの小ピットが付属することを覆土から確認した。この小ピットはやや斜めに掘込まれ高床式建物への梯子が２本の足であることを示している。

溝は断面から自然流路と考えられるが、覆土中の遺物、周囲の住居址などの時期から奈良時代から平安時代後期の間は存在していたと思われる。

この他２地区北東部には縄文晩期の遺物を出土した土壙、検出面から塗彩された弥生時代の土器片を得ており、溝下部に認められた焼土と突合わせれば、土質の良好な検出面下の一部にはもっと古い時期の遺構が存在した可能性がある。

なお今回調査した範囲内で時期別占地の傾向をみると、不明瞭ながら２地区の南東側にⅦ期以前のものが集中し、X期という新しいものは３地区東に点在している。このことから古い時期の集落の中心は調査区域外東側にあったものと予想する。また珍しく今回は中世の遺構・遺物は殆んど見られなかった。これはこの検出面まで一度に重機で削平したためであろうか。

第４章　島立条里的遺構

第１節　各地内の概要と遺物

１　北栗地内

ここは（北栗遺跡　３地区北方100m）に位置し西方120mで中央道を隔て１Ｔ(1)の東端に達する。現水路で見ると鬼沢は中央部分で南北に分派し、水量の多い南の堰は北栗遺跡として調査した２、３地区の間で東流してきたくぬぎ沢と合流する。又北へ向かった水量の少ない堰（水路Ａ）は堺沢から分流した小堰（水路Ｂ）と一部合流し更に東へ（水路Ｃ）或いはそのまま南流（水路Ｄ）(2)する。この合流地点が調査地である。

調査面積は約170m²で土層断面で見ると、東側では50～60cm、北側で50cm、西側で90～100cmで鉄分を沈澱させた礫層が露出し、この面を検出面とした北栗遺跡の調査地や、他の２ヶ所の条里調査地と比較すると、この礫層出現は地表よりかなり浅いレベルである。

水路について見ると、Ａ、Ｂ、Ｃとも水路際に上流より運んで来たⅠ層を堆積させている。このうちＢについては、現水路以前に直下にⅢ”と表示した古い水路が存在し、西側に杭を打ち込んでいた様子を見る事ができる。更に検出面には一層鉄分を激しく沈澱させた溝の痕跡が認められた。南へ向かい６m程でゆるやかに東へ向かっているが東面にはこの様子が見られず、また南側にあった筈の水路Ｄも見当たらない。この杭を入れた堰がどこへ通じているのかは不明である。なお本調査地からの遺物等はごく少量で土師器坏、甕、須恵器甕等が見られる。すべて小片となっており検出面より得ている。

２　永田地内

ここは永田集落の南東に当たり南40mには堺沢を隔てて７Ｔ(3)が東へ伸びている。堺沢より引き込んだ堰が西から入り（水路Ｅ）、同じく堺沢よりの堰が南から来て（水路Ｆ）調査地点で水路Ｅが北方へ向きを変え、２本が並流（水路Ｇ、Ｈ）して北方約10m程で合流し、さらに北流して永田集落にて堺沢より既に分派して来た堰へ合流する。

本調査地の調査面積は約300m²と条里３地区のうちでは最も広い。検出面は茶褐色土で表土から

はそれぞれ南側で70cm、北側で60～90cm、西側で90～100cmを測る。

ここでは溝を2本検出した。溝1は西面に断面を見る事ができた。溝は北東へ向かい途中北へ分派して末端は巾広くなり消失してしまう。その深さはかなり不安定なものである。なお水路Eは溝1より北へ3m、両者の間には間層が厚く直接的に溝1が水路Eにつながるものとは考え難い。溝2は南側断面に見えている水路Fの直下に当たり、溝底部は砂利層中にある。北へ向かうが徐々にレベルが深くなるため人力では追跡できず、北側面C－C'にも現れていない。Ⅰ層断面から溝1と比較すると溝2は先行するものと言えよう。現水路についてみると北へ並流する水路GはEと、水路HはFとつながるものである。前者はⅠ層の堆積を残す後者より比較的歴史の浅い堰と思われる。なお用地内中央やや東で土師器甕片を得ている。これらと検出した溝とをあえて時期的に結びつけるならば、溝Ⅰに近いものと考える。

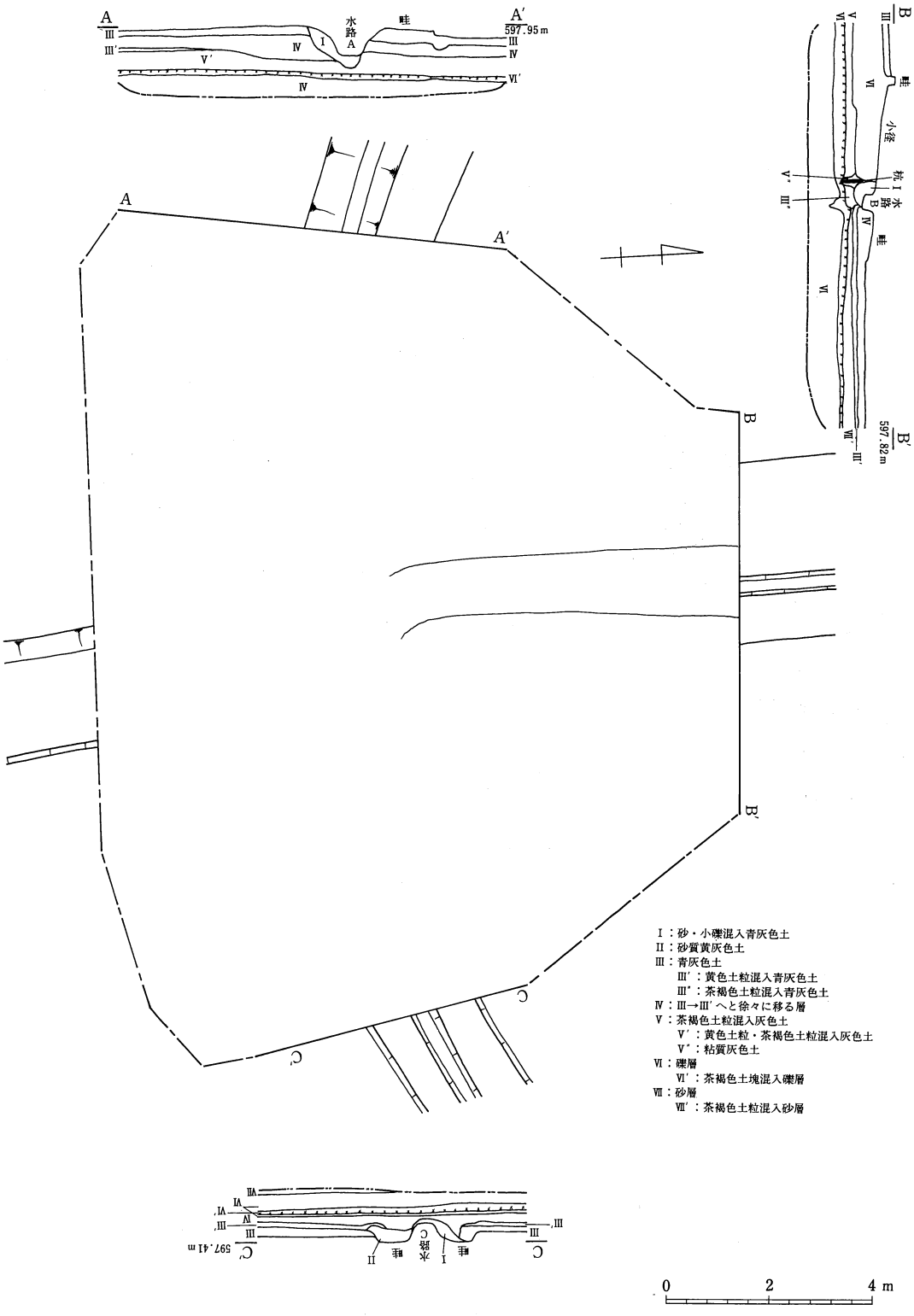
3　町区地内

ここは栗林堰が新村から島立地区に入り、本流は小和沢、堺沢へ向かうが分派した小堰は北へ向かい80m程で水田の間を曲流しながら東下する。（水路Ⅰ）(4)この堰と堺沢より分派して東へ向かい更に北へ向きを変えた小堰（水路J）が当調査地にて合流し、このあと（水路K）35m程で宮沢に流れ込んでいる。

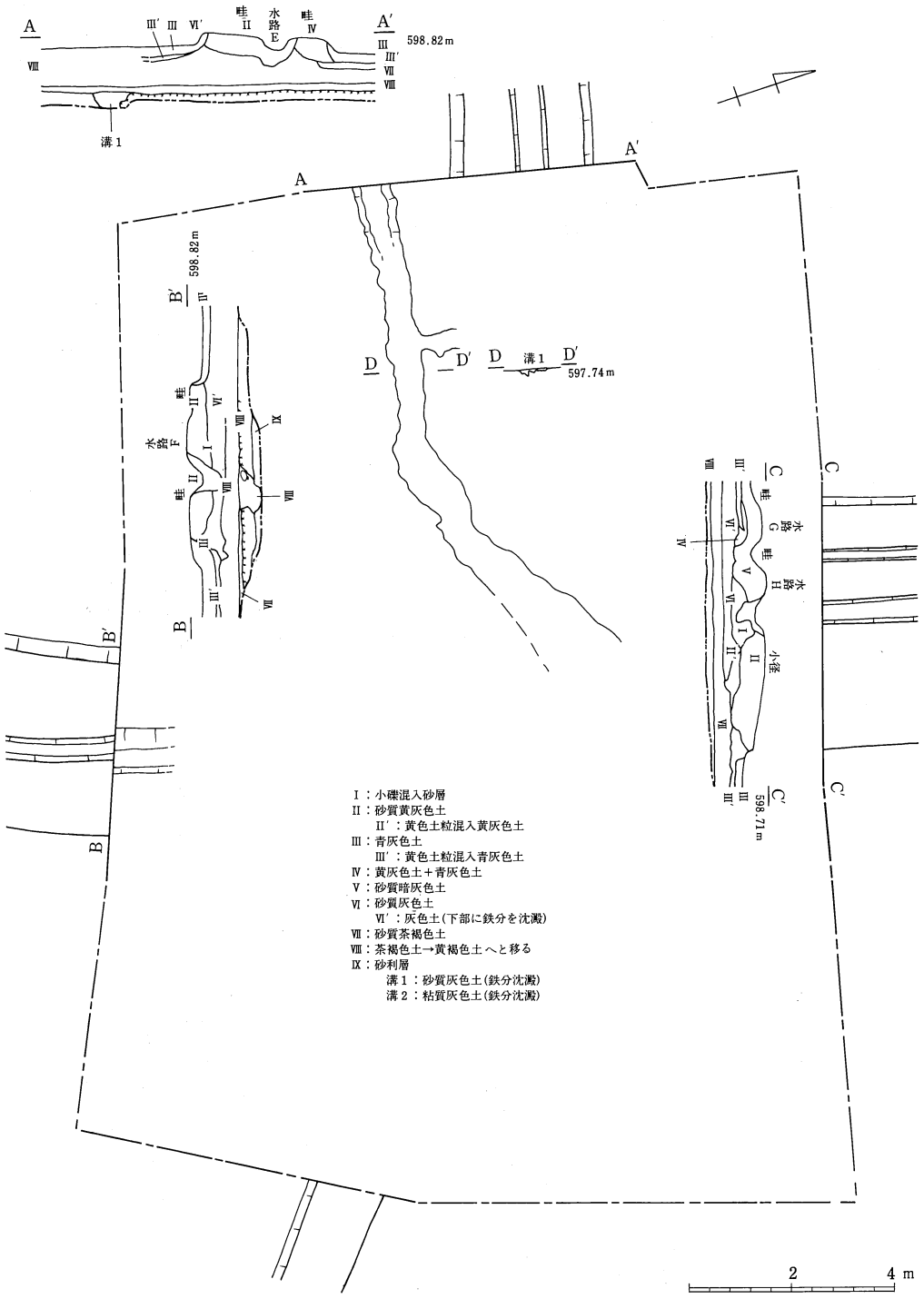
本調査地の実質検出面積は約220m²である。全体に茶褐色となってからも10～50cm程掘り込んだ。その結果西側で80cm、南側で90～120cm、北東部で120～150cmの深度となった。溝3は北西隅に出現し、今回調査のうちでも最も人為的と思われる、断面浅いU字型の溝である。これは東に向かいC～C'図中のⅤ層へ入っているものと思われる。水路Ⅰはほ場用図面に依るとこのやや北にある筈であるが、土層から見て溝3は直後の堆積に埋もれ、新しい水路には継続していない。これに対し溝4は南東部分に現われ、やや蛇行して北に向かう。西側はゆるやかな落ち込みを見せており、当初広い自然流的なものではなかったろうか。南側面B～B'の図を見ると土層的には溝4が徐々に水路Jに発展していったものと考えられる。又C－C'についてみると南からきた溝4は後に設けられた溝3を利用しながらそれが水路Kに発展継続してきたものと考えることができよう。

なお本調査地からの遺物は全く得られずただ検出面からの土色から推し測ると永田地区同様、古墳末～奈良時代の検出面までは充分達しているものと考える。

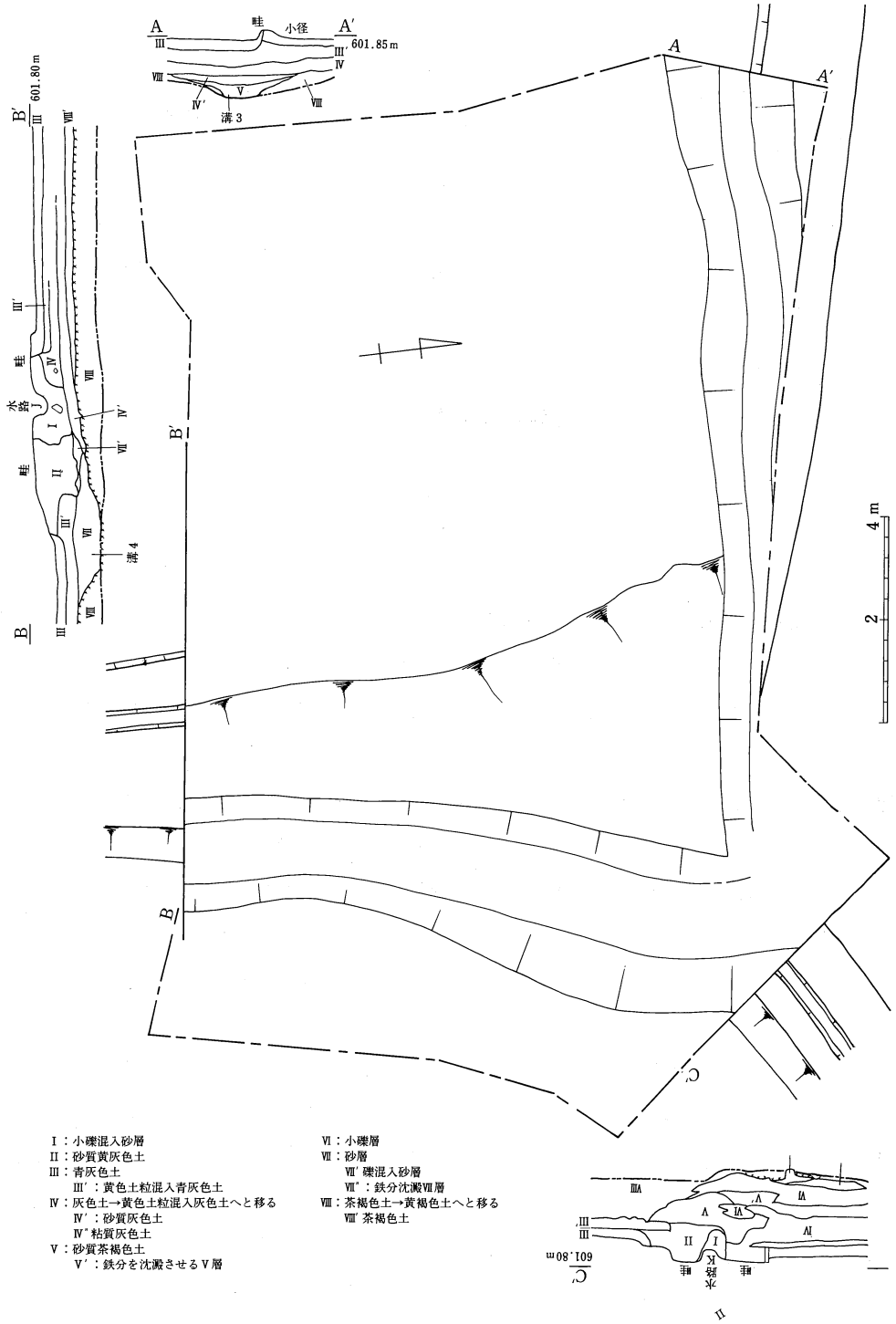
註　1　『松本市島立南栗・北栗遺跡・高綱中学校遺跡、条里的遺構』(1985) P130参照
　　2　中信土地改良事務所作成ほ場用図面にはこのようにあるが、今回調査現場測図の際には水路は見当らなかった。
　　3　註2と同様
　　4　註1と同様



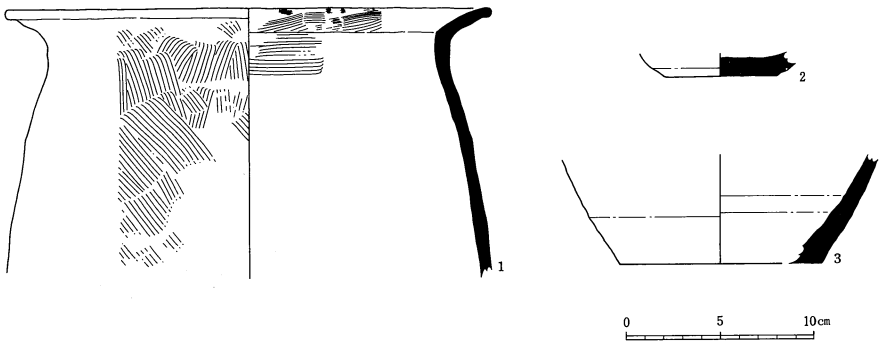
第92図　調査地区全体図(北栗)



第93図　調査地区全体図(永田)



第94図　調査地区全体図(町区)



第95図　土器実測図

第2節　小　　結

まずこの場を借りて、出土土器について解説してみたい。

北栗地内分出土土器は須恵器5片、土師器1片が出土している。器種は須恵器の長頸壺1・坏1・甕3片、土師器は不明でいずれも小破片で図示していない。坏は底部が糸切りで、器形等からみて9C前半代のものとみられる。

永田地内分からは100片以上の出土量があった。図示した3点はすべてここから出土したものである。第95図1は土師器の甕で大きく「く」の字形に外開する口縁が特徴となる。北栗遺跡分類の甕Aにあたる。2は須恵器坏Dの底部、3は大形の須恵器の壺底部または小形の甕類の一部であろう。図化できなかった遺物の組成は、最も多いのが須恵器甕、次いで同壺(長頸壺と推定)、同坏(坏B・坏C片がみえる)となる。土師器はほとんどが磨滅した甕片で、木葉庄痕のある底部1点の他、坏B片、埦A片が1点づつ観察できるのみである。

これらの土器の時期的な特徴は、全体的にみると供膳形態の食器類と土師器が少なく、須恵器が多いことからみて、北栗遺跡の時期段階の③段階以前に位置づけられる。土器個々にみると土師器の甕Aは①・②段階に、また須恵器坏Bも②段階を中心に存在するものと考えており、古い様相を示している。新しい様相を示すものは土師器の埦Aが④段階に位置づけられているが、他にこれに類するものがない。上記の点からみると、永田地区分の遺物は②～③段階を中心とした時期的な特徴を表している。あまり適切ではないが歴年代をあてはめると7C末～9C前半位になろう。

調査で検出した溝、水路類との関係では、第1節で述べた様に溝1がこの土器群の年代に近いものとすると、溝2は更に古くなるが今のところ島立で①段階以前の遺構はきわめて少ない。

町区分の調査で遺物の出土はない。

今回は現在使用中の水路の歴史的経緯を探る為になるべく水路の復走する3地点を選び、旧水路の検出とその時期・発展状況に注意して狭い範囲ながら調査を行ない土層を観察した。その結果はすでに各地内の項で述べたように

（1）やや古い水路が堰床を上げたのみで現水路となる。（北栗地内）

（2）現状の水路下に或いはすぐ脇に時間的空間を置きながらも旧水路が存在した。（永田地内）

（3）自然水路へ人為的水路を落としたが、後者は後に消滅し自然水路が管理されて現水路となっている。

という具合であった。遺物或いは遺構との切り合い等により時期の求められた溝はなくその上限は不明である。ただ旧水路が一旦途絶えた後、その直上（溝1と水路E、溝2と水路F、溝3とほ場用水路）で偶然にも再び水路が現れてくるのは不思議である。なお中央自動車道部分の調査では北栗遺跡より平安時代の水田址(1)が、又三の宮遺跡より「中世検出面上で現畦畔区画とほぼ一致する条里遺構的な水田址(2)」を確認しており、これらがどのような範囲で何時より開始されたか興味ある問題である。

註1　長野県埋蔵文化財センター　百瀬新治氏御教示

2　〃　〃　『長野県埋蔵文化財センター年報2』1985

参考文献

小穴喜一　「松本市島立・新村両条里的遺構の開発経緯－古代・中世の用水路を軸にして－」『信濃』　Ⅲ・37－9

第5章　調査のまとめ

今回の調査は現北栗集落の西側一帯と、堺沢・栗林堰からの小水路について3地点を選び行なった。遺跡台帳には後者は島立条里的遺構として、また前者は北栗遺跡と条里的遺構という二重のネットがかけられた遺跡である。島立地区においては栗林神社周辺(昭和58年)、奈良井川左岸段丘上、永田集落南側、高綱中学校南東部（以上昭和59年)、高綱中学校東際、南栗公民館東側（以上昭和60年、前者は未報告）に次ぐ調査であり、また今調査の合い間にも市道高綱線沿いの中央自動車道長野線のルート際を調査し、これらの調査の全てから遺構・遺物を記録している。

今回の成果についても以前と同様に多くの遺構を検出し、多量の遺物を得た。また現在調査中の中央道長野線においても島立地区の3遺跡（南栗・北栗・三の宮）より、古墳時代から中世の住居址766、掘立柱建物址280、竪穴状遺構・柵列・墓壙・土壙5500という膨大な数の遺構を調査しており、島立地区全域が遺跡の上に成立している事を示している。これはこの地が奈良井川、梓川そして鎖川等により形成された後、それらにより破壊をされることなく現在まで存続しているという証でもある。その長期的な集落を存在させた基礎がこの地にあるとされる条里である。今回の条里の調査では現水路に至るまでに歴史的に中断する3本の小水路と、管理された1本の小水路をその成果とするが、時期的な問題と有無不明の水田址との関係がつかめないまま終了してしまったことは残念である。

なお中央道長野線調査部分では北栗遺跡に平安時代の、また三の宮遺跡に中世の水田址を確認しており、両遺跡の間を流れる堺沢は平安時代から中世頃には管理されていた(1)ようである。今後はそれらと周囲の集落との関り合い、範囲、そして開始時期などが課題であり、なお一層自然科学的分野と連携した調査が必要であろう。

文末になったが今回の調査にあたり、近くで行なわれている長野県埋蔵文化財センターの調査研究員、また地元公民館の方々には多大なる御指導、御協力を頂いた。記して感謝する次第である。

註1　長野県埋蔵文化財センター調査研究員百瀬新治氏より御教示を得た。

調査地近景

1地区(南より)

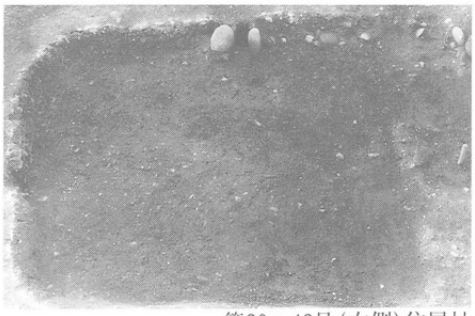
1地区(北より)

2地区南側

3地区(西より)

雪の3地区

第1図版　北栗遺跡調査地風景



第30・42号(右側)住居址

同　遺物出土状況

第30号住居址　カマド

第42号住居址　カマドか？

第31号住居址

同　カマド

第31号住居址　出土遺物

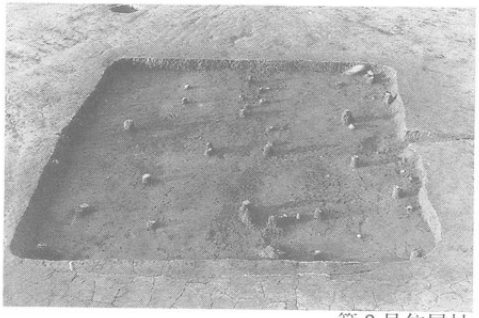
同旧　カマド

第２図版　住居址(1)

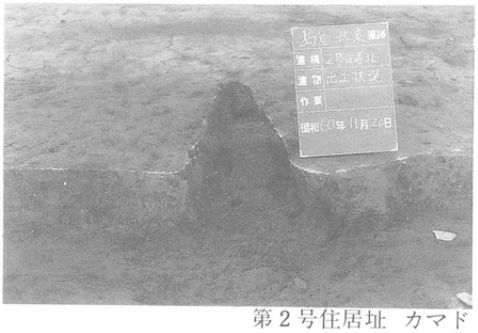
第１号住居址

同　遺物出土状況

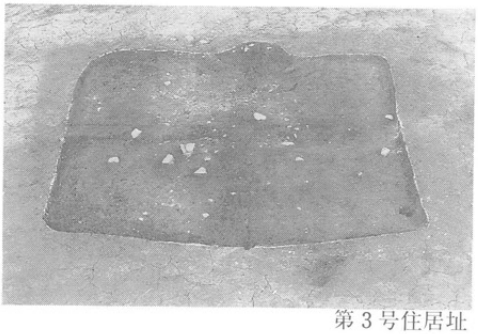
同　カマド煙道



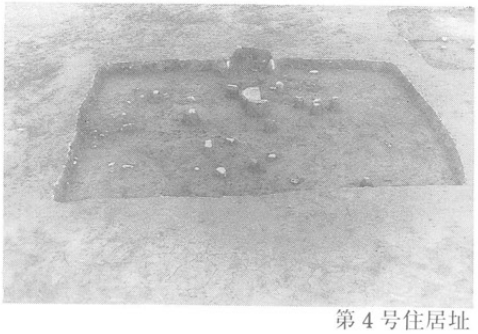
第２号住居址



第２号住居址　カマド



第３号住居址



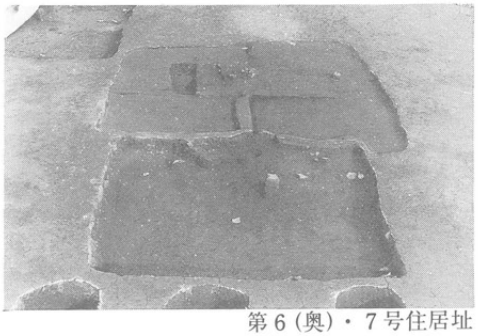
第４号住居址

同　カマド

第３図版　住居址(2)

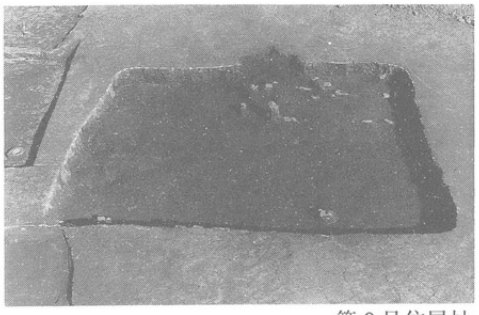
第 5 号住居址

同　遺物出土状況



第 6 (奥)・7 号住居址

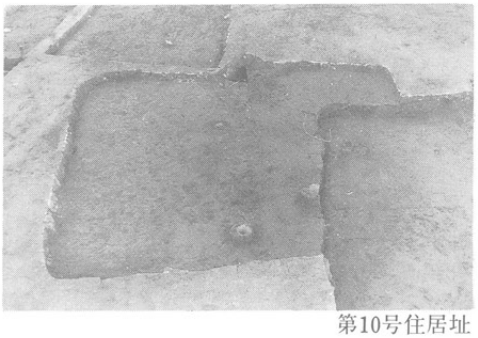
第 8 号住居址



第 9 号住居址

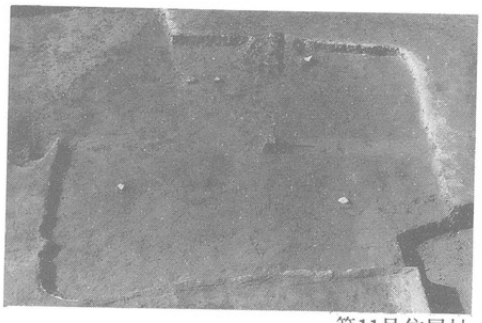
同　カマド

第 9 号住居址　出土遺物

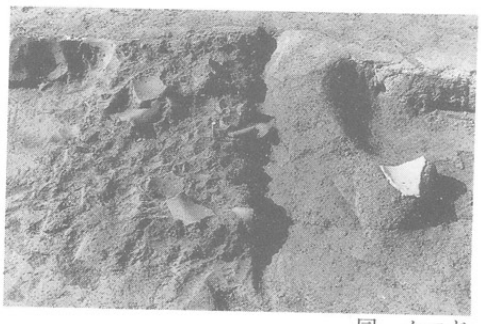


第10号住居址

第 4 図版　住居址(3)

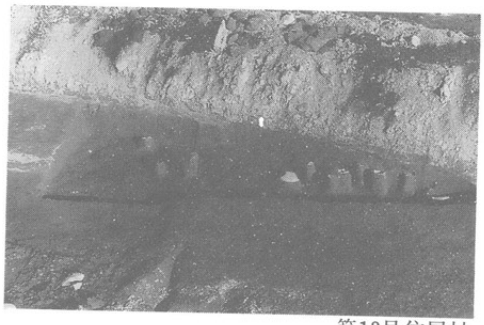


第11号住居址

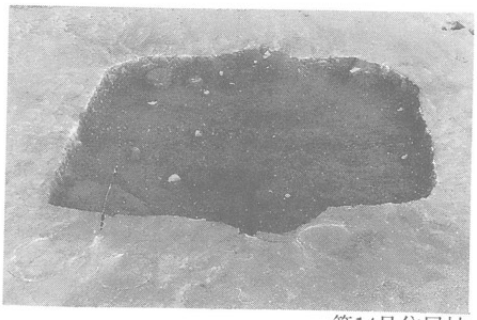


同　カマド

第12号住居址

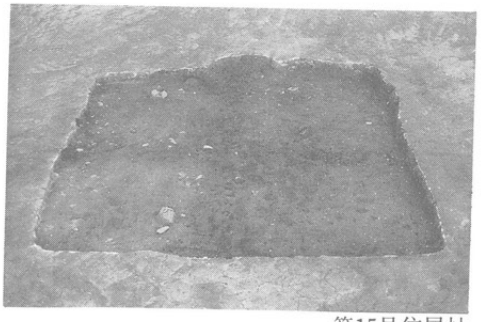


第13号住居址



第14号住居址

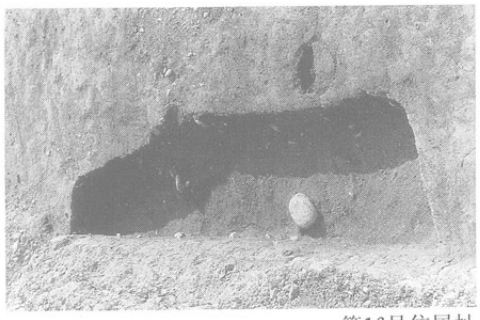
同　遺物出土状況



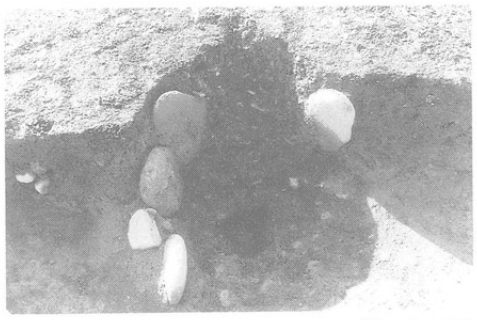
第15号住居址

同　カマド

第 5 図版　住居址(4)



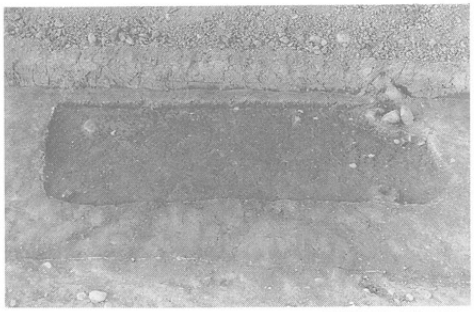
第16号住居址



同　カマド

第17号住居址

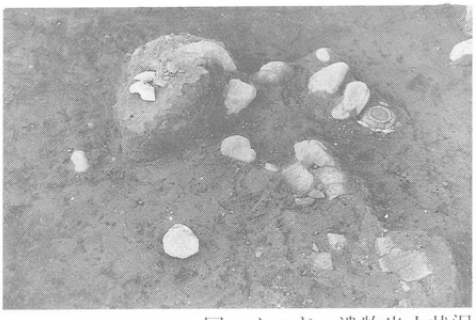
同　カマド



第18号住居址

同　カマド

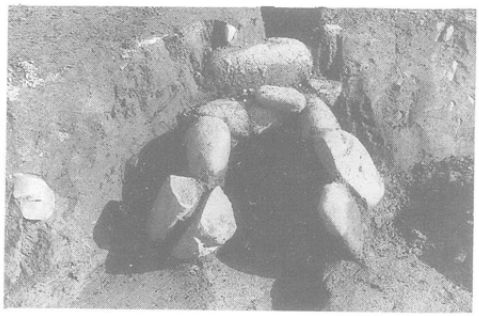
第19号住居址



同　カマド・遺物出土状況

第 6 図版　住居址(5)

第20号住居址　遺物出土状況

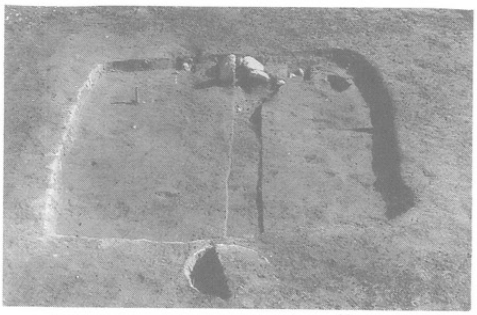


同　カマド

第20号住居址　遺物出土状況

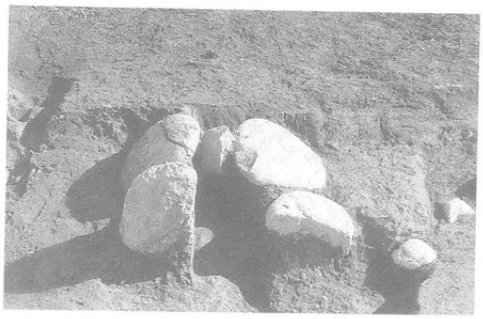
同

第21号住居址



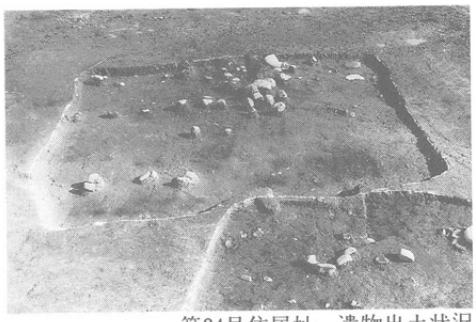
第23号住居址

第23号住居址　遺物出土状況



同　カマド

第７図版　住居址(6)



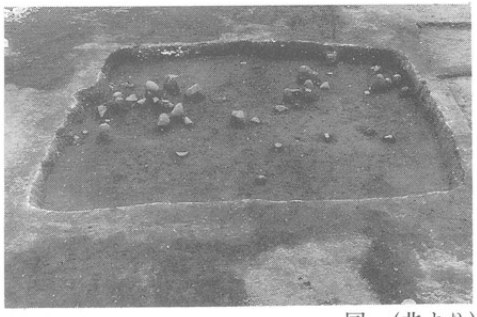
第24号住居址　遺物出土状況

同　カマド

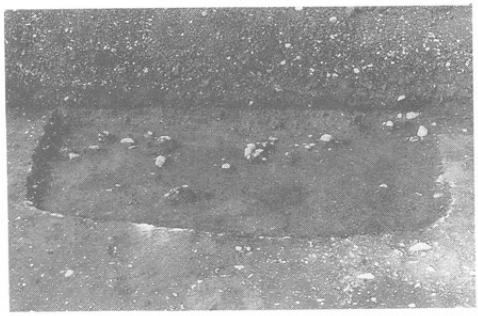
第24号住居址　遺物出土状況

第25号住居址

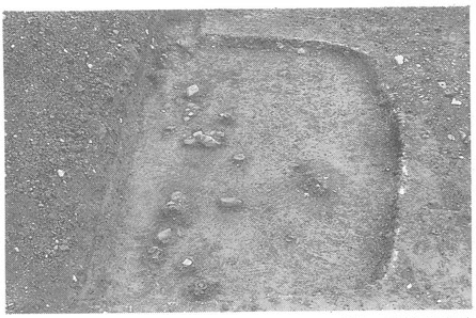
第26号住居址　遺物出土状況(西より)



同　(北より)

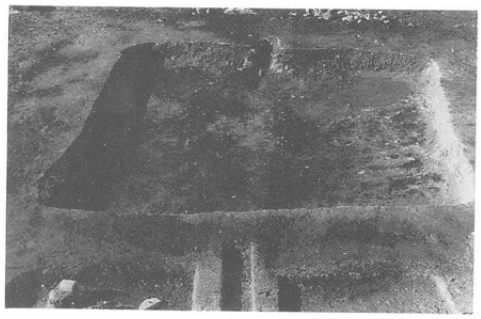


第27号住居址　遺物出土状況(南より)

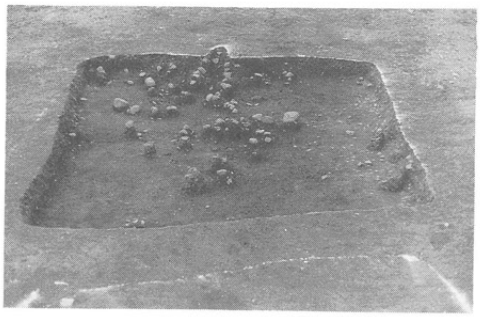


同　(西より)

第 8 図版　住居址(7)



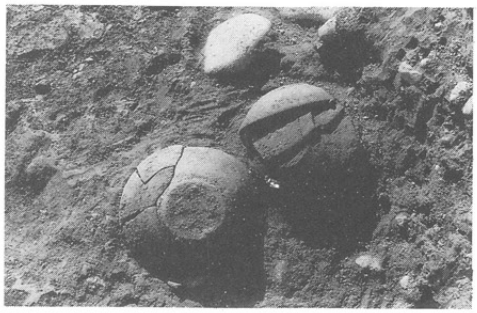
第28号住居址



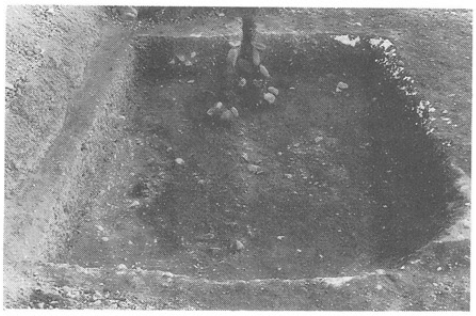
同　遺物出土状況

第28号住居址　カマド

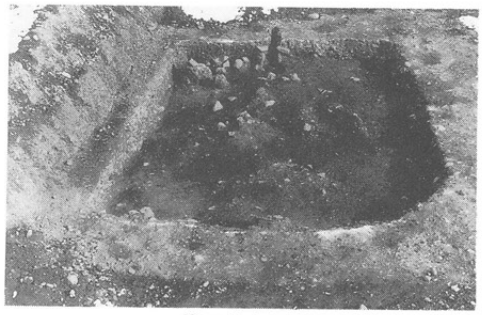
同　遺物出土状況



第28号住居址　遺物出土状況



第29号住居址



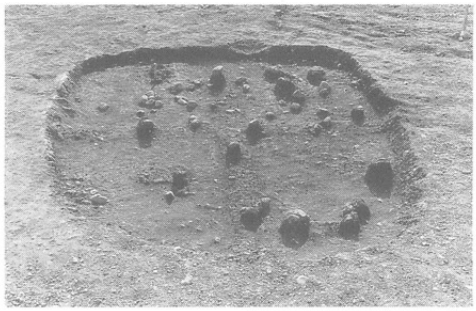
第29号住居址　遺物出土状況

同　カマド

第 9 図版　住居址(8)

第32号住居址

同　カマド



第33号住居址(北より)

第33号住居址(西より)

第33号住居址　カマド

第34号住居址

第35号住居址

同　カマド

第10図版　住居址(9)

第36号住居址

第37号住居址

第38号住居址(右側37住)

第39号住居址(右奥39住)

第40号住居址

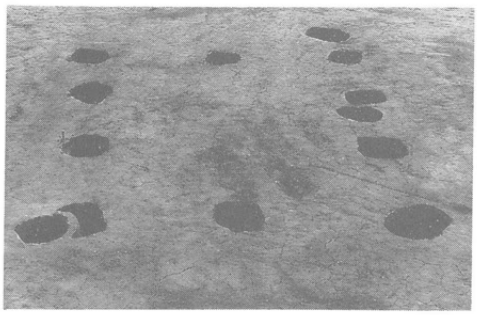
第41号住居址

第41号住居址　遺物出土状況

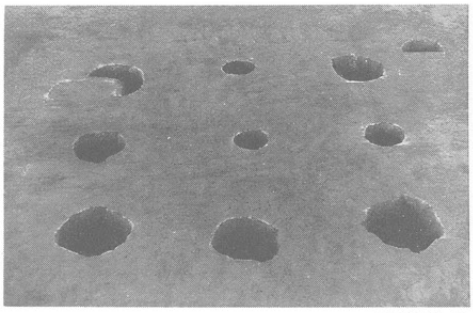
第41号住居址　遺物出土状況

第11図版　住居址(10)

建物址検出時



建物址 1

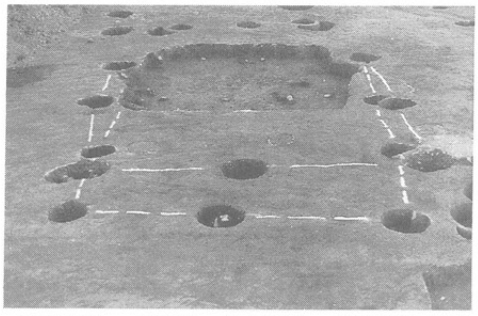


建物址 2

建物址 3

建物址 4（奥は12住）

建物址 5

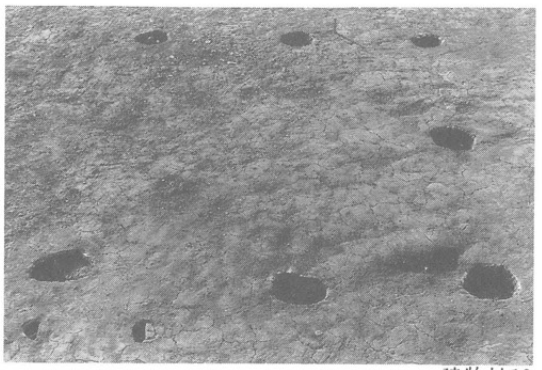


建物址 6 ・ 7（外）・11（未掘）、第14号住居址

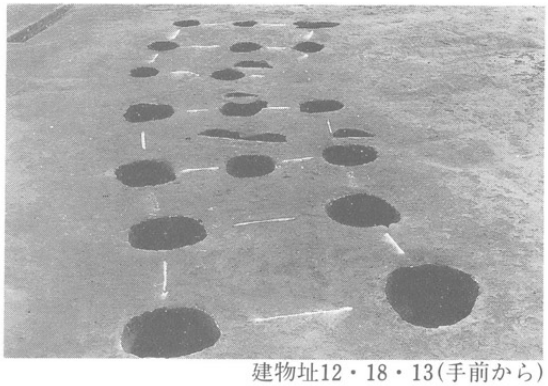
建物址 8

第12図版　建物址(1)

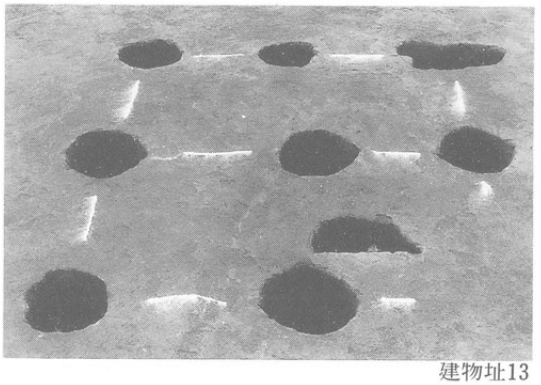
建物址 9



建物址10



建物址12・18・13(手前から)

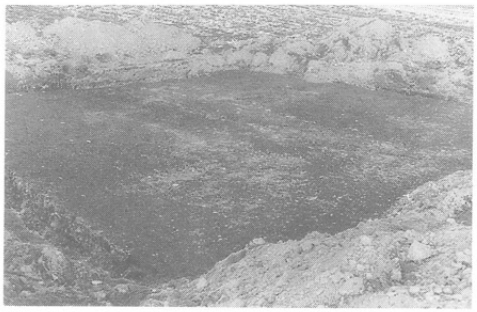


建物址13

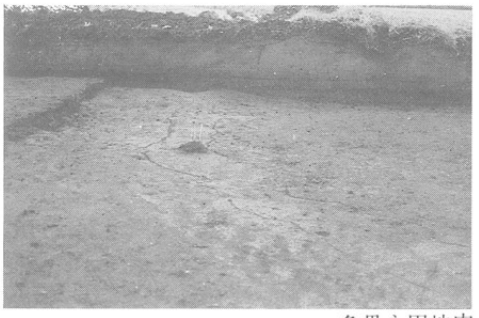
柵列 1 (右奥 6 住)

土壙 2

第13図版　建物址(2)・柵列・土壙



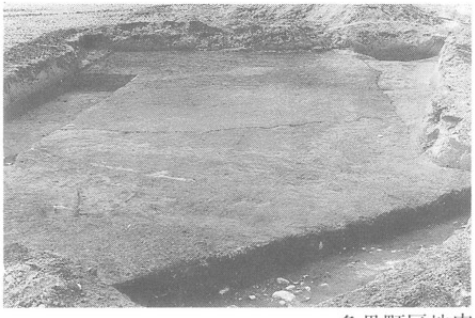
条里北栗地内



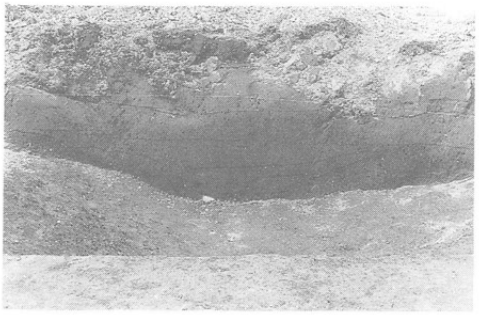
条里永田地内

永田地内　溝1

同



条里町区地内



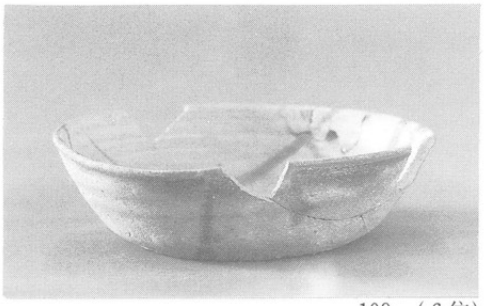
同A－A′　溝3

同B－B′　溝4

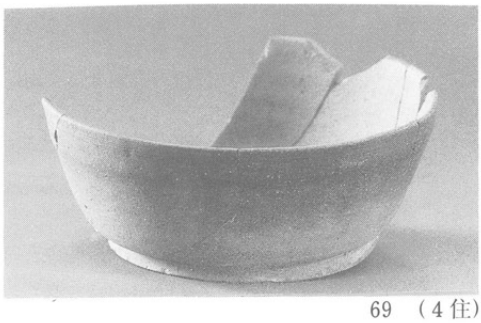
同C－C′

第14図版　条里的遺構

65 （4住）

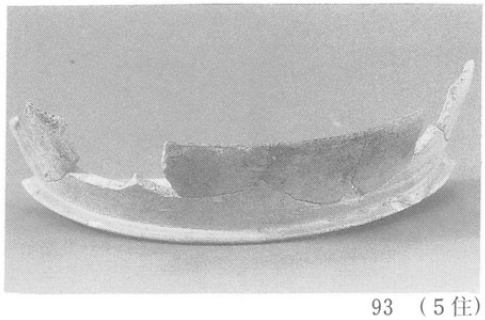


109 （6住）

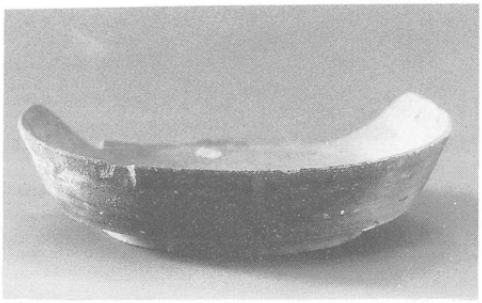


69 （4住）

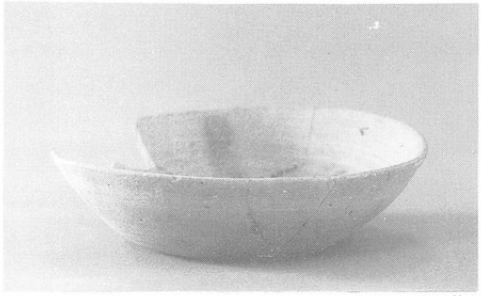
119 （7住）



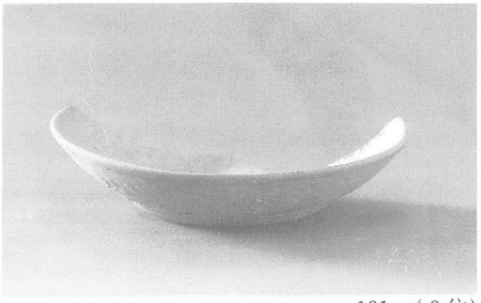
93 （5住）



128 （9住）



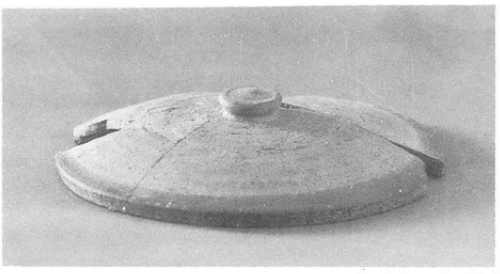
110 （16住）



131 （9住）

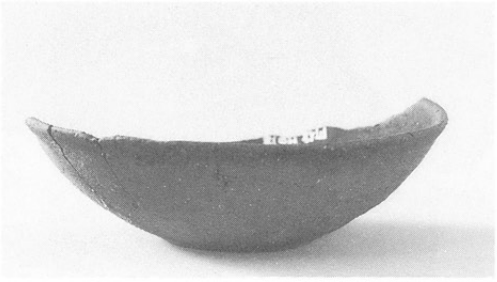
第15図版　出土土器(1)

157 (12住)

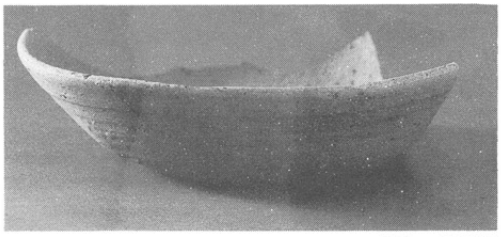


166 (14住)

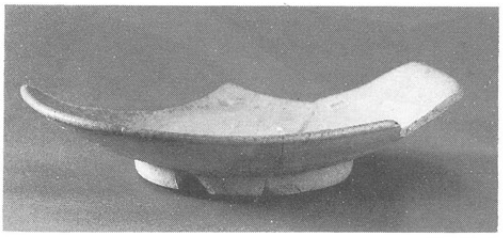
159 (12住)



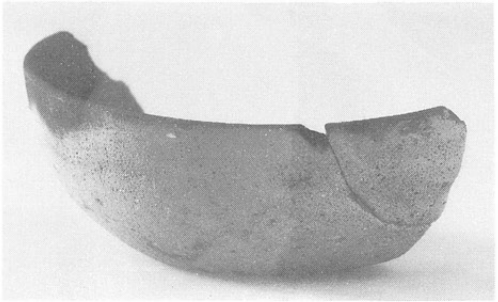
192 (17住)



161 (13住)



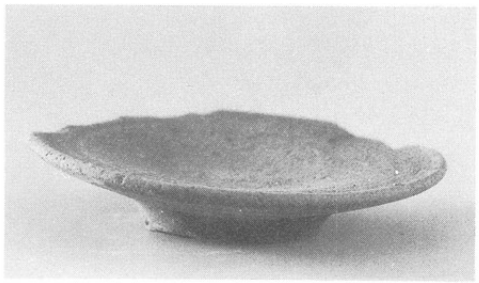
215 (19住)



162 (13住)

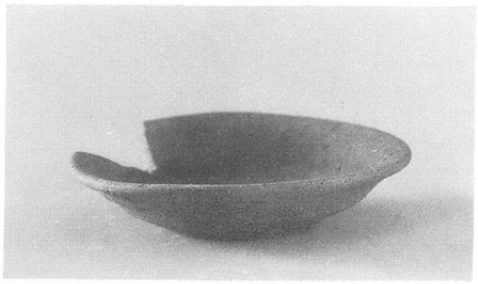
216 (19住)

第16図版　出土土器(2)



233 (20住)

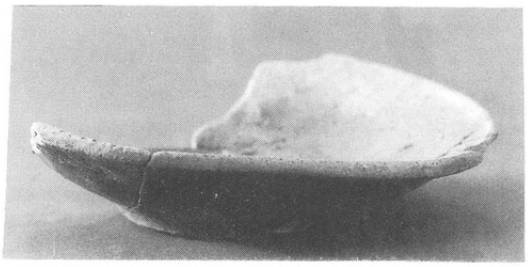
244 (20住)



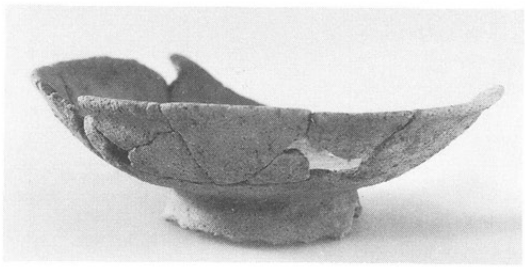
238 (20住)

226 (20住)

237 (20住)



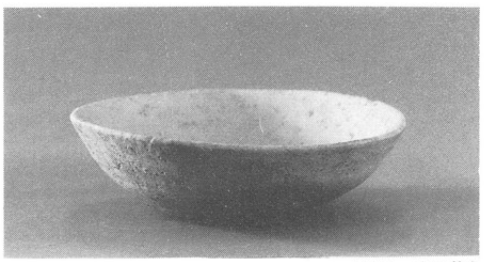
231 (20住)



252 (20住)

第17図版　出土土器(3)

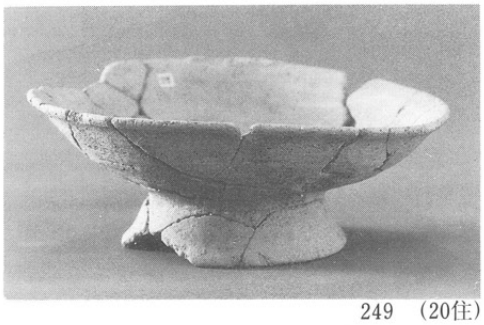
205　(18住)



288　(23住)

250　(20住)

302　(23住)



249　(20住)

358　(26住)

292　(23住)

362　(26住)

第18図版　出土土器(4)

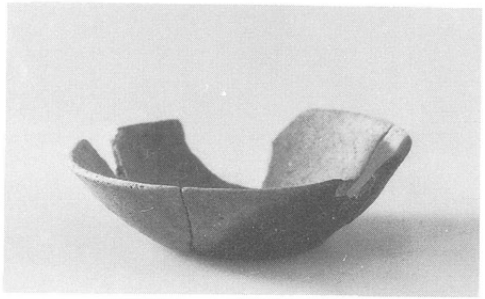
350　(25住)

410　(29住)

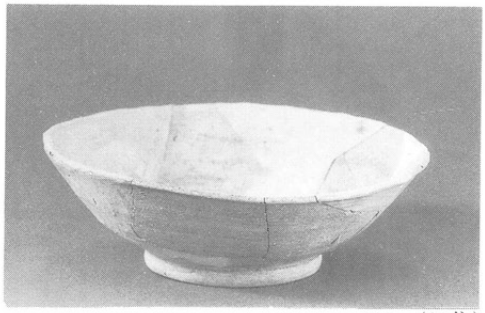
391　(28住)

414　(29住)

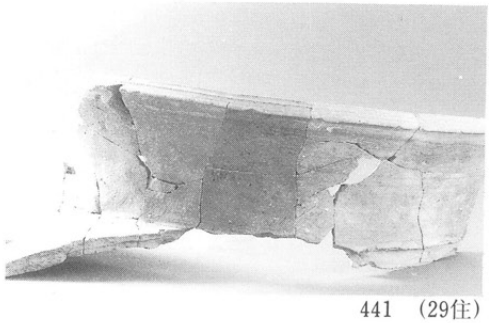
389　(28住)



406　(29住)

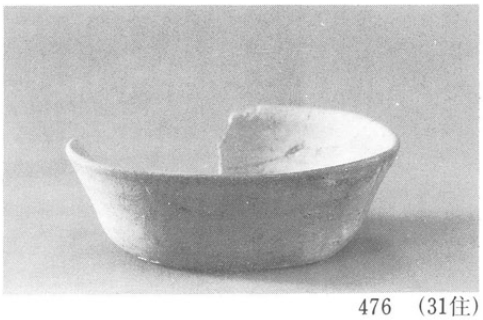


396　(28住)



441　(29住)

第19図版　出土土器(5)



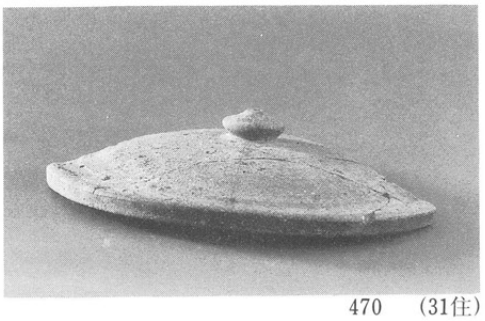
476　(31住)

478　(31住)

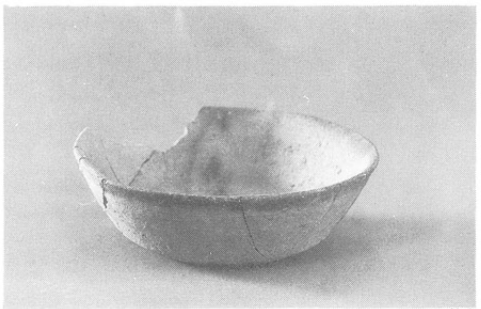
473　(31住)

477　(31住)

475　(31住)



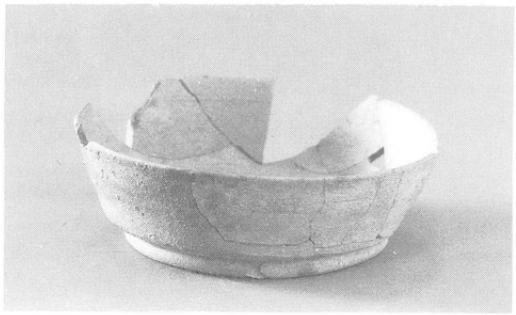
470　(31住)



474　(31住)

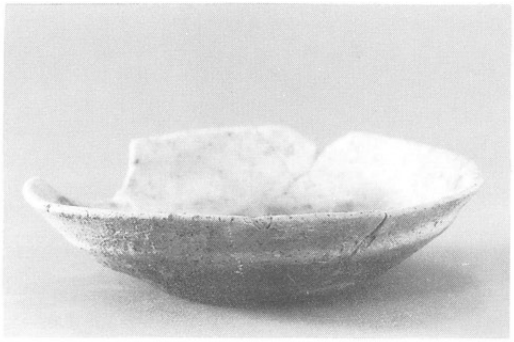
489　(31住)

第20図版　出土土器(6)

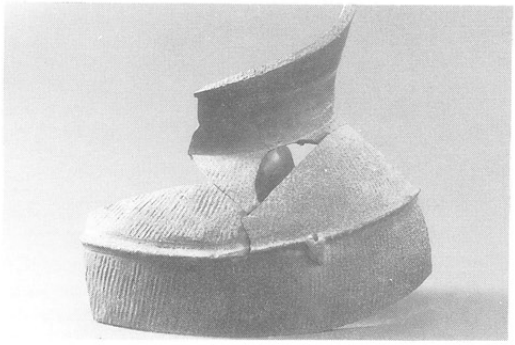


497　(32住)

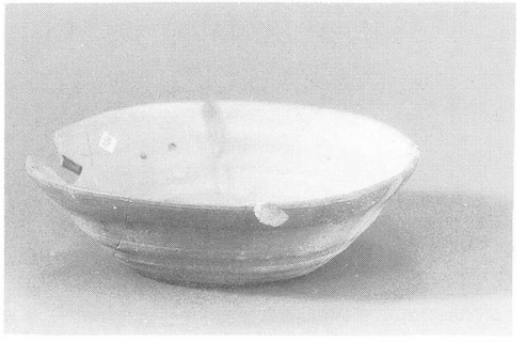
621　(42住)



495　(32住)



(溝１)



611　(42住)

706　(検出面)

第21図版　出土土器(7)

松本市文化財調査報告No.48

松本市島立北栗遺跡・条里的遺構

昭和62年３月20日　印刷
昭和62年３月31日　発行

発行　長野県松本地方事務所
松本市教育委員会
印刷　株式会社　綜合印刷所
写植　有賀写植　ＡＮＰＣ